
とある戦士の風林火山

Y S - 8 6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦士の風林火山

【Nコード】

N1229Y

【作者名】

YSー86

【あらすじ】

四千年の長きに渡り、繰り返された聖剣戦争が遂に終結した。小次郎は十本の聖剣を総て消滅させる決意をし、それを実行する。その時、起こった衝撃波で彼は世界から消滅してしまう。次に彼が目覚めた時、目の前に広がっていたのは、科学の街・学園都市だった！新たな世界を舞台に風の戦士の新たな闘いが、今、始まる！！

＊この作品は車田正美先生の代表作の一つ「風魔の小次郎」と鎌池和馬先生の代表作「とある魔術の禁書目録」のクロスオーバーとなる

ります。

プロローグ（前書き）

はじめまして！YSー86と申します。此度は私めのような駄文にお付き合い頂き誠にありがとうございます。さて、この作品は二次創作であり、クロスオーバー作品であります。そういうものが苦手な方は問答無用でブラウザバックでお戻り頂いて構いません。尚この作品のメイン主人公の小次郎君の服装に若干の変化があります。そのことについては平にご了承くださると助かります。では、プロローグ始まります。

プロローグ

天は燃え、地はひび割れ

、その天と地交わるところ、果てしなき遠い彼方

―この大いなる聖地で、

四千年間闘いは続けられていた。しかし、それも今終わろうとしていた。

―既に八人もの戦士が己の聖剣のみを残して：闘いの果てに消えていた。

何もない空間から1人の

少年が突如現れた。赤いシャツの上に学ランを羽織った活発そうな少年である。

「か：華^{カオス}悪崇：お前もこの戦場に舞い戻ったはずだ！出てこい華悪崇よ！

！」

少年が叫ぶと紅い衣を纏った男が姿を現した。

「小次郎：」

「華悪崇！」

「わ：私たちはどうやら

：同じものを見てきたらしいな：」

「死界の入口ってやつか：」「し：しかし何故急にこの戦場へ戻ったのか：……？」

「風林火山が時の流れを

逆に変えたのよ！」

少年のその言葉に男は驚愕した。

「な：なにに、まさか：」

「あのまま 逝っちまったら、また、いつの日か俺達は闘わなければならねえ運命だ。そんなこたアもう、ごめんだからな！」

叫んだ後、少年―小次郎は飛び上がり、攻撃態勢へと移った。

「聖剣戦争をこれで終わりにする為に華悪崇、死界には、おめえ1人で逝ってもらうぜー！ー！ー」

ッ！！」

二つの聖剣がぶつかり合う。それから何合か打ち合う二人。やがて華悪崇が口を開く。

「バ：バカな。時の流れを変えてまで決着をつけようなどと：こ：

小次郎

お前は自分のしでかしたことが分かっているのか：」

「往生際が悪いぜ華悪崇。おとなしく死界へと：」

小次郎が聖剣・風林火山を振り上げ華悪崇の聖剣へとおもいつきり叩きつける。

「消えちまえー！ー！！」

その時、華悪崇の聖剣・鳳凰天舞に大きく亀裂が走った。当然彼は驚愕する。

「な：なにに！こ：こんなバカな：鳳凰天舞に亀裂が入ったー！ー！ッ！ー！！」

その隙を小次郎が逃すはずもなく続けて聖剣を叩きつける。

「これで聖剣戦争が終わる！ー！！」

「くっ！」

受け止める華悪崇。しかし、彼の聖剣には次々と新しい亀裂が走っていく。そのまま鏢迫り合いに持ち込むも最早決着がつくのも時間の問題であった。

「う：うう：よ：よせ：

よせ小次郎。こ：これ以上流れを：時の流れを変えるな：……」

しかしその忠告も無視して、小次郎は次々と風林火山を鳳凰天舞へ叩きつけていく。

「聖剣戦争は今までずっと決着のつかないままきたのだ：いわばバランス・オブ・パワー：カオスとコスモの力の均衡で歴史は流れてきたのだ！ー！！」

尚も風林火山を叩きつける小次郎。その目には決意の炎が宿っていた。

「何故、決着が付かなかったのか…何故、四千年も続いたのか…それはどちらか一方が勝つことによって何かが狂うのではないのか！」

その言葉の終わりと共に
小次郎は一旦距離をとる。

「何を今更つべこ言ってるんだ華悪崇。これで、もうもう二度とオレ達は闘わずに済むんだぜ。お前が負けることによってな！」
そして、青眼に構える小次郎。

「そうよ、これで終わるのよ…気の遠くなるほど長かったこの聖剣戦争もやっと終わるんだ…」
その姿に華悪崇は恐怖する。

「あ…ああ…風林火山の輝きが…大きさがまるで違う！や…やめろ小次郎、み…未来の…」

最後の突進をする小次郎。その姿に、その後待つ運命に恐怖する華悪崇。

「歴史を変えるな————ッ！！」
叫びと共に轟音と閃光が走る。

次の瞬間に、空を舞う聖剣・鳳凰天舞。それが地面に突き刺さった時、刃先を残して崩壊していった。暫く背中合わせに対峙していた二人だったが、やがて華悪崇がその重い口を開いた。

「こ…小次郎…この闘いは、た…確かにお前の勝ちかもしれん…そ…そして、もう二度と聖剣を巡る闘いがおこることはもうないだろう…」

そう言った後、華悪崇は小次郎の方へ向き直った。

「だ…だが、お前は…お前はその手で歴史を変えてしまった………
…そ…それが、いったいどんなに恐ろしいことになるのかかわっているのか…」

小次郎にそう問いかけながら、華悪崇の体は光の粒子となって消滅

していく…。消滅しながらも尚、華惡崇は小次郎に話しかける。

「歴史を作るのは神だ…。そ…それを人間であるお前が変えてしまったのだ…。き…きつと…きつとお前もそのまま無事には済むまい…。お前も消される。」

神の怒りによってな…」

その言葉と共に、華惡崇は完全に消滅した。そして、それから数秒後、小次郎はゆっくりと後ろを振り向いた。そこには、この闘いで散っていった九人の戦士の聖剣がまるで墓標のように地面に突きたった光景だった。

「神か！もし、そんなものが本当に存在するなら見ていたはずだな」
小次郎は剣の墓標を見ながら静かに呟いた。

「聖剣戦争は終わった！これで四千年続いた闘いも二度と繰り返すこともないはずだ！！」

小次郎は呟きながらも静かに聖剣―剛刀・風林火山を振り上げる。

「そして、主人を失い戦場に残った十本の…これら総ての聖剣も最早無用のもの…」

風林火山を握る手の力を更に強める。

「な…何が大地の守りだ。こんなものが…こんなものがあるから闘いが生まれ、闘いが絶えることがなかったのだ…」

小次郎は今まで自分が見てきた闘いとこれまで人類が歩んできた闘いの歴史を思い浮かべる。そして、遂にある決断を下す。それは―

「残念だが神よ！あんたの創り出した聖剣は消える！！今、この場でな！！」

自身の決意を叫びながら、小次郎は勢いよく風林火山（相棒）を振り下ろした。振り下ろされた剣から光の衝撃波が迸り、九本の聖剣を飲み込んだ。そして、衝撃波に飲み込まれた聖剣は一つ残らず崩壊・消滅していく。それは小次郎も例外ではなかった。

（き…消える…総てが…）

小次郎は光の中静かに思う。

（総てが白い光の中に飲み込まれ…や…やがて一切のものが無にな

るのか……。人も地も星も……。そ……。そして、いずれは……。この大宇宙さえもか……)

その思考を最後に小次郎は意識を失った。

―そんな意識を失った小次郎に語りかける存在が在った。

《小次郎……。小次郎よ……》

四千年もの年月、神の正統たる戦士であった小次郎よ……。遂に別離わかれの時がきたようです……。貴方達コスモの戦士は常に聖剣を守り通し、そして、貴方は遂に十本の聖剣を神のもとへと帰してください……。これで聖剣戦争もやっと終焉を迎えることができました……。神も、もう貴方達を輪廻によって縛ったりすることはありません……。さあ、これからは貴方達の求めるところへ……。自分の一番望むところへお帰りなさい……。四千年もの間ありがとう……。さようなら小次郎……。さようならコスモの戦士達……》

その言葉が終わると小次郎の身体は黄金の光に包み込まれた。光が治まった時、小次郎の姿はどこにもなかった。この世界から完全に消滅したのである……。

プロローグ（後書き）

次回、遂にとある世界にトリップします。小次郎の運命やいかに！
？

第一話 学園都市に降り立つ”風”（前書き）

この作品は、ネコさんの小説「とある伝説の赤き英雄」^{レプリロイド}にかなり影響を受けています。なので、ネコさんに参考許可を頂きました。
という訳で私の初連載 本編スタートです。

第一話 学園都市に降り立つ”風”

辺りに小鳥の鳴き声が響き渡る、どうやら、時刻は早朝のようだ……そんな穏やかな陽気とは裏腹にとある公園にて一人のボサボサ頭の――しかし、自然と一つの髪型として、定着している――少年が倒れていた。服装は赤いシャツに学ランを羽織ったちよっと変わった学生服を着た少年である。

「う……くっ！」

穏やかな朝日を浴びて少年は目を覚ましたようだ。

「こ……ここはどこだ？ 風魔の里じゃなさそうだし、白凰学院の周辺でもねえ。一体……」

少年――小次郎は微かに痛む体を起こし、辺りを見回す。同時に耳を周囲の音を拾う為に傾ける。暫くすると、状況が少しは分かったのか、

「全く知らねえ場所っぱいな……仕方ねえ、ここは行動あるのみだぜ！」

そう言って立ち上がる小次郎。すると――

ぐうううっ！ と突然彼の腹から大きな音が出てきた。

「っと！ その前に腹ごしらえだな！ しかし、どうすつかねえ……。金ねえんだよね」

途方にくれる小次郎。だが、彼はこちらに近付いてくる気配に、いや、すぐ近くを通りかかる気配に気付いていた。

「しゃあねえ。この気配のやつに相談してみるとすっか！」

言うやいなや、小次郎の姿は風と共に消えた。

――しかし、小次郎は空腹故に気付いていなかった。自分の右手が僅かに熱を持っていたことを――

ここ学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能し

ないビル。レベル4の一つである空間移動テレポートを使わない限りは出入りも出来ない密室の中心に、巨大なガラスの円筒器は鎮座していた。

直径四メートル、全長十メートルを越す強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方の壁は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数十万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光が、まるで夜空の星々のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さで浮かんでいた。

学園都市統括理事長、《人間》アレイスター。

それは男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える。その《人間》は自分の生命活動を全て機械に預けることで、計算上ではおよそ千七百年もの寿命を手に入れていた。脳を含め全身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によって補助している。

(……、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたように円筒の正面に、唐突に二つの人影が現れた。一人は小柄の空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手を繋いだ大男だ。空間移動能力者は一言も発しないまま会釈すると、再び虚空へと消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にはそぐわない格好をしている。

土御門元春。イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

スパイである土御門は、

雇い主であるアレイスターに向かって苛立った口調で言った。スパイであるものの、彼はアレイスターの従属的な部下ではないのだ。

土御門の口調は突き放すような響きがあり、普段の彼を知るものなら驚きに身をすくめていただろう。自分の不満を隠そうとしない土御門に、アレイスターは淡く淡く笑って、

「構わぬよ。侵入者の所在はこちらでも追跡している。これを使わぬ手はない。若干ルートを変更するだけで、プラン二〇八二から二三七七までを短縮も出来ー」

「言っておくが」

土御門は遮るように言った。バン、と手の中のレポートをガラスの円筒へ押し付ける。クリップで留められた隠し撮りの写真には、侵入者の顔が写っている。

年は二十代も後半で、金色の髪と、別の国の血を引いた褐色の肌が特徴的な女だ。ただし髪の手入れを怠っているのか安っぽい演劇用のカツラのようにあちこちの毛が荒れて飛び跳ねている。後ろ姿を見るとライオンみたいなシルエットの女だ。

服装は漆黒のドレスの端々に白いレースをあしらった、ゴシックロリータ。ただしドレスの生地は擦り切れ、レースも解れてくすんだ色を見せている。飾りではなく、日常的に豪華な衣装を身に纏っている証拠だ。

「シェリー・クロムウェル。こいつは流れの魔術師ではなく、イギリス清教《必要悪の教会》^{ネセサリーウス}の人間だ。

アウレオールの時のようにはいかないぞ」

土御門はまるで無理な禁煙でもしているような苛立った様子で、

「イギリス清教だって人の作る組織である以上は一枚岩ではない。

いや、構成の特性上、十字教の中でもあれほど複雑に分岐した国教は他にはない。お前とて分かっているだろうが」

「隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、

随分とすてきな職場だな」

「全くだ」土御門は息を吐いて、「しかし、それ故にイギリス清教にも様々な派閥と考え方がある。学園都市協力派だけとは限らないぞ。中には全世界を英国の殖民地にして全ての国旗のデザインを一つに統一したいと考えるヤツまでいる始末だ。お前がウチのお姫様と結んだ《協定》にしても、どこまで役に立つかは分らん」

イギリス清教と学園都市のトップ同士が決めた《協定》さえ疑問視する者もいる。知識の宝庫たるインデックスが学園都市内部にいる事が、既に情報漏洩の危険を孕むに違いないと。もちろん、《必要悪の協会》とは別枠の《騎士団》達が実際にインデックスのセキュリティが外れていることまでは掴んではいないとは思うのだが。

それにしても、今の段階でさえ《騎士団》の中でも十字軍時代の侵略精神をそのまま引き継いでいる派閥などは学園都市を危険視している。土御門が上手く情報操作しなければ学園都市討伐運動が起きかねないほどに。

「オレも教会に潜れば在る程度の人心を操作することも出来る。だがな、それにも限度ってがあるんだ。派閥や勢力が異なる所までは手を伸ばせない。伸ばしたとしても、どこかでこちらが意図的に操作した情報は歪曲してしまう」

彼は一度そこで言葉を区切ってから、

「大体、アウレオルスの時でさえ散々あちこちに手を回していただろうが。魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。この法則はオレよりもお前の方が分かっているはずだ。学園都市は《科学》を、教会は《神秘》を、それぞれの技術を独占することでアドバンテージが生まれている。その中で学園都市の面子が魔術師を潰してみろ。せっかく死守してきた門外不出の独占技術がそこから漏れるかもしれないと思われただけで立派な亀裂の出来上がりだ」

上条当麻という少年は、この一ヶ月強で何人かの魔術師と戦ってきた。しかし、ステイルや神裂は教会と事前の取引があったし、アウレオルスや閻咲などは教会所属ではない流れの魔術師なので、それほど波風は立たなかった。

だが今回は意味の重さが違う。学園都市に侵入してきたのは《イギリス清教独自の術式》を抱えた魔術師で、しかも取引もない。これが一派閥の意向なのかシェリー一人の判断できないが、仮に彼女の独断だとしても、勝手に倒すのはまずい。

シェリーⅡクロムウェルは王立芸術院でも最も寓意画の組み立てと解説に優れた人間だ。寓意画とは絵画の中に魔導書の内容を隠した暗号絵画の事で、例えば洋上に浮かぶ船の上から見た、夕暮れに水平線へ沈んでいく太陽の絵画があったとする。普通の人が見れば何気ない一枚の風景画に過ぎないが、この中の海水は《塩》を、太陽は《黄金》を意味し、これらを組み合わせると《黄金と塩を使えば、海の中を魚のように泳ぐことが出来る魔術の方法を示している》という情報を取り出せる。

他にも絵の具のカラーや厚み、夕暮れという時間帯、船の上という場所……絵画の中にある些細な要素の全てが何らかの意味を持つ暗号として機能するので、何百年も経ってから寓意画の読解に誤りがあったと判明するパターンも多い。真の意味で寓意画のスペシャリストになるのは、それぐらい難しいのだ。

インデックスが知識の収集・保管を担当するなら、シェリーは暗号技術を封印・開封する専門家である。彼女が他勢力の手に落ちれば、イギリス清教が守り続けてきた複雑怪奇な暗号の解説方法が丸ごと相手側に伝わってしまう事になる。下手にシェリーを倒せばイギリス清教と学園都市の間に亀裂が走る。シェリーを送り込んだ派閥が学園都市を嫌っているのだとすれば、そこを狙って亀裂を押し広げようとするだろう。

だが、土御門はその先を敢えて言葉には出さない。というよりも、出せない。その一文は口に出すのも躊躇われ、胸の中に広がっていく。

「最悪、科学世界と教会世界の戦争となるかもしれない。

土御門はアレキスターを睨みながら、

「まあ、今回の件でもよほど間拔けな選択をしない限り、この火種

が燃え上がることはないだろう。だが、火種を消す為に水面下で人死にが起きるかもしれない。お前は何を考えている？本腰を入れて警備に力を入れれば、いくらでも侵入を阻止できた癖に」舌打ちして、「とにかく、オレはシェリーを討つぞ。魔術師の手で魔術師を討てば、少しは波も小さくなる。それからスパイはこれで廃業だ。ここまで派手に動けば必ず目をつけられるからな。まったく、心理的な死角に潜ってこそそのスパイだというのに、四六時中監視されて仕事かー」

「君は手を出さなくて良い」

遮るようなアレイスターの一言に、土御門は一瞬凍りついた。何を言っているのか、理解できなかった。

「君は手を出さなくても良いと告げた」

「……本気で言っているのか？」

土御門は、相手の正気を疑うように言った。

「可能性は、決してゼロではないんだぞ。水面下での工作戦なんてビルからビルへ綱渡りするようなものだ、手を間違えれば戦争が起きるかもしれないというのに！」

大量破壊兵器の設計図が他国に漏れれば、それだけで戦争の火種として正当化される。学園都市内で教会の魔術師をほくするとは、つまりはそういう意味なのだ。

確かに余程のことがない限り、全面戦争にはならないだろう。しかし、逆に言えば余程の事があれば戦争が起きてしまうのだ。それも国家と国家の戦争ではない、国教の壁すらも越えた《科学》と《教会》、二つの世界の大戦なのだ。

学園都市を代表する《科学》と教会を代表する《オカルト》の間に圧倒的な戦力差はない。それはつまり、実際に戦争が起きれば泥沼のように長引いてしまうのだ。

「アレイスター、お前は何を考えている？上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か。あの右手は確かに魔術に対するジョーカーだが、それでもアレだけで教会全体の崩壊など出来るはずもな

いだろう！」

「プラン二〇八二から二三七七までを短縮できる。理由はそれだけだが？」

アレイスターの言葉に、土御門の息が詰まる。

プラン。「計画」というより「手順」といった所か。アレイスターがこの単語を口にする場合、該当するものは一つしかない。

「虚数学区・五行機関の制御法か」土御門は忌々しげに呟いた。虚数学区・五行機関。学園都市ができた当初の《始まりの研究所》と呼ばれているが、今はどこにあるのか、本当にあるのかも分からないと言われる幻のような存在。ウワサでは現在の工学でも再現不可能な《架空技術》を抱え、また学園都市の裏側からその全権を掌握していると考えられている。

「外」の教会や魔術師はこのビルを指していると思っているようだが、違う。実際はそんなものではないし、本当の事を「外」に教える訳にもいかない。

言えるはずがない。学園都市に対して絶大な影響力を持つ「ソレ」が、誰にも制御できず何のためにあるのかも分からないまま潜んでいるなどと。

学園都市を治めるアレイスターとしてはあらゆるものを利用してでも五行機関の御し方を掴まなければならない。いや、アレイスターはおそらく御し方自体は既に掴んでいる。ただし、ソレを実行するための材料が、キーが足りないのだ。

「手順」というのは一方通行が行った絶対能力進化（レベル6シフト）実験を思い浮かべると分かりやすい。あれと同じく、一定の順序で事件・問題を起こしてキーを作り上げていく。

その「手順」の中心には一人の少年がいる。

上条当麻。

アレイスターは当初から彼をプロセスに取り組むつもりだったが、禁書目録や錬金術師などの魔術戦まで考慮していたとは思えないと土御門は睨んでいる。アレイスターはこうしたイレギュラーが起き

る度に「計画」を組み替え、誤差を修正するどころか逆に利用して膨大な「手順」を少しでも短縮しようとしているのだ。

今回のシェリー・クロムウェルもそういう事か。

ここで手を出さなくても、いずれ「手順」^{プラン}は終わるはずなのに。

「その程度の、為に？」

「この街の軍事力や影響力を考えれば、その程度などとは呼べないはずだがな。何せ世界を引き裂く程の暴れ馬だ、手綱は出来るだけ早くつかみ尚した方が無難だろう」

アレイスターは淡く笑う。そこからはいかなる感情も掴めない。喜ぶようにも嘲るようにも哀れむようにも楽しむようにも見えてしまう。喜怒哀楽の全てが混線している。

なんてふざけた話だ、と土御門は舌打ちした。できるならアレイスターの命令など無視して独断でシェリーを討ちたい所だが、それも叶わない。

そもそも、彼一人ではこのビルから出る事も出来ない。出口がないのだ。

ドアも窓も廊下も階段もない、生活に必要な大気すら施設内で生成しているため通気口もない。それでいてこのビルは、火力だけなら核ミサイルの爆風を受けても倒れないほどの強度を誇る。

状況としては銀行の大金庫や核シェルターに監禁される事よりもタチが悪い。絶望度で言えば宇宙服のない状態で大気圏外を飛ぶスペースシャトルに閉じ込められるのと同じくらいか。

「外と連絡がつくはずもない、か。おいアレイスター、お前の有線で外の空間移動能力者を呼び出せ。さもないとそこらに伸びているコードを片っ端から引き抜くぞ」

「構わんよ。ストレスを解消したいのなら好きにだけやるといい」土御門は苦虫を噛み潰したような顔をした。薄々勘付いてはいたが、この部屋にあるチューブやコード、機械類はダミーなのだろう。大体、この部屋だけでアレイスターの生命維持を賄えるなら、そもそもこんな巨大なビルを用意する必要もない。この円筒器もただのハ

ツタリで、ひよっとしたら立体映像を映すための装置なのかもしれない。

アレイスターの浮かぶ円筒器に背を預け、口を開こうとした時、不意にアレイスターが声を掛けてきた。

「ところで、君はもう一人、実に妙な侵入者がいることを知っているかい？」

「何……？ 上条当麻ではないのか？」

「違う。彼ではない」

土御門はアレイスターの言っていることの意味が理解できなかった。何故ならば、今朝、侵入してきた者は、シェリーと上条当麻の二人だけのはずだからだ。

「これを見たまえ」

土御門の目の前に出された映像には、年齢が十五歳ほどの、やや逆立ったボサボサした茶色い髪をしたちよつと変わった学生服をラフに着た少年だった。その顔から少々空腹のようだと分かる。そして、どことなく活発そうな印象を受ける、そんな少年だった。

「こいつは？」

「分からない。急に街の中にある公園に出現した」

「何だと！？ どういう事だ、何故報告がない！？」

「このことはまだ誰にも伝えてはいない。だが、彼は魔術師でも能力者でもない。そうだろう？」 確かに映像に映る少年は魔術師には見えない。しかし、この少年は不思議な事に突然街に現れたと言うのだ。このことには、流石の土御門にさえ訳が分からなかった。と、様々な疑問が浮かぶ土御門の前で突然、件の少年が風と共に消えた。

「なっ！？」

その光景に驚く土御門。その顔には驚愕の色がただただ浮かんでいた。

一方、土御門と同じようにその光景を眺めていたアレイスターは笑っていた。彼自身、分からないといったにも関わらず…。

（彼は……もしかしたら……）

それはまるで、新しい玩具を得た子供のように。そして、それは幻想殺し・一方通行に続く第三の鍵を見つけた者の目でもあった。

「あゝ…なんかもう、不幸だゝ…」

何だかぐったりとした顔をしたツンツン頭の少年が歩いていた。彼はとある理由で、つい先程まで警備員アンチスキルに追いかけられていたのである。

「はあゝ…」

公園の近くに立ち止まり思いっきり溜息をつく少年―上条当麻。その時、不意に妙な、しかし、心地よい風が吹くのを感じた。

「な…なんだあ!？」

当麻が風の吹いた方を向くと、そこにはやや逆立ったボサボサした頭のちよつと変わった学生服をラフに着込んだ少年がいた。

その少年は当麻の事を見ると、にっ、不敵に笑った。その様子に当麻はいやな予感がした。

（な、なんでせうか。この感じは!？なんか帰って早々カツアゲにあっちゃいそうな感じがするんですが!？…ふ、不幸だ…）

そう思った当麻はちよつと身構える。そんな当麻に構わずゆっくり近付いていく少年。

そして、当麻のすぐ近くに（いつでも殴りかけられるくらいの距離だ）着くと、少年はその口を漸く開いた。

「おい、お前…ちよつくら相談したいことがあるんだけどよ…」

「は、はい…な、なんでせうか？」

続く言葉に警戒する当麻。しかし、その次に出てきた言葉と態度に思わず硬直してしまうことになる。

「頼む! 三百円でいいんだ。俺に恵んでくれ!!」

「……はあ!？」

突然少年がまるで当麻を拝むかのように手を合わせながら、ぺこりと頭を下げている。これがカツアゲだとすれば随分腰の低いカツアゲである。

この少年の思わぬ低姿勢な態度に当麻は先程まで抱いていた警戒心を霧散させた。

「え……え……と、一応聞くけど……何で？」

その言葉に少年は顔を上げて口を開け答えようとした時――
ぐうううううっ！

と盛大な音が少年の腹から聞こえた。

「……………」

「……………」

暫く沈黙する二人。その沈黙の後、先に口を開いたのは当麻だった。

「え……と、腹が減ってるのか？」

「や、やっぱ分かつちまうか？」

「ま、まああんだだけ盛大な腹の音を聞けばな……」

「じゃ、じゃあ……」

「ああ、三百円くらいやるよ。ほれ！」

当麻は百円玉を三枚、財布から取り出すと、少年に手渡した。

「サンキュー！恩に着るぜ！この恩は後で必ず返すからよ！」

「恩って……んな大げさな……。まあそんなのはいいから、早くコンビニ行って食べ物を買ってこいよ」

「おうっ。んじゃな！」

「ああ！……あつ、ソレ別に返さなくていいかなー！」

別れの挨拶を交わし、別れようとした時、当麻は慌てて後ろを振り返り、お金を返さなくてもいい旨を少年に伝えたが、当麻が少年にそう言った時、既にその少年は既に遠くを走っていた。

（……変なヤツだったけど、悪い奴じゃないっぽいな。しかし、なんかいいことをしたなあ……）

当麻は素直にそう思い、その場を後にし、家路へとついた。

この時の当麻は思いもしなかった。あの少年が自分にとって最も頼りになる戦友になることを……

寮への道すがら悶々と昨夜から今朝までのことを思い出していた当麻は、漸く自宅のある学生寮の近くまで辿り着いた。

（……あ。やっと学生寮が見えてきた。うおー、漸く日常空間に帰ってこれたー）

実際には寮を出て一日も経っていないのだが、当麻には数ヶ月ぶりの我が家のように感じられた。もっとも、彼は記憶喪失で八月以前の記憶がない為、数ヶ月ぶり、というものがどんな感覚なのかを知らないのだが。

上条は疲労と睡眠不足でフラフラになった体を引きずるように学生寮の建物に入り、狭いエレベーターを経由して自分の部屋まで辿り着いた。

（うう……ねむい）

当麻は思わず欠伸を噛み殺す。本音を言えばベッドに飛び込んで二、三日は眠りこけていたのだが、今日は九月一日、始業式である。

夏休みに記憶を失った当麻にとっては、一部の人間を除けばクラスメイトとほぼ面識がない状態なのだ。他の生徒にとっては何気ない一日だろうが、当麻にとっては今の状況は転校初日に似ている。眠いという理由で初日からサボりを決める転入生というのともうかと思ふ。

（記憶をなくしてるってのは……やっぱ誰にも知られたくねえからなあ。今日は授業もないだろうし、一日使って学校生活のリズムと自分の人間関係^{ポジション}を覚えねえと）

割と苦労人な当麻は眠気の混じった溜息をつきつつ、玄関のドアを

開けた。

瞬間、部屋の奥から少女の甲高い叫び声が飛んでくる。

「と・う・まゝッ！！」

その声は怒りを含んだものだだったが、それだけだった。その少女は玄関にいる当麻の元へと駆け寄ってくることはない。

当麻は一瞬だけ怪訝そうな顔をしたが……やがて思い出した。

彼が眠たい頭を働かせていると、漸く声の主の少女が部屋の奥から現れた。腰まである銀の髪と白い肌を持つ外国人の少女だ。着ている衣服は純白の布地に金糸の刺繍をあしらった豪華な服で、何故か服の縫い目に沿って無数の安全ピンが刺してある。

まだ子供らしさが残る少女の名はインデックス。

……なのだが、今の彼女は体中を細いロープで雁字搦めに縛られていた。手足をまともに動かせないインデックスは、尺取虫みたいな動きで部屋の奥から這ってきたのだ。ちなみに、彼女の頭の上には三毛猫が器用に座っていて、のんびりと欠伸をしていた。感覚的には《下克上》という言葉がイヤに似合う。

「うわっ、すっかり忘れてた！お前ずっとそのままだったのか！？」

「とうま！人を置き去りにしておいて最初に出てくる台詞がそれなの！？」

インデックスは犬歯を剥き出しにして叫ぶ。

実は昨夜当麻は闇咲逢魔やみさか おうまという男と出会い、彼の知り合いを助けるために一戦交えている。当然ながらそんな所へか弱いインデックスを連れて行くわけにもいかなかったのだが、そう説明した瞬間に彼女が叩く蹴る噛み付くと大暴れを始めたため、やむなく縄縛術じょうばくじゅつとかいう縄スキルを持つ闇咲に彼女を縛ってもらい、インデックスにはお留守番してもらうしかなかったのだ。

「また今回も今回も今回も一人で突っ走って……。とうま、とにかくこのロープを解きなさい！注連縄しめなわを使った小型結界でも、とうまの右手なら触っただけで壊せるはずだもん！」

とうまの右手。

そこには幻想殺し（イメージブレイカー）という力が宿っている。それが異能の力による者ならば、魔術だろうが超能力だろうが問答無用で無効化させるものだ。ただし、その力は右手の手首から先しか適用されない、という欠点もある訳だが。

「けど、なあ。このロープ、解いたら解いたでお前ものすごく暴れそうだし」

インデックスは怒ると人の頭に噛み付くということでもない悪癖がある。今の怒髪天モードの彼女の戒めを解くというのは、言ってしまえばお腹を空かせた猛犬の首輪を外して野に放つようなものだ。当麻としては、新学期早々、体に女の子の歯型をつけて登校するなんて事はしたくないのだが……。

と、インデックスの表情が柔らかく変化した。分かりやすく言うと、迷子になって怯える子供に接するような感じで。

「とうま。今なら私は怒らないから、素直にロープを解いてごらん？」

「……ホントに？ホントに怒らない？」

「怒らないよ」

「ロープを解いた瞬間にガブガブ噛み付いてきたりしない？」

「しないしない」

インデックスはにっこりと、聖母のような柔らかな笑みを浮かべて言う。

当麻は屈み込んで、床の上に転がっているインデックスの体を縛り付けているロープを、右人差し指で軽くつついた。するとまるで手品のように、インデックスの全身を縛っていたロープの数十もの結び目が、一斉にするりと解けた。

次の瞬間、拘束から解放されたインデックスは迷わず当麻へと襲いかかる。

「ひい！？」

原始人が巨大な肉にかぶりつくように、彼女は当麻の頭にかじりつ

く。

「とうまのとうまのばかばか!!」

「ぎゃああ!？」当麻は叫んだがもう遅く、彼は激痛にびくんびくんと跳ね回る。あらゆる異能も打ち消せる右手の幻想殺しも猛獣少女インデックスには何の効果もない。

「う、うそつき! 怒らないつつたのに痛ぁ!？」

「怒るに決まってるんだよ! まったく、魔術師と戦うって分かっているのに私を置いていくなんて! どれだけ不思議な力を持っていたって、とうまは魔術の素人なんだから! 何かあったらどうするつもりだったの!？」

見れば、間近にある彼女の顔は大層怒っていたが、その目だけは泣きそうになっていた。

インデックスは思い出の品を抱き締めるように、当麻の頭に手を回す。

「……本当にどうするつもりだったの？」

抱き締められた当麻は、頭の上から降りかかるその声を聞いた。

その長い銀髪から、ほのかに甘い匂いが漂ってきた。

少女の体は、わずかに震えてさえた。

きっと、彼女は当麻が帰ってくるまで、一晚中心配し続けていたのだろう。

「ごめん」

当麻は、それだけ言った。

それしか、言葉が出なかった。

ここまで自分の身を気にかけてくれた人に、これ以上不安がらせる訳にはいかないな、と当麻は考えた。素直に、本当に素直に、当麻はインデックスを傷つけないと、心の底から願うことが出来た。そのため、当麻はインデックスに自分が記憶喪失であることを話していない。話せばやっぱり彼女を傷つけてしまうだろうから。

当麻は眠気をこらえて二人分の朝食を作る。時間がないため軽めのヤツだ。

料理が出来た後、すぐに食卓についたインデックスと三毛猫に対し、当麻はトーストをくわえたまま部屋のあちこちを歩いて、始業式に必要な物を

準備していく。「……っと、上履きだろ、筆記用具に……宿題の提出日って、今日……だよな。やっぱり今日なんだよなあ。くそ、結局終わんなかったしどうしよう……？……あとは、通信簿？こんなメールで送ってくれりゃ良いのに」

あるいはハッキング体策なのかも、とか適当に考えながら、当麻は通信簿を鞆に投げ込んだ。

と、テーブルに一人残されたインデックスは不満そうな目を当麻へと向けて、

「とうま。ホントにガッコー行っちゃうの？」

「んー？」

当麻は荷物を詰め込んだ鞆を適当な場所に置くと、残りの朝食を一気に食べて、自分の食器を流し台へ持って行った。

「あーそっか。新学期始まると、お前ずっと留守番になっちゃうのか」

「む。と、とうま。私は別に寂しいとか一人が嫌だとか、そういう事言っているんじゃないんだよ？」

むしろ彼女を一人にしておくとか危険だと思っている当麻。だが、余計な口出しはやめておいた。

それには色々な事情があるが、ここでは敢えて割愛する。

「その辺も考えなくっちゃなー。悪いインデックス、今日は取り敢えず留守番頼むわ。食器は流しの中で水に漬けといて」

当麻は時計を見ながら、急いだ調子で言った。

ある事情で半分寝室と化しているユニットバスへ入り、顔を洗って歯を磨いて、夏用制服へと着替える。本音を言えば、シャワーを浴

びたいが、時間がない。支度を取り敢えず済ました当麻がユニットバスのドアを開けると、インデックスがドアの前で待っていた。彼女は何か言いたそうな表情をしていた。

「とうま、早く帰ってくる？」

「そうだな、分かった。帰ったら一緒にどこか遊びに行くか」

当麻の言葉に、インデックスはとても素直な笑みを浮かべた。

当麻としてはその顔を見るのが嬉しかったが、同時に複雑な気分になる。当麻はインデックスには、自分を經由しない人間関係を作って欲しいと思っているのだ。

「じゃ、行ってくる」

結局、何もできない当麻は、問題を保留にした。

「うん、行ってらっしゃい」

そんな当麻に、インデックスは笑みを浮かべてそう言った。

当麻が部屋を出て、五分でインデックスは退屈になっていた。

暇を潰すため暫く色々な事を考えゴロゴロしていた彼女だったが、やがて、（彼女にとって）重大な事を思い出し、その動きをピタリと止めた。

「……、あれ？とうま、お昼ご飯は？」

呟いてから、インデックスの顔がちょっと青ざめた。

現在、この部屋には食糧というモノは皆無だ。

「ど、どうしよう。未曾有の大ピンチかも」

思わず呟いてから、彼女は玄関へと視線を投げた。

薄いドアの向こうには、上条当麻のいる外の世界が広がっている。

一方その頃、当麻は学校へ向かうため、朝の大通りを走っていた。都会のいたずらカラスが線路上に小石を置いた、という本当にどうしようもない理由で電車が止まっていたのだ。

当麻の学校では電車通学を校則で禁止している。

その代わり、料金が馬鹿高いスクールバスを推奨している。が、万年金欠学生の当麻にその代金を払い続けることなぞ出来ないので、内緒で電車を使っていたのだ。

そのため、遅延証明書を学校へ持って行っても遅刻は取り消されない。

（ちつくしよ……眠いのに、疲れてんのに、朝っぱらからついてねえ。いや、今回は俺だけがついてないって訳じゃないか。分かったところで、ちっともさっぱり嬉しくねえけど）

ぼんやりした頭でそんな事を考えていた当麻だったが、不意に後ろから、何者かに物凄い速度で追い抜かれた。

茶色い髪を肩まで伸ばした、中学生くらいの少女だ。半袖のブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートというその姿は名門と呼ばれる常盤台中学のものだったが、舞い上がるスカートの端も気にせず下には短パンを穿いてますと言わんばかりの全力疾走っぷりは、完全にお嬢様のイメージからかけ離れてしまっている。

「……あー、なんだ。ビリビリか」

寝不足で回転の悪い当麻の頭が漸く答えを導き出す。

当麻は走りながら、眠くてショボショボした目を瞬かせ、

「おっすー。若者は朝っぱらから元気だなあオイ」彼の声を聞いたビリビリこと御坂美琴は、不承不承という感じで走る速度を落として当麻と並行すると、ただいま不機嫌ですという顔を向けてきた。

美琴はジト目で隣の当麻を睨みつつ、

「ってか、どうしてそんな気安く話しかけれんのかしら。昨日の夜は人をさんざんさんざんさんざんスルーしていったってのに！ちよつとは引け目とか感じないの！？」

当麻は寝ぼけ眼を擦りながら、美琴の言葉を頭の中をぐるぐる回す。そういえば確か昨夜インデックスを闇咲にさらわれた時に美琴とも会っていたような気もしたが、場合が場合だったので放ったらかしにしていた気がする。

彼らは結構な早さで朝の道を走りつつ、

「あれ、何だよ。ひょっとしてお前なんか用事でもあったのか？」

「べっ、別に。そう言う用があった訳じゃないけど……」

「???」当麻は眠たい目をぱちくりと瞬かせ、「あの、一個聞きたいんだけど。用もないのに何で俺を呼び止める必要があったんだ？」

「う、うるさいわね！別に何でもないわよ！もういい、話題を変える！アンタ普段ってこっちの道だったけ！？」

自分で話題を変えるとか宣言するなよ、と当麻は心中そう思ったが、口には出さなかった。

「……いいや。電車が止まっちゃまってから、そのせい。ま、つつても二駅分だから橋りゃあなんとかなるレベルなんだけどな」

「そう言えば、さっきから随分とテンション低いわね。朝弱いのか？隣を走る美琴はキョトンとした顔をしていたが、当麻はうんざりした視線を向けて、

「昨日いろいろあったから疲れてんの。つか、むしろお前は何だって疲れが綺麗サッパリなくなってるんだ。何だよ、これが若さか、若さの力か」

昨日、八月三十一日には美琴もちよとしたトラブルに巻き込まれている。もっとも、被害を受けたのは、そのとばかりを食った当麻なのだが……。

「な、何よ。昨日の、こ、恋人ごっこって、そんなに疲れる仕事だった訳？」

「あん？それ一つじゃないんだけどな。他にも昨日は色々あったんでございますよ」

そっか、と美琴は小さく息を吐いた。

彼女としては、また自分が何かとんでもない迷惑を背負わせたんじゃないか、という疑念を振り払って安堵しかけていたのだが、

「ん？他にも？……アンタ、まさか他の子とも似たような事してた訳？」

「アホか。あんなこつ恥ずかしいコト平然と頼んでくるヤツなんてお前しかいねーよ」

「な……っ!？」

寝不足で平淡になっている当麻の声に、美琴の顔が瞬時に真っ赤に染まる。

「へ、平然って、そんな訳ないでしょ!わ、わたっ、私だってメチャメチャ悩んでそれでも他に打開策がなくて仕方がなくて恥を忍んで頼み込んだって言うのに!!」

「……あーはいはい。そっすねそうだねその通りですわねー」

「ちよっと、真面目に聞きなさい!こら、ローテンションのままスルーしてんじゃないわよアンタ!」

そんなこんなで、テンションの落差の激しい二人は騒ぎながら学校への道を走っていく。

当麻と美琴の二人が痴話喧嘩(?)をしながら走っている時、とある公園(美琴がいつも自販機に蹴りをぶち込む公園)に当麻に恵んでもらったお金で食べ物を買った小次郎がいた。

彼は少し後悔していた。何故なら、

(あゝ、ちくしょう!ジュース買う分のお金を考えてなかった)そう、三百円では食糧は買えても、飲み物を買える分はなかったのである。

左手に持っているビニール袋には、あの後コンビニで買った鮭オニギリとあんパンだけが入っていた。いくら安くても、流石に飲み物を買う分のお金はなかった。

(参ったな、また恵んでもらいに行くのは悪いし、公園の水を飲むってのもなあ)

すこぶるどうでもいいことで悩む小次郎。この辺りはあの不幸な少

年と似ている部分がある。

そんな風に悩む小次郎の目に金食い虫（自販機）が映る。

（……ホントはこういうこたアしたくねえんだけど背に腹は変えられねえか……）

何かを決断したのか自販機に向かって構える。そして、

「うおりゃあああああ！」それはそれは見事な右フックだった。この場に学生が十人いれば全員がそう答えるであろう右フックを小次郎は放った。

どごおん！という轟音が響く。すると、ガコンという音と共に缶ジュースが一本出てきた。

ジュースの銘柄は抹茶ミルクだった……。

それを無言で眺める小次郎だったが、

「まあ、普通に販売してんだから飲めないこともねえか」そう言つて、自販機から出てきた缶を取り出し、小次郎は近くのベンチに座り、ちよつと遅い朝食をとる。

数分後、食事を終えた小次郎（抹茶ミルクの味は微妙だと感じた）は、図書館の位置を確かめるため公園に設置してあるタッチパネル式の地図を見ていた。

何故、図書館かというと、そこにあるパソコンで、ここが一体日本の何処なのかを調査するためである。

「うしっ！じゃあ行くか！！」

図書館の場所の確認を終えた小次郎は気合いを入れると風と共に消えた。

まるで、最初からその場にいなかったかのように。

この日、学園都市に一人の”風”が現れた。

この世界の住人は知らなかった。
その”風”の少年が、

その脚は一日に数千里を駆け、

その耳、三里先に落ちた針の音をも聞き分け、

闇夜に千メートル先の敵をも見極める眼を持ち、

その姿、動けば電光石火。とどまれば樹木の如し……

されど人知れず風のようにさすらい、風のように生きてきた

風の民であり、最強の忍びの一族である風魔一族の末裔であること
を――……。――。

そして、彼が実は神に選ばれし、聖剣の戦士の一人であることを――
――……。

一人の”風”の戦士と幻想殺しが出会う時、物語は始まる！

第一話 学園都市に降り立つ”風”（後書き）

オリジナル部分の文章力の拙さが嫌でも目立つ……。そして、定期更新がお出来になる他の作家さんがどれだけすごいか骨身に染みました。

感想・評価、誤字・脱字ご指摘宜しくお願いします。

第二話 ”風”と幻想殺し（前書き）

原作を忠実にしかし、そこにオリジナリティーな表現を組み込む。
そんな作業に四苦八苦。

他の作家さんは本当に凄い。

という訳で本編第二話。

駄文だとは思いますが、ご覧頂けると嬉しいです。

中身は大して進んでませんが……

第二話 ”風”と幻想殺し

当麻が美琴と別れてからさらに走ると、目指す高校が見えてきた。

（何とか……遅刻しないで済みそうだな。あー、夏休みの補習受け
といて良かった）

学校までの道のりも、校内の大体の見取り図も、事前に補習で来ていたために頭の中に入っている。その甲斐あって、この日に挙動不審な真似を済んで良かったと当麻はしみじみ思った。

（校舎は二つ。手前が新校舎で奥が旧校舎。目指す教室は新校舎の三階、右から二つ目。下駄箱は昇降口の右手側は昇降口の右手側。よし！）

記憶を失っていないという演技のためのデータを頭の中で纏めると、走る勢いを止めず、他の生徒達と一緒に校門を潜り抜けた。

都会の学校にしては珍しく、この学校はスタンダードの塊のような高校だ。

ぶっちゃけ、平凡な高校と言える。

（ま、個性がありすぎても疲れるだけだろうけど。常盤台とか凄そうだよな）

つらつらと考え事をしながら当麻は昇降口へ急いで向かった。結構時間帶的に差し迫っているからだ。途中で職員用の駐車場の横を通り過ぎようとした時、ふと横合いから甲高い警告音が鳴った。見ると、バックで駐車しようとしていた一台の自動車が、その途中で停まって短く何度かクラクションを鳴らしていた。

明るい緑色の、丸っこいデザインの軽乗用車だ。だが、それにしても小さい。助手席がない。どうやら、一人乗り用に設計された車のようだ。

（うお、何だあの車。スクーター級にお手軽なのに雨でも濡れないのか、いいなあ。乗り物か、自動車は無理でも自転車ぐらい買ってみっかなー。……いや、やめよう。駅前に停めたら絶対盗まれるに

決まってる。俺のヤツだけピンポイントで)

ビジョンがクリアーに浮かぶ程不幸に慣れている当麻は溜息をついたところで、ふと気付いた。

運転席で、見た目小学生の女教師、月詠小萌がハンドルを握っていることに。

「ーってオイ！ブレーキに足届くんかい！？」

「とっ、届かなくなたって運転できるんですーっ！」

小萌先生はわざわざ車のドアを開けて叫び返してきた。

よく見ると、その小型車はハンドルの形が少し特殊で、左右にボタンがついている。レースゲーム用の専用コントローラみたいな感じと思ってくればいい。多分、ボタンを使ってアクセルとブレーキを制御する障害者用の車の技術を利用しているのだろう。

意外にも小萌先生は実により慣れた様子でスムーズに車を停めると、仕事に使うものなのか、分厚いクリアファイルを片手に車から降りてくる。

「まったく、夏休み明けの第一声がそれなんですか。先生は上条ちゃんをそんな風に育てた覚えはないんですよー」

「(……いや、あの光景を見たら誰でも先生の身を案じると思いますけど……)」

当麻は目を逸らして口の中で呟いたが、

「何か言いましたか上条ちゃん！？また背後からこっそり近付いて先生の事を高い高いしようとしてますか！？」

「してねえよ！疑心暗鬼になりすぎだアンタ！」

当麻と小萌先生は大声で言い合いながら校舎への道を歩いていく。始業式の準備でもあるのか小萌先生はやけに小走りだったが、周りの生徒に挨拶される度に律儀に立ち止まって「おはようございますー」と返してしまう為、早歩きの当麻に簡単に追い着かれている。

「ところでそのクリアファイルの中身の紙束って何なんですか？まさか初っ端から抜き打ちテストとかじゃないですよね」

「上条ちゃん、先生は学生時代にやられて嫌だと思ったことはやり

ません。ほらほら、のんびりしないで急いで急いで」小萌先生は当麻を急かすように、「これは学校のお仕事とは違うのです。大学時代の友人から論文の資料集めをお願いされてまして、そっちのお手伝いなのですよー」

「大学時代。……そっか、そうだよな。教員免許採ってるんだもん
な」

「上条ちゃん？」

ぶつぶつ呟いている当麻に、小萌先生は小首を傾げる。

当麻は改めてクリアファイルに目を向けながら、

「ちなみにどんなもんなんですか、論文とかって」

「別に難しい事じゃないですよ？AIM拡散力場の話ですし、上条ちゃんにとっても馴染み深いものですから」

と言われても、既にAIM拡散力場なんて言葉は聞いた事もない。

小萌先生はやや時間を気にしつつも説明好きな教師モードになって、「上条ちゃんがもう少し大人になったら勉強するんですけどねー」。

AIMはAn In v o u n t a r y M o v e m e n t ……《

無自覚》という事です。件のAIM拡散力場とはその名の通り、能力者が体温みたいに自然に発してしまう力のフィールドですねー」

「ふうん。例えば御坂の体から微弱な磁場が漏れてるって感じか：

…」

「はあ、ミサカさんですか？……、あれ。ミサカ？いや、あの、まさかですよね」小萌先生の動きが少しだけ止まる「とにかくAIM拡散力場は、能力者の力の種類によって異なります。発火能力なら熱量、念動力なら圧力を周囲に展開してしまうといった具合ですねー。もっとも、どれも微弱なので精密機器を使わなければ計測できないレベルのものなんですけど」

早足の当麻に追い抜かれると、小萌先生は慌てて小走りで彼の隣にやってくる。

「へー。じゃ、もしもそのAIMナンタラを読み取る能力者がいれば、《ムッ、近くに能力者の気配がする》とかっつーマンガみたい

な真似が出来るとて訳ですか」

「あはは、そうですねー。さらに進歩すれば、AIM拡散力場から能力の種類や強さを測る事も出来るかもしれません。《ムムツ、ヤツ》の戦闘力は七万ポイントだ《みたいな感じで。まあ、とにかく世の中にはそんな事に情熱を注いでいる物好きさん達もいるのです》そんな話をしながら、当麻と小萌先生は校舎に向かって走って行っ

たが、すぐに別れた。職員用昇降口は他にもある為だ。

(……、よし)

それから、意を決して昇降口へと向かう。

記憶を失った当麻の、騙し合いの学園生活が始まる。

自分の教室前まで来た当麻は最大のピンチを迎えていた。何故なら、記憶喪失の彼には自分の座席が何処だか分からないからだ。

(さて、どうするか……)

当麻は少し悩んだが、何の解決策も見出せないまま、教室のドアを開ける。

(うっわ……)

中に入った途端、当麻は内心舌打ちした。教室にいる生徒の数は半分にも満たず、尚且つ誰も席に着いちゃあいなかったのだ。つくづく運がない、と当麻は思った。

と、教室の入り口で呆然と立つ当麻を、一足先に学校に来ていたらしい彼の悪友・青髪ピアスが発見した。身長一八〇センチに届く大男は当麻の元へ歩いてきながら、

「んー？どしたんカミヤん。まさかここまで来て夏の宿題全部忘れてもうたー、なんて愉快に不幸な事実が気が付いたとか？」

青髪ピアスがそんな事を言うと、教室にいる全ての男女の視線が当麻に集中した。

彼等は口々に言う。

「あ、なに？上条ひよっとして宿題忘れてんの？」

「えっと、上条君。本当に宿題忘れちゃったの？」

「うおおやったーっ！俺達だけじゃねえ！仲間是他にもいたーっ！」

「バンザーイ！先生の注目浴びんのはどうせ不幸な上条だけだから、これで僕らのダメーじは軽減されるかも！バンザーイ！！」

色めき立つクラスメイト達に当麻はうんざりした顔になる。

まあ、こんなのは当麻にとってコミカルな日常に過ぎないのだが……。

「つつか、テメエら全員宿題やってねえのか。小萌先生泣くんじゃねえのか？」

昨日の自分の努力は何だったんだろうか、と軽くこめかみを押さえる当麻に、青髪ピアスはニヤニヤ笑って、

「なに、大丈夫やろ。あの人は賢い生徒より手にかかる生徒の方が好きそうやし。夏の補習だってクラスの三分の二が参加したから小萌先生嬉しそうやったやん」

「……、あの人。居酒屋とかでこっそり一人で泣いてたりしねーだろうな」

「あっはっは。なにを言うのんカミヤんは。ボクなんか小萌先生に怒られるためだけに、宿題終わってんのに敢えて全部忘れてきましてよ？」

「ってか絶対泣くだろあの先生！！テメエは好きな女の子に意地悪する小学生か！」

当麻は思わず叫んでいたが、このクラスでは単なる日常風景のようだ。クラスの面々は散り散りになって世間話を再開する。

実に変な集団から解放された当麻としては、さっさと自分の席に着いてホームルームが始まるまで少しでも眠っておきたかったのだが、どこが自分の席なのかが分からない。

（さて、と。馬鹿正直に《俺の席ってどこ？》なんて聞いたら一発で怪しまれるだろうし）

当麻はちよっと考えてから青髪ピアスに向かって、

「ああ悪い。ちよっと俺の机の中からノート取ってきてくんない？」

「ありゃ？何やのカミやん。終業式ん時に置き忘れたん？」

青髪ピアスは当麻の言葉に割と素直に従って、窓際の後ろの席へと歩いていく。

（成程、あそこが俺の席な訳ね）

当麻は机の中を覗き込んでいる青髪ピアスを見ながらそんな事を思った。

「なーカミやん。ノートなんてどこにもないんやけどー？」

「は？あれ、そこじゃなかったっけ？」

首を傾げる青髪ピアスに当麻は適当な言葉を返して、漸く席に着いた。

と、青髪ピアスは隣の席に座ると、世間話を始めた。

「でさー、ゲーム脳の次はマンガ脳ですよ、その自称識者サマが言うには。もうアホかと。マンガ読んだ程度で脳が変質するなら能力開発も楽チンやん。つか時間割の教科書がマンガになるならバンバンザイやけどな」カリキュラム「あー、でも教科書に選ばれるようなマンガってきつと面白くねーぞ。なんつーか、教材色丸出しな感じで」

「馬鹿野郎！そこに隠し萌えがあるんやないか！子供向けのアニメや特撮に含まれる意外なまでの破壊力に何故気がつかん！？一度ぶん殴らんと分からんかテメエは！！」

「何でそこまでキレちゃうの！？それで超能力者（レベル5）になっちまっても微妙だし！」

当麻はいつもの馬鹿話をしながら、自分がこの空間に溶け込んでいくのに気付いた。

現在の当麻は、もう思い出を語ることが出来る。

記憶喪失というハンデは、既に消えつつあった。

だが、それはあくまでも彼自身の事情だ。

きつと、あの少女にとっては何の解決にもなっちゃいない。

色々物思いに耽る当麻。

「カミやん？おーいカミやん」

青髪ピアスのこの声で漸く意識を戻す。

「あ、あー。悪い、昨日眠ってなくて頭がボーッとしてんだ」
強引に取り繕い、彼は偽りが作る日常へと帰る。

「はいはい、それじゃさっさとホームルーム始めますよー。始業式まで時間が押しちゃってるのでテキパキ進めちゃいますからねー」
小萌先生が教室に入ってきた頃には、生徒の殆どは着席していた。

「ありゃ？先生、土御門は？」

「お休みの連絡は受けてませんー。もしかしたらお寝坊さんかもしれませんー」

当麻の問いに、小萌先生は首を傾げながら答えた。

「えー、出席を取る前にクラスみんなにビッグニュースですー。

なんと今日から転入生追加ですー」

おや？とクラスの面々の注目が小萌先生に向く。

「ちなみにその子は女の子ですー。おめでとう野郎どもー、残念でした子猫ちゃん達ー」

おおおお！！とクラスの面々が色めき立つ。

そんな中、当麻は一人、何だか言い知れぬ嫌な予感に襲われていた。
万年不幸な彼らしいと言えづらいのだが……。

(……、何か。何かとんでもないオチがつくような気がする)

色々悶々と考え込む当麻。それは一般的に言えば妄想と呼べるモノであった。

「い、いけない！それはちょっと楽しそうだと思った自分がいけない！」

「上条ちゃん？何頭抱えてぶつぶつ言ってるんですかー？」小萌先生は挙動不審な当麻の態度にちよつと首を傾げながた後、「取り敢えず顔見せだけですー。詳しい自己紹介とかは始業式が終わった後にしますからねー。さあ転入生ちゃん、どーぞー」

小萌先生がそう言うのと、教室の入り口の引き戸がガラガラと音を立てて開かれた。

転入生って、誰だろうと思って、当麻が視線を向けると、

そこには、三毛猫を抱えた白いシスターが立っていた。

「なばあっ……!!」

余りにも予想外すぎる展開に、当麻の思考が真っ白に染まる。

クラスの皆も色々困惑しているようだ。

そんな空気を読めないインデックスだけは本当にいつも通りに、

「あ、とうまだ。うん、という事はやっぱりここがとうまの通うガッコーなんだね。ここまで案内してくれたまいかには後でお礼を言っておいた方がいいかも」

彼女の言葉を聞いた途端にクラスの皆は一斉に当麻へと視線を集中させた。

彼等の目は「またテメエか」と語っていた。

「……………あ、あれ？なのですよー」

小萌先生はドアの前に立つインデックスを見てカチンコチンに凍り付いている。

「ちょ、待って。小萌先生、これは一体どういう……？」

当麻はそう問い質すが、彼女にとっても予想外の展開だったようで、その声を聞いた小萌先生はやっと正気に戻り、

「シスターちゃん！まったくどこから入ってきたんですか！転入生は貴女じゃないでしょう！？ほら出てった出でったですーっ！」

「あっ、でも、私はとうまにお昼ご飯のことを……」

何かを訴えるインデックスだったが、小萌先生は問答無用でぐいぐいと彼女の背中を押して教室から追い出そうとしている。

当麻は反射的に席を立ち、

「あ……。お、おいインデク……っ!!」

「上条ちゃん！もうこれ以上お話をややこしくしないでくださいー」

っ！」

「うおっ!？」

追いかけてようとしたら、小萌先生に一喝され立ち止まる当麻。そして、小萌先生はいっ泣き出してしまふのか予測できない子供のような怖さを醸し出したまま、インデックスの背中を押し出して一緒に教室から出て行った。

その様子を当麻はただ呆然と見送ることしか出来なかった。

そんな彼女たちと入れ替わるように、黒のストレートロングの少女が入って来る。

「ちなみに。本物の転入生は私。ひめがみ あいさ 姫神秋沙」

その少女はかつて当麻が命を賭けて救った少女だった。

見知った顔を確認できた当麻は安堵の余り机に突っ伏した。

「よ、良かった。地味に姫神で良かった。しかも巫女装束じゃなくて何のひねりもない地味な制服に身を包んでくれて心底本当に良かった……」

「君の台詞には。そこはかたない悪意を感じるのだけど」

地味地味と言われた秋沙は、少しだけムツとしたような顔でそう答えた。

その後、当麻は色々不幸(?)なイベントに遭遇する事になるのだが、それはまた別の話である。

一方、当麻が自分の学校でホームルームを受けて、なんやかんやでラッキースケベなイベントに遭遇したり、小萌先生に説教されたりしている頃、小次郎は学園都市内にある図書館に来ていた。

目的はただ一つ、ここが何処なのかを調査すること。ただ、それだけのはずだったのだが、

「……白凰学院も、誠士館もねえ。一体どういうことだ、こりゃ？」

小次郎は困惑していた。

何故なら、調査している内に今、自分がいる場所が関東地方（それも東京都内）だと分かったというのに、ここで見た地図上にも、パソコン（使い方はかつて任務で白凰学院に来たとき世話になった女性・柳生蘭子に教わった）のインターネットで調べても自分のよく知る学校の名が全く載っていなかった。

代わりに”学園都市”という名称が地図上の東京都の三分の一程にわたって記述され、そこには数多くの学校があること、超能力開発を日々の日課にしている事等が分かった。

ここまで来ると、流石さすがの小次郎も今、自分が置かれている状況がすぐにでも分かった。それは――

（こりゃ、もう完全に異世界、それも並行世界ってヤツに来ちまっ
たみたいだな……。確かにあの聖地から生きて元の世界に戻れねえ
とは思ったけどよ……。流石に異世界に移動っつーのはねえんじやね
えか？）

小次郎はがらくんとした（今、この時間帯はこの住民の八割である
学生が学校に行っている為。ただし、不良は別）図書館内にある
備え付けのパソコン前の椅子の背もたれにだらりと力なく身を任せ
た。

小次郎はその体勢のまま今まで調べてきた事を思い返していた。
その中でも鮮明に思い返すのは、”超能力”や”能力者”というフ
レーズである。

このフレーズには、小次郎は聞き覚えがあるどころか、実に身近に
そういった力を持った人物がいたので、別段気にすることではない。
問題なのは――

（……それにしても、この世界、いや、この街には竜魔りょうまや武蔵むさしみた
いな超能力戦士がゴロゴロいんのか？参っちゃまうぜ……）

そう、問題とはこのことだ。

小次郎は自分と同じ風魔の同胞の一人と自分にとって生涯最高の好
敵手イバルを思い出しながら、この街の事実^ラに少しウンザリしてしまう。

何故なら、彼等の実力とその強大さを嫌と言うほど知っているからだ。小次郎がそう思うのも仕方のないことだろう。

しかし、それは彼の勘違いである。

それは、彼等のような力を持った人間はほんの一握りだけだということだ。

まあ、それを彼が知るのはごくごく近い未来のことだが。今はそのことは置いとくでしょう。

あらかた調べ終えた小次郎はふと、館内の時計を見た。時刻は既に正午近くになっている。

（……もうこんな時間か……。しょうがねえ、昼飯時だからもうここから出るとすっかな）

そう考えるとすぐに行動を開始する。

小次郎は、図書館の出入り口に向かいながら、これからどうするべきかを思案する。

（……さあて、風魔の里に戻れねえんだから、どうやってここで暮らしていくのか考えねえとな。宿のことはひとまず後回しだ。まずしなけりゃいけねえことは……。飯だな！）

やはり立ち直りが早い小次郎。伊達に忍びはやってないだけのことはある。というかもうこれは彼の性分と言える。

図書館を出て、近くの歩道に足を踏み入れた時、彼の耳に声が聞こえた。

随分遠くからだ、何か少女の泣き声のようなモノだ。

「誰かが泣いてるみてえだな……。よし！どこまでできるか分かんねえけど訳ぐらいは聞けんだろ。行くか！！」

この世界に來ても相変わらずな小次郎は、声の聞こえた方角へ向けて移動し始めた。女の子の涙を止めるために。

もちろん、風と共にその姿を消して……。

紆余曲折あって学校から追い出されたインデックスは、校門近くの金網のフェンスに寄りかかって当麻を待っていた。腕の中の三毛猫のスフィックスは眠そうに欠伸をしている。

「……あの……なんか、すごかったね。ちよつとびっくりした」
か細い声にインデックスが振り向くと、そこには先程食堂でひよんなことで知り合い、友達になった眼鏡をかけた少女・風斬氷華^{かざきり ひょうか}が立っていた。

「あんなのいつもの事だよ。ひょうかも一緒におしゃべりすれば良かったのに」

「こもえのあれは怒ってるんじゃないよ。どうしてそんなに気にするの、ひょうか？」

「だって、あなた……何か、哀しそうな顔してるから……」

氷華が言うと、インデックスはちよつとだけ黙った。
暫くしてから、彼女は口を開く。

「……、とうま。怒ってた」

「？」

「今までだって何度もケンカした事あるけど、なんか今回は違う気がする。とうまは全然私の言葉を聞いてくれないし、ずっと怒ったままだし、ちよつとも笑ってくれないし……」

自分で放った言葉に、インデックスは少しだけ顔を歪ませる。

つい先程、当麻と口喧嘩をした時は活発だった彼女も、内心落ち込んでいたようだ。

「とうま。私の事嫌いになっちゃったのかな……」
インデックスは顔を俯かせる。

（それとも……）

彼女はネガティブな思考に陥っていた。

（それとも、とうまは最初から嫌いで、私はやっとそれに気付いただけなのかも）

わずかに唇を噛むインデックス。

三毛猫を抱く手に思わず力が入ってしまったのか、抗議の鳴き声をあげる。

そんな少女を見て、氷華は小さく笑った。

「……そんな事、ないよ。ケンカできる友達って……凄く仲が良いって証なんだから」

「どうして？ ケンカすると傷つくんだよ。乱暴な言葉を言われると痛むんだよ。仲が良い人ならそんなの押し付けたりしないよ、絶対」

「ケンカができる友達っていうのはね……」氷華は静かに言う、「ケンカをしても……ちゃんと仲直りできる友達なのよ。それっきりで、終わらないの。あの人は……あなたとケンカしても縁が切れないうって信じてるから……安心してケンカできたんだと思うの」

「ホントに？」

「これは、本当……じゃあ、ケンカしない方が良い？ ケンカしたくないから……自分のやりたい事を押し殺して、したくもないのに笑顔で応じて……それでもケンカしちゃったらもうそれっきりで、仲直りもしないで……その友達を捨てて別の友人を作る。そんな薄氷みたいな関係の方が良い……？」

その言葉を聞いたインデックスは嫌そうな顔をする。

その顔を見て、氷華は柔らかく微笑みかける。

「そんなの、やだよ。私は、とうまとずっと一緒にいたい」

そのインデックスの言葉に、

「うん……そう思えるなら……きっと、あなた達は大丈夫よ……。少なくとも、あの人はあなたのために怒ってくれるような、人だから。大丈夫」

氷華は、そんな言葉を返した。

その時、ひゅうううと、柔らかな”風”が吹いた。

インデックスと氷華が風が吹いた方を向くと、そこには一人の少年が頭を掻きながら参ったなーというような顔をして立っていた。

始業式中に起きた食堂での一件でお説教を食らっていた当麻は漸く小萌先生から解放されていた。既に生徒は皆帰ってしまつて校舎の中には誰もいない。この時間帯はもう始業式もホームルームも終わっていて、部活以外の人一人もいないのは当たり前のことだが…。

(…う、うだー)

疲労&寝不足のせいで当

麻はしなびた野菜の如くへこんでいた。

既に時刻は正午過ぎ。空腹を感じながら当麻は教室に戻り鞆を回収、その足で昇降口へ向かい、外履き用の革靴に履き替え外に出る。校庭をテクテクと歩いていると、校門近くにインデックスと氷華、そして、何故か今朝会った少年が待っているのを発見する。

パチクリと目を瞬かせる当麻。どうやら向こうもこちらに気付いたらしく、少し驚いた顔をしている。

暫くそんなお見合いじみた事をした後、

「「あーっ！お、お前は！？」」

二人はお互いを指差し、同時に叫んだ。そして、

「今朝の腹ペコ金欠学生！」「あの時の飯代を恵んでくれた人か！」
そう、当麻は勿論のことその少年ー小次郎もちゃんとお互いのことを覚えていたのだ。

片や助けてあげた人、片や恩のある人として。

「いやあ、まさかこんなとこでまた会えるなんてなあ」

「そいつぁ俺の台詞だぜ！こんなに早く再会できるなんてよ！」

二人の少年の会話にインデックスは少し疑問に感じたので、会話の間に入る事にした。

「とうま。この人と知り合いなの？」

「ん？ああ、今朝お金に困ってたんで助けたんだ。つかお前もこの人と知り合いなのか？」

「ううん。さっき知り合っただけなんだよ。でも、この人、とっても言い人だよ。うま。わざわざ私の事慰めに来てくれたんだよ」

「そっか。悪かったな、俺のせいでこいつの世話かけさせちゃって」
当麻の言葉に小次郎は別に気にしてないという感じで、

「いや、俺が勝手にこっちに来ちゃっただけさ」

と、どことなく照れた感じで答える。

「それでとうま。この人は誰なの。紹介して欲しいかも」

機嫌のいい様子で訊いてくるインデックスにやや固まる当麻。

「そういや、俺達……」

「まだ自己紹介してなかったな」

二人はお互いに顔を合わせ確認する。インデックスからはやや呆れの視線が二人に向けられる。その視線に気付いてないのか二人は気を取り直し自己紹介することにした。

「じゃあ、まずは俺だな。俺は当麻。上条当麻だ」

「俺は小次郎。」風魔”の小次郎ってんだ。よろしくな当麻」

そう言って右手を差し伸べる小次郎。

当麻はその名乗りに何で通り名みたいなモノを名乗ったんだろう、と思ったが、特に気にすることじゃないかと思い（インデックスは”風魔”？どこかで聞いたような、という顔をした）、二人は快く握手をした。

その挨拶を終えると当麻は当初の目的を思い出し、インデックスに顔を向ける。

「で、どこへメシ食いに行く？あんま高そうな場所はダメだぞ」

当麻の言葉にやや不思議そうな顔をインデックスは言葉を紡ぐ。

「とうま、今日はウチで食べないの？」

「だって、面倒くさいだろ。どうせメシ食ったら遊びに行くんだし」

「……、」

「何だよ。お前、朝言っただろ。もう忘れたのか？」

「わ、忘れてない……けど」

インデックスがちよっと顔を赤らめて猫を抱く手に力を込めると、
スライク三毛猫が鬱陶しそうに鳴いてバタバタと暴れる。

隣でくすぐすと氷華が笑い、当麻の隣で小次郎も微笑ましそうに見える。

「そうだ、ひょうかも一緒に行こう？」

「え……いいの？」

「断る理由なんかないよ。ねえ、とうまもいいよね」

「だな」

当麻が即答すると、氷華はほんの少し驚いた顔になる。

「えっと……ありが、とう」

彼女はインデックスの顔を見て、小声でそう言った。

「ああ。……そうだ！小次郎も来ないか？」

当麻は隣にいた小次郎に声をかける。

「ん？いいのか？邪魔しちまっても？」

「邪魔なんかじゃないって。インデックスもいいよな？」

「もちろんだよ、とうま！」

快く返事をするインデックスに小次郎は軽く驚いたが、すぐに笑みを浮かべ、

「ありがとな、ええと……」

「インデックスだよ、こじろう！」

「ああ、インデックス……」

妹分を見るかのような優しい目で小次郎はそう言った。

「ん。一日遊ぶんならちよっと金があるか。悪い、ちよっとコンビニで金下ろしてくるから、ここで待ってろ」

当麻はそれだけ言うと、学校付近にあるコンビニへ向かい、入り口近くにあるATMを操作する。

学園都市には奨学金制度があり、月一で口座にお金が給料日の如く振り込まれる。

その額はレベルが高いほど上がっていくが、彼は無能力者（レベル

0)なので、大した金額もない。

彼は、お金を引き出すとそれを財布に入れつつコンビニを出る。と、不意に横合いから声をかけられた。

「おいおいちょっとー、その少年。不用心じゃんよー」

声をかけてきた方を向くと、そこには緑色のジャージを着た色っぽい女の人が立っていた。しかし、どうも肩の所についている腕章を見る限り、どうも警備員アンチスキルの人のようだ。

彼女は当麻を見て、どこか呆れているように言う。

「ATMの近くで財布を見せながら無防備に歩くんじゃないの。奪ってくださいと言っているようなものじゃん」

「え、あ？はあ、すみません」

何か訳が分からない内に当麻が謝っていると、何でだか分からないがジャージの女性は満足そうに、

「うんうん。次からは気を付けるんだぞ少年」

ニコニコ笑うと、彼女は当麻を置いてきぼりにしてどこかへ行ってしまった。

当麻は頭を掻いた。警備員はプロとしての訓練を積んでいるが、その本職は教師だ。これは別に副業というわけではなく、ぶっちゃけて言えばボランティアで夜の見回りをしている活動の延長線上にあるものなのだ。

ちなみに、結構人気があるらしい。

（それにしても、この近くをうろついているって事は、案外ウチの先生なのか？……やべえな、思い切り初対面のノリで接しちまったぞ。いや、向こうも知り合いに話しかけるようなトーンじゃなかったし……）

そう考えた時、当麻は誰かに自分の服をちょいちょいと引っ張られた。何だろうと思ひ、彼が振り向くと、そこには秋沙が立っている。

「ありゃ？何やってんだ姫神。お前まだ帰ってなかったのか？」

「……。人が転校してきたというのに。その淡泊な反応は何？」

「あー……」

朝のインパクトが強すぎたせいで有耶無耶になりつつあったが、今日は秋沙の転校初日という大きな出来事があったのだった。

「そうか。私はやっぱり。影が薄い女なのね」

「いや、あの、そんなに落ち込むなって。なんかお前の周りだけ太陽の恵みが希薄だぞ……」

ゴーン、と効果音つきで落ち込んでしまっている秋沙だったのだが、暫くすると復活し、

「そんな事より」

「（そんな事って……やっぱこいつも掴み所がねーよな……）」

「ちよっと話が耳に入ったのだけど。あの眼鏡の女の名前って。風斬氷華でいいの？」

「あん？」

当麻は視線を移す。

少し離れた校門の辺りで、インデックスと氷華、そして小次郎が立っている。ここからでは聞こえないが、どこことなく楽しそうに会話している様子は分かる（この時の当麻は知る由もないが、小次郎は二人と会話しながら、こっちの話に聞き耳を立てている）。

彼は再び秋沙の方に顔を向け、

「ああ、そうそう。風斬氷華で合ってるよ。ってか、お前の友達なのか？」

「……」

秋沙は当麻の言葉を受け、遠くにいる氷華の顔を見る。

それはあまり好意的な眼差しではなかった。

「おい、どうしたんだよお前」

「確認するけど。あの子の名前は。風斬氷華なのね？」

「まあ……本人もインデックスもそう言ってるけど。身分証とか確認した訳じゃねーけど、別にそんなのする必要ねーだろ」

「風斬。氷華」

もう一度、秋沙はその名を告げる。

「君は。私が前に通っていた高校の名前は。知らないよね？」

「まあ……知らないけど」

「霧が丘女学院。単純に能力開発分野だけなら常盤台に肩を並べる名門校。常盤台が汎用性に優れたレギュラー的な能力者の育成に特化しているのなら。霧が丘は奇妙で。異常で。でも再現するのが難しいイレギュラー的な能力者の開発のエキスパート」

ふうん、と適当に当麻は相槌を打つ。「風斬氷華の名前は。霧が丘でも見た事がある」

妙に名前は、の所を強調する秋沙。

「って事は、お前達って一緒に転校してきたのか？」

「……」

何故か秋沙は答えなかった。当麻は少し奇妙に思いながらも、

「霧が丘に通ってたって事は、風斬もお前みたいに珍しい能力の持ち主って訳だよな」

当麻はそう言ったが、特に彼は驚かない。何故なら彼の知り合いには最強クラスの電撃娘がいるし、彼自身も特殊な能力を持っている為だ。

だが、

「分からない」

「？」

「風斬氷華の力は誰にも分からない」

そこで一度言葉を切ってから、秋沙は続ける。

「彼女の名前は。いつでもテストの上位ランクとして学校の掲示板に張り出してあったけど」

「ふうん。頭良かったのか、あいつ」

「ううん。頭の良さ（ソレ）とは関係ない。霧が丘は《能力の価値》によってランク付けされるから。単純に。風斬の力が一番珍しかっただけ。それが有用かどうかは話が違う」

けれど、と言葉を切ってから秋沙は語る。

「そもそも。風斬が何年何組に在籍していたのか。それすら誰も知らない。霧が丘の人間は。みんな風斬氷華の名前を知っていたけれ

ど。実際に彼女の姿を見た人は。誰もいないの。いつもテストの上位リンクとして発表されているのに」

「……何だよ、それ」

「だから。誰にも分からないの。霧が丘では。私は気になって先生に尋ねた事がある。そしたら内緒話をするみたいにして教えてもらった。風斬氷華は《カウンターストップ正体不明》と呼ばれていると」
尚も秋沙の言葉は続く。

「でも。一番重要なのはそこじゃない。先生が教えてくれた所で一番重要なのは。その《正体不明》ではなく。もっと別の所にある」
彼女はこう告げる。

「いわく。風斬氷華は。虚数学区・五行機関の正体を知るための鍵だ」

当麻は思わず眉をひそめた。

それはこの街の深い暗部だ。

それは、どこことなく、ある少女と似ている節があるのだ。

「先生の話では。風斬氷華には彼女個人の能力を調べるための研究室とくべつがあるという話だった。個人のために研究室を用意するなんて滅多にないから。実はそれは《正体不明》ではなく。虚数学区・五行機関の正体を探るための研究室だって」

秋沙はそこで考え込むようにして、

「でも。先生もやっぱり風斬氷華の姿は見た事がないって言っていた。研究室はあって。テストの結果にも名前が載っているのに。その正体は先生の間でも一部の人しか分からないって」

「けど……そんなのって」

「うん。私もどこまでが本当かは分からないから。だからこそ。一応の忠告で済ませてるの」

だから気をつけてね、と秋沙は言った後、ところで、と一言入れて小次郎の事を気にしながら、

「あの人は、誰？」

「え？小次郎のことか？」

その当麻の言葉に秋沙はこくと頷く。

「あいつは、今朝食費に困ってたから助けたヤツなんだ」

「……」

秋沙は当麻の言葉を黙って小次郎を見ながら聞いている。

「まあ、見ての通り気さくでいいヤツなんだけどさ……って、姫神。あいつがどうかしたのか？」

じゅっ、と小次郎を観察するように見つめる秋沙に気付いた当麻は疑問に思った為、質問する。

「……。あの人から。君と同じ雰囲気を感じる」

「えっ、そうなのか？」

その当麻の言葉に秋沙は頷くと、もう用は済んだのか、その場を立ち去ろうとする。

「あっ、ちよっと待てよ。俺達これから遊びに行くんだけど、お前もどうだ？」

「……」

秋沙は振り返る。ポーカーフェイスなその顔が、ほんのちよっとだけびっくりしているように見えるのは気のせいではないだろう。

「……。小萌の……バカ」

「は？」

「何でもない。用事を頼まれているから。私は行けない」

彼女は（大分無理しているような）平淡な声でそう言うと、当麻に背を向けて歩き出した。どこことなくしょんぼりムードを漂わせる秋沙の後ろ姿を当麻は暫し見つめていたのだが、ふと何かを思い出したかのように秋沙は立ち止まり当麻の方を振り向いた。

「時に。あの風斬氷華は。どうやってこの学校に入ってきたの？」

「え？ 確か……インデックスの話だと、転入生だとかって」

「そう」

秋沙は一言だけ言うと、

「でもね。記録では。転入生は私一人しかいないはずなのよ」
その言葉に当麻は絶句。秋沙はもう一度だけ”気を付けてね”とだ

け言うと、今度こそ彼の元から立ち去った。当麻は、秋沙から校門近くに佇む少女達＋αの方へと視線を向ける。

インデックスや秋沙に自分と雰囲気似てると言われた小次郎と一緒に笑い合っている氷華は、どこからどう見てもただの一般人に見えない。

（分っかんねーな。ただの噂なのか、本当のことなのか……）

当麻は頭を掻きながら、三人の元へと歩いていく。

インデックスと氷華は、そんな彼を迎え入れるように笑顔を作る。

スライク三毛猫がみにゃ〜と鳴く。

おかしい所などどこにもない。そう思った時、

「しかし、あれだな」

「あん？」

小次郎がニヤリとした顔をしながら当麻に話しかけて来た。怪訝な顔をする当麻に、小次郎はこう言った。

「お前って、モテんのな」

「はあ!？」

当麻の素っ頓狂な叫びが青空に響き渡る。

その後、当麻は小次郎が抱いた誤解（という訳ではないのだが）を解くのに数分の時間を費やした。

そんな当麻を小次郎は生暖かい目で見ていた。

こうして、”風”と幻想殺しは出会った。

それがまるで、運命だったかのように……。

第二話 ”風”と幻想殺し（後書き）

小次郎、メイン主人公なのに今回あんまり出番がない。
だからって、原作主人公である、当麻を疎かにはできやしない。
次回はもう少し出番が増えると思います。
それでは、また！

第二・五話 駅前での闘い（前書き）

思ったより早く幕間のモノが書けました。
では、どうぞ！

第二・五話 駅前での闘い

小次郎と当麻達が地下街に向かっている頃、駅前的大通りで、風紀ジャツ委員の一人、白井黒子は、学園都市に進入してきた女と向かい合っていた。

いや、正確には黒子のみが、その件の女を見つめているだけなのだが……。

治安部隊による避難命令は先程出した。あと、もう数十秒もしない内にこの駅前の繁華街から人影は消えるだろう。その女は、ただゆらりと立っている。

両者の距離はおよそ十メートル強程。小次郎なら極微ごくみの間に踏み込み相手を仕留められる距離だ。

まあ、それは置いとくとして、黒子はその女へ視線を向ける。

その女の外見ははっきり言ってしまえば、残念ゴスロリといった感じだ。「動かないで戴きたいですわね。わたくし、この街の治安維持を務めております白井黒子と申します。自身が拘束される理由は、わざわざ述べるまでもないでしょう？」

黒子の言葉に女は大きな反応を見せない。

彼女は黒子の事にはあまり興味がないようだ。

黒子の質問より5秒後、女は漸く黒子に目を向け、

「探索中止。……手間かけさせやがって」

明確な侮蔑を含む声で言う。そして、女が何かをしようと、袖に手を差し入れた所で――

――瞬間、黒子は既に女の鼻先に立っていた。

小次郎よりは遅いが、それでも黒子は十メートルという距離を一瞬でゼロにまで詰めたのだ。

女の気怠げな顔がほんの少しだけ怪訝な色になる。

これを可能にしたのは黒子が大能力（レベル4）の空間移動能力者だからなのだが、それは置いてくとしよう。

話を戻す。その後すぐに黒子は自身の能力を駆使し、女を地面に倒す。

女はその状態になっても尚、面倒臭そうに地を転がる回避行動をとろうとするが、

「ですからー」

黒子は即座にドカドカドカツ！と、女の着ているドレスの袖やスカートの布地の端っこに十二本もの金属矢が貫き、アスファルトの地面に縫いつけた。

「動くな、と申し上げております。日本語、正しく伝わっていませんの？」

黒子は静かに告げる。

だが、このような状態になっても、女の褐色の顔に変化は見られない。

ただ、その口元だけが、まるで口裂け女のように真横へ細く長く音もなく、笑っていた。

「な……」

かえって、黒子の方が眉をひそめるだけだった。

その時、不意に彼女の後ろで、地面が勢いよく爆発した。

「……ん、です……ッ！？」

黒子は驚いたものの振り返る余裕すらなかった。アスファルトの隆起に巻き上げられ、その体が宙に浮いてしまう。硬い地面に背中から倒れた彼女は漸く背後に目をやる。

そこにはただただ巨大な腕があった。

それを見た黒子は慌てて離脱しようとしたが、足首が何かに引っかかってしまって動く事が出来なかった。

地面と《腕》の付け根の近くの地面が盛り上がっていて、砕けたアスファルトが複雑に絡み合う、そんな場所の隙間に彼女の足首が挟まってしまったのだ。

(……あ、ぐっ……。まさか、外部の人間のくせに……能力者、なん……!?)

黒子はじわじわと足首に加わっていく重圧に顔をしかめた。

ふと、女の方に顔を向けると、彼女の手には白いチョークのようなモノが握られており、それを使って、アスファルトの上に何か記号のようなモノを刻んでいる。

それはどこかオカルトじみた魔法の文字のように見える。

魔術を知らない黒子は自分の知識のみでそれを自己暗示をケータイの短縮メモリのように何パターンか用意して能力を制御していると分析した。

(ま、ずい……ですわ。とにかく、体勢を、整え……ッ!)

とにかく黒子は冷静になろうとしたが、ふと気付いた。

足首を挟まれた、その隆起部分が巨人の頭のように見えることに。

それは、彼女の足がアスファルトの《歯》に噛みつかれているかのような光景だった。

(ま、ず……)

冷静さを忘れてしまった為、黒子はただでさえ複雑な自分の能力を使うことが出来ない。

その上、ギチギチ、とアスファルトの《歯》が数ミリ食い込み、彼女の足首が激痛の悲鳴をあげる。

(あ、ぎっ……が……!?)

痛みに耐えながら黒子は女の方を見る。

地に伏したままなはずのその女は、うっすらと笑いながら手首のスナップだけで白いチョークのようなものを動かしている。それに呼応するかのように、じわじわと大きな腕の肘の間接が折れ曲がり、そのの向きが変わっていく。地面を這う獲物を押し潰す為にゆっくりとそれは狙いを定めていく。

黒子は激痛と死の緊張から回避行動に移る事が出来ないでいた。

女が白いチョークを宙へ曲線を描くように振るうと、《腕》の五本の指が強く握りしめられた。同時に、黒子の足首を噛む《歯》がさ

らに食い込み、彼女の足首に激痛が走った。

あまりの激痛と死への恐怖に思わず黒子は目を閉じる。

しかし、次に聞こえてきたのは、何者かが《腕》を切断した音だった。

(な……、え……?)

突然の一撃に黒子は驚きの余り目を開けた。

《腕》の手首の部分が水平に綺麗に切られていた。それを確認しようとした次の瞬間には、黒子の足首を固定していた《歯》が鋭い何かによって、薙ぎ払われる。急に枷が外れた為、黒子の体は後ろへ転がってしまう。

ビュバン!!と空を裂く音と共に、鋭い何か―砂鉄の鞭―が持ち主の元へと戻っていく。

(お待ち、なさい……。磁力で、操る?まさ、か……。!!)

黒子は咳き込みながらも、自分を助けてくれた者の方へ目を向ける。その先には、学園都市第三位・御坂美琴が立っていた。

キン、という小さな金属音が鳴り響く。それは、美琴の指が、一枚のコインをはじいた音だった。

コインは実にゆっくりと彼女の頭上を舞い踊っている。

彼女の口が開く。

「何の騒ぎだか知らないんだけどさー」

腕の残骸が黒子に向かってゆっくりと倒れかかる。

弾かれたコインが、再び美琴の親指へ乗る。

「ー私の知り合いに手え出してんじゃないわよ、クソ豚が!!」

瞬間。美琴の異名、超電磁砲^{レールガン}の所以となる必殺の一撃が放たれた。

そしてそれは黒子を狙ったモノを総てまとめて吹き飛ばした。それは音速の三倍もの速さであった。

その後、すぐにもうもうと立ち込める粉塵のスクリーンは、超電磁砲によって押し出された空気之余波によって吹き飛ばされた。

(す、すごい……)

黒子は念の為に辺りを警戒しながらも、思考の大部分は別の事に奪

われていた。

（余波が生み出した烈風だけで、既に並の風力使いを凌駕していますわ。一体どこまで底なしになれば気が済むんですの、お姉様ってば！）

それに対し、美琴は既に危機感もなくのんびりと黒子の元へ歩いて来る。

「あー、黒子。もう硬くならなくても良いわよ。あのでっかい手は囷だったみたいだから。超電磁砲の威力じゃなくて、自分から爆発したのよ。ほら、煙幕の陰に隠れてあの馬鹿女がどっかに消えてんじゃない」

美琴は舌をチロツと出して指を指す。

黒子が見ると、そこにいたはずの女がどこにもいなかった。

「で、あれって誰なの？アンタが追ってるって事は、やっぱ風紀委員がらみ？」

「え、ええ。どうやら不法侵入者みたいでしたのですけど……お姉様あ……」

黒子はそこで緊張が解けたのか、美琴に抱きついた。

「ちょっと、こら、アンタ！こんな時まで変な妄想膨らませてー」
美琴は少し遅れてから、胸に飛び込んできた黒子を引き剥がそうとするが、出来なかった。

黒子は美琴のサマーセーターの胸の辺りを小さく掴んでいた。そして、ただそれだけでも彼女の体が震えてるのに美琴はすぐに気付いた。

「ったく」

美琴は軽く息を吐いてから少し思案する。

こんな時、震えているのが自分だったら、当麻だったらなんて言うのかを。

「黒子。アンタは何でも一人で解決しようとしすぎんのよ。あんなの相手にアンタが一人本気になったってバカみたいでしょ。別に一对一で戦わなきゃいけないなんてルールもないんだし」

美琴はかける言葉の内容ではなく、言葉をかけるといふ行為と、それを行おうとする想いにこそ意味があると思っている。

「もっと私を頼れ。ヤバイ事が起きてからだけじゃなくて、少しでもヤバそうならそれだけで連絡を入れなさい。私に迷惑かけたくななんて思わないの。状況が絶望的であればあるほど、そういう場面で頼られればそれだけ私を信賴してくれてるって証になるんだから。私がそれを拒絶するはずがないでしょ」

美琴は、ポンポン、と黒子の頭を撫でてあげる。

一方の黒子といえば、小刻みに震えたまま、

「……うっふっふ。これぞまさしく千載一遇のチャンスですわ。こうして近付けばお姉様の胸の谷間へと思う存分……うっふっふ。うっふっふっふっふっふっふ!!」

「なっ、え、あれ?……ちよっと!ひ、人がマジメに慰めてたっていうのに!黒子、アンタこの震えは武者震いなのか!」

美琴が赤面して叫ぶも、既に遅い。

黒子は美琴の背中にがっちり手を回す（ホールドする）と、愛しのお姉様の胸元へ思いつ切り頬ずりし始めた。

この様子を小次郎が聞こえたのかは定かではない。

第二・五話 駅前での闘い（後書き）

文章力が相変わらず……。頑張って上達したいと思います。

第三話 地下街にて……（前書き）

お待たせしました！第三話です。

通算五話目です。

相変わらずの駄文だとは思いますが、読んで頂けると嬉しいです！
今回はいつもよりちょっぴり長めです。

（小次郎の出番、前々回よりは多いと思います。）

第三話 地下街にて……

「漸く着いたな、地下街に」

「そ、そうですね……」

「おー。とうま、これがウワサの地下世界なんだね」

「地下街な、地下街」

小次郎の妙に達成感のある言葉に、小動物のように答える氷華。そして、はしゃぐインデックスに、寝不足のローギアのまますツコミを入れる当麻。なんとも個性的なメンツの揃った四人組である。

全くの余談だが、小次郎は学園都市には地下街が多いことは午前中の調査で知ってはいたが、随分多くの学生達が行き来しているのにやや驚いていた。何せ調査通り、大人の姿が殆ど、というか全くないのだから無理もない。

ちなみに、地下街（こち）に来るまでに小次郎と当麻は意気投合し、昔からの親友だったような関係になっていた。

「取り敢えずメシでも食いますか。インデックス、なんか希望とかあるか？あと、小次郎も。あー、高いトコと行列ができるトコはやめてくれよな」

「そんな所行かなくても良いよ。安くて美味しくて量が多くてあまり人に知られていないお店がいい」

「俺はどこでも良いけどな。腹が膨れりゃ」

「……、それはそれで探すのが難しそうだけどな。そして、小次郎。それが一番困る意見だから。風斬は？」

当麻が氷華にそう振るが、何故か彼女は肩を震わせてインデックスの陰に隠れてしまった。

「あー……」

当麻が、なんかやったのか俺は、心中で呟くと（小次郎はシャイだねー、と思っていた）、

「……あ、いえ……ごめん、なさい。怖い、とかじゃないんですけ

ど」氷華は物陰から伺うように、「……その、ハダカも、見られたし……」

「は？」当麻には最後の辺りが聞こえなかったが、小次郎にはしっかりと聞こえており、口には出さず、心の中で「当麻のラッキースケベ」とからかっていた。

「え、っと……いえ、何でも、ありま、せん。でも……見られたし……見られたのに、この、やたらと薄い反応は……えっと……」

当麻はさっぱり分かっていないようだが、小次郎は、

（やれやれ、秋沙（あの子）もそうだが、当麻って奴あ、罪な男だぜ……）

とこの状況をどこか楽しみながら、呆れていた。

一方、インデックスは同じ女故に氷華の言いたいことが分かっているのか、やや冷たい眼差しで、

「まったく、とうまは目が怖いんだよ」

「あん？どこがだよ」

「その獣のような目が。虎視眈々と婦女子を付け狙うその目がっ。普段は人畜無害ですよーと主張しておきながら美味しい所是一片たりとも逃さんと黙して語るその目が怖いっ！」

「テメエがそういう事を吹き込むから無駄に怖がるんだろうが！」

当麻が叫ぶと氷華の肩が反応するようにピクンと震えた（小次郎は穏やかにかつ、面白そうに笑っているが）。彼女はインデックスの陰に隠れたまま、恐る恐る、

「……あ、あの……」

「ほらとうま！とうまが吼えるからひょうかが怖がってる！」

「あーはいはい！そうですねそうですね！じゃあいよいよ獣で！ただし獣を公認するからには本格的に獣になるぞ！バッド上条の真の姿に刮目せよッ！！」

「……あの、怖いとか……そうじゃ、なくて……お昼ご飯……」

消え入りそうな氷華の声に、半分ヤケクソに騒いでいた二人はピタリと口ゲンカを止め、同時に彼女の方へ振り返る。

氷華は指を差している。

その先に目を向けると、一軒のレストランがあった。
そして、既に小次郎はその前で当麻達を待っていた。

「がくしょくれすとらん？」

「そう、学食レストラン」

「へえ。流石、学園都市。妙なレストランがあるもんだな」

地下街に入った時と同じく、あまり理解していないインデックスに
当麻は言葉を返し、小次郎は素直に感心していた。

小次郎達四人は、ごく普通のファミレスのようなお店に入っていた。
四人掛けのテーブルに、当麻とインデックスは向かい合うように、
氷華はインデックスの隣に座り小次郎と向かい合っている。

スライデックス
三毛猫はというと、ペット同伴OKのお店だった為、インデックス
の膝の上にいる。

「学園都市って大小無数の学校があるだろ。だから街中の学食のレ
シピの美味いトコを集めただけで一軒の店が賄えちまうんだよ。ま、
学食レストランつつつても給食も混じってるけど。他の学校では何
食ってんだろっていう疑問もこれで解消という訳」

「む。とうま、そもそも学食とか給食って何？」

インデックスはまるで挑むかのように、凄く大きなメニューを睨み
ながら、そんな事を言う。

そして、当麻はそれに適当に答える。

「平たく言っちゃおうと、あれだ。学校でしか食べられない料理の事
だ」

「す、凄い。限定商品というヤツだね！」

「……、あー。なんかもうそれでいいや。レアだぞレアー」

「……。えらく適当な説明の仕方だな、オイ」

「あの……説明が、面倒臭いからって……放ったらかしにするのは、どうかと……」

寝不足でツッコミ分が不足してしまっている当麻に代わり、氷華が腰の引けた一言を付け加えるが（小次郎はやや呆れの視線を当麻にぶつけている）、インデックスの耳には届いていないようだ。彼女は馬鹿デカいメニューで顔を隠すと、目だけをその上から出して、当麻の顔を窺う。

「とうま。これ何でも選んじやってもいいの？」

「あー、高いのは禁止な」

当麻は適当に釘を差す。

と、インデックスはメニューをテーブルの上へパタンと倒すと、当麻にも分かりやすいように料理の写真の一点を指差す。

「私はこれがいいかも」

「んー？どれどれ」

「なにになに？」

当麻とインデックスの食いたいモノに興味を持った小次郎が彼女の白く細い指の先を目で追う。するとそこには、

常盤台中学給食セット 四〇〇〇〇円

「……。」

「……、」

目が点になる小次郎。そして、当麻は無言でメニューを閉じると、その角でインデックスの頭を引っ叩いた。

「痛ったあ！？どうしていきなり人の頭を叩くの！」

「言ったはずだ、高いモノは禁止だ！ってかツッコミ待ちじゃなかったのか今のは！」

「……流石に今のはフォロー出来ねえや……」

当麻は何かを考え絶句し、小次郎は彼女の価値観に頭を抱えてしまう。

「……あ、あの……私はこっちがいい、です……」

と、ぎゃあぎゃあど騒ぐ当麻とインデックス、それを引きつった笑顔で見つめる小次郎の横から、氷華はメニューの同じページにある料理を指差した。

そこには、本当にごくごく普通の給食の写真があった。

それを見た小次郎は、

「おっ！じゃあ俺もこれでいいや」

と言い、当麻はインデックスの後だったせいもあるのだろう。ちょっぴり彼は感動した。

「ほら見なさいインデックス、これが優等生達の答えというモノだ」

「えー、ひょうかとかじろうの好みはちょっと地味かも。私はもっと派手派手なのが食べてみたい」

ぶーぶー、と文句垂れるインデックスに当麻は重たい溜息をつき、

「食べ物を見た目じゃなくて味で選ぶうな、インデックス。あと、どさくさに紛れて風斬と小次郎に常盤台中学のセットをオススメしてんじゃねえバカ！風斬も地味とか言われて本気でへこんだり考え直そうとしたりしなくても良いから！あと、小次郎！お前は本当にこれで良いのかよ！？」

当麻が思わず叫ぶと、氷華はびっくりしてしまい、巨大なメニューを掴んで自分の顔を隠し、小次郎は、

「まあ、俺はこれぐらいでも十分だし、分相応なモンだと思うぜ」
と、自分の里での食生活を思い出しながら、冷静に返した。

暫く待つと、四人分の料理が運ばれてきた。

「さつてと。そんじやいただきますか。そういや風斬、このメニューが食いたかった理由とかあんの？ヨーグルトが大好物とか」

「そうだな。俺もそれが聞いてみたい」

普通、こういう店では何かしら思い入れがあって注文するのだが、

氷華にはそういった思い入れがないようで、首を縦に振ると、
「……あ、あの、私……こういう所で、ご飯食べた事、なかったから……」

「ふうん。今まで給食のない学校ばっか通ってたのか」

「えっと……はい」

何故か申し訳なさそうな顔をする氷華を見ながら、小次郎は、

（忍びじゃねえ普通の子なのに随分変わってるな……）

と思い、当麻は、

（給食に縁がないって事はいつもお昼はお弁当だったのかなとする
と自炊派かそれとも寮の方でお弁当のサービスでもやってるのかい
いなあ弁当いいなあ学食の食料争奪戦を横目に優雅なお食事ですよ
あーウチの寮も朝何もしなくても弁当が用意されてるようなサービ
スやってねーかな待てよそれならウチに居候の女の子いるじゃんイ
ンデックスにお願いするのは……駄目か駄目だなあ駄目だ電子レ
ンジの使い方も分かんない女の子に料理ができるとでも思ってるん
かい俺？）

などと思いながら、えっへっへっへ、と暗い笑みを浮かべ周囲に暗
いオーラを発生させる。

「……あ、え、その……何か、目が……怖い、です」

「一体どうしたんだ？当麻のヤツ」

「ひょうか。こじろう。あれはとうまの病気みたいなモノだから、
優しい目で見守ってあげてね」

小次郎達がちょっと遅いランチタイムをとっている頃、黒いドレス
の女―シェリー―クロムウェルは街を歩いていた。

口元に笑みを浮かべながら雑踏を彼女は行く。

「――まずは、原初に土」

歌うように、彼女は歩きながら一人呟く。手には魔法陣作成の為の

オイルパステルが握られている。

「――神は土より形を作り、命を吹き込み、これに人と名をつけた」歌いながら、シェリーは手近にある自販機にオイルパステルを走らせる。

「――その秘法はやがて、地に落つる墮天によって人へと口伝される」

シェリーは進路上にある総てのモノへすれ違いざまにオイルパステルを走らせる。

「――しかしてその御業は人の手に生み出されし命は腐った泥の人形止まり、と。さて、泥臭いゴーレムⅡエリス。私の為に、笑って使い潰されな」

最後にパン、と手を打つと、徐々にだが、確実に”何か”が形成されていく。

それを横目で確認しながら、シェリーは葉書サイズの黒い紙を取り出した。

「自動書記。標的はこいつでいいか……かぜ、かざ……何だこりや？この国の標準表記は象形文字なの？」

呟いた後、オイルパステルを一閃。その後、ぴん、と指で弾くように、シェリーは黒い紙を手放す。

ゆっくりと地面に着地したその紙には《風斬氷華》と書かれていた。”何か”の一部である無数の眼球がその黒い紙を吸収するとやがて、四方八方へと散っていった。

「あまり待たせんよ。エリス」

シェリーは笑って、雑踏の中へ溶け込むように消えた。

食事を終えた小次郎達四人は店の外へ出た。

周りのモノを興味深げに見回す小次郎の横で、

「不味くはないけど美味しくもなかった。うーん、どういう事なのかな。この胸の内に残る、微妙に欲求不満気味なモヤモヤは……」

「毎日食うために作られたメニューだからな。美味しい不味いより飽きられないように工夫してんだろうさ。豪勢なフルコースなんて毎日食ったら一週間で吐いちゃうだろ」

「……………、フルコースなら、吐くほど食べても良いかも」

「……、まーな」

と、いった当麻とインデックスの会話が繰り広げられていた。

時刻は午後一時過ぎ。地上は残暑で物凄く暑い。

逆に地下街は空調が効いていて程良い室温を保っている。

なので、涼しい地下街からは今は出たくない、と考えてしまうのは人の性だろう。

氷華は、会話が切れたタイミングでインデックスに話しかける。

「……あ、あの……これから、どこで遊ぶの……？」

「分かんない。とうま、こじろう、そもそも地下街って何があるの？」

インデックスはどことなくホクホクした気分で当麻や小次郎に聞く。

「ん？地下街ならボウリング場があるんじゃないのか？」

「うーん、それかゲーセンとかになっちゃうのかな？」

小次郎と当麻がそんな事を考えながら歩いていると、丁度一軒の内務系のゲームセンターの横を通りかかった。

店の中から流れてくる自然とワクワクするような電子音の波に、目を丸くするインデックス。

「うわっ、うわっ、何あれ？なんかテレビがいっぱい置いてある！」

「あー、テレビじゃねーんだけど……まあいいかテレビで。細かいことは気にしたら負けって方向で。てれびてれびー」

「……オイオイ……」

「……、あの……だから、投げっ放しは……」

そう言い合いながら、四人はゲームセンターの中を覗く。

「す、すごい。なんかピカピカしてキラキラしてバキバキ音が鳴っ

てる！と、とうま。私はあそこに行ってみたい！あのピコピコを体験してみたいかも！」

「へへ……インデックスじゃないが、俺もやってみてえな」

インデックスや小次郎にせがまれるようにして、四人は店内に入る。ガラスの自動ドアを抜けた途端、音の波の威力が数倍に膨れ上がった。

店内には様々な小次郎の世界には遊園地ぐらいにしかないようなゲームが置かれていた。

最早、一種のアミューズメントパークと言っても良いくらいだ。

それを見た小次郎は、

「すげえ……」

と、少年らしい笑顔を作りながら思わず呟く。その横では、

「インデックス、なんかやりたいゲームとかってあんの？」

当麻が何気なく聞いてみたが、返事がなかった。

不審に思っただけがインデックスの顔を覗くと彼女の動きが止まっていた。ただ、その目が凄く幸せそうにキラキラキラと光り輝いていた。

「あ、やばい……」

当麻は思わず何かを思い出しながら呟き、インデックスは勢い良く当麻に向かい振り返ると、

「全部！全部やる！！とうま、とうま！まずはあれからやってみたいかも！！」

興奮したインデックスは当麻の腕を掴みぐいぐいと進んでいく。

当麻は懐の心配をしながら溜息をつき、小次郎はそれに穏やかだが、嬉しそうな顔をしながらついて行き、氷華は当麻を気の毒そうな笑みを浮かべて見つめていた。

店内を軽く一周しただけで、当麻は八〇〇〇円以上使ってしまった。その一周の間に、小次郎が変則的なガンアクションのゲームで《腰抜け（チキン）度》ゼロ、ノーコンティニュー・店内最速クリアという驚異的な記録を叩き出したりもしたが……。

「ふー。あー面白かった。とうま、私はもう満足満足かも」

「俺も十分楽しめたぜ。サンキューな、当麻！」

「……、あい。上条さんももういっぱいいいですよ？ねえ三毛猫。今日から俺達のご飯は三食残らず食パンの耳になるかもしれないけどオツケーかい？」

当麻が燃え尽きた感じで問いかけると、三毛猫は《ふぎやあ！しゃああ！！》と蛇の威嚇のような鳴き声をあげて拒絶オーラを出す。

「とうま、とうま。次は何して遊ぶの？」

「そうだな、どうするんだ当麻」

「……、ちよつと休ませてくたせえ」

「とうま、もう一周してみる？」

「オイオイ、いくら何でもそれは酷すぎねえか？インデックス」

「小次郎の言う通りです！本当にやめてください！それやったら間違ひなく破産しますから！！」

当麻が絶叫すると、タイミングを見計らったように、当麻の携帯電話話がひび割れた着メロを流し始めた。性能が悪いのではなく、単にスピーカーの調子が悪くなっているだけなのだが……。その理由は彼の愉快的夏休みに起因するのだが、ここでは語らないでおこう。

当麻は携帯電話の画面を見る。どうやら通話のようだ。彼が小次郎達に背を向けて携帯電話を操作し始めると、小次郎は気を利かせ、

「俺はちよつと、もう一周回ってくる。ま、見るだけだな……」

と言って、休む為に座っていたベンチから立ち上がる。見ると、氷華達もどこかへ行くようだ。

当麻は一度だけ空いた手で軽く謝るジェスチャーをする気配がしたが、小次郎は気にすんな、とばかりに後ろを向きながら手を振って、その場を離れた。

小次郎が店内をもう一周（見て回るだけ）し終えて、当麻の所に戻ると、彼は首を捻っていた。

「どうした、当麻？何か引っかかることでもあったのか？」

「いや、小次郎が気にする事でもねえから、心配しないでくれ」「そうか」

すると突然、当麻は何かに気付いたような雰囲気になった。

「あっ！」

「どうした？」

「実はインデックス達がまだ戻ってきてないんだ。ちょっと、探しに行ってくるから、小次郎はここで待っていてくれ」

「ああ。ただ、気を付けろよ」

「？何に？」

当麻は小次郎の忠告に首を傾げる。すると、

「いや、気にするな。ただの勘だ。当たらねえことを祈ってる」

「……？おう」

そう言って、当麻はインデックスと当麻を探しに行った。

数分後、当麻の悲鳴を聞きつけ、まさか……、と思いながら歩いて現場にやってきた小次郎の前で、女の子達のはしゃぐ声が聞こえる。
「写真シール……。ひょうか、ひょうか。この写真を撮るには、どうすればいいの？」

「えっと……ここに、お金を入れて……ボタンを押して、五秒後に……」

「ふうん。ひょうか、何か困った顔してるけど、悩み事でもあるの？」

「あの、その……どうしても撮らなきゃダメ？ 私は、えっと……あつ、待って！ ボタンを押さないで！ や、やっぱり私は……」

「ほら撮るって。ひょうか、あんまり暴れると変な顔で写っちゃうかも」

「あ、うう……人の、話を……」

小次郎が、その楽しそうに語らう二人のコスプレ少女という光景から斜め後ろ三メートルの物陰に無言で目を移すと、ボロ雑巾のように変わり果てた当麻が転がっているのを見つけた。

小次郎は膝をつくと、

「……、すまねえ当麻。俺がもっとちゃんとした忠告をしてりゃ、こんな事にはならなかったのに」

と、ボロ雑巾となった当麻の体を労りながら彼に謝罪した。

元の服に着替えたインデックスと氷華の姿は対照的だった。インデックスは出来上がった写真シールを見て、はしゃいでいるのに対し、氷華はごうん！、と除夜の鐘について出た音のような効果音付きで落ち込んでいた。

小次郎は何故こうなっているのか大体分かっている為、下手な慰めの言葉

を言えなかった。

「はい、ひょうか。半分こ」

インデックスはそんな様子にも気が付かず写真シールをきっちり半分にして、氷華に手渡した。受け取った氷華の表情はかなり複雑な色を浮かべていたが……。

「なんか、一日があつという間に過ぎていく感じがするね」インデックスは自分の分の写真シールを眺めながら、「これがガッコー生活かぁ。うーん、いいなあ」

「いやいや、現実には退屈な授業とか地獄みてーなテストとかあって、それどころじゃねーけどな」

「まあ、確かに。良い所と言やあ、友達に毎日会えるってだけかもしれないな」

当麻は記憶喪失故に知ったかぶりで話を合わし、小次郎は自分の世界でかつて経験した事を思い出しながらインデックスに語る。

そんな小次郎達に、インデックスは心底楽しそうな笑顔で、

「それを退屈だと言えるのが、きっと既に幸せなんだと思うよ」

「……、かもな」

「……言われてみりゃ、そうかもしれないな」

当麻と小次郎は少し考えてから、頷いた。

小次郎自身、元の世界では、忍びであり、戦士だった故に改めてそう思える。

この争いのない平和な世界が、退屈と呼べる温かい時間が掛け替えない宝物なのだ、と。

当麻の懐が心配になったので、外へ出ることにした小次郎達。

結構あれから時間が立ったはずなのだが、地下街の活気は衰えていなかった。ただ、道行く学生達の服装が、学生服から私服に変化している事を除けば、だが。当麻の提案で、道行く人達の通行を邪魔しないように壁際に寄って四人で楽しそうに会話していると、彼らの横を高校生ぐらいの腕に《風紀委員》^{ジャッジメント}の腕章をつけた少女が走り抜けてきた。

「……、ん？」

「何だ？」

当麻と小次郎はそれらから目線を外そうとしたのだが、ぴたと《風紀委員》の少女が立ち止まり、こちらを睨んでいる事に気が付いた。二人がきょとんとしていると、その少女は怒っているような顔をしたままつかつかと歩いてくる。

少女は当麻と小次郎の前で仁王立ちすると、

「こら、そのあなたたち！人がこんだけ注意しているのにどうしてのんびりしているの！早く逃げなさい、早く！！」

いきなり怒鳴られたので、小次郎は疑問に思い、当麻達三人は驚いた。

（いや、でも、なんか言ってたっけ、こいつ？）

（治安を守るはずの《風紀委員》が何でもない事で怒鳴るはずがねえ。まさか、何かあったのか！？）

当麻は首を傾げ、小次郎は、何かが起こったのだと推測する。

ふと、地下街へ来る途中で聞いた”音”を思い出し、それと関係があるのではないかと小次郎は考えていた。

一方、何が何だかよく分かっているような当麻の反応に《風紀委員》の少女はムツと眉を寄せ、

「だから、念話能力よ、念話能力。聞こえているんでしよう、ほら！」

少女の顔が力むように赤くなった途端、インデックスと氷華が同時に「わあ！」「ひゃあ！？」と叫んだ。（小次郎は、超能力を持たない自分にも感知できた事にほんの少し驚いていたが……）彼女達は周囲をきよろきよろ見回した後、

「あ、あれ……。今、どこから、声が……？」

「む。何か頭の中から直接声が聞こえたような気がするかも」

このように不思議がっている二人（十一人）をよそに、当麻のみきよとんとしたまま、

「あー、テレパスってあれか。離れた人間と会話が出来る力とかいうの。っと、確か伝達系にも色んなタイプがあるんだっけか。小萌先生が補習で言ってたな、そんな話。生体電気の読み書き、可聴域外の低周波音声、いや……こりゃ糸電話か？ほら」

当麻がインデックスの顔の前に右手をかざすと、彼女はもう一度驚いた顔をした。おそらく当麻の右手の力・幻想殺し（イマジンブレイカー）によって念話が遮断され、急に頭の中に響いてきた”声”

が聞こえなくなったからだろう。

そして、当麻に”声”が聞こえなかったのはこの右手が原因である。
「しかし念話能力ってまだ開発続いてたんだな。携帯電話の普及と共にポケベルみてーに消えていったって聞いてたけど」
当麻の暢気な言葉を聞いて、

「……あなた、ね」

と、《風紀委員》の少女はひくひくとこめかみを引きつらせていたが、

「どうしてあなたには届かないのかしら、あたしの”声”が。まあいいでしょう、口頭で説明するから」

と言った後、ずい、と更に一步、少女は当麻と小次郎の元へと近付いてきた。

「は？」

「……」

「現在、この地下街にテロリストが紛れ込んでいます。特別警戒宣言も発令されてますよ。今から……えっと、九〇二秒後に捕獲作戦を始める為に、隔壁を下ろして地下街は閉鎖します。これから銃撃戦になるからさっさと逃げてくださいねって指示を出している所。分かりました？」

その声に、小次郎は目つきを鋭くし、当麻はぎょっとした。

インデックスはコードレッドの意味が分からず、氷華は理解していても突然の非日常に実感が湧かないのか、《風紀委員》の言葉を聞いてもきょとんとしていた。

「当のテロリストに捕獲準備の情報を知られると逃げられるかもしれないから、こうして音に頼らないあたしの念話能力が入り用になったんです。だからあなた達も騒ぎを起こさないで、出来る限り自然に退避してくださいね」

「ふうん。テロリスト以外の人間限定で伝えてるって訳か。あれ？それってつまりテロリストの顔はもう分かってんのか？」

「それは俺も聞きたかった。で、どんなツラしてんだ？」

「そんな事は一般のあなた達が心配する必要はありません。きちんと顔写真付きで手配書は回してもらっているので問題ないの」

《風紀委員》の少女は折り畳み式携帯電話をパカッと開く。そこには何者かの顔写真が写っていた。これがテロリストなのか？と小次郎と当麻が画面を覗こうとした所で、彼女は片手で携帯電話を折り畳んだ。

「ほらほら。分かったら早く逃げてください。閉鎖までもう八〇〇秒ありませんよ」

それだけ言うと、少女はそこから去って行った。

小次郎は周囲を見回す。彼女の”声”を聞いたのか、学生達はわずかにどよめきながら、指示通りに出来るだけ自然な感じで出口へと向かっていく。当麻も同じ事をしたのだろう。心なしか焦っていた。「おいおい、まずいな……。とにかくここを出るか。インデックス風斬。小次郎」

下手なトラブルに巻き込まれる必要もない。自分から目立つ真似はしたくない。小次郎は当麻達と一緒にここから離れるべく行動を開始した。

しかし……。

（オイオイ……ありやあちよつとやべえな）

出口となっている大手デパートの階段の手前で、当麻も同じ事を思ったのか、二人はほぼ同時に立ち止まった。二人の少女はそんな彼らに怪訝そうな目を向ける。

出口の周りに、完全武装した《警備員》^{アンチスキル}の男達が四、五人ほど固まっていたのだ。彼らの姿はどことなくロボットのように見える。

生憎、小次郎はこの街の学生ではない上に、学生ですらない。言うなれば不法侵入者である。

そんな彼が、この街の警察とも言える《警備員》^{かれら}の前にこのこ出る訳にも行かない。なんだか、当麻も色々葛藤しているが、小次郎は戦闘時とはまた違った緊張感に包まれていた。

彼はテロリストに文句を言いたくなった。

どこの誰だかは知らねえが、人の迷惑になる事をしやがって、と。
小次郎が行くのを躊躇っていると、彼とは少し違った事で悩んでいた当麻が多少の危険を伴うもののここから立ち去る事にしたようだが、その彼の行動も、彼に腹を括ってついて行こうとした小次郎も途中で止まることになる。

日常を非日常へと変える魔の手によって……。

《――見いつつけた》

それは女の声であった。

ただし、何もないはずの、何の気配もしないはずの壁の方から聞こえてきた。

当麻はそこに目を向けて硬直する。

小次郎はそこにあるモノを見つけ警戒する。

壁の、丁度当麻や小次郎の目線の高さの辺りに、掌てのひらサイズ程の茶色い泥がへばりついていたのだ。

その泥の中央には人間の眼球が沈んでいた。

その眼球は、ギョロギョロと、忙せわしく動いている。

氷華や当麻は上手く脳が現状を処理していないのかきょんとしている。

ただ、インデックスと小次郎だけが驚きもせず冷静にその目玉を眺めている。

泥の表面がさざ波のように小刻みに揺れ、その振動が”声”を作り出す。

《うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書目録に、幻想殺し（イメージブレイカー）に、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃうわあ》

女の声は妖艶だが、どこか錆びていた。

そんな退廃的な声は一転し、

《――ま、全部ぶっ殺しちゃえば手っ取り早えか》

粗暴な声色へと瞬時に切り替わる。

当麻はこの奇妙な闖入者が何者なのか、判断しかねている。しかし、小次郎は瞬時にこれが”敵”だと判断する。

そして、インデックスも即座に切り捨てる。

「土より出でる人の虚像――そのカバラの術式、アレンジの仕方がウチとよく似てるね。ユダヤの守護者たるゴーレムを無理矢理に英国の守護天使に置き換えている辺りなんか、特に」

当麻は理解が追いついていないようだが、小次郎はこの”敵”がどのような”業”^{わざ}を持っているのかを自分なりに解釈していた。

（こいつは、どうやら土系統の使い手ってヤツみたいだな）

そう考える小次郎の横で当麻がインデックスに疑問を述べている。

「ゴーレムって、この目玉が？」

当麻は危機感もなく壁にへばりついた泥と眼球を指差した。

それに対し、インデックスは泥の眼球を睨みつけたまま、

「神は土から人を創り出した、っていう伝承があるの。ゴーレムはその亜種で、この魔術師は探索・監視用に眼球部分のみを特化させた泥人形を作り上げたんだと思う。本来は一体のゴーレムを作るのが精一杯だけど、これは一体当たりのコストを下げる事で、大量の個体を手駒にしてるんじゃないかな」

インデックスが告げると、眼球は泥の表面を震わせて妖艶な声を発した。

小次郎はこの”敵”が土使いの”忍び”ではなく、”魔術師”であることを理解し、更に警戒を強める。当麻は理屈こそ分らないが、この泥と眼球をラジコンのように操っていると何となくだが理解して、

「って事は……この魔術師がテロリストさんって訳か」

《うふ》と、泥が笑い、《テロリスト？テロリスト！うふふ。テロリストっていうのは、こういう真似をする人達を指すのかしら？》
そう言い残すと、バシヤッ、と音を立てて泥と眼球は弾け、壁の中

に溶けて消えた。
その瞬間。

ガゴン！！と。地下街全体が大きく揺れたのである。

「なん……っ！？」

「な、なんだと！？」

まるで大地震あったかのような振動に、小次郎はバランスを上手くとってやり過ごしていたが、当麻は思わずよろけ、転びそうになったインデックスは氷華の腕の中にすっぽりと収まってしまう。

さらにもう一度、大きな揺れが地下街を襲う。爆心地こそ遠いが、その余波が一瞬で地下全体に広がったのだろう。

パラパラと、天井から粉塵のようなもの降ってくる。

蛍光灯が二、三度ちらついたと思ったら、突然全ての照明が同時に消え、その数秒後、非常灯の赤い光が薄暗く周囲を照らした。

それまでのんびり出口に向かっていた人の波が一気にパニック状態になる。学生達の足は暴走した猛牛の群の如き音を立てた。

その直後、低く、重たい音が響き始める。

予定より早く、《警備員》達が隔壁を下ろし始めたのだ。あらゆる災害に対処する為なのか、やたら分厚い鋼鉄の門が出口を遮る為、天井から落ちてくる。人混みの最後尾を噛み千切るかのように、隔壁は地面に叩きつけられた。もう少しで押し潰されそうになった学生や逃げ損ねた学生達は混乱したまま分厚い鋼鉄の壁をドンドンと叩いている。そして、中には出口で検問を敷いていた《警備員》に詰め寄ろうとする者達までいた。

文字通り閉じ込められた。

小次郎は”敵”の魔術師が巧妙に様々な情報を的確に把握していたのだ、と理解する。

《さあ、パーティーを始めましょうー》

グチャリ、と潰れた泥から、女の声が聞こえた。それは、既に壊れ

た眼球の最期の言葉。ひび割れたスピーカーが音を動かすような音だった。

《ー土の被った泥臭え墓穴の中で、存分に鳴きやがれ》

その声がした後、さらにもう一度、一際大きな振動が地下街を揺らした。

小次郎と当麻は念の為、他の出口を探してみたが、全く成果が出なかった。

空調が切れた為か、地下の温度が上がると共に普通の人間ならば空気もどんどん薄くなっているような錯覚に陥ってしまう。おそらく当麻もそう思ったのだろう。

当麻は薄暗い通路の先を見渡しながら、小次郎と顔を見合わせて頷きあってから、忌々しげに呟いた。

「……、向こうはこっちの顔を確かめてから襲ってきたみたいだし、迎え撃つしかなさそうだ。インデックス、風斬と一緒にどこかに隠れてろ」

「そうだな。女は、ここで大人しく待っててくれた方が余計な心配をしないで済む」

敵がこちらの命を狙い、そして、逃げる事が出来ない以上、取る道はただ一つ。

（敵がインデックスや氷華に手を出す前に、こっちから討って出るまでだ！幸い、敵は”魔術師”が一人に、ゴーレムとかいうモノが一体。魔術師に当麻をぶつけ、俺が先にゴーレムを倒せば勝機がある！）

と考える小次郎に対し、

（（中略※途中まで小次郎と同じ為）くそ、こっちは二人いるとは言え、敵が何人いるかだけでも分かれば策を練る事もできそうだけど……）

と、当麻が敵の数を瞬時に把握できた小次郎とは違う考えを巡らせ

ていると、三毛猫を抱えるインデックスは頬を膨らませ、

「とうまにこじろうこそ、ひょうかと一緒に隠れてて。敵が魔術師なら、これは私の仕事なんだから」

「アホか、お前の細腕でケンカなんかできるかよ。そんな拳で人殴ってみろ、お前の手首の方が傷んじまうんじゃないのか。いいからお前は風斬と一緒に隠れてろって。俺と小次郎がやるから」

「すまねえが、そいつには俺も賛成だ。女は黙って後ろで応援してくれりゃあいんだよ」

「む。こじろうはともかく、とうま、ひょつとして今までのラッキーが全部自分の実力だと思っていない？どれだけ不思議な力があっても、所詮とうまやこじろうは魔術の素人なんだから。だから素人は素人らしく、ひょうかと一緒に隠れてって言ってるの」

「はっ、何を仰いますやら。この不幸の擬人化・ジェントル上条にラッキーなんかあるはずねーだろ。……うっ、自分で言ってる嫌になる」

「確かに魔術に関しては素人だが、俺は”忍び”だ。そこらにいるような魔術師の細腕に負けやしねえ」

割と重要な事をあっさり口にした小次郎は、ふと誰かの気配を感じ、警戒態勢を最大限に強める。

そして、何故か自己嫌悪に陥っている当麻に、氷華はオロオロしながら、

「……あ、あの……何だか良く分からないんだけど……私が、何かを手伝うって方向は……ない、の？」

「「ない」」

警戒及び臨戦態勢に移っている小次郎以外の二人に同時に言われ、氷華はしょんぼりとうな垂れてしまう。

と、次の瞬間、手近な曲がり角からカッンという足音が聞こえた。

「!？」

小次郎はいつでも闘えるように身構え、当麻とインデックスはお互いが仲間を庇おうとして、仲良く転んでしまい、氷華はそんな彼ら

の様子にびっくりしたように両手を引き寄せたまま固まってしまふ。かつこつという足音がだんだん近付いてくる。インデックスの腕に押し潰されそうな三毛猫がみゃーみゃー鳴きながら前脚をバタバタと動かしていた。

かつこつかつこつ、と古ぼけた柱時計のように足音が響いている。

曲がり角の方から、当麻にとっては知り合いの、小次郎にとっては少々聞き覚えのある女の子の声が聞こえてきた。

「あら？猫の鳴き声が聞こえますわね」

「黒子。アンタ動物に興味ないんじゃないかなかったっけ？」

「かくいうお姉様は興味がありでしたよね」

「べ、別に私は……」

「あらあ。わたくし、知っていますのよ。お姉様には寮の裏手にたむろつてる猫達にご飯をあげる日課がある事を。しかし体から発せられる微弱な電磁波のせいでもいつも一匹残らず逃げられて、猫缶片手に一人ポツンと佇む羽目になっている事も！」

「何故それを……！？ってか黒子！アンタまたストーキングして……っ！」

曲がり角から現れた二人の少女は、床に転がっている当麻とインデックスの姿を発見して足を止め、小次郎は（少なくとも見た目は）可憐な少女二人を見て、警戒&臨戦態勢を即座に解いた。わざわざ確認するまでもなく、彼女達―御坂美琴と白井黒子は敵ではない。余計な緊張から解放されてぐったりと力を抜く当麻を美琴は奇異の目で見る。

「アンタ、こんなトコで女の子に押し倒されて、何やってる訳？」

「……、あらあら。こんな時間から大胆ですこと」

美琴は（小次郎から見ても）嫉妬全開の電気を髪の毛辺りからバチバチと火花のように放出し、黒子は微妙に冷たい声でそんな台詞を言い放った。

小次郎は聞き覚えのある声の、（あくまでも見た目が）可憐で妙に上流階級独特の雰囲気のある二人の少女の事が気になったが、この

状況では、自分が部外者であるが故にまずは成り行きを見守る事にした。

「とうま、この品のない女達は一体誰なの。知り合い？どんな関係？そっちの短髪、この前のクールビューティに似ているけど、違う人だよ」

この当麻の上から退きもしないインデックスの言葉に、なっ……、と黒子は声を詰まらせ、美琴はその明らかにケンカ腰なインデックスに向けて、何故か友好的とも取れてしまう危険な笑みを浮かべ始めた。

これを見た小次郎は、

（この空気はまさか、”また”か？”また”なのか？）

小次郎はやや現実逃避している当麻を見つめたまま、

（はあ、当麻のヤツあホントに罪作りな男だぜ……）

小次郎は当麻と最初にあった時に感じたピリピリした空気を眺め、つくづくそう思った。

やがて、インデックスと美琴が視線を交差させ、

「それで、あなたはやっぱりとうまの知り合いなの？」

「やっぱりってーちよっと待ちなさい。じゃあアンタも？」

「……えっと。命の恩人だったりする？」

「あー……もしかして、そっちも頼んでないのに駆けつけて来てくれたクチ？」

「……、」

二人はほんの僅かの間沈黙し、同時に溜息をついた。なんだか、当麻は呑気に構えていたが、この後の展開は小次郎からすれば容易に予測できた。

「「とうま／アンタ！私の見てない所で何やってたか説明して欲しいかも／もらうわよっ！！」」

そう、当麻を待っていたのは言わば修羅場だったのだ。

それから暫く二方向からステレオで当麻が叱られたり、それを見た氷華が彼を助けようとするものの出来なかったり、黒子が当麻に対

して黒いオーラを発したりと愉快で面白い(?) 今や懐かしい光景が繰り広げられた。

当麻が長い長いステレオ説教から解放されると、漸くインデックスの下から這い出て美琴や黒子にこの中で面識のない小次郎と氷華を紹介した後、簡単な、しかし魔術関連以外の事情の説明を行った。

「ふうん。なんかよく分かんないけど、結局またアンタがトラブルに巻き込まれた上に、知り合ったばかりのその子と小次郎さんだっけ? までも巻き添えにしちゃった訳ね。しかし今度はテロリストときましたか。テロリスト、ねえ。黒子、やっぱさっきのキレたゴスロリと繋がりがあると思う?」

美琴は実につまんなそうに黒子を見る。

「そうですね。殿方達が聞いたとされる声の特徴からしても、関与していると考えるのが妥当では? しかし、学園都市の”外”から能力者が攻めてくるだなんて。それは、天然モノの能力者がいたって不思議ではないのですけど……」

「或いは学園都市の他にも能力開発機関があるのかしら? でも、”外”から超能力のウワサなんて政府のUFO陰謀説と同じくらい信憑性がないのよね」

魔術を知らない黒子や美琴は目の前の現象が全て超能力という事で納得しようとしているようだ。

インデックスはムツとしているのを当麻は片手で制している。

小次郎はその様子を微笑ましく見ていた。

不意に黒子が腕に留めている《風紀委員》の腕章を揺らしながら溜息をついて、

「まったく、テロリストの進入を許すだなんて、わたくしも氣を入れ直す必要があるようですわね。今朝は二組の侵入者がいたと聞きますし、片方だけでこの騒ぎ。もう片方の侵入者の方も氣になりま

すわ」

ん？と当麻と小次郎は黒子の言葉に違和感を覚える。

「何よ、黒子。もしかしてまだトラブルの種があるの？」

「ええ。《警備員》経由の情報によれば侵入者は合わせて二人。経路や方法が異なっていた事から別口らしいとは聞きましたが、断定は出来ませんわね」

侵入ではなく転移したと記憶している小次郎は、二人？一体どういう事だ？と考え込み、当麻は、んー……？と黒子の言葉にダラダラと冷や汗を流し始める。

そんな当麻にインデックスがいち早く気付き（小次郎の事には気付いていない）、当麻のシャツを両手で掴んでぐいぐいと引っ張りながら、

「とうま。何か体が小刻みに震えてるけど、どうかしたの？」

といい、美琴はそんなインデックスに小さく笑いかけて、

「くっくっ……アンタが暑苦しくて鬱陶しいんじゃない？」

それに対し、インデックスが「うっとうしくないもんっ！！」と叫び返す様子にも目もくれずに当麻は、

「えっと、あの、怒らないでくださいまし。多分、もう一組の侵入者って、俺だと思う」

小次郎は当麻のその言葉にさらに情報を聞き出す為耳を傾け、彼以外のその場の全員が「は？」という表情で当麻を見る。

当麻は、それらの視線から全て逃げるといふ、小次郎から見ても実に器用な芸当をしつつ、

「えー、実は昨日の夜に闇咲っていう不器用な男と知り合いました。そいつの知り合いを助ける為に学園都市の外へ出る必要がどうしてもあった訳で、その問題を片付けて漸く帰ってきたのが今朝の事であって、それで、あの……何だよ？御坂も白井も何でそう《分かった分かったいつもの病気だろ》みたいな目をして溜息をつくんだ？」小次郎は、「だから、今朝あんな所を歩いていたのか」と、納得していた。

その横で話題を変えなきゃと思ったのか、当麻は、

「つつか、お前達は何でここにいるんだ？」

「そう言えばそうだな。どうしてお前らみたいな姫さん達がここに？」

小次郎は先程自己紹介した時に二人が令嬢の通う名門・常盤台中学の生徒である事を知ったのでこう呼んでいる。

「小次郎さん、先程も言いましたが、その呼び方は止めてくださいまし。まあ、わたくしは《風紀委員》ですので、閉じ込められた方達の脱出用にやってきた、という所ですの。それでも一応《空間移動》^トの使い手ですので」

「ふうん。じゃあ御坂は？」

「え、いや、別に私は……」

「？」

「（ニヤニヤ）」

「な、何よ！別に何でも良いでしょうが、何でも！！小次郎さんも意味深に笑わないで！！」

当麻は気付かないのか、顔を真っ赤にして叫ぶ美琴に不思議そうに首を傾げる。その様子を眺めながら、黒子は片目を閉じると若干不機嫌な顔とオーラを隠しめせず、

「……（まあ、わたくしの仕事に付き添ったお姉様が警備室で特別警戒宣言下の防犯カメラにあなたの姿が映っていたのを発見したから心配になって駆けつけた、とは言えませんがね。普通なら）」

当麻が黒子の方を見ると、彼女はピッと顔を逸らす様子を眺めながら、小次郎は黒子の能力を考える。確かに彼女の能力なら、戦闘には邪魔になりかねない彼女たちを含んだ戦う力のない一般人達を地上に脱出させるのなんて朝飯前だろう。

「わたくし、それでも《風紀委員》の一員ですので、そのテロリストとやらを見過ごす事は出来ませんけれども」

とそこで、黒子は言葉を切り、一度だけ薄暗い通路の先を睨み、「それ以上に、人命の方が重要ですわね。予定を切り上げて隔壁を

下ろしたというのが正しいなら、もう時間はありませんわ。ここで大規模な戦闘が起きるにしても、先に避難を済ませませんと」

こう話している現在も、隔壁の辺りでは逃げ遅れた学生達が数十人もいる。彼らは必死にここから脱出しようと懸命に努力していた。

「分かった。白井、お前が閉じ込められた人達を脱出させてる間は、俺と小次郎が時間を稼ぐから、お前はあいつらを外に出してやってくれ」

「そういう事だ、黒子よ。殿しんがりは俺達が引き受けてやる」

当麻と小次郎が言った瞬間、三方から当麻のみ黒子と美琴とインデックスの手でどつかれた。（氷華はどつく勇気が湧かなかったのか、虚空に手を泳がせていた）どつかれた当麻は「何で俺だけ！？不幸だ……」と呟いていたが。

そして、その場の全員を代表して、美琴が口を開く。

「アンタは真っ先に逃げるの。っつか小次郎さん以外のアンタ達がピンポイントで狙われてんでしょうが。一番危険な人間を戦場に残すと思ってるのかアンタは」

「……っつつてもなあ」

とやや不満そうに当麻は頭を掻きながら、

「俺の右手はあらゆる能力を無効化させちまう。白井の力だって例外じゃねーぞ。っつか何で小次郎にはどつかねーんだよ！」

「え？だって、ねえ？」

「とうまより何故だか知らないけどこじろうの方が頼りになりそうな気がしたんだよ」

と美琴とインデックスに言われてしまう。その言葉にマジで凹む当麻。

その直後、黒子が思い出したかのように、

「そういえば……あなたが女子寮に来た時、一度失敗していましたわね」

この呟きを聞いた美琴の目が鋭くなる。その目を見た当麻がギクリとして後ずさったが、事情を知らない小次郎には全く分からなかった

た。

「と、とにかくだな。俺は白井の力じゃ外に出られない。だからここに残ってヤツの相手をするしかねーんだよ」

その言葉を聞いたインデックスは、当麻の腕にがっちりとしがみつ
きながら、

「じゃあ私も残る！」

と言った瞬間、今度は四方から、当麻と美琴と黒子と今度はどつく
勇気を持った氷華にどつき回された。小次郎は女の子をどつくつも
りが最初からない為、傍観^{ハナ}していた。

どついた後、黒子は両手を腰に当てながら、

「わたくしの力にも限度がありまして……そうですわね。一度に運
べるのは二人が限度でしょう。おチビちゃんが予想以上に重かった
ら話は別ですけどねえ？」

「ふん！あなたにだけはチビとか言われたくないかも！一番子供の
癖に！！！」

「な、何ですって、このまな板が知った口を……！？」

激昂する後輩を見ながら、美琴は溜息をつき、

「まーまー、どうでも良いでしょそんなの。一步離れて見てみりや
どっちも子供よ子供」

「……、」

一步離れた所で当麻は黙ってそんな三人を生温かい目で見つめてい
る。（ちなみに、さらに一步離れた所で氷華が四人を保母さんのよ
うな目で見つめている）小次郎は、穏やかな笑みと懐かしそうな目
をしながらそんな光景を眺めていた。

「しかし、運べるのは二人までか……。そんなじゃ、まずはインデッ
クスと風斬を頼む」

「とうま。それはつまりその短髪と一緒に残る、と言いたいんだ
ね？」

小次郎も残る事実を無視したインデックスは微妙に平淡な声で言う。
妙に凄みがあるのは気のせいだと思いたい。

「……、あー。じゃあ御坂と風斬でいいや」

「ほう。アンタ、その小っこいのと残りたい、と。ほほう」

今度は美琴の凄みが増す。当麻もタジタジだ。

そんな修羅場のようなモノを小次郎は苦笑して見ている。

「ああちくしょう！じゃあインデックスと御坂で！！」

当麻が頭を掻きながら叫ぶと、黒子は溜息をつき、

「はあ。ではお姉様とチビガキを連れて行きますわねーではお二人共」

いがみ合うインデックスと美琴を仲裁するように、黒子は二人の肩に手を置くと、ブンツ！と羽音のようなモノと共にインデックスと美琴、そして、黒子の三人が虚空へと消えた。（ただ消える直前、美琴が「あれ？ちよっと黒子！私は残るってば！！」と言っていたが……）それを見た小次郎は内心、竜魔や武蔵とは違うタイプの瞬間移動だな、と思っていた。

当麻と小次郎、そして氷華の三人は、無意識に天井を見上げた。彼らは同じ事を考えていた。彼女達は無事に地上へ行けたのだろうか、と。

「当麻……」

「ああ。まずは二人、か。……悪りいな。お前を残しちまって」

「……う、ううん。私は別に……最後でも良い、です。それより……」

……あなた達の方こそ……」

氷華の言い掛けた言葉は途中で遮られる。

ゴガン！！と、また地下街全体が大きく揺れた為だ。

それも、今までよりも爆心地がかなり近い。薄暗い通路の先から、戦闘音がこちらにまで流れ込んでくる。

（どうやら、こんな所でチンタラやってる場合じゃねえらしいな……）

（本命のお出ましか……。つつつても早すぎるぞ！！）

相手はこの地下街をスキャンして把握し尽くしている。その為、こちらへ迷う事なく来る可能性が十分にある。

おまけに隔壁の前に集まっている学生達が遠くからよく聞こえる戦闘音によってパニックを引き起こしている。

小次郎と当麻は通路の奥を睨み付ける。

彼らは再び顔を見合わせ頷き合う。

お互い考えている事は寸分狂うことなく全く同じだった。

「いくぜ、当麻！」

「ああ！……悪い、風斬。お前はここで白井が来るのを待っていてくれ」

「え……あなた達は……？」

二人の言葉の意味が理解したくないのか氷華が何か言い掛けた時、さらに凄まじい音が響き、地下街を大きく振動させる。今度はもう目と鼻の先だ。戦場特有の生温かい風が吹いてくる。

小次郎が氷華の顔を微笑みながら見てから、当麻は彼女の顔を見ずに、目の前の闇に視線を投げると、

「俺達が……あれを止めてくる！」

それだけ言うと、二人は氷華の言葉を待たずに闇に向かって走り出す。

多くの人達の命を守る為に。

その決意を胸に、己の魂に誓って二人は戦場へと向かう。

第三話 地下街にて……（後書き）

そう言えば、小次郎もそうですけど、車田作品のキャラってみんな超人ですよ。星矢にしろ、竜児にしろ……。

次回、遂にシェリーと激突します！

文章力があって欲しい。つくづくそう思います。

第四話 地下街での死闘（前書き）

まず、最初に言わねばならない事があります。

この話で遂に戦闘シーンが入りますが、ここでちょっとした設定を話しておきます。

この作品の小次郎は「聖剣戦争」を経た後である為、原作の続編に当たる「柳生暗殺帖」の設定を拝借して、パワーアップしております。

戦闘力でいえば、最低でも禁書世界における「聖人」クラスはあります。

では、駄文ですが読んで頂けると嬉しい限りです。

第四話 地下街での死闘

そこはまさに戦場だった。

通路の角を曲がった瞬間、小次郎は眼光をさらに鋭くし、当麻は思わず口元を覆いそうになった。

小次郎はまるで、ここは野戦病院のようだと思った。

二十人弱の《警備員》アンチスキルが体中に傷を負って、応急処置を施していた。また、少しでも体の動く者は近くの店から椅子やテーブルなどを持ち出し、即席のバリケードを作っている。

彼らは総て死んでも学園都市の平和を守ろうと必死になってるのだ。

(……こんなにまでなってもまだ、諦めねえか……。フツ……。全員、教師の、いや、人間の鑑だな)

小次郎は素直に感心していた。彼らの生き様を、姿勢を。それら総てが尊敬に値するモノだからだ。

小次郎は未だ曲がり角で呆然となっている当麻に先を急ごうと促そうとした時、壁に寄りかかるように座り込んでいた女性の《警備員》に見咎められた。彼女は傷ついた仲間の腕に巻いていた止血テープの動きを止めて、

「その少年達！ 一体ここで何をしてんじゃん！？」

その女性の怒号に、その場にいた十数名もの《警備員》達が一斉に振り返った。急に言われた為当麻は答える事が出来ない。その様子を見た大声を出した女性はいかにも苛立たい調子で舌打ちして、

「くそ、一人は月詠先生んトコの悪ガキじゃん。どうした、閉じ込めれたの？ だから隔壁の閉鎖を早めるなって言ったじゃん！ 少年達、逃げるなら方向が逆！ Aゲートまで行けば後続の《風紀委員》が詰めてるから、出られないまでもまずはそこへ退避！ メットも持って行け、ないよりはマシじゃん！」

その《警備員》の女性は小次郎の記憶が正しければ、当麻の学校近くにいた色気たっぷりのジャージを着ていた美人教師だったはずだ。

その女性が怒鳴りながら自分の装備品を外して、それを当麻へ乱暴に放り投げた。当麻はそれを慌てて両手で受け取る。

(……、)

(……。)

小次郎と当麻はもう一度周囲を見回す。

当麻は彼らが退かない理由をなんとなく知り、小次郎はその信念を無駄にしない事を誓った。

小次郎達がさらに奥へと足を進める。

「どこへ行こうとしてんの、少年達！ ええい、体が動かないじゃん！ 誰でも良いからその民間人を取り押さえて！！」

女性―黄泉川よみかわ愛穂あいほが叫び、手を伸ばすが、小次郎達には届かない。

その他にも彼女の怒号を聞いて何人もの《警備員》が二人を止めようとするが、怪我をしている体では出来なかった。

それらの手を振り切り奥へ進もうとする二人の前に眼鏡をかけた女性の《警備員》が両手を広げて立ち塞がった。

しかし、彼女も所々怪我をしている。

「これ以上先へ行かせる事は出来ません！ 止まってください！！」

そう言う女性の様子（恐怖故なのかは不明だが微かに震えていたり、立っているのもやっとの状態）を見た当麻は思う。彼女もまた、誰にも頼まれる訳でもなく自ら子供達を守る為に志願した立派な”人間”の一人なのだと。

(くそったれが……)

(ホントに良い人達だな……)

無意識に当麻は舌打ちし、

そんな彼女を心から賞賛した小次郎は、

「止まってやってもいいぜ。ただし……」

フツ、と不敵に笑ってから続ける。

「俺達の動きについてこれたらな！」

言うやいなや、

「行くぜ、当麻！」

「って、おい！小次郎！！何する気だ！？」
小次郎は当麻の腕を掴み、一陣の風となってその女性の横を駆け抜けた。

「「「なっ！？」「」」」
その女性を含む《警備員》の面々は思わず驚愕の声を漏らした。何故なら二人の少年が”能力”で発生した訳ではない風と共に消えたのだから……。

先程の場所から少し離れた場所で小次郎は立ち止まり、当麻の腕を離す。

「小次郎……お前……一体……」
当麻もまた驚いていた。異能の力を使わず、ただ純粹な己の脚力のみでここまで一瞬で自分を運んだ小次郎の事を……。

「んな細かい事は後回しだ！行くんだろ、当麻！！」
「！……おう！！」

そう、今は小次郎の事を考えるのは後回しだと当麻は思う。今は闇の先にいる偉大な《警備員》達を助け出し、魔術師を倒す事が先決なのだから。

今は先を進むのみ。
そう決意し、小次郎と当麻は先へと進む。

小次郎達がさらに通路の奥へと向かうと、何かがおかしい事に気が付いた。

（妙に静かだ……）

（物音が……しない？）

通路の奥では確かに銃撃戦が繰り広げられていたはずなのだが、それにしても静かすぎるのだ。何の音も地を揺るがするような衝撃音も全く聞こえないのだ。

小次郎は即座に臨戦態勢に切り替え、当麻は嫌な予感をひしひしと感じていた。

（それ程濃くねえが、血の臭いがしやがる）

（まさか……）

それぞれ思いながら、薄暗い、ただ赤い照明に照らされただけの通路の先へ彼らは走る。

その先には――。

「うふ。こんにちは。うふふ。うふふうふ」

錆びた女の声が、薄暗い空間に反響する。

ボロボロのゴシッククロリータを身に纏った金髪の女がそこにいた。

そして、彼女の盾となるかのように、様々な無機物で形成された石像が佇んでいた。

その周囲には強烈なダメージを受けた《警備員》達が七、八人程、床に倒れ伏していた。だが、命は繋いでいるようだ。

「くふ。存外、衝撃吸収率の高い装備で固めているのね。まさかエリスの直撃を受けて生き延びるだなんて。――まあ、お陰でこっちは存分に楽しめたけどよ」

残虐の色を帯びた笑みを女は浮かべた。

当麻は少しだけ分かっていない顔を浮かべていたが、小次郎は完璧に理解していた。エリスの直撃、というフレーズの意味を。

「どうして……」

「……………」

……そんな事が出来るんだ、と当麻は絶句し、小次郎はただ、無言で、この”結果”を作り上げた石像を睨みつけていた。

それに対し、特に感慨も持たずに金髪の女は言う。

「おや。お前は幻想殺し（イマジンブレイカー）か。もう一人は誰か知らないけど、虚数学区の鍵は一緒ではないのね。あの……あの……何だったかしら？ かぜ、いや、かざ……何とかってヤツ。くそ、ジャパニーズの名前は複雑すぎるぞ」

面倒臭そうに女は金髪をいじりながら、

「別に何でも良いのよ、何でも。ぶち殺すのはあのガキである必要なんざねえし」

「何だと？」

「どういう事だ？」

その言葉に、当麻は耳を疑い、小次郎は相手の真意を探るように訊く。

この女がどうも当麻や氷華を狙っているらしい事は、察しはついていたが、どうも投げやりな感じがするのだ。

「そのまんまの意味よ。つ・ま・り。別にテメェらを殺したって問題ねえワケ、だっ！！」

女がオイルパステルを思いつ切り横一閃に振るう。

その動きに連動するかのように、石像は大きく地を踏みしめる。ガゴン！！という強烈な振動が走り、当麻は大きくよろめく。続けてもう一度石像が足を振ると、彼は耐え切れずに地面に倒れ込んでしまった。

しかし、この状況にも関わらず、女は平然と立っていた。

「地は私の力。そもそもエリスを前にしたら、誰も地に立つ事など出来はしない。ほらほら、無様に這いつくばれよ。その状態で私に噛み付けるかあ、負け犬？ ……それにしても、何でテメェは平然と立ててんのかしら？」

勝ち誇るように当麻に言う金髪の女だったが、小次郎を見てそう言った。

「なっ！？」

当麻は倒れたまま小次郎の方に目を向けると、彼は驚きの声を上げ

た。

普通なら、一方的な攻撃を可能とするこの戦法の前にどんなに厳しい訓練を積んだ者でも、手も足も出せずにやられてしまうだろう。だが、小次郎は違った。

彼は激しい揺れにも関わらず鋭い眼光はそのまま、穏やかな笑みを浮かべながら自然体のまま立っているのだ。

その様子を見て、彼を転ばそうと女はオイルパステルを一閃する。再び石像の足が振り下ろされ、地が揺れる。しかし、小次郎は全く動じていなかった。

「……これぐらいの揺れじゃ、”今”の俺を地に伏せさせる事は出来やしねえよ。……戦う前に一つ訊きてえことがある。お前は何でこんなふざけた事をしようとするんだ？」

「……くっ！ そうだ！ 何故なんだ！？」

「……お前でなくて、シェリー＝クロムウェルよ。覚えておきなさい……っと言っても無駄か。あなた達はここで死んでしまいうんだし、イギリス清教を名乗っても意味がないわね」

金髪的女ーシェリーは、小次郎の事はエリスの攻撃で潰せば良いと判断し、口を開く。

その言葉に当麻は、なに？と眉をひそめた。

イギリス清教といえば、インデックスと同じ所属のはず、と。

そんな彼に、シェリーは薄く笑いかけながら、

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと、ね？ ーエリス」

シェリーが手首のスナップを利かせてオイルパステルをくるりと回す。彼女の動きに引かれるようにエリスと呼ばれる巨大な石像が地を踏みしめ、その巨大な拳を当麻めがけて振り上げた。当麻は動くことが出来ないで、ただ、右手を振り回すしか手はない。

一方、小次郎は戦闘開始とばかりに右手を挙げ、背中の方へそれを回す。

「離れろ、少年達!」

「――!」

その時、不意に、横合いから叫び声が上がった。傷ついた《警備員》の一人が、倒れたままライフルを掴んでいたのだ。

その言葉に小次郎は瞬時に当麻を抱え、ライフルの射線上から離脱する（その見事な動きに《警備員》はやや驚いていたが）。それと同時に小さな銃口が勢い良く火を噴いた。銃声と閃光が薄暗い街の通路を塗り潰す。空を引き裂く弾丸は、エリスを転倒させる為に、次々と石像の脚部へ激突する。

それに対しいち早く跳弾を怖れた小次郎は倒れている《警備員》達を避難させるべく行動を開始した。

そして、その小次郎の勘は現実のモノとなった。

「うわっ!」

頬のすぐ横を突き抜けた烈風に、当麻は思わず声を上げてしまう。それは、通路を遮る様々な無機物で構成されたエリスに向かって当麻達を守るために《警備員》の一人が放った銃弾がピンボールのように跳ね返ったモノだった。

小次郎は跳弾が飛び交う中、倒れている《警備員》達の避難を行っている。

当麻はその光景を唾然として眺めながら、跳弾から頭を守るため両手を使って地に伏せているしかなかった。

（くそ、小次郎が頑張って、《警備員》を避難させてるってのに、俺は何も出来ないなんて……。せめて、少しでもあのデク野郎に触れる事が出来れば……ッ!!）

当麻とエリスの距離はかなり銃撃が始まった直後に小次郎に避難させられてしまったのか結構離れてしまっている。その為、エリスに近付くのは至難の業と言えるだろう。いや、例えば、距離が近かろうが不可能だったろう。

一方の小次郎は、《警備員》達を避難させながら、隙を窺っていた。

あのエリスを倒す為の隙を。

狙い目はおそらく、装填リロードの瞬間だ。

新しい弾倉マガジンを差し替える数秒間―それは当麻には不可能だが、小次郎なら容易に踏み込み背中（というか学ランの中）に仕込んでいる木刀（閉じ込められて他の出口を捜している時に土産物屋で調達した）を取り出して、自身の奥義をぶち込み、倒すだけには十分すぎる瞬間だ。

小次郎は虎視眈々とその瞬間を手を動かしながら待ち続ける。その時だった。

カッン、と。

本当に唐突に、小次郎と当麻の後方から小さな足音が聞こえた。

連続する銃声が鼓膜を叩く中で、その弱々しい足音は戦闘に集中していた小次郎は敵意がなかった為、感じるのが遅れ、当麻は逆に何故か彼の耳に残った。

当麻は跳弾を避ける為に倒れ込んだまま、首だけ動かして背後を見る。

それは頼りなさげなビクビクした足音だった。

動き回る小次郎と当麻はその”引っ込み思案”な足音に嫌な予感を感じた。

そんな彼らの不安に応えるように、

「……あ、あの……」

その足音の主は、太股に届く長いストレートにゴムで束ねた髪が横から一房飛び出し、線の細い眼鏡をかけた少女――風斬氷華だった。

「馬鹿野郎！！何で白井を待ってなかった!？」

「そうだ！ここはお前みたいな普通の女子供の来る所じゃねえ!!」

銃声の渦に負けないような二人の男の叫び声が地下街に響き渡る。
小次郎は跳弾をかわしながら、《警備員》の救助や隙を窺う事に手一杯で、無防備に突っ立ったままの彼女の元に駆け寄る事が出来ず、当麻は跳ね回る銃弾のせいで立ち上がる事すら出来なかった。

それに対し、氷華は状況が把握出来ないのか、

「……あ。だって……」

「「良いから早く伏せろ（やがれ）　！！」」

「……え？」

小次郎と当麻の同時に放たれた叫び声に、氷華がキョトンとした直後、

ゴンッ！！と。彼女の頭が、大きく後ろへ跳ねた。

「な……！！？」

「あ？」

小次郎は驚愕の声をあげ、当麻は思わず間の抜けた声をあげていた。
状況は”最悪”と言えた。

エリスの体に当たって跳ね返ったライフフル弾の一発が、氷華の顔面にマトモにヒットしたのだ。

何か肌色のモノが飛び散り、眼鏡のフレームが千切れ、吹き飛ぶ。

小次郎は突然の出来事に彼の反射神経を持っても反応できなかった。当麻は頭が極度の混乱のせいで真っ白に飛びかけた。銃声はいつの間にやら止まっていた。《警備員》が、呆然とした様子で撃ち抜かれた少女を見ていた。シェリーは己の標的の一人が突然目の前にやってきて思わぬ形で自滅した急な展開に、若干眉をひそめた。氷華は大きく後方へ仰け反り、そのまま抵抗なく、人形のように倒れ込んでしまった。

「氷華ーーーーー！！！」

「か、ざーーーーきりィ！！！」

小次郎はシェリーそっちのけで、当麻は慌てて立ち上がると、氷華の元へと走り出した。

彼女の側まで駆け寄った時、小次郎と当麻の足がビクンと止まっていた。

小次郎の顔はやや驚いているだけだったが、当麻の顔の色は、驚愕の一色で塗り潰されていた。

そのあまりの傷ではなく、頭の半分を吹き飛ばす程の酷い傷なのにも関わらず、中身が肉も骨も脳髄も、何もないただの空洞だったことに。

氷華の傷口からは一滴の血も流れていなかった。まるで、ポリゴンで作った3Dモデルのような、そんな感じのモノであった。

空洞となった頭部の中心点に、肌色の三角柱の小さな物体がひとりでクルクルと回転しながら浮かんでいた。その三角柱側面にはキーボードのようなモノが付いており、カチャカチャと見えない指が走るかのように、長方形のキーが忙しく動いている。

当麻は何やら考え込んでいるようだったが、小次郎は氷華の安否を純粹に心配していた。それと同時に彼が彼女に会った時から薄々感じていた疑問が解消されていた。

（そうか、そういう事だったのか。氷華よ……）

小次郎は相手が人間ではなくともそれが自分の意思ある者であれば平等に接する事が出来る。それは彼が”元”の世界での環境―厳しい自然の中で野生動物と共存しながら生活（というか修業の毎日）をしていた事と彼の周りには化け物じみた強さを持った人間しかなかった事に由来する。まあ、それはさて置き、

「う……」

心配する小次郎と、どうしたら良いか分からない当麻の前で、氷華が小さな呻き声をあげた。

意識が戻った事に反応してか、頭部中心の三角柱がクルクルと回転

し、側面のキーボードが高速で叩かれていく。

そして、三角柱の動きに合わせて氷華の仕草や表情が作られているかのよな動きに、あのシェリーですら攻撃を忘れ、その光景にギョッと肩を固まらせた。

氷華の、片方しかない目がぼんやりと小次郎と当麻の顔を見る。

まるで寝起きのような仕草で、痛みを訴えているような気配は全くない。

彼女はゆっくりとした動作で、上体だけ地面から起こすと、

「あ……れ？……めがね。眼鏡は、どこ、です……か？」

自分が眼鏡をかけていた辺りを指で触れようとした時に何かに気付いたようだ。一度だけ熱湯に触れたかのように手を引っ込めると、今度は恐る恐る自分の顔に指を近付ける。

「な、に……これ？」

彼女の指が、その空洞の縁を、ゆっくりとなぞる。

「い、や……」

彼女の目がすぐ側にあった喫茶店のウィンドウを捉えていた。

そこに映し出されている自分の顔に気付いてしまったのだろう。欠けてしまったその顔から、血の気が引いていく。

「いや……ア！……な、に……これ！？いやあ！！」

「おい！落ち着け氷華！！」

押さえていたモノが爆発し、氷華は髪を振り乱し思い切り叫んだ。

小次郎は彼女を落ち着かせようとし、当麻の息が詰まる。彼女は明らかにバランス感覚を失ってしまったかのような危うい動作で立ち上がると、ガラスに映る自分の姿から逃げるように小次郎の制止を振り切って走り出す。余程混乱しているのか、あろう事か巨大な石像――エリスの方へと向かってしまう。

彼女の動きにシェリーは我に返り、すぐにオイルパステルを一閃する。

その巨大な剛腕が唸りをあげる。

その羽虫を振り払うような裏拳気味の拳が、氷華の腕と脇腹を巻き

込むように直撃した。彼女の体が真横へと吹き飛ぶ。途中で失速することなく三メートル近く宙を舞うと、その華奢な体が支柱へと勢い良く激突し、そこからピンボールのように跳ね飛び、柱を支点として《く》の字を描くような軌道でシェリーの足元まで転がった。ぽとり、という生々しい音がした。

あ
・
・
・
・
・
」

[illegible]

だが、氷華にはそんな事に氣を向けるだけの余裕がなかった。自分の腕の中が空虚な空洞である事実を知ると、半狂乱のような状態になり、通路の奥に広がる闇の中へと逃げるように去って行った。

シェリーが呟き、オイルパステルの表面を軽く指先で叩くと、エリスは近くの近くの支柱を殴りつけた。その瞬間、ガゴン！と地下街全体が揺らぎ、天井がミシミシと音を立てる。

それは明らかに” 足止め” の為の行為であつた。

それを見た小次郎は即座にそこへ行き、当麻達に降り注ぐ建材をい
つの間にか握られていた木刀で神速の勢いで薙ぎ払い始める。

よう」

降り落ちる建材を薙ぎ払い続ける小次郎と呆然とする当麻達には目も向けず、シェリーは氷華を追う為にエリスと共に闇の奥へと引き返す。

（かざ、きり……）

当麻は、『警備員』を助けている小次郎を眺めながら、暫く呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。

それだけ、今見た光景が、あまりにも鮮烈に焼き付いてしまったからだろう。

黒子は戸惑っていた。

あの小憎たらしい銀髪シスターと愛しのお姉様を地上へ運んだ後にもう一度地下街へ戻って見たら、あの類人猿・上条当麻と、影の薄そうな少女と穏やかな”風”のような雰囲気纏っている少年の姿がどこにもいなかった。

（困りましたわね……。辺りを捜しても良いのですけれど）

幸いなことに、現在、戦闘の気配が途絶えているものの、いつまた再開されるか分からない。そして、この場には民間人が数十人もいる。

危険度からいけば、当然直接狙われている当麻達（小次郎除く）の方が高いだろう。だからと言って、巻き添えを食らうかもしれない彼らを見捨てて良い道理はない。

それに、当麻達は、あの小次郎という少年が付いていれば問題ないという実に妙な安心感が黒子の中にはいつの間にかあった。

その為、黒子はすぐに決断する。

（命の価値に大小はありませんわ。あの方達は今の所、小次郎さんに任せて、わたくしはこの人達を避難させる事にしましょう）

黒子は内心そう思いながら、閉じ込められて怯える学生達の元へ向

かった。

あの後、周囲に倒れていた《警備員》達も負傷こそしているものの命に別条がなく、傷口に包帯を巻いたり針と糸で縫いつけたりしている。

小次郎と当麻は、《警備員》達の状態をある程度見届けると、制止する彼らの声を振り切って、氷華とシェリーを追う為に通路の奥へと向かった。

小次郎は二人の足音から現在の場所を把握する為、耳に全神経を集中し探っていた。

一方の当麻は何やら思い悩んでいるようだ。

（……………どうやらここからそう遠くねえ所にいるみてえだな。…
…早く行って助けてえのは山々だが、問題は当麻だな）

居場所を確認し、当麻に向き直る小次郎。

丁度、当麻は誰かに電話をしようとスポーツ用品店の壁にあるアンテナへと向かっているのが見えた。

彼はそのアンテナの真下まで行くと、漸く携帯電話を操作する。今回は小次郎も聞き耳を立てる事にした。

コール音が二回鳴ってから、当麻の連絡先の人物と繋がる。

《あっ！上条ちゃんですか！？やったやった、漸く繋がったですー。
上条ちゃん、今までどこにいたんですかー？》

何やら小学生くらいの女の子の声が聞こえた。

その声の小次郎は思わず疑問に感じた。

（何でこの局面で、小学生の女の子に電話してんだ？まさか、もうそこまでパニックっちまってるのか当麻よ！？）

しかし、小次郎のその誤解はすぐに解けることになる。

「？先生、俺の事捜してたんですか？」

その当麻の言葉に小次郎は驚愕する。

(先生?……先生!?その声で、もう少なくとも二十代半ば行ってるのかよ!?流石異世界、侮れねえ)

小次郎が素直に感心している間にも話は続いていく。

《姫神ちゃんが一度そっちに電話かけたはずなんですけど、電波の調子が悪かったそうなのですよー?》

首を傾げる当麻。

《上条ちゃん上条ちゃん。ちょっと大事なお話があるのです。あのですね》

「先生。悪いけどこっちも立て込んでるんだ。先にこっちの話から済ませてくれませんか?」

《え?……本当に大事なお話なのに。まあいいのです。何なのですかー?》

あっさり退いてくれた少女(?)教師に当麻は感謝し、小次郎は、この人も良い先生だな、と思った。

当麻がその少女(?)教師に氷華の状態についてかいつまんで説明した。

それを聞いた少女(?)教師はほんの少しだけ考えるような間を空けると、

《……上条ちゃん。それはもしかしてカザキリヒョウカさんの事じゃないですか?》

たった一言で言い当ててしまった事に当麻は絶句し、小次郎は感心する。

《んーっと。実は先生の大事な話というのも、彼女についてなのです》

「え?何で先生が、風斬について調べてるんですか?」

《あのですね、上条ちゃん。学校にはセキュリティというモノがあるのです。能力開発用の機密情報もありますし、嫌な犯罪も増えますからねー。転入生でもない部外者さんが勝手に校内に入っちゃったら、身元を調べられても文句は言えないのですよ?まあ、シスターちゃんは面識あるのでチェック甘いですけどねー》

当麻は秋沙に言われた事を思い出しているようだ。

《それで、上条ちゃんの疑問に対する答えですけど……確かにそう
いった能力者はいます。例えば肉体变化^{メタモルフォーゼ}。自分の体を、自分の思っ
た通りに作り変える能力者さんですね》

「じゃあ、風斬は……」

《いいえ。肉体変化は大変稀少な能力で、学園都市でも三人しかい
ないんです。その中に、カザキリヒョウカなどという名前は存在し
ません》

そこで、少女(?)教師の声が、わずかに硬くなった。

《そもそも、ただの肉体変化能力者では、説明がつかないのですよ》
「何ですか、それ」

当麻の顔に、悪い予感がする、というような色が浮かぶ。

《上条ちゃん。さっきも言った通り、学校にはセキュリティがある
のです。敷地の周囲に防犯カメラの類^{たぐい}がですねー》

そこで、少女(?)教師は、ですが、と言葉を切る。

《件のカザキリヒョウカさんは、どのカメラにも映っていませんで
した。『警備員』側に連絡して衛星写真を確認してもらいましたが、
やはり怪しい影はありません。……あの時、上条ちゃんの側でここ
やかに会話していたカザキリヒョウカさんは、一体どこから進入し
てきたのでしょうか?》

「な……」

(……………)

《彼女が食堂から姿を消した時、上条ちゃんはそれに気付きました
か? 先生は気付けませんでした。まるで、突然虚空へと消えてしま
ったように見えたのですよー》

「ちよ、ちよっと待ってください! じゃあ何ですか、風斬は肉体変
化と空間移動の両方を持った能力者だっていうんですか!??」
^{テレポート}

《上条ちゃん。^{デュアルスキル}「多重能力者」は脳への負担が大きすぎる為実現不
可能と断じられてますよー。もっとも、小萌先生の仮説はそれ以上
に現実離れしているのですけどねー》

小次郎はその言葉を聞いて、ふと思う。ここでは、自分のよく知る超能力戦士達は多重能力者になるのではないかと。
当麻はぐくりと喉を鳴らす。

「……小萌先生は、どう考えてんですか？」

《先生の考えはですねー、AIM拡散力場。これが深く関わってると思うのですよー》

言われた所で当麻はいまいちピンと来なかったようだが、

「AIMって、あれですか？能力者が無意識の内に放ってる力だとか、何とか」

《ですです。加えて言うなら、AIM拡散力場は機械で計測しなければ分からない程微弱なモノで、能力者によって放たれる力の種類も異なる、という所ですー》

「???それが、風斬とどう関係があるんですか。まさか、風斬が無意識の内に放ってる力が無茶苦茶な代物だとしても？」

当麻の問いに少女(?)教師ー小萌先生は答えず、

《先生は言いましたよね、今朝。大学時代の友人の研究に付き合っ
て、AIM拡散力場について調べていると》

何やら紙をめくるような音がパラパラと聞こえる。

《人様の論文内容を漏らすのは本来御法度なんですけど、上条ちゃん
の口が堅いのを信じてます。……その研究内容はあれです、複数の
AIM拡散力場がぶつかった時に生まれる、余波についてですね》
小次郎は静かに聞き耳を立て、当麻は首をひねる。

《上条ちゃん。人間って、機械で測ったらいろんなデータが採れま
すよね?》

「え?」

《熱の生成・放出・吸収。光の反射・屈折・吸収。生体電気の発生
と、それに伴う磁場の形成。酸素の消費と二酸化炭素の排出。もっ
と基本的な所なら質量や重量。……もっと基本的な所なら質量や重

量。……その他、あげればキリがないと先生は思いますー。それこそ扱う機械の種類に応じて、数千数万ものデータが採れるはずですよ」

「それが、どうかしたんですか？」

当麻は辺りを気にしつつ、先を促す。

《あくまで推測なのですけど》

そこで、小萌先生は少し間を空けて、

《逆に、それら人間らしいデータが全て揃ったとしたら、そこに人間がいる事にはなりませんかー？》
な……、と当麻の声が詰まる。

《学園都市には、様々な能力者がいます。そして、彼らは常に無意識の内に微弱な力を放出してしまう。一人一人は些細な力でしかなくとも、それがいくつも重なり合って、一つの意味を為すとしたらどうでしょうか。ほら、アルファベットってBとかPとか一文字だけじゃ何の意味もないじゃないですか。それをいくつもいくつも並べていくとSELECTとかSTARTとか意味のある言葉になりますよねー。それこそがカザキリヒョウカさんを作っている基盤だとしたらどうでしょうか。思うに、「風斬氷華」とは無数のアルファベットを並べ作った命令文コマンドが集まったプログラムコードのようなモノなのですよー。街中にいる学生さん達がアルファベットを一文ずつ刻み付けてしまっているんですねー。そのアルファベットが命令文を作り、それら命令文が合わさってプログラムを作り上げているのです》

それを聞いて当麻は暫くの間、呆然としてしまう。

やがて、

「ちょ……待ってください！いくら何でも暴論過ぎますよ！人間らしいデータって簡単に言いますけどね。さっき先生が言ってたじゃないですか。そんなの数千数万ものデータが必要になるって！」

《ですー。けど、学園都市には二三〇万人もの能力者さんがいますよ？例えば体温は発火能力者バイロキネシスが、生体電気は発電能力者エレクトロマスタが、それぞ

れ知らない間に担当してしまっているのです。それらがカザキリヒヨウカさんというアプリケーションを作ってしまったのですー》小次郎はその小萌先生の言葉に、氷華の正体は何なのかを完璧に把握する。しかし、それでも彼がするべき事は変わらない。

《姫神ちゃんの話では、”不完全なカザキリヒヨウカさん”の目撃談は昔からあったそうなのです。おそらく当時のカザキリヒヨウカさんは、幽霊みたいな曖昧な存在だったと思います。プログラムコードで言うならアルファベットの種類や数が欠けた命令文だった為、まともに機能できず、視覚や嗅覚など五感で捉える事は出来なかったのですねー。五感で感じ取れないのに気配などは感じ取れたのかもしれないけど。霧が丘にあると言われるカザキリヒヨウカさんの研究室というのは、元々この幽霊みたいに曖昧な存在を詳しく調べる為のモノだったのではないのでしょうか。あるいはA I M拡散力場の応用研究かもしれないけどー》

当麻の顔色が少し悪くなったと同時に何かを思い出したようなモノになる。

「けど、風斬自身はその事に気付いてなかったみたいなんですよ。自分はいくまで普通の人間で、だから自分の異常な正体に気付いた時は怯えて逃げ出した。本当に風斬がそんな、生まれた時からずっと人間以外のモノだとしたら、おかしいじゃないですか」

《どこがですかー？》

「どこがって……」

《ですから、生まれた時からずっと自分が人間だと思い込んでいれば、彼女は自分の存在に何の疑問も持たないはずですよー？》

「なーー」

当麻は驚愕している。

だが、小次郎は別にそんな事は当たり前だ、と思っている。

何故なら、”元”の世界で生きて今は平穩に生活しているはずの自身の妹分である小桃も自分が”風の神子”である事を知らないで育ってるのだから。そして、小次郎自身も自分がまさか、”聖剣”の

正当所持者の一人だったなんて知る由もなかったのだから。

《結論を言ってしまうえば、カザキリヒヨウカさんは人間ではありません。A I M拡散力場が生み出した、物理現象の一つという事になりますねー》

当麻はその小萌先生の言葉に、全身から血の気が引いたような顔になる。

「ちくしょう……そんなのって、アリなのかよ。ひどすぎる」

その当麻の言葉に小次郎は流石に我慢できなくなった。

「なにが酷いんだ、当麻！お前はそんな事を平気で言えるようなダセエ野郎なのかよ？」

「……こ、小次郎……」

小次郎は携帯電話を片手に持つ当麻の胸ぐらを掴んで叫ぶ。

「いいか！あいつは確かに俺達とは体の作りは違うかもしれねえ。だけどな、”それだけ”だろうが！！」

「！」

当麻は小次郎のその言葉にハツとした顔になる。

「あいつは他の誰が何と言おうが、俺達にとっちゃ友達^{ダチ}だろうが！いつからお前はそんなダセエ事を平気で言えるようになった！！そんなヤツじゃねえって事^{こと}ア付き合^{みじけ}いの短え俺でも分かるぜ！！」

《どなたかは知りませんが、先生も同意見ですネー》

小次郎のその言葉に同意した小萌先生の話に当麻は耳を傾ける。

《先生はカザキリヒヨウカさんとお話をした事がありませんから何とも言えませんけど、上条ちゃんの目から見て、どうでしたかー？カザキリヒヨウカさんは、ただそこに佇んでいるだけの命も心もない幻想にすぎませんでしたか？》

「……、」

その質問に対し、当麻の顔ははっきりと違々と語っていた。

《カザキリヒヨウカさんは、簡単に失われて良い程軽い存在でしたか？人間だとかそうでないとか、本物だとか偽物だとか、そんなくだらない理由だけで仲間外れにして良いような存在でしたか？》

「違う。そんな訳があるか」

当麻は今度こそはつきりと断言した。

《うふふ、それでよいのです。先生はまっすぐな方向に育ってくれる子羊ちゃんは大好きなのですよー》

小萌先生の笑い声にホッとする当麻。小次郎もまた、穏やかな顔に戻る。

《うふふ、くれぐれも”大事なお友達”のカザキリヒョウカさんを泣かさないうようにしてくださいねー》

それではなのです、と彼女は言って通話が切れた。

小萌先生は、《大事なお友達》と言ってくれた。

そこにどれだけの意味が含まれているかを、当麻は知る事が出来た。

「……、」

当麻は暫くの間、携帯電話に視線を落としていたが、やがてパタンと折り畳むとズボンのポケットにしまった。

「さて、友達^{タチ}を助けに行くか」

「ああ、けど、どうするんだ？」

小次郎の言葉に当麻は素直に疑問を口にする。

あの石像に平気で立ち向かえるとすれば、小次郎だけだろう。先程の様子を見れば火を見るより明らかだ。

「俺が石像をぶっ壊しちまえば手っ取り早えんだがな……だが、そうなると、当麻が氷華を庇い続ける事になっちまうから決定打に欠けるしな……」

「小次郎……」

小次郎の異常性を垣間見ている当麻にも石像ーエリスの相手は彼が適任である、と理解できている。だが、二人だけではどうやっても”手”が足りない。

小次郎がエリスを破壊しても件の魔術師が無傷ではいくらでも再生させる事が出来てしまう事など想像するのは容易かった。

どう戦えばいいのか熟考していたのだが、

「ん？ 誰か後ろにいやがる……」

小次郎が自分達の背後に誰かが立っている事に気が付いた。

「!?!」

当麻は風切り音が鳴るぐらいの勢いで振り返り、小次郎は目だけを後ろへ向ける。

そこにいたのは、

「は、」

「フッ」

当麻と小次郎は思わず笑っていた。いや、当麻だけは肺に溜まっていた息を吐いたら、自然と笑い声になっていたという感じである。完全に、己の意思とは無関係に表情が動いていた。

暫くの間、彼は信じられないという顔をしていたが、やがて今度は自分の意思で笑顔を作る。

「そうだよなあー」

「ああ……」

少年達は笑う。

「……くっだらねえ。そりゃ誰だってそう思うだろうさ」

「まったくだぜ!」

少年達是不敵に笑う。

最後までなかったはずの切り札が、彼らの前にあったからだ。

氷華は、今になって漸く焼けるような痛みを感じ始めていた。

「う、ぐうう……っ!?!」

暫しの間、生き地獄を味わっていた彼女だが、それは長く続かなかった。

「あ……?」

ぐじゅり、とゼリーが崩れるような音と共に、傷口が塞がり始めたのだ。

その体の全てが、身に付けているものの全てがじわじわと元に戻っていく。

「あ、ああ……っ！」

痛みが引いていくのと同時に、それまで考える余裕がなかった頭が漸く働き始める。

そして、思い出した事実が、彼女の意識を埋め尽くす。

「あがっ……ぎっ！が、ぐ……う、うううう！！げほっ、ぐ……うえ、かっ……ぎ、ぎぎ……っ！ひひゅ、がっ、ご、ぐぐ……い、ぎっ！い、い、うう、……が、ああああ！！」

言葉を組み立てる余裕のない彼女は心にのしかかる巨大な重圧によって絶望の叫び声をあげた。

と、そんな氷華の絶望に引き寄せられるように、さらなる絶望が現れる。

ズシン！！という地下街全体を揺るがす震動。

その震動にバランスを崩しながら氷華は、暗闇の先へ目を向ける。

そこには、無機物によって固められた歪な化け物とそれより恐ろしい金髪の女が立っていた。

彼女は歪んだ笑みを浮かべていた。

「ひ、……あ……っ！」

氷華は先程の恐怖と激痛を思い出し、反射的に逃げようとするものの、恐怖と焦りのあまり、思うように足を動かさないでいた。

それに対して、女は無言で白いチョークのようなオイルパステルを振るい、それに呼応した石像が氷華の背中を狙って拳を放つ。

氷華はとっさに地面に伏せようとしたが一步遅れてなびいた長い髪に石像の拳が引っかかり、彼女の体はまるで頭皮を丸ごと引き剥がすかのような激痛と共に砲弾の如く吹き飛ばされる。

「げう……ッ！？」

凄まじい勢いで地面を滑った氷華は激痛に襲われた。

「あ、あ、あ……ッ！」

見ると、地面には何メートルもの長さにわたって強引に引き剥がさ

れた皮膚の破片や長い髪の毛などが一直線に走っていた。
しかし、それを見ている間にも体の修復が行われていた。

「何なのかしらねえ、これ」

ここにきて漸く金髪の女が声を発した。それも目の前の光景がおかしくてたまらないといった感じで笑いながらだ。

「虚数学区の鍵とか言われてどんなものかと思ってみれば、その正体はこんなもんかよ！ あはは！ こんなものを後生大事に抱え込むなんざホントに科学ってのは狂ってるよなあ！！」

女が笑っている前で氷華の傷付いた体は完全に復元されてしまう。

「い、ひっ！？」

氷華は自分の体に恐怖と嫌悪を覚えた。

そして、金髪の女―シェリーは愉快げに言い放つ。

「くっく。しかしこれって殺すのも面倒臭そうね。ああ、それなら試してみるか。挽き肉になるまでぐちゃぐちゃに潰しても元に戻るかどうか」

「ど、どう……して……？」

「あん？」

「どうして、何で……こんな、こんな……ひどい、事……っ！」

「んー？別に、理由なんかないけど？」

そのあんまりな言葉に氷華は言葉を失う。

「別にあなたでなければならぬ理由なんてないの。あなたじゃなくてもいいの。でも、あなたが一番手っ取り早そうだったから。理由はそのんだけ。な、簡単だろ？」

その言葉に理不尽さを感じる間もなく氷華はエリスに吹き飛ばされる。直接ではなく間接的に。

それでも彼女は生きている。

女は殺す事に失敗しても顔色一つ変えない。

まるで生きようが死のうが関係ないと言っているようだ。

そして、氷華は己の命を軽々しく扱われて、屈辱のあまり彼女の瞳から涙が溢れた。悔しいと分かっているても事態を打開できない自分

の弱さにも腹が立った。

そんな氷華の顔を見て、シェリーは興が削がれてしまったかのように、

「おいおい。何なのようその面構えは？えー、なに？ひょっとしてあなた、自分が死ぬのが怖いと言っちゃう人かしら？」

「え……？」

「おいおいおいおい。ナニ当然ですっつー顔してんだよ。いい加減気付きなさいっての。ここまでやられてピンピンしてるテメエがまともな人間なはずねえだろが」

「……、」

「なーに顔を真っ青にしてんだよ。それで保護欲あおってるつもりか、そんなんありえないでしょう。この世界からあなたの存在が消えた所で何か損失がある訳？例えば、ほら」

シェリーがオイルパステルの側面を人差し指で軽く叩くと、石像が真横に腕を振るう。すると、壁に直撃したその腕が、真ん中から千切れ飛んだ。

「私があなたにしている事って、この程度でしょう？」

「あ……」

「化け物の手足が壊れた程度で、お涙頂戴なんてありえねーつってんの。分かってんのかお前？何を物体に感情移入してんだよ。モノに対して擬人化して涙なんか浮かべっと思っくんのか気持ち悪いいな。私は着せ替え人形の服を脱がして興奮するような変態じゃねえんだよ」

「あ、うあ……っ！！」

絶望する氷華の前で、壊れた石像の腕が再び再生していく。その様子はどこことなく彼女に良く似ていた。

それは無言で語っているようだった。

自分もこの石像とそう大差はないのだと。

「これで分かったでしょう？今のあなたはエリスと同じ化け物。あなたに逃げる事なんて出来ない。そもそもどこへ逃げるの？あなた

みたいな化け物を受け入れてくれる場所ってどこかしら？だから分かったろ。分かれよ。何で分からないの？テメエの居場所なんかどこにもないって事が」

シェリーの手の動きと共に石像が徐々にだが確実に近付いてくる。氷華は動く事が出来ない。

体には問題ない。問題あるのは心の方だった。

氷華は思い出す。

先程までの自分が体験した出来事を。

そのどれもが”初めて”だった。

そして、気付く。自分が幻影のような存在だった事に。

氷華は一人の少女を思い出す。自分を友達と言ってくれた銀髪のシスター少女だ。

でも、あの子が自分の事を知ったら、もう笑ってくれない。

氷華はその事に恐怖し涙を流す。

「泣くなよ、化け物」

シェリーが、嘲笑うように告げてオイルパステルを振るう。

「アナタガナイテモ、キモチガワルイダケナンダシ」

大木すら叩き折る石像の巨大な腕が、ゆっくりと迫る。

氷華は死を覚悟して目を瞑る。

「……？」

氷華は、恐る恐る瞼を開ける。

すぐ近くに誰かが、それも気配からして二人ほど立っているような気がした。だが、涙が視界を遮り、ぼんやりとした像でしか捉える事が出来ない。

その二つの人影は、少年のようだった。

氷華は十字路の真ん中にいる。一人の少年は、対峙する氷華と石像を遮るように、もう一人の少年は自分を庇うように、どこからともなく現れたようだ。二つの人影の横顔が、おぼろげに見える。

「あんた達、どこから!？」

シェリーの驚きとうろたえたような声が聞こえる。しかし、二人の少年はそっちには見向きもしなかった。

彼らはただ真っ直ぐに涙を流す氷華の顔を見ていた。

「待たせちゃったな」

「悪いな、こんなに泣かせちゃってよ」

その二つの声に、氷華はビクリと肩を震わせた。涙でその姿が見えなかったが、その声は彼女のよく知る人物達のモノだった。

その二つの声は、何よりも力強く、温かく、頼もしく、そして優しくかった。

少年達は告げる。

「だけど、もう大丈夫だ。ったく、みっともねえな。こんなつまんねえ事でいちいち泣いてんじゃねえよ」

「お前みたいな女にはやっぱ笑顔が一番なんだ。だから、泣くなよ」

氷華は子供ののように、瞼をゴシゴシとこする。

涙の膜が晴れる。

その先に、彼らがいた。

上条当麻が、”風魔”の小次郎が立っていた。

まるで、この上ない大切な真友マブダチに向けるような笑顔を見せて。

それから二人の少年がシェリーの方へ振り返る。

追い詰められた少女を守るように、歪な石像の前に立ち塞がるように。

その光景に氷華は驚き、シェリーは引き裂くような笑みを浮かべる。「くっ、はは。うふあはは！何だあこの笑い話は。おい、一体何を食べたならそんな気持ち悪い育ち方するんだよ！ははっ、喜べ化け物。この世界も捨てたものじゃないわね、こういう馬鹿が二人いるんだから！」

その錆び付いた声に、氷華は肩を震わせた。

彼女には耐えられないのだ。氷華自身が望んだあの温かい日常の象徴である二人がこの場で倒れてしまう事を。

しかし、そんな氷華をよそに、少年達は巨大な石像を前にしても少しも揺るがない。

彼らは言う。

「俺達二人だけだと思うのは大間違いだぞ（ぜ）」
は？とシェリーが間の抜けた声を上げかけたその瞬間、

ドガッ！！ととてつもない閃光が襲いかかった。

「!？」

氷華は目を潰すような白い光の渦に、思わず両手で自分の顔を庇った。

暫くすると目が慣れてきた為、三方全てから放たれる光の出所を確かめた。

そこには、三十人から四十人にも及ぶ人々が、この場に集まり、銃に取り付けられたフラッシュライトでシェリーを囲む光景が広がっていた。

彼ら、《警備員》達は誰一人として無傷な者などいない、重症患者として病院のベッドにいてもおかしくない人達ばかりだ。

それでも、彼らが臆することはない。

己の危険を省みずに、死地へと何のためらいもなく駆けつけてきた。その中には、女性の姿もある。透明な盾を構えるその彼女は、自身の傷など無視して、不敵な笑顔を浮かべている。

その目は、もう大丈夫だぞ、と語っているようだった。

「……どう、して……？」

氷華は不思議そうに問いかける。

「ばっかばっかしい。理由なんていらねえだろうが」

「女が、いや子供が涙を流している。……闘う理由はそれだけで充分だ！」

対して、少年達は即答する。

普通ではないはずの氷華じぶんから一度たりとも目を逸らさずに。

一緒に遊んでいた、あの時の表情のまま。

光の中で、いつものように彼らは言う。

「別に大した事ことあしてねーよ。俺達はたった一言、あの人達に言うただけだぜ？」

溢れんばかりの光の中で、彼らは言う。

「俺達の友達ダチを助けて欲しい（くれ）って（な！）」

氷華は一瞬、その言葉の意味が分からなかった。だって自分は化物なのに。

彼らは、それをどうでも良いと一言で切り捨ててくれるのか。

自分は、ここにいても良いのだろうか。

呆然とする氷華に、二人の少年は交互に言う。

「涙を拭って前を見な。胸を張って誇りに思いやがれ。ここにいる皆総て、お前に死なれちゃ困るっつってんだ」

氷華は、顔を上げる。

その顔にはもう絶望などなかった。

「今からお前に見せてやる。お前の住んでいるこの世界には、まだまだ救いがあるって事を！」

彼女は知る。

確かに、あの金髪の子ーシェリーによって、この地下街は闇に閉ざされた。しかし、彼らは光を用いて闇に立ち向かう。

闇の中で苦しみ泣き続ける誰かを救うために。

小次郎が告げる。

「そして教えてやるぜ！お前の居場所^{げんそう}は、こんなもんじゃ簡単に壊れやしねえって事をな！！」

「エリスー」

石像の陰に隠れたシェリーは、ブルブルと怒りに震えた声で、

「ーぶち殺せ、一人残らず！こいつらの肉片を集めてお前の体を作ってやる！！」

叫ぶと同時に、オイルパステルを宙を引き裂くように振るう。何重にも重ねた線が石像を操る糸となる。

「させん！！配置B！民間人の保護を最優先！！」

一人の怒号を皮切りに、全ての銃口が一斉に火を噴いた。

《警備員》達は透明な盾^{ポリカーボネイト}を持つ前衛とライフルを撃つ後衛の二人組で動いていた。ちなみに盾は跳弾を防ぐ為のものだ。

鼓膜を突き破るような銃声の嵐と共に、小次郎は自分で伏せて、当麻と氷華は近くにいた《警備員》の女の手で地面に引きずり倒される。そして、その《警備員》は小次郎達を守るように透明な盾をかざす。

ギギギザザギギ！！と目の前の盾が悲鳴をあげる。

氷華はその音に、雷に怯える子供のように震えている。

当麻と小次郎は前方にいる石像の姿を見る。

集中砲火を浴びているエリスだが、その体は傷付いていくのと同様にその場にある、あらゆるモノを利用して修復されていく。

「チィッ！！」

銃声のカーテンから、シェリーの怒号が聞こえてくる。

「《神の如き者》^{ミカエル} 《神の葉》^{ラファエル} 《神の力》^{ガブリエル} 《神の火》^{ウリエル}！四界を示す四天の象徴、正しき力を正しき方向へ正しく導け！！」

オイルパステルによって歪んだ十字架が空気中に走り書きされている

く。

ぎぢっ……、と。エリスの体から、悲鳴のような軋んだ音が響く。その後、ギチギチと不気味な音を立てながら、その体が一步前へ出る。

ズン！と。重たい音色が地面をわずかに震わせる。

シェリーはその光景に歓喜するかのように、さらに激しくオイルパステルを振り回す。

「あ……あ、そんな……」

火薬の爆音の中で氷華が思わず声を上げる。

「ここまでは、予想通りってトコだな。悪い予想の方ってのが気に入らねえが。ま、出来れば押し返すなり拮抗してくれるなりしてくれば文句なしだったんだけどな」

「闘いっつーのはそういうモンだぜ、当麻よ」

当麻と小次郎の言葉に、彼女は耳を疑った。

さらに、今度は透明な盾を構えている女の《警備員》―黄泉川愛穂が、

「少年達。本気でやる気なの？ 怖じ気づいたって言っても誰も咎めないじゃん？」

「仕方ねえさ。ヤツとマトモに闘えるのは俺ぐらいしかいねえしな。っていうかよ、あんなの”程度”に怖じ気づいてたまるかよ」

「情けねーけど、その手しかねーんだよなあ。だけど、まずはあれをなんとかしない限り、こっちに勝機はないんだからな」

その三人の会話に、氷華は愕然とした。

「……待って、ちょっと……待って、くだ、さい。……あ、あの……何を……」

「んなもん決まってる」

「決まってるだろ」

小次郎と当麻は、間を空けずに宣言する。

「俺があゝ”動く石像”をぶっ壊して……」

「その直後に俺がアイツを叩く！」

ズン！という石像の重たい足音が響く。

その足音は先程よりも強かった。

「ダメ、です……そんな……っ！危険、すぎ……！！」

「安心しろ、氷華。必ず勝ってくる！」

「俺達を信じろ！」

ゴン！と、さらに地面が揺れる。

段々と石像は近付いてくる。

その距離はもう一〇メートル足らず。

「指示を出す。最後に二人に確認するけど、構わないの？」

「「ああ！／＼当たり前だ！」」

何をすべきかは、ここに来る前にもう打ち合わせている。

故に、彼らの答えに余計な言葉など必要ないのだ。

「まったく、格好良すぎるぞ少年達」

小型の無線機を取り出した愛穂は小さく笑った。

「いいよ、付き合ってやろうじゃん。代わりに何があっても成功させろ。そして生きて帰ってこい。そのための協力ならいくらでもしてやる」

その言葉に、当麻は口元にわずかな笑みを浮かべ、小次郎は、

「ああ。元よりそのつもりよ」

と言って、右手を挙げ背中になを回し”何か”を引き抜く。

それに愛穂も当麻も、そして、氷華も目を丸くし、同時に叫ぶ。

「「……背中から、木刀……！！」」

そう小次郎が取り出したのは木刀だったのだ。

「つつーか、どうやって”それ”入れてんの！？いやそんな事よりも”それ”どこで手に入れたんだよ！？地下街（地下街）に来た時は持ってなかっただろ！？」

当麻はみんなを代表して魂のツツコミを小次郎に入れる。心なしかエリスに射撃を行っている《警備員》達も皆一様に頷いている。だが、小次郎は意に介さず、

「収納方法については秘密だぜ、当麻ちゃんよオ。あと、どこで手

に入れたかつーと閉じ込められて出口を捜してる時に通りかかった土産物屋で調達した」

「当麻ちゃん言うんじゃねえ！ってあの時かい！？」

当麻のツツコミにそれをのらりくらりとかわす小次郎。氷華はポカンとする。

それを見て愛穂は、

「ははは、そんなじゃ気を取り直して、……準備せよ（プリパレーション）。……カウント3」

気を引き締め直して、無線機に向かって何かの命令を下した。

これを聞いた氷華はゾツとした。まさか、この少年（小次郎）は本気であの化け物と戦おうとしているのか、と。

人間なぞゴミのように殺せるあの化け物と。

怖くないのだろうか、氷華は思った。

「……カウント2」

そこで当麻と漫才のようなモノを繰り広げていた小次郎が好戦的な表情に変わった後立ち上がり、戦闘態勢に移る。当麻は少し上体を起こす。

「待って……だめ、です！……これじゃ、絶対に助からない……っ！そんなの……そんなの……いや、です！私……っ！」

「止めるなよ、風斬」

殆ど錯乱しかけている氷華を当麻は落ち着いた声で制する。

「お前が俺の事を避けてた理由な、きつとこの右手にあるんだと思う。この右手は、異能の力なら善悪を問わず、あらゆる力を打ち消しちまうから。きつと、お前の事も例外じゃない」

だから不用意に手を伸ばして押し留めようとするな、と当麻は言う。氷華は衝撃を受けたように息を詰まらせた。

「……カウント1」

シェリーも（小次郎の木刀の件で目が点になっていた）何か仕掛けてくる事に勘付いたのか、さらに狂ったようにオイルパステルを振り回しエリスの足を力強く前へ進ませる。

しかし、この瞬間だけ当麻はシェリーの事など気にも留めず目前の少女の顔を見つめていた。

「そんなの気にすんなよ。別に触れ合う事が出来なくたって、お前が友達だって事にゃ変わりないだろ？それと、簡単に死ぬなんて諦めんな。俺はいや、小次郎と俺は必ず帰ってくる。いいか、必ずだ」

「……あ。帰って、くる……？」

「おう。またインデックス連れて四人で、どっかに遊びに行きたいしな」

そう言って、当麻は笑いかける。

「ま、俺より小次郎の方が大変だろうけど、な」

そう言ってから彼は前方へ顔を向ける。

「氷華……」

小次郎が氷華に声をかける。それに反応し、小次郎の方へ彼女は視線を移す。

「お前は自分が”化け物”つつたが、お前はただの力ないちよつと変わった女だ。そして、よく見ておけよ。真の”化け物”ってのが、こういうモンかをよ……」

木刀を肩に担ぎながら言う小次郎に氷華は思わず、「え？」という声を漏らす。

そして愛穂は”戦闘”開始の合図を告げる。

「――カウント0」

瞬間。

エリスに向かって銃弾をばら撒いていた《警備員》達が――一斉に撃つのを止め後ろへ下がった。

シェリーにとっては予想外の展開だろう。

何せ、銃弾は《警備員》の身を守る最後の砦だ。その手を休めれば、次の瞬間にはエリスの拳の餌食となるからだ。普通に考えればそれ

は自殺行為でしかない。

だが、その彼らの代わりにシェリーとエリスの前に出て来た者がいた。

それはやや逆立ったボサボサの髪にちよつと変わった学生服を着た木刀を持った少年だった。

少年は言う。

「さて、おっ始めはじようかね。俺の”闘い”ってヤツをよ」

それは、ちよつくら行つてくらあ、と言ってるような軽い感じだった。

シェリーはそんな小次郎の態度に怒りが沸いた。

「……さっきもそうだが、何だ、その今の態度はよ……いいわ。そんなに死にてえなら、まずはテメエからぶっ潰してやる！ やりなさい、エリス！！」

シェリーはオイルパステルを力一杯振るう。

それに呼応するようにエリスの拳が少年―小次郎に凄まじい勢いで迫る。

それを見た小次郎は一瞬、フツ、と笑うと、

「遅おそえっ！」

叫ぶやいなやその一撃を軽々とかわしエリスの肩口に木刀による神速の斬撃を入れた。

「」「な！？」」「」

それを見た者は皆（小次郎の異常性を垣間見ていたはずの当麻含む）驚きの声を上げた。

何故なら、誰も深い傷を与える事が出来なかったエリスに”木刀”

で決して浅くはない”刀”傷をつけたのだから。

それに”木刀”の方は全く折れていない。

それ自体はただのなんの変哲もないただの”木刀”なのにも関わらずだ。

シェリーはそれを見て憎々しげに、

「テメエ、どうやってエリスに傷を！？ それに何であなたの木刀は

折れねえんだ！？おかしいでしょう、木刀で岩やコンクリートを斬れるなんて！」

それに対し、小次郎は不敵に笑いながら、

「別におかしくなんざねえさ……。 ” 剣 ” つつーのは ” 得物 ” じゃねえ、 ” 技 ” で斬るもんだ。俺はそいつを ” 技 ” で斬った。そんだけの事だぜ？」

しかし、そう言う小次郎も始めからこういった事が出来た訳ではない。以前は木刀を力任せに叩き込む使い方をしていた。だが、ある ” 男 ” との死合しあいに負けた事で彼はその男に勝ちたい一心で、石灯籠を木刀で斬る鍛錬を積み、その中で、この ” 技 ” を身に付けたのだ。ちなみに、これを修得できた背景には、彼が当時世話になっていた ” 家 ” が大きいのだが、ここでは関係ないので割愛する。話を戻す。

その小次郎の言葉を聞いたシェリーは、さらに怒りを顕わにした。

「デメエ……ふざけんじゃねえぞ！ーエリス！！」

シェリーの怒りに応じるように、エリスは小次郎に全てを破壊するゴーレムの拳を怒濤の勢いで放ち続ける。しかし、その全てが目にも見えないスピードでかわされ、エリスは、カウンター気味に神速の斬撃を受けてしまう。

一向に攻撃が当たらない上に、エリスは斬傷を増やしていく。

いくら再生するからといってもこれは ” 魔術師 ” である彼女にとって、屈辱だった。

故に彼女は叫ぶ。

「ちくしょう……、ちくちよう！当たり前さえすればあなたなんか！！」

その言葉に、小次郎は反応し、動きを止める。

時間は少し遡る。

当麻達はこの”闘い”を信じられない思いで見っていた。

その中でも当麻は、

（小次郎がただモンじゃねえのは知ってたけど、まさかここまでとは……。ひよっとしたら神裂かんざきより強いんじゃないか？）

と思っていた。氷華も信じられない思いだ。そして、他の者もその小次郎の強さに感嘆の声をあげていた。

その時、シェリーの怒りの声が辺りに響いた。

その声を聞いた小次郎が足を止める。その行動に対し、全員が思った。

（（（何で足を止めるんだ。動かなきゃ殺されるぞ！）））と。

その皆の考えを知ってか知らずか、小次郎は木刀を持つ右手をダラリと下げて、残った左手で不敵な笑みを浮かべながら、挑発行為を行った。

「当ててみるよ、それで俺が殺せればな」

それを見たシェリーは当然、遂にブチ切れた。

「……なめやがって！……いいわ。望み通り殺してやる！やってしまえエリス！！」

オイルパステルを振るいゴーレムの拳を小次郎めがけて渾身の力で叩きつける。

誰もが小次郎の”死”を予想し確信する。

中には目を瞑る者、顔を背ける者がいた。

ズドオオオオオン！！と凄まじい衝撃音が鳴り響く。

だが、それだけだ。

肉や骨が潰れるような音が全くしない。

当麻や氷華を含む全員が小次郎の立っていた場所を確認する。

そこには信じられない光景が広がっていた。

「そ……そんな……」

シェリーは今度こそ驚愕の顔を浮かべる。そこには恐怖の色もあった。

何故なら、小次郎が”片手で身長四メートル強のエリスの巨大な拳を受け止めていたから”だ。

確かに彼が立っていた所はクレーター状になって陥没している。だが、それだけだった。

小次郎が驚愕と恐怖に染まるシェリーに静かに問いかける。

「シェリー……お前は真の極限の闘いつつーのを知ってるか？」

その言葉にビクツとなるシェリー。

「……え？」

「その石像を作り操る”魔術”をもつてしても、いやどんなに鍛えた奴でも……あの聖劍戦争を……真の修羅場をくぐり抜けて来ちまった俺には到底及びやしねえんだ」

「……ど……どういふ事だよ？」

そのシェリーの質問に静かに答える小次郎。

「終わりって事だ。お前の、そして、その石像の運命も……な」

そう語る小次郎の周囲を風が、いや烈風が舞う。やがて、小次郎の持つ木刀に舞い上がる烈風が集束する。

「お前をとっ捕まえる前に……まずは、」

その呟きと共に烈風を纏った木刀を振り上げる。

それをシェリーはただ見つめる事しか出来なかった。

「その石像をぶっ壊させてもらうぜ！」

大上段に持ってきた木刀を振り下ろす……。

その小次郎の叫びと共に……

烈風が旋を巻き凄まじき嵐を巻き起こす。

嵐はゴーレムⅡエリスを飲み込み、真空の刃がその五体をバラバラにした。

当麻はエリスが壊された瞬間、立ち上がり”戦場”へと歩く。

バラバラにされたエリスと一仕事終えたとばかりに木刀を肩で担ぐ小次郎をやや苦笑い（端から見たらちよつと引きつっていた）をしながら見た後、呆然と佇むシェリーを見つめる。

「え、エリス……」

彼女は焦りと緊張、そして小次郎への畏怖が入り交じった声を出す。エリスを復元する事はいくらでも出来る。だが、絶対にこの男には勝てないという確信が彼女にはあった。そして、彼からマトモな手段で逃げる事など出来ない事も。

彼女の手握られているオイルパステルが、不器用に宙を泳いでいた。

もうシェリーには、誰にも救いを求める事が完全に不可能である。

最強の兵器は、目の前にいる、真正銘の真の”化け物”イレギュラーに破壊されてしまったのだから。

「さって、と」

当麻は肩の調子確かめるように、右腕を大きく回しながら言う。

「は、」

この絶望的な状況にシェリーは引きつった笑みを思わず浮かべていた。

「はは。何だ、そりゃ。これじゃ、本当にどこにも逃げられないじ

やない」

「逃げる必要なんかねええよ」

風が穏やかに流れる中で、当麻は片目を瞑り、

「テメエは黙って眠ってろ」

当麻は一切の手加減なしにシェリーを殴り飛ばした。

彼女のその細い体は、風に流される紙屑のように何度も転がった。

第四話 地下街での死闘（後書き）

車田作品のキャラって基本的にクロスさせると苦戦するイメージが湧かない。

アックアが出て来るまではこんな感じかも……。

第五話 憎しみの理由（前書き）

今回は前回活躍できなかった当麻の活躍です。（まあ、殆ど原作と同じですが……）

それでは、本編スタートです。

第五話 憎しみの理由

《警備員》^{アンチスキル}達が小次郎に破壊されたものの未だに大きな残骸となっている石像の処理に追われている頃、

「それにしても、なんとなく分かつちやいたけど、小次郎って本当に強かったんだな。でも、これで”あん時”俺も一緒にやるつつたのに、それを突っぱねた理由がこれでよく分かつたぜ」

当麻は石像の残骸を眺めながら氷華救出作戦前に話し合っていた事を思い出して、小次郎に話しかける。

そう、現場^{こじ}へ向かう前に《警備員》達を交えての作戦会議で、やっぱり自分の右手を使って石像を破壊した方が時間がかからなくていいのでは、と小次郎に意見した所、初戦時の当麻の様子ではとてもじゃないが危険すぎるという理由で前回の作戦内容になったのである。

まあ、それはさて置き、

「まあな。”昔”ならともかく、”今”の俺には雑作もねえ事だったからな。それに、確かにお前なら、俺より楽に”アレ”を壊せたかもしれないねえが……流石に大怪我負わせて”あの子達”を泣かせたくなかったからな」

「?泣くって、誰が?……つつーか”あの子達”って?どうせまたインデックスに噛みつかれるだけだと思うんだけど……」

その小次郎の答えに当麻は首を傾げながら真顔で言う。

小次郎はその当麻の様子に、「はあ、”あいつら”が本当に憐れに思えてきたぜ……」と呟いた。

当麻はそれに対して疑問符が浮かんでいたが……。

一級フラグ建築士（しかも鈍感）はやはり健在であった。

「しかし、お前って何者なんだ?戦い方からしてどう考えても能力者でも魔術師でもないっぽいし……」

当麻は前回から気になっていた事を小次郎に訊いた。

「……ん？まあ、そりやそうか。こんだけ派手に暴れりや疑問に思うのも当たり前か……。それに闘いの後に言う約束だったしな……。小次郎が自分の事を話す為に当麻に向き直り……。」

「ふ。うふふ」

そこで、気絶させたはずの女の笑い声を聞いて、小次郎と当麻は勢い良くシェリーの方へ振り返る。

（浅かった？まさかコイツ、自分から後ろに跳んでたのか……っ！？）

（体力の万全な当麻の拳をマトモに食らったと思ったんだがな）。どうも”この世界”の女も戦闘センスが優れているらしいな……。彼女は倒れたままその手に白いオイルパステルを握ったまま笑っている。

突如、ビュバン！！と居合いあひのようにオイルパステルが地面に走った。判読不能な模様だか記号だかよく分からない何かが床へと書き殴られる。

「な……まさか、二体目を作る気か！？」

「待て、当麻！止まれ！様子がおかしい！！」

阻止しようとする当麻を小次郎は左片手で制する。

「うふふ。うふうふ。うふうふうふ。出来ないわよ。ああして残骸とはいえ、エリスが存在する以上、二体目を作って操る事など出来はしない。大体、複数同時に作れるのならエリスの軍団を作っているもの。無理に二体目を作ろうとした所で、どうやっても形を維持できない。ボロボロドロドロ、腐った泥みてーに崩れちまう」
けどなあ、と小次郎への恐怖も憎悪に変わったシェリーは獐猛しやうもうに笑って、

「そいつも上手く活用すりゃあ、”こういう事”もできんのさ！！」
瞬間、シェリーが描いた文字を中心点にして、半径二メートル程、彼女が倒れている地面が丸ごと崩れ落ちた。彼女は地面の崩落に巻き込まれ、地面に巻き込まれるように姿を消した。

「チイツ！！」

「くそっ!!」

小次郎と当麻が慌てて駆け寄ったが、そこには空洞しかなかった。底の方から空気の流れが感じられるものの、穴は深く何メートルあるかは分からなかった。小次郎なら追おうと思えば出来たが、これ以上目立つ真似はしたくないし、なにより、女を追い詰めるような事はしたくないから敢えて追わなかった。

（やられた。下に地下鉄の線路が走ってやがる……）

（流石、”地”を司るだけの事はあるな。見事な撤退法だぜ……）

当麻が舌打ちし、小次郎が感心すると同時に、残骸となって、存在していたエリスがバラバラと音を立てて崩れ去った。新しい人形を作る為にスクラップ同然になったモノを廃棄したのだろう。大きな残骸の処理をしていた《警備員》達は、エリスだったモノが全て急に崩壊した為、やや驚いていた。

（しかし、妙だな）

暗い穴の底を見ながら、小次郎と当麻の二人はふと疑問を感じていた。

いくらシェリーにとって最大の脅威である小次郎がいるとはいっても、ターゲットに対する執着心があまりにも低すぎる。

（何か忘れているような……）

（思い出せ。何が引っかかってるんだ？）

小次郎と当麻は彼女が言っていた言葉を思い出していた。暫く難しい顔をして二人揃って俯いていた（小次郎は顎に手を添えながら）のだが、不意に彼らは顔を上げた。

それは絶対にあり得る可能性。

シェリーは逃亡ではなく、最大の邪魔者こじろうに守られていない三人目に狙いを変えたとしたら。

そして、彼女の標的の内、今この場にいない者といえ……

「そうか……。インデックスか!!」

「くそ……。インデックスか!!」

暗い地下鉄の構内を、重そうな足音が響く。

それは彼女が新しく無機物を集めて作り上げられた四メートルもの高さを誇る動く石像・ゴーレムⅡエリスの足音である。

シェリーはエリスの腕に抱かれながら、”とある”目的地に向かっている。

小次郎から受けた屈辱に体を震わせ、当麻に殴られた頬がズキズキと痛む。

彼女は周囲を見回しながら、口の中で、忌々しい、と呟く。

この街全体が彼女には忌々しいのだ。

彼女はこの街が大嫌いだ。その総てが。

正真正銘の化け物から感じた恐怖は今や憎悪に変わっていた。何故ならあのような化け物をこの街が作り出したモノだと思ったからだ（それは彼女の勘違いなのだが）。

超能力者の少年に殴られた頬が熱を帯び始めた。

こんな街があるからいけないんだ、と彼女は口の中で毒づく。

「エリス」

彼女は”その名”を呟く。

そう、”エリス”とは元々このゴーレムにつけられた名前ではなかったのだ。

それは、二〇年も前に亡くなった、一人の超能力者の名前である。

薄暗い地下とは異なり、地上は物凄い炎天下であった。

そんな街中に、インデックスと美琴はぽつん、と残されていた。ちなみに黒子は今も閉じ込められた学生達の救出を行っている最中で

ある。

当麻達が無事に出て来ない以上、帰るのは薄情だし、かと言って彼女達の間に共通の話題なんてあるはずがない。ただ、炎天下の中で、何か妙な沈黙が流れるばかりであった。

(あーもう。黒子のヤツめ……)

美琴は今ここにはいない彼女の後輩に心中で恨み言を告げる。

暑さに耐えられないとでも言うかのように、インデックスの腕の中で三毛猫が暴れた。

やがて、彼女はポツリと呟く。

「……あつついね」

「そうね」

美琴も同意するように頷くが、

「ていうか、アンタのその服は何なのよ？このクソ暑い中にそんな長袖なんて……。あ、ひよっとして日焼けに弱い肌してる訳？なんか色素が薄いとすぐヒリヒリするってテレビで言ってたような気がするけど」

「別に気にした事はないかも。この服も今ではスースーと風通しが良いし」

「え？……うわっ、良く見たら布地を安全ピンで留めてるだけじゃない！何でこんなパンクな格好になっちゃってるのよ？」

「うっ……。色々と古傷があるので、理由は深く言及しないで欲しいかも」

インデックスがそこで流れを遮断してしまった為、またもや会話が止まってしまった。が、一度会話の味を覚えた美琴はすぐに耐えられなくなり、

「にしても遅いわね、あいつら」

「……うん。どうしよう、なんかあの魔術師はひょうかの事を狙ってたみたいだし。術式もロンドン仕込みみたいないがしていたし、本当になんにもなければ良いけど……。こじろうがついていてもやっぱり心配だよ……」

「？」

何やら普段あまり聞き慣れない単語に美琴は首を傾げた。

彼女は黒子に連れ出された際に、感謝するどころか逆に詰め寄って大騒ぎしていた。その時にも似たような単語を言っていた気がする。ちよつと考えて美琴は切り捨てた。格好からして宗教関係者のようだから、超能力も彼女からしたら魔法に見えるのだろうと考えたからだ。

「ひょうか、つてのは一緒にいた女の子の事？」

「うん。あ、今回はとうまが引っ張ってきたんじゃないんだよ。私が先に会ったんだから」

「……今回は、ね。ほほう」

美琴は顔を逸らし黒い笑みを浮かべていたのだが、無邪気なインデックスは気付いていなかった。

「ところで、アイツの身の安全は心配してない訳？」

すぐに素に戻った美琴の質問にインデックスは美琴に顔を向けて、「ん、とうま？とうまなら心配ないよ。とうまは何があっても、絶対に帰ってきてくれるんだから。それに理由は分からないけど、こじろうがいるからいつもより安心できるんだよ」

彼女はそう答えたが、その行動には既に矛盾がある。本当に心配していないのなら、こんな所でじつ、と待つ必要などないのだから。

（ま、この状況で心配するなつてのが無理な話よね）

美琴は会話の流れを再び切ってしまった事に悔いながら、一方で、（しかし、帰ってきてくれる、とききましたか）

何故か彼女の特別な含みを持たせた訳でもないその言葉に精神的に大ダメージを受けてしまう。それだけ彼らの間には”絆”があるという事なんだろう。

美琴はちよつと前髪をいじった後で、

（だから、何で、そこで、私が、ショックを受けなきゃいけないのよ？）

自分の中にある感情の波に眉をひそめたのだが、

突如、みぎゃあ！という甲高い鳴き声と共に、三毛猫がインデックスの腕の中から逃走した。

「あっ！」

インデックスが思わず叫ぶ。美琴がそっちに意識をやると、丁度三毛猫がインデックスの腕からスリと抜けて、地面に着地した所だった。「もうこれ以上暑苦しいのはうんざりだぜ！」と言うような感じで三毛猫は走り去った。

インデックスはすぐさま小さな逃亡者を追い駆けようとして、その足がすぐに止まった。オロオロと、逃走する三毛猫と美琴の顔を交互に見る。

「いいわよ。ここには私が残ってるから、アンタはさっさとネコ捕まえて戻ってきなさい。私はネコに嫌われやすい体質だから追っても無駄だし」

「ごめんね。そうしてもらえるとありがたいかも。……コラーツ！ スフィンクス！！」

インデックスはペコリと頭を下げると、コンビニ裏手の日陰ゾーンへ逃げ込んだ三毛猫を追いかけていった。

美琴は彼女のその破滅的なネーミングセンスに絶句していたのだが、ふと、マンホールがカタカタと揺れている事に気が付いた。

「あれ？」

美琴が不思議そうな声を上げると、今度は歩道脇にあるジュース用自販機の取り出し口が小刻みに揺れ始めた。街路樹の葉っぱが、風が吹いていないにも関わらず、カサカサと音を立て始める。

それは地震の揺れというよりも、どこか遠くで、怪獣のようなモノが歩いているような奇妙な震動である。

美琴は、あのネコはもしかしたら動物的な感覚で震動を察知して逃げたのかもしれない、と思った。

氷華は、薄暗い地下街の地面にペタリと座り込んでいた。

今はもう戦闘の空気が微塵みじんもなく、《警備員》達はシェリーが地上へ逃げるのを防ぐ為、アチコチに無線で指示を飛ばしている。

ふと、彼女は離れた所で誰かが言い争いをしているのに気が付いた。そっちに目を向けると、当麻と小次郎が《警備員》の女性と何やら話し込んでいる。というか、当麻が殆ど掴みかかりそうな勢いであった。

「だから！もうさっきのヤツは地下街にいないんだろ！だったら何で地下街の封鎖が解かれないんだよ！？」

「当麻、少しは落ち着け！焦った所でどうにもなんねえんだぞ！」

「そっちの頼りがいのある少年の言う通りじゃん。少年、何度も言うように、地下街の管理はウチらとは管轄が異なるじゃん。こちらも連絡をつけているけど、命令系統というものもあるし。封鎖を解くにはもう少し時間がかかるじゃんよ」

「くそ！」

「……。」

そう毒づいて壁を蹴る当麻の様子（小次郎は何かを考えているようで無言）に氷華はビクツと肩を震わせたが、彼の様子に少しの違和感を感じた。直接的な危機であるシェリーがもういないのだ。当麻と小次郎（昔）の彼から想像出来ないが当麻よりは落ち着いて見える）は何を慌てているのだろうか。

小次郎や当麻と話し込んでいた《警備員》の無線機に連絡が入ったようだ。彼女は少年達の元を離れると専門用語のようなモノを使っ
てこちらでも何やら口論している。

それを見ていた小次郎は当麻に何か話しかけると何か別の用事があるのか、どこかへ行ってしまった。

そこに一人残された当麻の元へ氷華は吸い込まれるようにフラフラと近付いた。彼の姿は少し怖かったが、同時に今にも泣き出してしまふ小さな子供のように、どこか放っておけない危うさがそこにあった。

「……あ、あの……さつきは、ありがとう、ございました。ところで、小次郎さんはどこに？」

「ん？ 別にお礼を言われる程の、っていうか殆ど小次郎がしたと思うけど。それにあいつは便……トイレに行ったよ。それよりお前、体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。……平気、だと思います、けど。えっと……それで。何が、あったん……ですか？」

その言葉に当麻は少し躊躇うように黙った。やがて、彼はゆっくりと溜め込んだモノを少しずつ吐き出すような感じで、

「シェリー・クロムウェル……あのすすけたゴスロリ女は逃げたんじゃない。次のターゲットとして、インデックスを追い始めたただだ」

「え……？」

「あいつはどうやら俺や風斬を殺す為にここに来たんじゃなくて、特定の条件が合えば誰でも良かったみたいなんだ。で、その一人がインデックスって訳」

氷華は息を吞んだ。確かにあの金髪の女はそう言っていた気がする。当麻や氷華は《警備員》達、そして小次郎に守られているが、インデックスの方は完全に無防備だろう。どちらでも良いのなら圧倒的に難易度の低い者を狙うに決まっている。

「《警備員》に掛け合ってみたけど、地下街の封鎖はまだ解かれないうて。ったく、あの分厚いシャッターが上がらないと外へ出られないのに！」

「え……？ でも小次郎さんなら力づくでどうにか出来るんじゃない？」
「いや、あいつが言うには、壊せる事は壊せるが、弁償請求されたら厄介だからやりたくないって……」

それ程お金に余裕がない当麻にとっては納得がいく理由である。

「……そ、それなら、あの人達に言えば。地上にも、《警備員》の人達はいるんだから……保護してもらえば良いんじゃない……」

「それは出来ない」

そのもつともらしい意見にも関わらず、当麻は即答する。

「どう、して？」

「インデックスは、この街の住人じゃない。《警備員》に見つかれば保護どころか逮捕されるかもしれない。……あくまで、かもしれないけどな」

ここで当麻は声を潜めて、

「一応、アイツにも臨時発行扱いのIDはあるんだけど、特別警戒^{コードレ}宣言^{ゾド}下なんて非常時じゃ役に立つかどうか分からない。免許証なりクレジットカードなり、他の身分証を見せろって言われても不思議じゃねえんだ」

そこで、彼は舌打ちして、

「まづいんだよ、それだと。ぶっちゃけた話、アイツには《書類上の身分^{パーソナルデータ}》がないんだ。カード、保険証、住民票、果ては自分の年齢、血液型、誕生日から何まで全部だぞ。インデックスなんて名前も明らかに偽名だしな。《外からやってきた怪しい人物》を捜している連中が、こんな空白だらけの人間を放っておくと思うか？」

ここで漸く氷華は当麻の焦っている理由を知る。自分と違い圧倒的に味方の数が少ないのだ。

「で、でも……私だって、実は住民じゃなかったんだし……」

「お前とインデックスは、ちよつと事情が違うんだ。確かにお前は街のID登録はしてないだろうけど、それだけだろ。確かに正体は普通じゃないかもしれないけど、お前の存在が危ないって決まっている訳じゃない。けど、インデックスはちよつと違うんだ。簡単に言っちゃえば学園都市とは系統が違う組織に属してる。そして、属してるだけで完全に危ないと判断されちまうかもしれない」

そこまで言うと、当麻は一人で歩き出した。氷華は慌ててその後を追う。

彼の向かった先は、金髪の女が逃走する為に空けた大穴の縁だった。「やっぱ、行くならここしかねえか。くそ、すぐその隔壁を開けてくれりゃ簡単に先回り出来るってのに、何で追走なんて後手に回

らなくっちゃならないんだ！」

氷華は大穴を覗き込んだ。底が見えない。どうやら物凄く深いようだ。

「ま、待って……。本当に、……小次郎さんに何も言わずにあなた一人で行くんですか？」

多少のリスクがあっても、《警備員》に連絡するか、頼りになる（と言うか文字通り超人の）小次郎と一緒に行くべきだと思う。あの金髪の女の怖さを身を持って知っているから。

断言できる。あれは普通の高校生が考えなしに戦って良いものではない。

おそらく当麻も分かっている。この場を切り抜ける事が出来たのは、圧倒的な力を持つ小次郎がいたからこそだ。あの石像は、常識で考えれば、一対一なら戦車にだって勝てるだろう（と言うか、あれに無傷で勝てた小次郎が非常識な存在である）。

それを知っていても彼は決して揺るがない。

《学園都市の敵》という少女を匿っている時点で、理由など問わなくても分かる。当麻は何があってもその少女を守りたいのだ、と。氷華にもその気持ちは痛い程分かる。何故なら彼女は自分にとって初めて出来た大切な友達だからだ。

だからと言って、黙って当麻一人を死地に送り出す事など出来はしない。

この少年を一人で石像と戦わせてはいけない。

どうすれば良いのか、氷華は考えた。そして、彼女が行き着いた答えは、

「……大丈夫、です。あなたが、行かなくても……助ける方法は、あります」

氷華の言葉に、当麻は訝しげに眉をひそめた。

そんな当麻に彼女は言った。

「化け物の、相手は……同じ化け物がすれば良いんです」

その言葉を聞いて息が止まった当麻に、氷華はそっと笑いかける。

「私は……小次郎さんのように……あの化け物に、勝てるかどうかは分からないけど、少なくとも、困ぐらいはできます……。私が殴られている間に、あの子を逃がす事が……。出来ます。私は、化け物だから。それぐらいしか、出来ないけど……」

その言葉に絶句した当麻は、やがて彼の表情が驚きから怒りへと変わった。

「お前、まだそんな事言ってるのか！ 良いか、お前がはっきり口にしねえと分かんねえなら、一から一〇まで全部教えてやる。小次郎も言ってたが、お前は化け物じゃねえんだよ！ 俺達が何の為に、誰の為にここまで駆け付けたと思ってんだ！ それぐらい分かれよ、何で分かつとうとしねえんだよ！」

当麻の嘘偽りのない言葉に氷華は嬉しくなる。

「そんな風にされて嬉しいとでも言うような人間に見えるのか、俺が！ それを黙って許す人間（だと思ってんのか、小次郎が！ あんな化け物にお前が殴られているのを背に逃げるような人間だと思ってたのか、インデックスが！ ふざけんな！ たとえお前が俺達を見捨てたって、俺達はお前を見殺しにしたりしねえんだよ！ 出来るはずがねえだろ！！」

だけど、彼は気付いているのだろうか。自分は小次郎が倒した化け物と同じである事を。

「……だけど、それで良いんです。私は、化け物で良い……」

氷華は、目を逸らさず正面から当麻の顔を見て告げた。

「私は、化け物だったから……あの石像に何度殴られても、死にませんでした。私が……。化け物だからこそ、私は小次郎さんと同じように立ち向かえます……」

だから、と彼女はそこで一度だけ言葉を切る。

「私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……。化け

物で、幸せでした」

にっこりと笑って、氷華はシェリーの空けた大穴の縁から、飛んだ。
「風斬イーーツー!!」

当麻は叫び、とっさに手を伸ばそうとしたが、途中で止まった。考える余裕がなかった為、利き手である右手を出してしまったのだ。これで彼女を掴んだら、その瞬間に彼女を消し飛ばしてしまう。

その事を彼は心のどこかで気付いていたのだ。

そして、彼は見た。

氷華の思わず手を止めてしまい、己を責める自分に、あなたが悪いんじゃないと、告げているような綺麗な微笑みを……。

自身を化け物と呼んだ少女は闇に落ちた。

その様子をただ見てる事しか出来ず、呆然とする当麻の後ろから声がかけられた。

「当麻！」

その声に当麻は後ろを振り向く。

そこには用を足して帰ってきた小次郎がいた。

「……こ、小次郎。お、俺は……」

己を責める当麻に、小次郎は、

「話はここへ来る時に聞かせてもらったから状況は分かってる！」
その小次郎の言葉に当麻は驚く。

「え!？」

「あいつ……俺があれだけ言ってやっても、まだあんな事思ってたのか……」

「こ……小次郎。お前……どこから聞いてたんだよ？」

「あ?……最初からだ。丁度手が離せなかったから、ここに来るのが遅れちゃったがな……」

小次郎の答えに益々困惑する当麻。

「いや、あそこからどうやって聞いてたんだよ？」

「ああ……俺の耳は三里先の針の落ちる音さえも聞き逃さねえから、^{あそこ}便所からでもぼっちり聞こえんだよ」

当麻は内心、生身の耳でっ！？、っーかどんな耳の構造してんの！？
？と思った。そんな当麻に気付いていない小次郎は決意したように言う。

「仕方ねえ。嫌でも目立っちまうから”これだけ”はしたくなかったがやむを得まい……」

「え？何する気だ？」

当麻は小次郎の雰囲気は何やら嫌な予感がしたので尋ねる。
そして、それは大当たりだった。

「決まってるあ、飛び降りる！」

「イエーイ！やっぱりそう来ると思った！っつか、何で！？何で生身！？降りるんだったら、ロープ使えばいいじゃん！！」

それに対し、小次郎はもうこれは決定事項だとも言おうように、
「バカヤロウ、ロープなんざ探してたら間に合わなくなっちまう。

その証拠に吹っ切れた氷華のヤツのスピードが上がりやがった。やべえぞ、俺達も急がにゃ……」

「いやいやいやいや！さっきから思ってたけど、何でそう現状が逐一ほぼ正確に掴めんの！？もう耳が良いだけじゃ説明になんねえよ！そして何か、飛び降りる事が、さも常識のように言ってるけど、こっから飛び降りて無事に済むのは、^{スーパーハイスベック}超高性能な小次郎さんだけですから！上条さんには無理ですの事よ！！」

そう言って生身で飛び降りる事を必死に反対する当麻。

しかし、運命の女神はそんな彼にはとことん非情だった。

「当麻！お前も男なんだから、つべこべ言うんじゃねえ！行くぜ！！」

騒ぐ当麻を脇に抱え、そのまま飛び降りる小次郎。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！？
やっぱり俺ってば、こうなんの！？だからいつものように叫びます

！せーの……、不幸だ~~~~~！！」

不幸少年の叫びと共に小次郎達は闇に消えていった。

大穴から地下鉄の構内に生身で降りた時、当麻は暫く「良かった。俺生きてる。生きてるよ……。本当に良かった……」とorzの体勢で繰り返し呟いていたが（小次郎は彼が立ち直るのを律儀に待っていた）、約十分後に立ち直ると、小次郎と共に暗い道を走り始めた。

（くそっ！どいつもこいつもあっちこっちで好き勝手にトラブルを起こしやがって。ただでさえ厄介な事態になってんだからテメェからハードル増やしてんじゃねえよ！）

（……もうかなり遠くにいやがる！急がねえと取り返しのかねえ事になっちまうな！！）

コンクリートの地面に点々と新しく作られたエリスの足跡がめり込んでいる。

当麻は、最後に見せた彼女の笑みを思い出し、右手を強く握り締め、小次郎は、最後に聞いた彼女の悲しげで優しい声を思い出し、左手で逆手に握られている木刀をさら強く握り締める。

二人は同時にあの儚い幻想の少女の事を想う。

（（終わらせてたまるか。こんなつまんねえ結末で、終わらせてたまるか！！））

彼らはその決意を胸に一心不乱に前へ進む。

地下鉄の構内を走り続けていた二人。

その時、不意に、すぐ側の柱が不自然に崩れた。

「ちっ……！！？」

「横に跳べ！当麻！！」

二人に向かって倒れてくる柱に、小次郎の的確な指示で横合いに跳んで避ける。ズン、という音と共に、コンクリートの粉塵が舞い上

がる。

「流石に、そう簡単に仕留められないわね……」

闇の先から声がかかる。小次郎と当麻がそこへ視線を向けると、薄汚れたドレスを引きずるようにシェリーが立っていた。

その距離一〇メートル強。

彼らはふと、眉をひそめる。そこにはゴーレムⅡエリスの姿がなかったからだ。

「ふ。うふふ。うふふうふ。エリスなら先に追わせているわよ。今頃もう標的の元に辿り着いている頃かしら。それとももう肉塊に変えちまってるかもなあ」

「テ、メエ……っ!!」

「くそっ、やるしかねえのか……」

当麻は腰を低く落として拳を握り、小次郎は木刀を構えながら苦しそうな声を出す。

何故そんな顔をするのか、それは彼が敵とはいえ女と闘う事を嫌がる性分だからだ。

そんな異なる態度を取る二人の様子を眺めながら、シェリーは満足げに笑って、

「それでいい。ええ、それでいいわ。あなた達は私の相手をしていなさい。エリスの元には、決して通してあげない」

そこまで言われて、言われて二人は彼女の意図を完全に理解する。

エリスを一撃で破壊できる当麻、そしてそのエリスですら圧倒的な強さで倒してしまう小次郎の二人を己の命を賭けて足止めするつもりなのだ。

氷華もここを通ったはずなのだが、全然姿が見えない。

おそらくシェリーはわざと見逃したのだろう。本来のターゲットの一人であるはずの氷華を何の未練もなく見逃した。既に彼女の狙いはインデックスただ一人なのだ、と。

ならば、こんな所で二人まとめてグズグズしている場合ではない、と当麻は思った。

そして、当麻は小次郎が女性と闘うのを嫌がる事をなんとなく気付いていた為、

「……小次郎、先に行ってくれ！」

「！当麻！いきなり何を……」

当麻の言葉に流石に驚く小次郎。

「今は時間が惜しい！お前の足なら、間に合うはずだ！」

「だが、あいつはゴーレムがなくても強敵だぞ！」

「心配すんな！アイツ一人ぐらい何とかなる！それにな……信じられねえかもしれないねえが、俺はこういう事にゃ慣れてるんだ！」

「だけどよ……」

当麻の申し出に、迷う小次郎。そんな彼を男らしい微笑みで、彼の背中を押すように、

「小次郎……。俺は今回、無様な事に何にもしてねえんだ。してても精々お前の仕事の後始末くらいだ。そんなんじや格好がつかねえ。だから、この局面では俺が戦わなくちゃいけないんだよ。ここで俺が戦わなきゃ自分自身が情けなくなっちまう。だから、ここは俺を信じて先に行ってくれ！」

その当麻の決意を聞いた小次郎は一瞬の逡巡^{しゅんじゆん}の後、

「分かった。俺は先を急がせてもらうぜ！」

当麻の言葉の内にあるもう一つの本音に気付いた小次郎は内心感謝しながら、了承する。

「絶対に死ぬなよ、当麻！」

「ああ。死ぬつもりなんぞ、さらさらねえよ」

その会話を最後に小次郎は行動を開始する。

しかし、この会話は当然ながらシェリーに聞かれていた。

「最大のガンであるテメエを行かせると思ふのかしら！？押し潰されて死んじまいな！！」

シェリーがオイルパステルを振るおうとしたのを見た小次郎は、

「悪いが、そんなトロさじゃ、俺は殺れねえぜ？」

そう言った途端、一陣の風となって消えた。

「なっ!？」

その疾風の如き動きを見せた小次郎に驚くシェリー。そして、当麻はそれをあまり驚きもせず見届けていた。

「……何者なのよ、アイツは……?」

「……さあな。でも分かっている事はアイツが人間で俺の友達って事ぐらいだ」

暫く啞然としていたシェリーだったが、それほどの間を置かず立ち直り、

「ふんっ、まあいいわ。あの男は行かせちゃったけど、テメエはここから行かせないわ」

もう自分の相手は当麻一人に狙いを定めたようだ。

暫く風が行った所を眺めていた当麻は彼女に向き直りながら、以前シェリーが告げていた言葉を思い出していた。

彼女が学園都市で騒動を起こしている以上、イギリス清教がどこ戦争を起こそうとしているかなど、聞くまでもない。

だが、それは本当にイギリス清教全体の意志なのかは疑問だ。

「……一体何を考えてんだよテメエ。俺には裏方がどうってんのかなんて分かんねえけどよ、今はまだ科学も魔術もバランスが取れてんだろ。なのに何でわざわざそれを引っ掻き回そうとするんだ!何か意味があんのかそれは!？」

当麻の問いに、しかしシェリーはただ含みのある笑みを口元に浮かべるのみだった。

そのまま、彼女は告げる。

「超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。聞いた事はないかしら」

「なに?」

その自分が出した質問に答えていない解答に、当麻は眉をひそめるが、

「おかしいとは思わなかったの? 一体どうしてそんな事が分かっているかって」

シェリーの言葉は当麻の心へと少しずつ刺さっていく。

「試したんだよ、今からざっと二〇年ぐらい前に。イギリス清教と学園都市が、魔術と科学が手を繋ごうって動きがウチの一部署で生まれてな。私達はお互いの技術や知識を一つの施設に持ち寄って、能力と魔術を組み合わせた新たな術者を生み出そうとした。その結果が……」

彼女の言葉を最後まで聞かずとも、当麻には結末が読めた。それはかつて《三沢塾》で見た事があるからだ。

「その施設ってのは……」

「潰れたというか潰されたというか。科学側と接触していた事が知れたその部署は、同じイギリス清教の者によって狩り出されたわ。互いの技術・知識が流れるのはそれだけで攻め込まれる口実にもなりかねねえからな」

当麻は押し黙った。

科学者と魔術師が手を結ぼうと思ったのも、別に誰かを傷付ける為のモノではなかったはずだ。

「エリスは私の友達だった」

ポツリとシェリーは言う。

「エリスはその時、学園都市の一派に連れてこられた超能力者の一人だった」

当麻は眉をひそめた。そのエリスという名は、確かあのゴーレムにつけられていた名前だ。という事はその名をどれほどの想いで呼んでいたのだろうか、と当麻は思う。

「私が教えた術式のせいで、エリスは血塗れになった。施設を潰そうとやってきた《騎士》達の手から私を逃がしてくれる為に、エリスは棍棒^{メイ}で打たれて死んだの」

教会の中のような静寂が暗い地下鉄の構内を支配する。

そして、シェリーはゆっくりとした口調で、

「私達は住み分けするべきなのよ。互いにいがみ合うばかりでなく、時には分かり合おうという想いすら牙を剥く。魔術師は魔術師の、

科学者は科学者の、それぞれを領分を定めておかなければ何度でも同じ事が繰り返されちまう」

その為の戦争。しかし、そこには矛盾が生じている。

「クソ、なんか話が噛み合わないな。お互いを守る為なら戦争を起こしてどーすんだよ。いや、実際に起こす気はねえよな。テメエの目的を果たす為なら、わざわざ戦争まで発展しなくても、《戦争が起きそうになった》《危険は目の前まで迫っていた》ってだけで十分だからな」

「買い被ってんじゃないわよクソガキ。あの男もそうだったけど、何哀れみの目で人を見てやガンだ」

シェリーは否定するが、当麻は自分の意見は間違っていないと思う。

「……、」

当麻にはシェリーの言い分にも一理あるというのも分かっているが、どうしても納得ができなかった。個人的な理由ではあるが、彼にはその”理由”を否定させる気には絶対になれなかった。

シェリーは荒んだドレスの袖から白いオイルパステルを取り出す。

当麻はそれに疑問に思い警戒しながらも内心で首を傾げる。

その様子を見たシェリーは自分の乱雑な金髪を揺らすように笑いながら、

「くふ。存外、気が付かないものなのね。辺りが暗いのも一役買っ
てんだろうけどな。まあ、あの”男”は見抜いていたみたいだけ
だね」

「なに？」

当麻は思わず聞き返す。

「おやおや、違和感は覚えなかったの？私は何故、わざわざこうして暗闇から姿を現してベラベラ喋ってたのか、とか。普通なら闇に紛れ、テメエらが通り過ぎようとした所を攻撃した方がよっぽど効果的じゃねえか」

ここまで言われて当麻は漸く小次郎の言っていた、彼女が強敵だと

いう意味を悟る。

「まさか……」

「……あの”男”のお陰か、察しがいいわね。そう、この場所。私
がここを選んだ理由。何故私がわざわざこの一点でじっと待ってい
たのか……」

次に続くであろう言葉に、当麻は悪い予感しか湧かなかった。

「あなたの思った通り、こういう理屈よ！目え剥きやがれ！！」

ヒュン、とシェリーは空を引き裂くようにオイルパステルを横に振
るう。

瞬間、地下鉄の構内全体が淡く輝き始めた。

（これは……！？）

当麻は驚愕する。壁や天井のあらゆる場所がオイルパステルで描い
たとされる紋様でびっしりと埋め尽くされている。見渡す限り全て
が、だ。

そして、床には、まるで天井から水滴が滴り落ちるしたたように魔法陣が
点々と描かれている。

（ま、ず……この魔法陣、まさかエリスの……ッ！？）

当麻は戦慄する。良く見ると、構内に埋め尽くされている魔法陣は、
全く同じ模様でタイルのように積み重ねて作られていた。シェリー
の言ったことを思い出しながら、これがどういう意味を持つのかを
瞬時に答えを導き出す。

（くそ……トンネル丸ごと潰す気だな！）

当麻は魔法陣を打ち消そうと思い、上を見上げるが一回二回触れた
ぐらいじゃとてもじゃないが、全ての魔法陣を消す事なんてできな
い、すぐに悟る。

彼女がこの場に留まっていたのは、この準備の為だったのだ。事前
に準備だけ整えておけば、わざわざ標的に近付かなくても命令一つ
で辺り一帯をまとめて押し潰せる。

「地は私の味方。しからば地に囲われし闇の底は我が領域」

歌うように、魔術師は告げる。

彼女の周囲にも魔法陣が描かれているが、恐らく逃げ道を用意しているを見て良いだろう。

「チィ……ッ!!」

当麻は舌打ちした。自分の足では、今からシェリーの元に走っても後ろに逃げても間に合わないだろう。

それにこれは敵が作った罠だ、退路など用意されている訳がない。

シェリーはそんな当麻の焦りすら予想範囲内とも言わんばかりに余裕の表情を浮かべ、

「全て崩れる!泥の人形のように!!」

絶叫に呼応するかのよう、周囲は一層輝きを増す。構内全体が低く不気味に蠕動する。ぜんどう

(くそ、どうする……ッ!?)

当麻はない頭をフル回転させ考える。生半可な方法では自分は生き埋めになってしまう。どうすればいいのかを文字通り考える。ふと床の魔法陣を見た時、自分の体の動きを止めた。

「愚者を呑み込め!泥の中へと練り混ぜろ!私はそれでテメエの体を肉付けしてやる!」

シェリーは最後のスイッチを入れるように叫ぶ。

壁や天井に亀裂が走り、まるで風船のように内側から膨らんだ。いや、耐久度を失った天井が大量の土砂の重みに負けたのであろう。

「くーーーーーッ!?!」

破裂寸前のシャボン玉のような天井の下を、当麻は弾かれたように一心不乱に前方へと駆け抜ける。シェリーの立ち位置は恐らく生き埋めにならない唯一の安全地帯なのだろう。しかし、小次郎ならともかく当麻の足では崩落前にそこまでの移動は出来ない。

(だから、そこじゃねえ)

当麻はインデックスが学校の食堂で言っていた事を思い出しながら、右手を握りながら腰を低くして走った。目的地はシェリーのいる地点よりもっと手前に描かれている魔法陣だ。

(“その”魔法陣だけが、意味がねえんだ)

そう、この構内を崩して当麻を（もしかしたら小次郎もそうするつもりだったのだろうが）生き埋めにするつもりならば、床に魔法陣を描く必要はないのだから。

（だとすれば、”その”魔法陣だけは”別の意味がある”！！）

当麻の行く先に気付いたシェリーの顔が驚きの色に染まる。慌ててオイルパステルを振るい、周囲の壁や柱に命令を下すが、もう遅い。当麻は自分に向かって倒れてくるそれらをくぐり抜け、床に描かれた魔法陣に向けて右手を振りかざし、そのまま迷わず振り下ろす。

魔法陣は、甲高い音を立てながら消滅した。

彼女にとって、それはこの場において必要なもう一つの術式―安全地帯を作る為の術式だったのだろう。

その安全地帯を失った今、彼女はもう迂闊に崩落を起こす事は出来ないのだ。

「チィッ！！」

シェリーは慌ててオイルパステルを宙で振り回した。天井の振動は治まっていき、再び固定化される。

その時、急に、バン！！という足音が鳴る。

シェリーが驚いて音のした方へ目を向けると、まるで飛び石のように床を跳ねる当麻が、既に彼女の懐深くへと潜り込んでいた。

シェリーがとっさにオイルパステルを振るおうとするも時既に遅く。当麻の拳がそれより早く彼女の顔面へ突き刺さった。

シェリーの体が地下鉄の構内を勢いよく転がり数メートルも吹き飛ばされる。これだけの大規模な攻撃を回避された為か、その顔には強烈な焦りと緊張が刻みつけられていた。

「……くそ、ちくしょう」

シェリーは一步、二歩とよろめくように後ろへ下がりがら、忌々しげに呟く。

「戦争を、《火種》を起こさなくっちゃならねえんだよ。止めるな！今のこの状況が一番危険なんだって事にどうして気付かないの！？学園都市はどうもガードが緩くなっている。イギリス清教だって

あの禁書目録を他所^{よそ}に預けるだなんて甘えを見せている。まるでエリスの時の状況と同じなのよ。私達の時でさえ、あれだけの悲劇が起きた。これが学園都市とイギリス清教全体なんて規模になったら！不用意に互いの領域に踏み込めば、何が起きるかなんて考えるまでもないのに！」

シェリーの声は暗い地下を何度も反響し、当麻の耳を多角的に揺るがしていく。

彼女の行動原理を理解し、目的も理解できた。

だが、当麻はつまらなそうに息を吐いた。

「くっだらねえ。そんな言い分で正当化出来ると思うな！風斬が何をした？インデックスがお前に何かやったのか！？争いたくないなんてご大層な演説してる割に、お前は一体誰を殺そうとしたんだよ！！」

当麻は、胸の内にあるものを吐き出すように、そして、納得できない事があるからこそ叫ぶ。それと同時に何故あの時、女の人と闘う事を良しとしない小次郎が一人で戦ったのが少し理解できた。

「怒るのは良い、哀しむのだって止めはしない。けどな、向ける矛先が間違ってたんだろうが！そもそも誰に向けるもんでもねえんだよ、その矛先は！もちろんそれは辛いに決まってる。俺なんか理解できるはずもねえってのも分かってる！それでもテメエがその矛先を誰かに向けちゃったら、それこそテメエが嫌う争いが起きちゃうだろうが！！」

当麻の魂の叫びが放たれる。

「……分かんねえよ」

ギリ、とシェリーは奥歯を噛み締める。

「ちくしょう、確かに憎いんだよ！エリスを殺した人間なんてみんな死んでしまえば良いと思ってるわよ！魔術師も科学者もみんな八つ当たりでぶっ殺したくなるわよ！だけどそれだけじゃねえんだよ！本当に魔術師と超能力者を争わせたくないとも思ってるんよ！頭の中なんて始めっからグチャグチャなんだよ！」

相反する矛盾した絶叫が、暗い構内に響き渡る。

彼女自身もそれに気付いているのだろう。さらに自身を引き裂くような声で、

「信念なんか一つじゃねえよ！ いろんな考えが納得できるから苦しんでいるのよ！ たった一つのルールで生きてんじゃねえよ！ ぜんまい仕掛けの人形みたいな生き方なんて出来ないわよ！ 笑いたければ笑い飛ばせ。どうせ信念の数なんか星の数程あるんだ！ 一つ二つ消えた所で胸も痛まないわよ！！」

対して、当麻は一言で、

「何で気付かねえんだよ、お前」

「……何ですって？」

「確かにお前の言葉は無茶苦茶だ。お前の主張はお前の中でも正反對だし、それはみんなの意見が分かるからだろうし、だからこそ自分の信念なんて簡単に揺らいでしまう……とか何とか思い込んでるみてえだけどさ、そんなの違うだろうが。結局テメエの中にある信念なんて、最初から最後まで一つきりしかねえんだよ」

彼は、彼女自身すら気付いていない、ただ一つの答えを言う。

「結局、お前は大切な友達を失いたくなかっただけなんじゃねえのか？」

そう、それこそが、シェリー・クロムウェルという女性の本質なのである。

「そこを踏まえて考えろ。もう一度でも何度でも考えろ！ テメエは泥の《目》を使って俺達を監視してたよな。テメエの目にはあれがどう映った？ 俺とインデックスは、互いの領域を決めて住み分けしなくちゃ争いを起こすような人間に見えたのか！」

当麻は叫ぶ。

「その星の数程ある信念の共通部分で考えろよ！ 俺やインデックスがお前に何かしたのか！？ テメエの目には俺が嫌々インデックスに

付き合わされているように見えたのかよ。そんなはずねえだろうが！住み分けなんかしなくても良いんだよ！そんな風にしなくたって俺達はずっと一緒にやっていけるんだ！！」

余計な事はこの際言わない。

当麻が告げるのは、ただ一つだ。

「お前の手なんか借りたくない！だから、俺から大切な人を奪わないでくれ！」

シェリーの肩がビクリと震えた。

当麻の言葉は単純だ。だが、それはシェリーに届かないはずがない言葉だ。何故なら、その言葉はかつて彼女自身が放った事があったはずの叫びなのだから。

「I-I n t i m u s 115（我が身の全ては亡き友の為に）！

」

しかし、彼女は拒絶するように魔法名を絶叫した。

彼女は当麻の気持ちが届く程に良く分かっているのだろう。

その一方で、”その気持ちが理解できない”部分も確かにあるのだ。ビュバン！！と彼女の手の中にあるオイルパステルが閃く。

彼女の横の壁に紋様が走った瞬間、それは紙粘土のように崩れ落ちた。巻き上げられる大量の粉塵があつという間に二人の視界を遮断する。

蠢く霧のような灰色のカーテンが迫り来るのを見て、当麻は思わず後ろへ下がろうとした。

と、その瞬間、目の前まで迫った粉塵を突き破るようにシェリーが飛びかかってきた。オイルパステルを手に、弾丸のような勢いで当麻の懐へと踏み込む。

それに当麻はギョツとさせられた。オイルパステル（あれ）に落書きされたモノは何でもエリスの材料にされてしまう。それは人肉さえも例外ではないだろう。

「死んでしまえ、超能力者!!」

鬼のような罵声を放つ彼女の顔は、どこか泣き出す寸前の子供のように見えた。

（ああ、そうか）

当麻は条件反射で右拳を握り締めながら、ふと、思った。

これはおそらく彼女の切り札ではない、と。

彼女は無数の考えが納得できるからこそ苦しんだ、と叫んでいた。だからこそ、

「自分を止めて欲しいって気持ちも、理解できる訳か」

ゴン!!と、当麻の右拳が柔らかいオイルパステルを粉々に砕き、そのまま軌道をわずかにずらしてシェリーの顔面を殴り飛ばした。

ガンゴン!!という凄まじい音を立てて彼女の体は構内の地面を跳ね回った。

そして、柱に寄りかかるようにして倒れているシェリーに、当麻はゆっくりと近付いていく。様子を見ると、どうやら彼女は気を失っているようだ。

（エリスの力は……これで止まったのか？）

当麻はいまいち確信が持てなかった。シェリーを起こして問い質しても良いのだが、彼女の答えがどうであれ当麻の中の不安が消える事はないだろう。

（“あの” 小次郎の事だから心配はいらねえだろうけど、なんでか知らねえけど不安が解消されねえ。……やっぱりここは自分の目で確かめた方が早そうだ!）

当麻は念の為に落ちていた廃棄コードを拾って、それでシェリーの手足を縛る事にした。

後ろ手に彼女の手首を拘束すると、当麻は再び構内の奥へと走っていった。

構内を走るにつれて、暗闇の奥から、少しずつ、重く低い震動が地

を這って来る。

エリスの居場所など聞くまでもなかった。

「……、」

シェリーはその一〇秒後に、うつすらと両目を開けた。

最初から意識など、あったのだ。

何故さっさと殺さなかったのだろう、と彼女は思う。殺されても文句は言えない、という気持ちも理解できたからこそその無謀な特攻を仕掛けたというのに……。

あの”化け物”^{（じけもの）}なら自分を殺しただろうか、いや、それは絶対しない、と彼女は思う。

何故なら、エリスと闘っている時の彼からは全くと言って良い程殺気を感じなかったし、彼が自分を殺す事は出来ない、という確信も何故かあったからだ。

そして、今は殊勝な事を考えているが、彼女の中では未だ、様々な感情がせめぎ合っていた。だが、今は……。

シェリーは後ろ手に縛られたまま、体を揺すって衣服の中からオイルパステルを取り出す。

（エ、リス、は……）

地面に転がったオイルパステルを後ろ手で取った所で、ふと彼女は気付く。エリスは今、彼女の命令を離れ、自動制御で動いている。それはどのような命令も受け付けない状態になってしまっているという事だ。今のエリスを止める為には安全装置であるシエムを破壊するか、エリスの肉体の文字通り九〇％以上を二秒以内に吹き飛ばす以外に方法はない。

シェリーは憎々しげに、手の中にある最後のオイルパステルを握り潰した。

今の彼女には何も出来ない。それは後ろ手に縛られて地面に転がされているという、この現状を打破できないことを意味していた。

（エリス）

シェリーは身動きを封じられたまま届かぬ命令をエリスへと送る。
果たしてそれは標的の殺害か、それともその中止なのか。
今の彼女には、その両方の気持ちが理解できる。

時間は少し遡る……。

当麻がシェリーと戦っている頃、小次郎は地下鉄の構内を疾風のような速さで駆け抜けていた。

（氷華……、俺が行くまで絶対に無茶すんじゃねえぞ）

構内を走りながら、小次郎は今、ここにはいない少女の事を案じていた。

その時、不意に自分の右手に違和感を感じた。

突然、右手から火花が発生したのだ。

「な、何だ!？」

小次郎は思わず足を止め、自分の右手を凝視する。

そこで漸く彼は気が付いたのだ。

自分の右手が異様に熱いのを……。

そして、

（ど、どういう事だ? どうして、俺の右手から”あいつ”と同じ……いやそのものの気配がしやがるんだ!？）

そう、小次郎の右手からは、いや、正確には自分の魂から右手を伝わって放出された凄まじい力を……自分にとって最高の”相棒”と同じどころかそのものの力を感じていた。

小次郎が驚くのも無理はない。それは、”あの地”で永遠の別れを

したはずだったモノだからだ。

暫くの間、と言ってもわずか数秒の間、呆然としていた小次郎だったが、やがて、

「はは……どうしてお前がそこにいんのかは訳が分かんねえけどよ……。いいぜ……。またお前の力、ほんのちよつとだけ貸してもらおうとすつか！」

どことなく嬉しそうに小次郎はそう言っていると再び疾風のような速さで走り出した。

第五話 憎しみの理由（後書き）

第1話からずっと続いていた自分の右手の熱に漸く気付いた小次郎。書いてる私が言うのも何ですが、いくら何でも鈍すぎ！

彼の右手には（というか彼自身には）何が宿っているのか……。

往年の車田ファンの方々はすぐ気付くかもしれませんね。

それでは、また次回！

第六話 蘇りし剛刀（前書き）

遂にこの話である”剛刀”が登場します。

今更ですが、お気に入り登録してくれた方々、どうもありがとうございます。

それでは、本編スタート！

第六話 蘇りし剛刀

かざり ひょうか
風斬氷華は弾丸のような速度で走る。

大切な友達を守る為に。

例え、彼女に”化け物”と呼ばれる事になっても……。

彼女はただ友達をその笑顔を守る為に走り続ける。

スライクス
三毛猫が逃げる。インデックスがその後を追う。

コンビニ裏手の日陰に駆け込んだ三毛猫は、そこで鬼のような形相で追跡してくる飼主を見て、慌てて逃走する。様々な場所を走り抜けたが、ついにどっかの廃墟らしき所へ飛び込もうとした所で、
「こらっ!!」

インデックスが三毛猫の首根っこを捕まえた。

ゼーゼーハーハーと荒い息を吐くお怒り修道女に動物的な本能が働いたのバタバタと暴れる三毛猫。

やがて暴れるのを止め、暑苦しいから勘弁してくれと言っているかのような鳴き声をあげる三毛猫を抱いて、インデックスは周囲を見回した。

そこは、まさに廃墟だった。

恐らく元は何らかの施設だったのだろう。

三毛猫が性懲りもなく廃墟の中へ飛び込もうと短い足をパタパタと振って暴れ始めたが、それに怒ったインデックスが頬を膨らませて、
「む! あんまり聞き分けない事言ってるよホントにお仕置きしちゃうかも!」

三毛猫の耳に息を吹きかけると、ネコは本格的に嫌そうな鳴き声をあげてブルルと震えた。

「ほら、短髪と待ち合わせしてる場所に戻るよ。お返事は？」
インデックスがそう言うのと、三毛猫は不承不承という感じで一度鳴く。

その時だった。

三毛猫が再び暴れ出し、インデックスの腕から逃れようともがき始めた。

パラパラ、とネコを落ち着かせようと色々試しているインデックスの頭上に何かが落ちてきた。

「？」

インデックスが頭の上に片手を置くと、コンクリートの粉がついていた。上を見上げると、廃ビルの壁から粉末が絶え間なく降ってきていた。

カタカタ、という音に反応して、下を見るとマンホールが震えていた。

「……、足元が、揺れてる？」

インデックスが首を傾げかけて、ふと気付く。ロンドン仕込みらしき魔術師は地下に潜んでいた、という事に。

彼女の踏んでいる地面が、一瞬蠢いた。

「！？」

インデックスが咄嗟に後方に飛んだ瞬間、彼女がついさっきまで立っていた場所が爆発した。

爆心地からは、石を固めて作ったような高さ約二メートル程の化け物の腕が伸びており、その拳がまるで首の長い恐竜が見下ろすように、彼女の前に立ち塞がった。

道路の破片が大量に飛んでくる。

石の”化け物”とインデックスの周囲を様々な破片が落ちて地面などにぶつかる音が響いている。

しかし、インデックスは後ろを振り返るといふ愚拳を行わずにただ前を見る。そこには墓場から這い出る亡者の如き動きで、ゆっくりと巨大な石像が姿を現していた。術者がいない所を見ると遠隔操作

が行われているのかもしれない。

インデックスの目が、音もなく細まり、自分の頭の中にある膨大な魔術の知識から”敵”の情報を事細かに分析していく。

（基礎理論はカバラ、主要用途は防衛・敵性の排除、抽出年代は一六世紀、ゲルシヨムⅡシヨレムいわく、その本質は無形と不定形）インデックスは更に分析を進めていく。

（応用性あり、オリジナルにイギリス清教術式を混合、言語系統はヘブライから英語へ変更、人体各部を十字架に照応、人の複製というより天使の組み立てに近い）

そう分析し終えてインデックスは危険な存在である”ゴーレム”を見据える。

ズン、という地を震わせる石像の足音。

「……ッ！」

インデックスは三毛猫を抱えたまま、一步後ろへ下がる。

正攻法で立ち向かってでも勝ち目はない（といっても小次郎はこれに圧勝したが……。まあ、これはあくまでも普通の人間の話）。弱点は分かっているが、恐らく体内にあるのだろう、外見からは全く見当たらない。

はつきり言えばインデックスは、ただ膨大な知識を持つだけの普通の少女だ。そんな少女に向かって、”ゴーレム”は容赦なく、その腕を振り上げる。

轟！と、空気どころか空間すら押し潰そうとする一撃を前に、インデックスは小さく息を呑み、

「左方へ歪曲せよ（T T T L）」

一言、告げた。

瞬間、”ゴーレム”が真っ直ぐ放ったはずの拳が、突然蛇のように逸れた。そんな行動をとる石像を尻目に、インデックスは一步だけ進み、ゴーレムの隣に立つ。

その直後、石像は振り向きざまに横殴りの拳を振るう。

「上方へ変更せよ（C F A）」

だが、その一撃はまたもやぐにやりと軌道を曲げて、彼女の頭上を通り過ぎる。続けて石像が更なる拳を放とうとした所で、

「左脚を後ろへ（P I O B T L L）」

バランスを無視して”ゴーレム”の足がいきなり後ろへ動き、その為、重心を失った彼（？）はそのまま勢いよく後ろに倒れてしまう。それを見届けたインデックスはトントン、と二歩、三歩と後方へと下がる。

この光景を見て（というか読んで）驚く人もいるかもしれない。

これこそ、魔術を使えない彼女が敵に対抗できる方法の一つ、強制スベルイン
タイセプト詠唱である。

彼女はこれを使う事によって、上手くいけば敵の魔術師を自爆させる事だって出来るのだ。

「右方へ変更（C R）。両足を交差（B B F）、首と腰を逆方向へ回転（T N A T W I T O D）！」

次々と繰り出される”ゴーレム”の拳に対し、インデックスは矢継ぎ早に叫ぶ。”ゴーレム”の拳は目隠しをされた酔っぱらいが闇雲に手を振り回すように、全く関係のない所へ飛んでいく。

（さばくだけじゃ……足りない！）

インデックスは修道服のスカート部分を留めている安全ピンをまとめて引き抜く。足が大きく露出してしまいが、現状では気にする余裕はない。

彼女は安全ピンを手に構え”ゴーレム”を睨みつける。

それは小次郎の木刀に比べあまりにも貧弱な武器だった。

（自己修復術式を逆算、その周囲をおよそ三秒ごと。逆手に取るなら……今！！）

彼女は迷わず安全ピンを”ゴーレム”の足元に向かって投げ放った。それが一度だけ”ゴーレム”の足に当たって跳ねると、磁石に吸い寄せられるように石像の体内に吸収された。

瞬間。

ガチン、と関節に楔を打ち込まれたように、“ゴーレム”の右足首の動きを阻害する。

いけるかも、とインデックスは少しずつ後退しながら考えた。彼女の強制詠唱が通用しない一部例外はあるものの、この“ゴーレム”には特にそういった問題は見当たらない。自分の出来る攻撃手段が全て通用するのだ。

このまま上手くいけば、術式の構成を破綻させて“ゴーレム”を崩す事が出来るかもしれないーとインデックスが計算を働かせた時だった。

ドン！！と、“ゴーレム”がその場で地面を踏みつけた。

「きゃあ……！？」

その大きな震動に、インデックスは足を引っかけられたように転んでしまう。彼女は舌打ちした。どんなに相手の攻撃に割り込みをかけようが、地面全体を揺さぶられては小次郎のような異世界の忍びではないのだから、避けようがないのだ。

地に伏せるインデックスの正面に、“ゴーレム”は右足を引きずりながらユラリと歩み寄る。

「っ！右方へー」

彼女は叫ぼうとしたが、それより先に“ゴーレム”は己の二つの拳を強く打ちつけた。

ゴドン！！という衝撃波がインデックスの耳を叩く。これにより組み立てかけた声は、強制的に打ち切られてしまう。そのあまりの轟音に彼女の腕の中にある三毛猫が悲鳴をあげた。

”ゴーレム”は改めて、天上へと拳を振り上げる。

インデックスは三毛猫を抱えたまま地面を少しでも距離を取る為、転がり移動しながら、

「両足を平行に配置し重心を崩せ（MBFPADCOG）！」

彼女は叫んだが、”ゴーレム”が一度頭を揺さぶると、パチン、とスイッチが切り替わったかのようにインデックスの命令を拒絶するようになった。

（ま、ずい……かも！遠隔操作から自動制御に変更されー！）

インデックスの強制詠唱は術者がいなければ効果を発揮する事が出来なくなる。彼女の言葉は”無機物を騙す事は出来ない”のだ。

”ゴーレム”の拳が空を薙ぎ払う。

インデックスの手ではもうその攻撃を止める事が出来ない。絶体絶命の危機が彼女を襲う。

そして、”ゴーレム”の拳が無情にも振り下ろされた。

周囲に肉を潰す不気味な音が、廃墟だらけのビルの谷間に響き渡る。しかし、それはインデックスの体が潰れる音ではなかった。当然ながら三毛猫のモノでもないし、石などの無機物で出来た”ゴーレム”からのモノでもない。

風斬氷華。

インデックスの背後からその頭上を飛び越した少女が、”ゴーレム”の腹に跳び蹴りを喰らわせていた。それは並大抵の速度・威力ではなく、まるで隕石が直撃したかのような一撃だった（小次郎ならやろうと思えば出来そうだが……）。

ゴドン！！という轟音。

”ゴーレム”の体が勢いよく吹き飛ばされ、空中で縦に三回転もしてからうつ伏せに倒れた。吹き飛んだ距離、およそ七メートル。それとは対照的に、氷華の体はフワリと宙で制止していた。

そして、これまたフワリと羽のように氷華は地に舞い降りる。

しかし、その動作に反して、ドッ！！という重たい震動がした。

蹴りを放ったのは逆の足が地に着いた瞬間、巨大なハンマーを打ちつけたように彼女の足を中心に半径二メートル程の地面に亀裂が走った。

「ひょう、か……？」

インデックスはその後ろ姿に声をかけようとして、息を詰まらせる。跳び蹴りを放った氷華の右脚が、膝の上から木っ端微塵に吹き飛んでいたからだ。重量数トンを誇る巨体を薙ぎ倒す程の威力の先程の一撃だ。そんな攻撃を放てば超人揃いの世界の住人ではない人間の生身の身体では反動に耐えられないのも無理はない、と思っていた。だが、氷華の足の切断面の奥はただの空洞でしかなかったのだ。傷口もどうも不自然な感じた。

(……な、なんだろう。あれ)

三毛猫を胸に抱いたまま、インデックスは考える。

しかし、様々な魔術的知識を持つ彼女ですらも、目の前の光景を説明する事が出来なかった。

ズバン！！という大きなシートで空気を叩くような音が聞こえたと思ったら、氷華の壊れた足が一瞬で復元された。

「逃げて」

氷華は振り返らず、ただ背中中で告げる。

「あなたは、早く逃げて。……ここは、まだ……危ないから」

その声はインデックスの良く知る少女のモノだった為、彼女は声をかえる事を躊躇ってしまう。

その時、うつ伏せに倒れていた石像がギチリと軋んだ音を立てた。

”ゴーレム”はどうやら起き上がりとしているようだが、氷華の一撃が石でできた体に構造単位のダメージを与えたのかもしれない。ヒトでいう腰の辺りに何かが引っかけたように、ギチギチと不気味な音を立てて関節を震わせて……。

ボギン、と骨の折れるような音が響いた。

無理に体を動かした結果、作り物である肉体の内側が破壊された音である。

ギギギガガガガ！！と”ゴーレム”が悲鳴のようなモノをあげた。その音の正体、それは全身の関節が無理矢理動かされた事による不協和音なのである。”ゴーレム”は立ち上がる事が出来ない為、

四つん這いになりながら天に向かって吠えるように頭上を仰ぎ見た。その時、轟！！と風が渦を巻いた。小次郎の《烈風剣》の発動前の現象に酷似しているが全く異なるモノだ。

絶叫する”ゴーレム”を中心として、竜巻のような烈風が吹き荒ぶ。この廃ビル区画を丸ごと呑み込むほど巨大な風の塊だ。それは、まるで渦潮、またはブラックホールのような光景であった。

周りにある全ての無機物が、片っ端から”ゴーレム”の方に引き寄せられ、見えない力でグシャグシャと押し潰されてその体の一部となっていく。

（ま、ず……。さっきの一撃で、”ゴーレム”の再生機能が暴走しているのかも……。ッ！）

嵐のような突風で飛ばされそうになる三毛猫を必死に抱きながら、インデックスは戦慄した。先程の一撃で、おそらく”ゴーレム”に致命的なダメージを与える事が出来たのだろう。しかし、それが災いし、”ゴーレム”は暴走してしまい、手当たり次第に何でも集めて自分の体を再構成しようと命令を送り続ける事になってしまったのだ。

その結果、”ゴーレム”の元々四メートル近くあった体が、ものの三〇秒しない内に縦横共に二倍近くまで増大してしまったのだ。四つん這いの体勢で、既にインデックス達を覆い被さる屋根のように見えてしまう。

周囲のビルがギシギシと音を立て始める。

その暴風に揺れる木々のように不気味な音を立てる巨大建造物に、インデックスの顔は真っ青になった。彼女の頭の中では最悪の展開が予想されていた。

その為、逃げなければ、と彼女は思った。

悔しい事だが、今の自分に出来る事はもう何もないのだから。

そして、あの”ゴーレム”を押さえつけられるのは、この事態を収拾できるのは彼女の知る限り当麻以外いないのだから。

「ひょうか、早く逃げよう！」

インデックスはやや躊躇いがちに叫ぶ。

その時、廃ビルの外壁が薄く剥離した。

竜巻に巻き込まれ、巨大な石塊が空を舞う。それを見たインデックスは、慌てて三毛猫を抱えながら地面に屈み込む。彼女の頭上を通り過ぎた石塊がアスファルトに直撃し、ばら撒かれた地面の破片もやはり風に乗って”ゴーレム”に吸収される。

このような有様では迂闊に動く事など出来やしない。

そのような絶望が支配する状況の中、氷華は何もせずただ立っていた。

氷華は振り返る事なく、ただ静かに語った。

「あなたは……早く逃げて」

「あなたはって、ひょうかはどうするの!？」

突風で飛ばされそうになる三毛猫を押さえながら、インデックスは問い質す。

「私は……」

少女は、少し考えた後に、

「あの化け物を……止めないと」

そう告げた。

氷華が答えた瞬間、その声に応じるかのように、四つん這いだった”ゴーレム”がその巨大な右腕を振り上げた。動きは非情にゆっくりだったが、その様子はまるで溜めた力を一気に放出する直前にも見える。

一度その拳が放たれば、”普通”の人間など肉塊になってしまうだろう。

「無理だよ。ひょうか、逃げなきゃダメだよ!」あれ”は人間が真っ向から相手にしちゃいけない敵だし、倒すにしても策を練って裏に回らないとダメなんだから! ひょうかが無理して戦わなきゃいけない理由なんてどこにもないんだよ」

インデックスの言葉に、氷華は振り返らない。

そして、”ゴーレム”は照準を付けているかのようにピタリと止ま

る。

「ひょうか、”あれ”は人間じゃないんだから！あんな化け物なんかと戦うなんて思っちゃダメだよ！そんな事したら、ひょうかは絶対に助からないよ！」

インデックスの叫びに氷華はゆっくりとだが、漸く振り返った。

「……大丈夫」

氷華は泣き出しそうな表情で笑いながら、言う。

「”私も、人間じゃないから”」

インデックスは、思わず息を呑む。

そんな彼女を見て、氷華はボロボロの笑みを浮かべながら、最後に告げた。

「ごめんね。今までずっと騙してて」

彼女の背後で、”ゴーレム”の拳が凄まじい勢い隕石の墜落に近い一撃で発射される。

「ひょうかー！ーッ！！」

インデックスが身を縮めながら氷華の名を叫ぶ。

氷華はもう何も答えぬまま、体ごと”ゴーレム”の方に向き直る。

そして、彼女は自信の華奢な両手を左右に広げ、友達インデックスを守る為の盾のように立ちはだかる。

氷華の眼前に”ゴーレム”の拳が迫った、その時だった。

どこことなく安心できる心地よい”風”が吹いた。

気が付くと、バキイイイイン！！という甲高い、木が折れるような音が聞こえたと思った次の瞬間、氷華とインデックスは何者かに抱えられ、一陣の風のようにその場から、かなり離れた場所（と言うか、廃ビルの物陰）に移動していた。

「ふうっ！……どうにか間に合ったみてえだな」

「「こ、小次郎さん／＼こじろう！？」」

氷華とインデックスは驚いた。何故なら”あの絶望的な状況”から二人をここまで（距離にして五〇メートル程）避難させたのだからあの瞬間、何があったのかを説明すると、小次郎が、自らインデックスの盾となった氷華の前に行立ち、木刀で防御。もちろん、彼自身、耐え切れるなど微塵も思わなかった為、すぐさま折れて粉々になった木刀を手放し、氷華とインデックスを抱えると同時に大地を蹴って、そこから離脱したのだ。

「俺が来たからにはもう安心だ。それにな、当麻も直にここに来るぜ！」

そう、”あの時”と同じ頼りがいのある笑顔でインデックス達に言う小次郎。

しかし、氷華の心は晴れやかではなかった。

「何で……」

「ん？」

「何で、ですか！」

氷華は叫んでいた。それは物凄く辛そうに。

「何で助けに来たんですか？わたっ、私は、人間じゃ……ないんですよ。例え”化け物”のような強さを持つ人間であるあなたとは違って、私は本物の化け物なんですよ……。それなのに、どうして……」

泣きそうな顔をしながら言う氷華に対し、小次郎は呆れたような顔をして、

「当麻にも言った事なんだがな……確かにお前は俺達とは体の造りが違うけどよ……ただ、”それだけ”だろうが。それにな……」

そして、ニカッ、という笑顔で言葉を続ける。

「お前がどんなヤツだろうが、俺達がお前の友達だっつーのに変わ

りはねえだろ」

その言葉に、今度こそ氷華は涙をこぼす。

そして、小次郎の言葉にインデックスが応じるように氷華に優しく眩しいくらいの笑顔で話しかける。

「ひょうか……、ひょうかがどんな存在でも、ひょうか自身が自分の事どう思っても私達は友達だよ……」

その言葉に氷華は泣き笑い（たぶん嬉し泣き）の顔になってインデックスを優しく抱き締める。

インデックスも嬉しそうな顔をして抱き締め返す。

その様子を見ていた小次郎はまるで自分の妹分を見るような表情で微笑む。

そして、

「んじゃ、俺は”アレ”を片付けてくるかな……」

と、また、ちよっくら散歩行つてくらあ、的な感じで言つて”ゴーレム”の方に向かおうとすると、

「な、何を言ってるんですか！？武器もないのに、どうやってあの”化け物”を倒すというんですか！？今度こそ死んじやいますよ！！」

「そうだよ！今度こそというのが分かんないけど、ひょうかの言う通りだよ！せめてとうまが来るまでここに隠れていようよ！！」抱き締め合っていた二人が勢いよく小次郎にそう叫んだ。

それに対し、小次郎はというと、

「悪いが、そういう訳にもいかねえんだ。何せ俺は”忍び”であると同時に”戦士”なんだからよ……。退く訳にゃいかねえんだ」

「そんな……」

「戦士って……、小次郎が何であんな動きが出来るのかは分からないけど、忍びには戦う力は最低限で、そんな敵と真正面から戦う能力は殆どないんだよ、こじろう。忍びはね、諜報活動を主な仕事としている、現代で云うスパイみたいなモノなんだよ。だからね、尚

更あんな”モノ”と戦う力は……」

小次郎の全く退かない態度に、氷華は何も言えなくなり、インデックスは小次郎に”この世界”での”忍び”の真実を伝える。
しかし、

「フッ……」

と静かに笑うと、

「それは”この世界”での常識、いや真実だろうインデックス。確かに、その”くだり”は共通しているけどよ、俺の”元いた世界”の”忍び”ってのはな、闘う為に生まれ闘いの中で死んでいく。そこには流派なんて関係ねえ。総てを捨て、闘う事でその生涯を費やしていく、戦士の一族ってヤツなのさ……」

「「え……？」」

その小次郎の言葉に、インデックスは自分の知識にはない情報と小次郎の”元いた世界”というフレーズを聞いて、思わず呆けた声を氷華と一緒に出す。

そんな彼女達に小次郎は決意を込めた声で自分の言葉を続ける。

「だからよ……これから戦士の務めってヤツを果たしてくるぜ！」
そう目だけをこちらに向けて言うと、今度こそ小次郎は”ゴーレム”の方へ向かっていく。ゆっくりと歩きながら。

「！こじろう！」

「だ、ダメです！行っちゃー！！」

呆然としていたインデックス達が正気に戻って小次郎を呼び止める。
小次郎はほんの少しだけ顔を向けると、

「心配すんな！すぐに戻ってくる！」

とだけ言ってから再び”ゴーレム”の方へ向かって行った。
その背中に”戦士”の決意を背負いながら……。

暴走し、獣のような唸り声をあげる”ゴーレム”の前で仁王立ちをする小次郎。その目には闘志が漲みなぎっていた。

「ようデケェの、お前に冥土の土産として、良いモノを見せてやるよ……」

そう言いながら、静かに”青眼”に構える。

その手には木刀はおろか、当然の事ながら、剣らしきモノも、棒も、何も持っていない。

インデックス達は何故、小次郎がそんな事をするのか理解できなかった。だが、次の瞬間、二人は驚愕する。

インデックスは彼から感じる、とてつもないその「天使の力」テレスマより洗練された強大な”力”に。

氷華はその未知の強大な”力”に。

「よく見ておけよ……コイツが……」

小次郎の両手の中に稲妻が迸り始める。

それに危機を感じたのか分からないが”ゴーレム”が拳を小次郎に叩き込む。

「こじろう危ない！」

「避けてください!!!」

インデックスと氷華が叫ぶ。

しかし、彼は目前の危機など気にも留めず、

「この俺の、最高の……”相棒”だ!!」

小次郎の叫びと共に、彼の両手から凄まじい閃光と衝撃波が四方八方に発生した。

「わっ！」

「きゃあっ！」

衝撃波により”ゴーレム”の放たれた拳が弾き返される。

そして、大量の土埃が舞う。

衝撃波により巻き上げられた土埃が晴れた時、インデックスと氷華はそこで見た光景に、揃って驚きの声をあげる。

「「えっ!?!」」

二人が見たのは、一振りの剣を持つ小次郎の姿だった。

しかし、彼女達が驚いたのは”そこ”ではない。

小次郎の右手にはダラリと先程には持っていなかったはずの無骨な、木刀のようにも、改造された舟の櫂のようにも見える”剣”が握られていたのだ。

しかし、そもそも”それ”が本当に木で出来ているのかも怪しい。

インデックスは、その”剣”から修道女としての特性から”神”に等しき”神秘”を感じ、氷華はとてつもない大いなる”何か”を感じていた。

それ程の”力”をあの”剣”が放っていたのだ。

（あ、あんな礼装……見た事も聞いた事もないかも。……ううん。

あの剣はもう礼装なんて代物じゃない。あれは、まるで……）

インデックスは呆然とする氷華の隣で、自分の頭の中にある一〇万三〇〇〇冊の魔導書総ての知識を総動員して分析したが、皆目、見当も付かなかった。

だが、彼女は一つの仮説を立てた。

”あれ”は”真の”神の武器、なのではないか、と。

そんなインデックス達の心境などお構いなしに、小次郎はその剣を肩に担ぐと、

「いくぜ、デケェの！」

叫ぶと同時に駆け出した。

それを見た”ゴーレム”はすかさず己の巨大な拳を隕石の如き勢いで突き出してきた。

それは常人ならかわす事すら出来ないモノだったろう。だが、当然の事だが、いかに巨大になり、さらに強力になった”ゴーレム”とはいえ、小次郎を、ましてや、この”剣”を手にした小次郎を捉える事など出来るはずがなかった。

”疾き事風の如く！”

通常の小次郎の速度をも圧倒的に上回る神速の斬撃で”ゴーレム”の放たれたはずの拳と共に片腕が切断される。

巨人の腕は上空をキリキリと舞い上がり、やがて轟音を立てて地面に落下した。

”ゴーレム”は何が起きたのかを理解する事が出来ないようだ。

「フツ……どうしたデケェの。俺はここだぜ？」

混乱する”ゴーレム”に対し、挑発行為を行う小次郎。

その声に反応したのか分からないが、”ゴーレム”は瞬時に腕を再生し、声のした方を向く。しかし、

”徐^{しず}かなる事林の如し！”

そこには小次郎の姿が霞んで、いや周囲の景色に溶け込んでしまつて見えなくなっていた。

読者の中には奇妙に思う方もいるであろう。

彼の姿は”剣”の後ろにあるのではないのか？と。

ところが、いつまでもそういった弱点を放っておく小次郎ではなく、彼は自分の体で”剣”を隠し、完全に周囲に溶け込んで見せたのだ。この状況に困惑し、辺りを探す”ゴーレム”。だが、小次郎の姿はどこにも見当たらない。

小次郎のいる所とは真逆の方向を”ゴーレム”が向いた時、小次郎はその隙を見逃さず打って出た。

”侵^{しんりやく}掠する事火の如く！”

燃え盛る炎が無機質で出来ているはずの”ゴーレム”の体を焼いた。炎に包まれた巨大な石像はそのままうつ伏せに轟音を立てながら倒れる。

一方の小次郎は何事もなかったかのように、”剣”を片手に自然体

で立っている。

この光景を目にしていたインデックスと氷華は咄然としていた。インデックスは小次郎が、あの”剣”の力を完全に使いこなし、かつ、何となく感じていたとはいえ、一流の戦士の動きを見せている事に、氷華は地下街で見たあの強さをさらに上回って見せた事に驚愕を隠せなかった。

どこことなく恨みがましく獣の如き叫びを上げながら、ゆっくりとだが、立ち上がった”ゴーレム”は小次郎に向けて巨大な両腕でハンマーのように渾身の力で叩きつける構えを取った。

それを見ても小次郎は避けようという素振りも防御しようする素振りも見せず、ただ余裕の表情を浮かべながら眺めている。そんな小次郎の姿を見た二人の少女は揃って声を上げる。

「こじろう！ どうして何もしようとしないの！？」

「そうです！ そのままだったら潰されてしまいます！！」

その声が届かないのか、小次郎はそこから動かない。

そして、無情にもその”ゴーレム”のハンマー攻撃が小次郎に向けて勢いよく放たれた。

インデックスと氷華は今度こそ終わったと思ってしまふ。だが、

”動かざる事山の如し！”

ガコォッ！という音と共に粉碎されたのは巨人の両拳の方であった。

「ええっ！？」

「そ、そんな……」

少女達の驚愕の聲が上がる。

それもそのはず、小次郎自身、何かをしたという訳ではない。ただ

右手に持つ”剣”を掲げただけである。

それだけで”ゴーレム”の両拳は無惨に破壊されてしまったのだ。その現状に、心なしか絶望の色をのぞかせる”ゴーレム”に小次郎は静かに言う。

「これで終わりだ、デケエの。そして覚えておけ、こいつが俺の最高の”相棒”……」

小次郎はその”剣”を振り上げ、

「剛刀・風林火山だー！ーッ！！」

気合いと共に一閃した。

小次郎が放った剣圧で大地が割れ、細長いクレーターが出来上がった。

クレーターの大きさは丁度今の巨人ぐらいの広さだった。

そして振り下ろした態勢のまま、

「……へへっ！ちいゝつとやりすぎちゃったかな？」

と小次郎が呟いた数秒後”ゴーレム”は真つ二つになった後ガラガラと崩壊していった。派手に粉塵を舞い上げながら……。

”ゴーレム”をまさに圧倒的な強さで倒した小次郎がインデックス達の元に戻ってきた。

聖剣「剛刀・風林火山」は現在、小次郎の手元にはない。光の粒子となって消えてしまったのである。

インデックス達が今の闘いで疑問に思った事を小次郎に聞こうとした時、

「おい、インデックス！風斬！小次郎！無事か！……!?」
当麻が小次郎達のいる所に向かって走ってきた。

「「とうま！／上条さん！」」

インデックスと氷華が反応し、当麻の方へ顔を向ける。小次郎も穏やかな笑みを浮かべながらそちらを見る。

「良かった！無事みたいだな！……って、うおっ!?何だ、これ！

？まさか、あの”化け物”の成れの果てってやつか！？」

当麻が二人の少女の安否を確認しホッとした顔になった後、後ろで完全に崩壊してしまった”ゴーレム”の姿を見て驚きの声を上げる。その反応を見た二人の少女は今さっき見た事実を当麻に伝えた。

「そうか……風斬が”こいつ”を倒したんじゃないかって、小次郎が全部やっちゃったのか。でも、どうやったんだ？」これ”、どう見ても、”あの時”の二倍以上はデカイぞ！？さらに手強くなってたんじゃないねえのか？こんなヤツを本当にどうやって倒したんだよ？」

その当麻の言葉に、インデックス達は思い出したかのように、

「そうだよ。一体、あの”剣”と”力”は何なのかなこじろう。あんなモノ私は見た事も聞いた事もないんだよ！どう考えても魔術じゃないし、それに”元の世界”って何なの！？教えて欲しいかも！」

「そ、そうです。……あの”力”は一体何なんですか？」
抱いていた疑問をインデックスと氷華は一気に小次郎にぶつけてきた。

それに対し、小次郎は、

「別に教えても構わねえが……今は無理っぽいな」
と微笑みながら答え、どうして？という疑問の表情を浮かべる面々にさらに続ける。

「悪いな……。当麻、後は頼ま^{わり}あ……」

まるで、もう限界だ、とでも言う感じで言いながら、彼は突然仰向けに倒れた。

それを見た三人は一斉に叫ぶ。

「」「小次郎／こじろう／小次郎さんッ！？」」

その声には彼の身を純粹に案じる色があった。

「ほら見てくださいよ。今回俺って入院とかしてないじゃないですか。うわすげーな俺、これって一つの成長進化ですよ？ そうですね？」

当麻が病院の診察室でカエル顔の医者に向かってはしゃいだ声をあげると、両サイドから小萌先生と秋沙が同時に彼の頭を引っ叩いた。「上条ちゃん！ あなたという人は本当に本当に本当に人様に迷惑をかけたのはノー眼中なのですか！？ しかもお友達も一緒に《警備員》さんのお世話になるだなんて……ぶつぶつ。もう！ 後できっちりお話聞かせてお説教ですからねーっ！」

「だから《風斬氷華》には警戒せよと。あれほど注意しておいたのに。あの”人”もそうみたいだけど、女と知ると見境がなくなるその人格は。一度徹底的に矯正した方が良いのかもしれない」

「……、あの。なんか後ろの二人が怖いのでやっぱり入院とか駄目ですか？ もう絶対安静面会謝絶とかで、とにかくこの凸凹コンビの温度が下がるまでのシェルターが欲しいのですが」

カエル顔の医者に当麻が要望を出すと、彼女達は高速で彼の頭を叩き始める。

今はもう日も暮れて、診察時間はとうの昔に終わっていた。

あの後、文字通り倒れるように眠ってしまった小次郎（元氣そうにいびきをかいて眠る小次郎の様子を見た三人は若干呆れながらも安心したかのように溜め息をついた）と見た目はピンピンしている当麻は、銃撃戦に巻き込まれたり地下の崩落に襲われていた為、精密検査を念の為受けるべく、カエル顔の医者のいる病院に来ていた。ちなみにインデックスと氷華は待合室で仲良く、古くからの親友のように会話して、騒ぎを聞きつけ現場にやってきた美琴は周囲に促され寮へ帰り、黒子は事件の後始末に追われて今日は徹夜のような。これで、この件はもう一件落着だな、と思っていた当麻だったが、一つ気がかりな事があった。

それは、言うまでもなく小次郎の事である。

「あ、そうだ。小萌先生、姫神、ちょっとこの先生と個人的なお話があるんで席を外してくれると嬉しいんだけど……」

「？むう、仕方ないですね。でも後でキチンとお説教ですからね、上条ちゃん。あ、先生。上条ちゃんのお話が終わった後で良いので、私からもいくつかの質問をしてもよろしいですか？」

「ん？ああ、僕は構わないよ」

それではまた後でお願いするですよ、と言って診察室の外に出る小萌先生と秋沙。

それを見送った後、

「それで、僕に話というのは何だい？」

カエル顔の医者が当麻に尋ねる。

「は、はい。その小次郎の事なんですけど……」

そう小次郎の正体も気にはなっていたが、何より彼の体の具合が心配だった。

「ふむ。彼のあれは単なる過労だね。それ以外は健康そのものだから、安心していいよ」

カエル顔の医者と言葉に安堵する当麻。しかし、

「しかしね……」

そう続いた言葉に当麻は首を傾げる。

カエル顔の医者は念の為に周りに誰もいないか、聞いていないかを確かめてから、

「彼はこの街の人間ではないんだ。というよりも街に入った形跡が一つもないんだよ」

その言葉に当麻は驚愕し硬直する。その状況はどことなく氷華に似ていたからだ。

だが、彼は氷華とは違い、右手で触れても消える事がない為、完全な人間である。これは一体どういう事なのか、と考えていると、

「そうだね。それについては彼に直接訊くのが一番良いと思うよ。おいで」

カエル顔の医者は当麻を先導して、とある病室の前に来る（診察室

を出た所で氷華とまた会う約束をしたインデックスと合流しているので彼女も一緒だ）。

「失礼するよ、小次郎君」

カエル顔の医者は病室のドアをノックしてから、ドアを開け、中に入る。

当麻とインデックスもその後に続けて中に入ると、そこには、退屈そうに手枕をして寝転がっている小次郎の姿があった。

当麻はその姿がまるでふて寝をしているみたいでつい笑みがこぼれてしまう。

「ん？ おお、当麻じゃねえか！」

こちらの気配に気が付くと、小次郎はすぐに上半身を起こした。

「体は大丈夫だって聞いてたけど、本当に大丈夫そうだな」

「へへ、まあな」

「でも良かったよ。氷華も私も心配してたんだから」

当麻とインデックスに囲まれながら、小次郎は元氣そうに答える。

「それじゃあ、僕はこの辺で失礼させてもらうよ」

カエル顔の医者は氣を利かせて退室する。

三人だけになった所で、途端に空気が重くなり何から訊けばいいのか当麻とインデックスが迷っていると、

「さて、あの一件が片付いた後に言う約束だったかな、俺の事を教えてやるよ。まずは何から訊きたいんだ？」

小次郎が軽く言ってくれたので、当麻とインデックスはそれぞれ抱いた疑問を小次郎にぶつける事にした。

「まず、俺から質問させてもらうよ。……小次郎、お前一体何者なんだ？」

当麻の質問に小次郎は穏やかな笑みを浮かべながら、どこか懐かしむように語り始めた。

「俺は、”風”さ……」

「「”風”？」」

当麻とインデックスは揃って首を傾げる。

それに小次郎は淡々と続ける。

「ああ。動けば電光石火。留まれば樹木の如し……。されど人知れず風のようにさすらい、風のように生きてきた、”風”の民の末裔にして、最強の忍びの一族、”風魔一族”の戦士。俺はその一人なんだ」

当麻は彼が”風魔”という一族の忍びであり戦士である事が分かり、学園都市の能力者でさえ遥かに凌駕するであろう身体能力とその驚異的な戦闘力の意味を理解し、納得できた。

だが、インデックスだけはそれに疑問符を浮かべた。

何故なら彼女の頭の中には数々の魔術の知識、及びそういった歴史の裏の事情などがほぼ総て詰まっているのだ。だからこそ、彼女は小次郎の言っている事におかしな点を、正確にはこの世界におけるおかしな点を見つけ出す事が出来るのである。

「でも、おかしいんだよ。とうま。風魔は確かに現代では忍びの一種だと考えられているけど、本当はそのような忍びの流派は”この世界”には存在しないんだよ」

「え？ どういう事だ？」

当然の如く当麻は首を傾げる。小次郎は既に”この世界”の事を午前中に調べていたので特に何も言わず、インデックスの言葉の続きを静かに待っていた。

「あのね、忍びの詳しい話は省くけど、風魔というのは盗賊―山賊団の名称だって、文献などで記されているの。つまり、風魔というのは忍びではないんだよ、”この世界”ではね」

インデックスは小次郎が”ゴーレム”と闘う前に言っていた事を思い出しながら当麻に”この世界”での”忍び”の講義を簡単にする。「ちょ、ちょっと待てよ。じゃあ小次郎が嘘を吐いてるってのかよ

！」

「小次郎は嘘は言ってないよ、とうま。目を見れば分かるもん。それに私が言ったのは”この世界”での話だよ」

「え？」この世界”って、まさか……」

困惑する当麻にインデックスは優しく諭し、それを聞いた当麻はある事実気付く。インデックスは”この世界”と言った。それが意味する所は……。

「もしかして、小次郎は異世界から来たってことなのか!？」

「うん。確証は持てないけど、こじろうの強さとうまから聞いた話をまとめて考えればそう思えるんだよ。魔術師でも”のうりよくしゃ”でもないのに”風”を操り、《聖人》に匹敵する程の戦闘力を持つ人間がいたら、裏の世界に身を置く者ならすぐに分かるもん。……こじろう私の推測間違ってる?」

「いや、間違っちゃいないさ……。まあ、正確には並行世界から来たっつーのが正しいがな」

当麻は驚いていたが、しかし、異世界人というだけで、小次郎の事を嫌いになるか、と訊かれたら答えはノーだ。氷華を受け入れたのだから、当然だろう。もう小次郎は当麻にとって友達なのだ。

「それじゃあ、私からも質問。こじろうが異世界から来たのが分かったから”礼装”じゃないって確信を持てたけど、あの”剣”とあれから感じられた”力”は何なの?もの凄い神秘を感じただけど。そして、あの”剣”はどこにいったの?」

今度はインデックスが質問する番である。

「信じられねえ話だとは思うが、コイツあ、俺が”ここ”に来ちゃった要因だからな。長くなっちゃうといけねえから掻い摘んで話すけどいいか?」

小次郎は苦笑して、ゆっくりと語り出した。

自分の”元の世界”の神が地上の守りとして創り上げた《神の十聖剣》の事を……。

そして、その”聖剣”を巡り繰り広げられた、とある戦争を、そし

て、その歴史を……。

「……………」

総てを語り終えた時、当麻もインデックスも驚き何も言えなかった。無理もないだろう。

いかに不思議な出来事や力に縁が深い二人にとっても、それはあまりにも悲惨といえるような運命だったからだ。

当麻は、ただでさえ戦士として生まれて、闘いの人生を歩まなければいけないというのに、四〇〇〇年の永きに渡り、輪廻を繰り返し闘う事を宿命付けられた神に選ばれし戦士の一人だったという一介の高校生である自分など足元にも及ばない、小次郎の背負った重い運命に驚き、インデックスはそんな運命を小次郎に宿命付けさせ続けた神に複雑な感情を持っていた。

「やっぱり信じられねえよな」

「「そんな事はないさ（よ）」」

小次郎の問いに実に清々しく即答する当麻とインデックス。付き合いこそ本当に短いが、今、こうして語っている小次郎が嘘をつかない事はよく分かっているのだ。

「お前がこの局面で嘘をつかねえってのは、友達なんだから、もう分かっているしな」

「私は”アレ”を実際に見ちゃったから、たぶんそうなんじゃないかなと思ってたし、それに友達の言う事を信じるのは当たり前だよ」その答えに小次郎は穏やかな笑顔になる。

そして、話を続ける。

「それと、”アレ”がどこに行っちゃったのかって話だったな、”アレ”は別に消えた訳じゃなくてだな。俺の魂の中に還ったってだけなんだ」

「え？ どういう事？」

「？」

インデックスは驚きながら先を促し、当麻はその現場にいなかった為、疑問符を浮かべている。

「どういう理由でかは分かんねえが、どうやら俺の”相棒”は俺と、正確に言やあ、俺の魂と融合しちゃったみてえでな。いわば文字通り一心同体になっちゃったって事だ」

「それって……」

小次郎の言葉にインデックスは一つの結論に辿り着く。

「こじろうが望めば、あの”剣”はいつでも現れるという事なんだね……」

インデックスのその声はやや不安げだった。

インデックスの不安は当然だろう。

”聖剣”は手にした者に神に等しき力を与える、と小次郎から聞いて、そしてそれを実際に見て、彼女はその強大な力と恐ろしさを理解しているのだから。

「……まあ、そうなるな。でも、いつでもポンポン出せるような代物じゃねえ。どうやら”アレ”を出すと体力をゴツソリ削られちゃうみてえだしな。それになインデックス、元々俺は余程の事態じゃなけりゃ”相棒”^{アイツ}を使うつもりはねえから安心しな」

小次郎が先程実際に経験した事を冷静に分析して分かった事とインデックスを安心させる為に自分の意志を告げる。

それを聞いたインデックスはホッとした顔で小次郎に言う。

「だから、あの時倒れちゃったんだね。それに、それなら安心だよ。あれほどの”力”はそのまま、そこにあるだけでも危険だからね。それを使わないのが一番良い事だと私も思う。それに……」

小次郎とインデックスは目を合わせ同時に言う。

「「大き過ぎる力は、己をも滅ぼすしね（な）！」」

そう言い合うと二人はにこやかに笑う。

そんな風に笑い合う新たな友達とインデックスの様子を当麻は穏や

かなそして、和やかな気持ちで見つめていた。

「これで満足か？」

ドアも窓も廊下も階段もエレベーターも通気孔すら存在しないビルの一室で、土御門元春は空中に浮かぶ映像から目を離して吐き捨てるように呟いた。

巨大なガラスの円筒の中で逆さに浮かぶアレイスターは、うつすらと笑っている。

返事がないという、嫌な静寂に、かえって元春はせっつかれるように言葉を絞り出す。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握する為の鍵の完成に近付いた、という訳だ。正直、オレにはお前が化け物に見えるぞ」

虚数学区・五行機関。

「まさかその正体がA I M拡散力場”そのもの”だなんて誰も思わぬだろう。学園都市に住む二三〇万人もの学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作っているなどと」

五行機関は有害か無害か、それすらも分かっていない。

だから、どこまで踏み込んで良いのか判別が出来ず、何が起ころのかも分からない。従って、学園都市は不用意に五行機関を叩く事も出来ないのだ。

その為、それを滅ぼさずに制御する方法が考えられ、その鍵こそが――。

「風斬氷華、という訳か。まったく、あくまで虚数学区の一部とはいえ、あんなモノへ人為的に自我を植え付けて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない」

幻想殺し（イマジンプレイカー）、という右手を持つ少年がいる。

その存在は、虚数学区にとって唯一の脅威とも言える。

そして、その脅威が虚数学区の生存本能に働きかけ、自我を生み出した。

と、それまで黙っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御する為の方策だ。《何をするか分からない》無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測出来るし、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える」

「生み出される心がお前の予測範囲内の善人ならば問題ないがな。それがとんでもない悪人になったらどうするつもりだったんだ」

「善人よりも悪人の方が御しやすい。両者の間にある違いなど、取り引きに使うカードの種類が異なる程度のモノだろう」

クソツタレが、と元春は口の中で毒づいた。そもそもアレイスターの人間に関する取り扱いは普通の人間のそれとは大きく違う。

「そこまでして、虚数学区を掌握する事に意味があるのか」やがて、元春は問い質した。

「確かに虚数学区は学園都市の脅威だ。だが、脅威とは内側だけにあるモノではないぞ。今回、お前が黙認した一件によって、世界は緩やかに狂い始めた。理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを撃退したのだ。聖^{セント}ジョージ大聖堂の面々はこれを黙って見過ごすとは思えない。まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達に勝てるなどとは思っていないだろうな」

その元春の脅迫じみた声に、アレイスターは笑みを崩さず、

「魔術師共など、あれさえ掌握出来れば取るに足らん相手だよ」

「あれ、だと？」

アレイスターの言葉に、元春は眉をひそめる。

暫く考えていた元春だが、ふと彼は背筋に嫌な感覚が走り抜けるのを感じた。

（待て、よ……）

さらに深く考え込み、ある事を連想する。

（まさか、”天使”）

虚数学区の意味を推測した彼は、その顔を驚愕に染めた。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか!？」

「さてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えただけだった。

元春は今までに起きた出来事と彼が語った内容から推測したが、分からずじまいだった。

ただ、分かっているのは、この男の考えている事は全く予測がつかないという事だけだ。

元春は戦慄しながらも、なかば負け犬が吠えるように吐き捨てる。

「ふん。これがイギリス清教に知れば即座に開戦だな。今にして少し思う、オレはシェリークロムウェルに同情すると。お前の言動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れっきとした、自分の世界を守る為に立ち上がったもう一人の主役だろうさ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作る為には、まずオリジナルの天国を知らなければならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの星にいるか。そうだろう?」

元春は、唇の端を歪めて言う。

「魔術師・アレイスターⅡクロウリー」

元春が口にした、その名は、二〇世紀に存在した歴史上最大の魔術師の名前だった。

アレイスターは何も言わずただ笑っているだけだった。

元春はその態度が気に入らなかったが、もう一つ気がかりな事があった。

「それで、あの男は何者なんだ?」

元春の目線の先には、一振りの、木刀のような、しかし、全く未知の材質で創られた、強大な神秘を放つ”剣”を握った少年が映し出されている映像があった。

「ふむ。あの少年は、”聞いた”所によると、我々の住むこの世界とは、似ているが違う世界から来た戦士のようだ」

アレイスターは答えながら、その映像に映る少年をまるで喜んでい
るかのように見ていた。

「それは、並行世界パラレルワールドから来た、という事か？」

元春のその問いに、
「そうなるな。そして、彼は既に”私が目指す頂いたadakiに一番近い所にいる”可能性が高い」

「何だと？それは一体どういう事だ？」

その言葉に反応した元春が彼の方へ顔を向ける。

「あの”剣”。いや、”聖剣”だったな。あの”力”は私にとって
も非常に有益と見た。そう、手順プランに良い意味で影響をもたらし
てくれる程の、ね」

アレイスターは笑っていた。楽しそうに笑っていた。まるで、これ
から起こるかもしれない出来事が楽しみで仕方がないと言っている
かのように。

「あれ程の強大な力を持つ”君”が果たして、”この世界”で何を
なすのか……。実に興味深い」

当麻達が帰ってから大分経ち、時刻は午後九時半。

病室のベッドで今までの疲れで眠っていた小次郎は、ふと目が覚め
た。

「んあ？……眠っちゃってたのか。まあ、ここんトコずっと闘いっ

ばなしだったかな。疲れるのは当たり前か……」

小次郎はベッドから体を起こし、伸びをすると、プルプルルルッ！とまるで、彼が身を起すタイミングを見計らっていたかのように電子音がベッドの下から聞こえてきた。

ベッドの下を覗いてみると、そこには何故か携帯電話があった。
(何で、こんな所にケータイがあるんだ？ 前の入院患者の忘れ物か？)

不思議に思い、手を伸ばし、携帯電話を取る小次郎。

妙な気がしたものの、持ち主がそのありかを知る為にかけたのだ
と思い、持ち主かもしれない人にこの携帯電話の在処を教える為、
出してみる事にした。

《はじめまして》

電話に出ると、自分の死んだ同胞と似通っているが異なる声、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも聞こえる不思議な
声がした。その為、彼は状況を理解した。

「おう、はじめまして。つか、お前誰だ？」

「私はアレイスター。学園都市このまちの統括理事長を務めている」

それを聞いた小次郎は、内心やっぴりか、と感じた。声からしてただ者じゃないとは思っていたからだ。

「……で、その統括理事長サマが侵入者おれに何の用だ？ まさか世間話をするって訳じゃねえんだろ？ このタイミングだ。何か意図があるからこんな（ケータイを予め置く真似）事したんじゃないのか？」

「ふむ。流石に察しが良い。なに、たいしたことではない。君と少し交渉がしたいだけだ。異世界の戦士・”風魔”の小次郎君」

小次郎は相手が自分の素性を知っている事に特に驚きはしなかった。
何故なら、この人物は学園都市のトップ。

街中に”耳”を張り巡らし、自分達の会話やこれまでの動向を監視
していても不思議ではなかったからだ。

「で？ アンタは俺にどうして欲しいんだ？」

「単刀直入に言おう。私の元で働かないかね？ そうすればこの街で

”安全に”暮らしていける」

確かに異世界から来た、本来この世界には存在しないこの身では、生きていく事は難しいだろう。だがそれは普通の人間の話であって、小次郎自身は別に困る事ではない。

何故なら、小次郎は闇に生き、闇に死ぬ”忍び”だったからだ。

それに、この要求を飲む事は、”自分の利益の為に行動するという事”になる。

”そんな事”を彼自身許せるはずがなかった。

「悪いが、断らせてもらうぜ」

「ほう。何故かね？」

即答する小次郎にアレイスターは静かに質問する。

「アンタの元で働く事は、つまり自分の利益の為に動くって事だ。言っておくがな。”忍び”は己の為には決して闘わねえし動かねえ。ましてや俺”達”風魔はな……」

「成る程、そうだったな。君は、”君達”は、永久とわにさすらう風だったな。……ふむ、思った通りだ」

「どういう意味だ？そりゃあ」

小次郎はアレイスターのその発言を疑問に思った。

まるで、彼の答えが最初から分かっていたかのような雰囲気だったからだ。

「なに、自分の為に動かないという事は、他者の為に動くという事。その方が私にとって、”色々”と都合が良いのだよ」

「何だよ、それ……」

何だか試されたような感覚に怒りよりも呆れが生じてくる。

小次郎が呆れていると、

「さて、君を試したお詫びと言ってはなんだが、”この世界”での生活での精一杯のバックアップを約束しよう。どうかね？」

「あ？ああ。それなら別に良いけどよ……」

呆れていた所に唐突に言われたが、その申し出には小次郎自身文句はなかった。

「で、バックアップっつーけどよ。具体的に最初は何をしてくれるんだ？」

その小次郎の問いに、

「君の戸籍の偽造。そして、この街での身分、これは学生だな。そして、この街での住居や君が通う事になる学校への編入の手配をしよう。その後は追々手配をさせてもらう。まずはこれぐらいだな。では詳しくは土御門にでも聞いてくれたまえ」

そう言うと、アレイスターは通話を切ったのか、電話からはツーッという音がした。

「まあ、学生として生活するっつーのは俺の年齢（15歳）からすりゃ妥当だから素直に嬉しいんだけどよ……。ってか土御門って誰だ！？……ん？土御門？はて、聞いた事がある姓だな。確か」
何かその名前に引かかるモノがあった小次郎は腕を組んで考え込んでいると、

「にゃー、お見舞い兼土産の品はこれで良かったかぜよ？」

自分のいる病室に、短めの金髪をツンツンに尖らせ、青いサンングラスで目線を隠した当麻と同じような制服を纏った大男が入ってきた。手には竹刀袋を持っている。

「ほい、土産の品の木刀だぜい！」

と大男が竹刀袋を勢いよく渡してきた。

「おう。サンキュー！って、お前が土御門ってヤツか？」

「そうですたい。オレの名は土御門元春。よろしくな、”風魔”の小次郎」

「ああ。もう分かってると思うが、俺の名は小次郎だ。よろしくな、元春！」

二人はお互い名乗り合ってから握手をする。

握手をし終わると、

「自己紹介も済んだ事だし。よし！そんじゃ説明するぜい」と言いながら、元春は近くにあった椅子に座った。

「まず、オマエの通う事になる学校だが、オレと同じ高校に通って

もらうぜい。まあ、どこにでもある平凡な学校ぜよ。ちなみに、もう既に編入手続きは済ませてある」

その手の早さに小次郎は流石、統括理事長だなくと素直に思っていた。

「次にオマエには、ここでの生活に必要な名前、偽名を名乗ってもらうぜよ。まあ、苗字だけだし、何のひねりもないけどな」

そう言うと、元春は（どこから出したのかは分からないが）紙の束を取り出した。

それは転入に必要な書類だった。

経歴などの所は、流石に嘘がある上に、名前の所には「風間^{かざま} 小次郎」と書かれていた。

「と、まあこんな感じだ。何のひねりもないが、オマエにはピッタリだろ？」

まあ、確かにと、その心配りに小次郎は感謝した。やはり、自分にとって”風魔”の二文字は大事なモノだからだ。

「それじゃあ、転入は明後日になるから、明日はオマエが住む事になる寮に案内するぜい。またな」

そう言って、元春は立ち上がり、病室のドアに向かう。

「ああ、頼むな！……っつーか、それよりお金はどうすんだよ？俺、持ってねーぞ？」

そう質問すると彼は振り向き、

「安心すると良いぜい。結構な額が支給される事になってるから。

オマエの事だから、取り敢えず、生活に困る事はないはずだよー。それじゃ、また明日な」

ボタンと病室のドアが閉められる。

彼が去った事で静寂さが病室に戻ってくる。

彼から感じた”力”のお陰で小次郎は漸く思い出す。

（……思い出した。土御門と言えば、陰陽師として有名な安倍家を祖とする家柄じゃねーか。世界が変わっても、その辺は変わんねーんだな）

その事を思い出し、スッキリとした顔の小次郎はこれからの事を考えながら星空を眺めていた。

第六話 蘇りし剛刀（後書き）

第六卷エピソード完結！

一ヶ月で一巻分かかるとは……。

次回の更新は元々遅いのさらにさらに遅れるかもしれません。
それでは、また！

第六・五話　ロンドンでの密談（前書き）

今回、小次郎や当麻の出番はありません。

まあ、彼らの現状は地の文に書いてあるので、問題ないと思います。ついでに漸く、携帯での『』の出し方が分かったので、この話から使っていると思います。

それでは『法の書』編スタートです。

第六・五話 ロンドンでの密談

あの闘いから二日後、小次郎が当麻の学校に転入したその日は、実に色々な事があった。

転校生への洗礼（様々な質問など）を受けたり、とある男子生徒（犯人は土御門元春）の言葉のせいで当麻へのホモ疑惑が浮上したり（すぐに誤解だと分かった）、小次郎がこの学校に来る事になった経緯を元春から小次郎を交えて聞かされたり（当麻はどうせ多重スパイの元春が一枚噛んでいると思い、あまり驚いていなかった）、小次郎の住む寮の部屋が当麻の部屋のお隣さん（元春の部屋とは逆に位置する部屋）だったり、その事実インデックスが喜んだり、夕飯時には小次郎の歓迎パーティーを開いて盛り上がりたりといった感じで初日は賑やかに終わった。

そして、二日目以降からは、街中で美琴と再会して、事の経緯（嘘の経歴含む）を話して納得してもらったり、ATMでお金（食事代）をおろす為に立ち寄った銀行で強盗に遭遇してそれを文字通りぶっ飛ばして鎮圧した為、そこにいた人達から感謝されたり、その現場に居合わせた（というか助けた）《風紀委員》^{ジャッジメント}の少女・固法美偉^{このり みい}とその後、度々顔を合わせるようになったり（彼女は小次郎と会う度、やけに嬉しそうだった）、不良に絡まれていた（と言うかナンパされていた）クラスメイトの吹寄制理^{ふきよ せいり}を”救出”して、彼女を寮まで送ってあげたり（純粋に彼女を心配しての行動であり、そこには下心などない。その証拠に送った後はすぐに何の躊躇いもなくその場を後にした）、その翌日には彼女から今まで苗字で呼ばれていたのに急に名前で呼ばれるようになって（その時の彼女は若干頬が赤かった）、それが原因でクラス中から”第二の上条”と陰で呼ばれるようになったりといった日々を小次郎は過ごしていた。

そんな愉快(?)な学園生活を小次郎が過ごしていた頃、イギリスのロンドンにて。

赤い髪の神父は朝のこの街を歩きながら困惑していた。

別に街の景色に变化があった訳ではない。歴史の新旧が入り乱れる、いつもの光景が広がっていた。

天候にもさしたる問題はない。

問題なのは、彼の隣にいる少女と少女の傍につき従うように、いや、少女を護るように歩いている妙に所々がすす切れている学生服を纏った”隻眼”の青年だ。

赤髪の神父ーステイルⅡマグヌスは暫く躊躇ちゅうちゅうしていたが、ふと青年がここにいるのは”当たり前”の事だからと思い直し、少女に話しかけた。

「アーキレシヨップ最大主教」

「んん。折角地味な装束を選ったのだから仰々しき名前で呼ぶべからずなのよ」

簡素なベージュの修道服を身に包んだ、見た目十八歳ぐらいの、そして、髪が異様に長く美しい金髪の少女が日本語で呑気な声を出した。

しかし彼女の周囲だけは何故かどこか荘厳な雰囲気を感じられた。それもそのはず。

彼女こそイギリス清教第零聖堂区《必要悪の教会》最大主教(言うなればトップ)・ローラースチュアートその人だからだ。

絶大な権限を持つはずの最大主教たる彼女が朝の街並みを護衛らしき青年を一人だけつけてトコトコと歩いている。

ステイル達は今、セント聖ジョージ大聖堂へと向かっている。そして、そもそもあらかじめこの時間に大聖堂に来いと指定してきたのは彼女

なので、本来ローラと青年は大聖堂で待っているはずなのだが……。
「わたし」達」にも帰るべき家ぐらいはありけるのよ。まさか年が
ら年中あんな古めき聖堂の中になど取り籠もらないわ」

ローラは雑音を感じさせない足で道を進み、

「歩みつつも語れるのだし、時の掠りといこうじゃない」

すれ違うのは会社員が多い。ロンドンでも最大級のウォータールー
駅の近くだからだろう。

シスターや神父の姿”だけ”ならそれほど珍しくもない。ローマ程
ではないが、ロンドンも公園ぐらいの間隔で教会が立っていたりす
る。

「まあ、構いませんけど。しかし、わざわざ大聖堂に呼び出す程の
用件なら、周りに聞かれない話なのでは？」

「気にしてるの？この”リヨウマ”と違って小さし男なのね。寧ろ
このわたしと共に歩める状況を耽楽せんとは出来ないの？婦人の懺
悔を聞きたる神父には《遊び人》という意味もあろうけど、少しは
冒険してみる気はないのかしら」

ローラが傍らで無言を貫いて歩いている青年を見ながら言う。

”リヨウマ”とは、この青年の名である。

背中の真ん中くらいまである黒い長髪に端正な顔立ちをしている。

そして、左目部分には大きな刀傷が走っており潰れている。

その端正な顔立ちと相まって、多少の痛々しさは感じるものの、そ
の凛々しい立ち姿の前にはそんなモノなど微々たるモノでしかなか
った。

そんな彼とローラが出会ったのは、九月一日の事である。

大聖堂内で白昼堂々と謎の暗殺者の集団（どこの手の者かは不明）
に襲われていたローラをその近くを偶然通りかかり騒ぎを聞きつけ
た彼が助け（その際にローラはお姫様抱っこされた）、その襲撃者
達を圧倒的な”力”で撃退した事が縁で、紆余曲折を経て彼は最大

主教の専属護衛官に任じられたのだ。

そうなった経緯はただ単純に彼女が青年の事を気に入ったという事もあるが、ステイルや神裂火織^{かんざき かおり}が彼の人間性と戦闘力を心の底から認めたが故であろう。

と言っても、彼が護衛に就いてから、まだ日が浅い。

その為、ステイルは先程の困惑した態度を取ってしまったのだ。

話を戻そう。

「……」

ステイルは少しだけ難しい顔をした後に、

「一つだけ尋ねてもよろしいですか」

「硬き事ね。何？」

「貴女はどうしてそこまで馬鹿なしゃべり方をしてるのですか？」

「……？」

ローラは最初キョトンとした顔をして、次にピタリと動きが止まって、最後に顔を真っ赤にすると、

「な、え、あ！お、おかしいの？ 《日本語》^{ジャパニーズ}とはこんな感じといふものではないければかしら！？」

「あの、失礼ですがもう何を言ってるか分かりません。古語としても狂ってます」

「……………」

道行く人々には日本語は通じていないはずなのだが、周囲の喧噪がヒソヒソ声となってローラに集中しているように感じられた。

一方の”隻眼”の青年は無言で（しかし、穏やかな笑みを浮かべながら）ローラを見ていた。

「く、く。……文献やテレビジョンなどの参考資料を元に、色々と勉強に励みて、さらには”本物の”日本人にもチェックを入れてもろうたのに……」

「はあ。”本物の”日本人って一体誰なんですか？まあ、”リヨウ

マ”ではないのは当然でしょうが……」

「つ、つちみかどもとはるのヤツなのよ……」

「……、あんな義理の妹にメイド服を着せて悶絶しているような危険人物を日本人の基準点にしないでください。アジアはそこまで奇妙な世界ではありません」

「さ、さにあったのね。しからは誤りたる口振りは改めねば……って、いかん!？」

ローラが叫ぶと、歩道で休んでいた鳩の群れが一斉に飛び立った。

「?どうかしたんですか」

「………」

「く、クセになってしもうて言葉遣いを直せないのよ」

「……まさかと思いますが、今までそんな馬鹿な言葉遣いで学園都市の代表と協議してきた訳じゃないですよね?」

ビクッ、とローラの肩が動いた。

「い、いや、案ずる事はないわよ。だ、大丈夫大丈夫。確けし確けし」

と言っていたが、その声は震えていたし変な汗が頬を伝っていたし目は泳ぎまわっていた。

「……フッ」

青年はそんなローラの様子に静かな、けれど馬鹿にしているという感じではない、寧ろ和やかな感じの笑い声を漏らした。

一方のステイルは煙草臭い溜め息について、

「とにかくそれについては大聖堂に到着してからゆっくり話し合いましょう」

三人は、密かに火織が入り浸っている日本料理店の角を曲がって先へ進む。

「い、いや、ゆると話す必要はないわよ。何もおかしき所などないのだから。第一”リヨウマ”は気にしてない風であるからして、むしろ暖かい目で見てくれて……」

「くだらない事と無意識的な惚気話^{のうけばなし}を言っていないで《仕事》の話を

は確認するようにローラの顔を見るが、やはり彼女の小さな口は動いていない。

「……通信用の護符、ですか？」

『声に出さねと思うだけで音聞きできようものなのよ』

ふむ、とステイルは手の中にあるカードに視線を落とす。ステイルが周りに聞かれるとまずい、と進言した事にわざわざ対応してくれたいらしい。

そして、隻眼の青年にこれと同じようなモノを渡さなかった、という事は彼には関係のない事なのだとすぐに悟る。

もつとも、青年は”魔術師”ではないのだから、当然なのだが……。

『で、何でまた心の声まで馬鹿口調なんですか？』

『えっ！？ま、待ていなによステイル！わ、わたしは今、^{クイーンズ}英国語で語らいてるわよ！』

声もなく慌てる様子に、開店前の喫茶店の前で丸まっていた猫がビクツと震える。ステイルは最大主教の威厳とか、そういう冷静さとかは持っていないのかと思いつながら、溜め息をついた。

『では通信・変換時に誤訳しているんですね。まあ気は抜けますけど意味は通じますし、このまま先に進みましょう』

『く、く……。ごほんっ！では始めたるわよ』

何か言いかけそうになったローラだったが、それを呑み込んで仕事の話へと移っていった。

『ステイル。貴方は「法の書」の名は知り足るわね』

『魔導書の名ですか。著者は確かエドワードⅡアレクサンダーだと思いましたが』

エドワードⅡアレクサンダー。またの名をクロウリー。

二〇世紀最高の魔術師と呼ばれ、同時に二〇世紀最低の魔術師とも言われた男の名である。

『それがどうしましたか。確か「法の書」の原典は今、ローマ正教のバチカン図書館にあったと記憶していますが』

ステイルはかつて禁書目録の少女と一緒に彼女の頭の中に一〇万三

〇〇〇冊もの魔導書を詰め込む為に世界中を旅して回った時に彼は有名な魔導書一〇〇冊の在処ぐらゐは記憶しているのだ。

『そうよな。クロウリーは一九二〇年から一九二三年までの間、イタリアのシチリア島にて活動しとったのよ。「法の書」はその時の落とし物という訳なの』

ローラは歴史の教科書をめくるような声で言う。

『さてステイル。それでは「法の書」の特徴は知りえるかしら』

『……、確かに、あのクロウリーの著作という事で信憑性の有無を問わず”様々な学説”がありますね。「法の書」は彼が召還した守護天使エイワスから伝え聞いた、人間には使えない「天使の術式」を書き記したものだとか。「法の書」が開かれた瞬間に十字教の時代は終わりを告げ、全く新しい次の時代がやってくるとか。……意志なき天使から話を聞き出すのは不可能にしても、後者の方は気になりますね。そして――”誰にも解読できない”、という事でしたね。元々、魔導書は様々な暗号を使って書かれるものですが、あれは別格だとか。禁書目録も解読を諦め、暗号解読専門官であるシエリー・クロムウェルすらサジを投げたそうですが』

それを聞いたローラは愉快げに笑ってから、
『では、何人たりとも読めん「法の書」を解読できる人間が現れんとしたら、どうする？』

『……、何ですって？』

ステイルはローラの顔を改めて見た。彼女が冗談を言っているようには見えなかった。

『その者はローマ正教の修道女で、オルソラ・アクィナスと言うさうよ。あくまで解読法を知りけるだけで、未だ本文に目を通しとらんようなの』

『どういう事ですか』

『件のオルソラは部分的な写本を参考に解読法を探さんとしたそうなの。目次と序文の数ページだけしか手元になかったのよ』

確かに「法の書」は厳重に管理されていて、そう簡単に閲覧する事

など出来ないだろう。それに迂闊に原典を手を取るには危険すぎる。
『ローマ正教は……現在、勢力争いの為の戦力^{カード}が不足していますからね。となると、「法の書」でも使って巻き返しを図ろうとしているんですか。ヤツら、「法の書」を単なる新兵器の設計図ぐらいにしか見ていないのか……』

ローマ正教は世界最大級の十字教宗派と言われているが、とある一件によって、現在はその力は弱まっているという情報もある。

その為、彼らが「法の書」の知識を使い、失った戦力の巻き返しに躍起になろうとしてもおかしくはない。

『いや、連中が戦力増強の為に「法の書」を利用する可能性はあらずのようね。少なくとも直ちにローマ正教が「法の書」を用いてどこそこを攻撃せしめる事はないから安心なさいな』
『?』

『ふふん。色々事情がありけるのよ、色々とな』

ローラはやけに自信たっぷりに言うが、何か根拠があるのかとステイルは眉をひそめる。まあ、その自信の根拠は彼女の傍らにいるこの青年の存在もあるのであろうが。

ローマ正教と「法の書」について考え込むステイルにローラは薄く笑い、

『心配性なのね、顔に出てるわよん。大丈夫ったら大丈夫って言うてるのに』

『しかし……』

『あーあーやかましいやかましい。ひらさらローマ正教が仮に「法の書」を使わんと企んでた所でとてもかくても今のままじゃ実行は不可能よ』

どうして?とステイルが問う前に、

『「法の書」とオルソラ・アクィナス。この二つが一緒に盗まれたさうだから』

「そんな……誰に!？」

ステイルは思わず口に出していた。そして突然大声を出した為、周りの人々の目が彼の方に集中する。

『予測はついてるから後は其の始末をつけてみよというのが私があるに伝えし今回のお仕事。まあ大方、相手は日本の天草式十字凄教で間違ん事ないと思うけど』

『天草式……』

それは、かつてステイルの同僚である神裂火織が、女^{トップ}教皇を務めていた日本の十字教勢力だ。

だが、色んな理由で、ステイルは彼らを十字教宗派とは認めていない。

『天草式は宗派としては、ローマ、イギリス、ロシアなど国家宗教に比べれば格段に小さしものよ。それなのにこの世界で繰り回し出来たのは、神裂というイレギュラーな存在がいた為。大黒柱としての神裂を失いたる彼らがその代わりとなる新たな力として「法の書」を求めても何ぞ不可思議なる事もないじゃない。何せ「法の書」は、使えば十字教のパワーバランスを突き崩やす一冊なんだから』

オルソラと「法の書」が天草式の手に渡ったとなれば、彼らがいつそれを使ってもおかしくはない。いや、使わない方が不自然というモノだ。

『しかし!』

ステイルは声を荒げる。

『「法の書」はバチカン図書館の最深部に安置してあったんですよ。今の天草式は”力を欲する程小さな組織”です。その程度の宗派が、あそこへ侵入できるとは思えません。僕はあの禁書目録の護衛として実際にバチカン図書館へ足を踏み入れた事があるから分かります。あそここの警備は死角も抜け道もない、まさしく壁です!』

『然^だから、「法の書」はバチカン図書館などにはなかったのは?とステイルの表情が固まる。』

『ローマ正教は国際展示会を開く為「法の書」を日本の博物館に移

送していたのよ。「神の子」が上ったと言やる、ローマにありしラテラノ聖堂の「聖なる階段」が何故一般にまで公開されているか、知らざる訳じゃないでしょ？」

歴史上や聖書上の物品を、数年に一度、教会が公開する事がある。理由は、まあ、新たな信徒を発掘する為の『客寄せ』なのだが……。

『馬鹿げている……。そんな危険な物を見世物にした挙げ句に横から掠め取られるだなんて、ローマ正教はどこまで恥をさらせば気が済むんだ』

『くつく。そりゃ当人が一番自覚しておるでしょうよ。地の利ありとはいえど、極東の小宗派に其処^{そこ}までやられたローマ正教の誇りはズタズタよ』

『はあ。それで、ヤツらは恥も外聞もなくこちらへ協力の打診をしてきたって訳ですか』

『いいえ。小奴^{こやつこ}どもは己が手で事を収めたいみたい。自分達だけで解決する言うて、この情報を聞き出だすのに苦を労したんだから。そこが最後のプライドたるといった所でしようけど、はつきり言いやれば現実見ろ馬鹿って感じよね』

『？ 僕達はローマ正教からの要請があつて「法の書」とアキナスの救出を手伝うのではないんですか？』

『向こうも渋りていたわ。まあ、オルソラ^{はふ}アキナスが本当に「法の書」を解読できるなら此方も放^{はな}らしておけないし』

『……恩でも売っておくつもりですか？」あの神職貴族ども”が借り返すような連中だと？』

スタイルは現在のローマ正教の”悪癖”を思い起こし、くだらなそうに言った。

『かような旧教^{カトリック}を腐^くらせたるーというより、「旧」などと付けさせてしまったー愚図どもに施しを与えてやる気なぞ毛頭ないわよ。それよりまずし事がありけるの』

『何か？』

『神裂火織と連絡が取れんのよ』

ローラのその最低限の言葉だけで、ステイルは即座にその意味を悟った。

『あの性格なれば後先考えずに手を出したる可能性は極めて高いわ。並かそれ以下ぐらいの腕ならまだしも、神裂クラスとなりたると流石に、ね』

ローラは大きく溜め息を吐く。

『神裂が下手を打つ前に、落^{かた}を付けて欲しいのよ。其れが最優先。方法は何れでも構わないわ。「法の書」とオルソラを救出するか、交渉に依りて天草式を降伏させるか、あるいは神裂ごと天草式を力で排除して事を収めるか』

『”あの”神裂と戦えですって?』

『場合が場合ならね』

ローラは簡単に言う。

『ウチからの人員は小分けして日本にいるローマ正教の搜索隊のもとへ送る手はずとなつてろうのよ。でも貴方は別働隊として、始めに学園都市と接触して頂戴ね』

ステイルは頭の中の疑念を吐くように口から煙草の白煙を出す。

ちなみに彼の疑念は別働隊として動くという事ではなく、始めに”学園都市と接触する”、という事である。

『これは教会諸勢力の問題でしょう。そこで何故、科学側^{かれら}の手がいるんです?』

『禁書目録』

ローラは、少女の名前ではなく、暗号名^{コードネーム}を言った。

『魔導書の、それも「法の書」の原典がお出ましとなれば、専門家の手が必要でしょ。向こう(かれら)には既に話をつけたるから、遠慮なくさらいて構わないわよ。条件の一つとして、”管理人”を同伴させる事になっているけどね』

『……』

『何ぞ。久々にあれと仕事が出来ようと言うに、あまり嬉しげでないわね』

『いえ』

”様々”なモノを呑み込んで、ステイルは無表情になる。

『……管理人というのは例の幻想殺しですか』

『ええ。せいさい有効に使うといいわ。あ、しいては駄目よ。あつちは借り物なんだから』

『学園都市所属の人間を、魔術師同士の争いに巻き込んでしまつて大丈夫なのですか？』

『其の方は色々和小細工を為せば大丈夫よ。というより、先方の交換条件につき外せんわね。いちいち交渉を長引かせている時間はないのよ』

『そう、ですか』

学園都市のトップも、隣を歩くローラも、いまいち考えている事は分からない（ローラの方は最近今も護衛として付いている”リヨウマ”のお陰かプライベートに關しての考へてる事は段々分かつてきた）。上に立つ者同士の腹の探り合いなどは下っ端の自分には想像できないし、口を出す訳にもいかない。

『それからステイル。これを持ちておいて』

ローラは地味な修道服の袖の中から小さな十字架のついたネックレスを取り出すと、それを無造作にステイルへと放り投げた。彼はそれを片手で受け取りながら、

『靈装の一種ですか？見た所、それらしき加工は見られません』

『件のオルソラⅡアクィナスへのささやかなる贈り物という所かしら。その者に出会いし機会があらば渡しといてね』

ステイルは彼女の意図がいまいち分からなかったが、ローラはその事に関してはこれ以上詳しく説明する気はないようだ。つまり、言外に『いいから黙って仕事しろ』と言っているのかもしれない。

と、三人の足がピタリと止まった。

彼らの前には大聖堂と名のつくそれ程大きくはない教会がそびえ立っていた。

聖ジョージ大聖堂。

ステイルと隻眼の青年の一步前へ進んだローラの手が、重たい扉のノブへそつと触れられる。

「さて」

ローラは重い両開きの扉を開けて振り返り、神父を中へと招く。

そして、隻眼の青年は彼女の隣へと当然の如く移動する。

青年が隣に移動したのを確認してから、ローラはカードを通さず、口を動かして澄んだ声を出した。

「詳しい説明は、中で掛け合いますようか」

詳しい説明を終え、ステイルが『仕事』へ向かうのを見届けると、

「聞きたりていたわね、リョウマ……」

ローラが傍らに立つ青年に話しかける。

「ああ……それでこうして俺に話しかけるという事は、別件の”用事”があるんだろう？」

青年は静かな口調で答える。

「ええ。貴方にはステイルには話していない、ある”一件”についてお願いしたいのよ」

「……その”一件”とは？」

ローラの言葉に青年は、静かに先を促す。

すると、ローラは彼に依頼する『仕事』を口にする。

「……………という事なのよ。お願いできうるかしら？」

「……それが本当なら”奴ら”、真の意味で腐っているな……。いいだろう。そういう”闇”に潜む者を『事こそ、”忍び”と

して相応しい任務だ」

「では、行ってきたりくれたりけるのね」

「ああ」

青年はそう答えると、ローラの傍を”一時的”に離れた。

大聖堂の重い両開きの扉へ向かっていく、その背中では、まさに戦場へ向かう一流の戦士の姿だった。

青年が扉の一步步前まで来ると、ふと足を止め、静かにローラへと話しかけた。

「俺のいない間、あまり無茶をするなよ。お前はただでさえ”敵”が多いのだから……」

「ええ。分かりたるわ」

ローラのその答えに、ならば良い、と満足そうに呟いた青年は”風”と共に姿を消した。

今、日本へ二人の『戦士』が向かう。

一人は、単体で数多の魔術結社を焼き払い壊滅させた炎のルーン魔術師。

もう一人は、異世界において絶大な力を持つ超能力戦士サイキックソルジャーにして、”忍び”の業をも使いこなす”風”の最強戦士の一角にして、独眼竜と称された”聖剣”の戦士。

それぞれの目的を胸に、二人の男が日本へ向かう。

『法の書』と一人の修道女を巡る闘いが始まろうとしていた。

第六・五話　ロンドンでの密談（後書き）

遂に出てきた、あの”男”。

そして、この世界でフラグ体質が覚醒した小次郎。

予定としては、原作で当麻に恋愛フラグが立っていないキャラ（Wikipedia調べ）にフラグ（しかも無意識だから質^{たち}が悪い）を立てさせるつもりです。

それでは、また次回。

第七話 戦士達の合流（前書き）

今回、長いです。

小次郎初戦闘回並に。

まあ、原作（禁書）における一章分のストーリー丸々（行間含む）書きましたからね。当然っちゃあ当然なんです。

では、本編スタート！

第七話 戦士達の合流

九月八日。

「だからなー、二学期というのは忙しいんだぞー。大覇星祭に一端覧祭、遠足に宿泊学習に修学旅行、芸術鑑賞祭に社会見学祭に大掃除祭に期末試験祭に追試祭に涙の居残り祭とお祭りづくしなのだかなー。その為の準備にみんな忙しいから仕方がないのだぞー」

午後の学生寮の通路で、メイド服を着て、清掃ロボットにちよこんと乗っている、元春の義妹・土御門舞夏はのんびりとした口調で言った。

「でも暇だよ退屈だよつまらないんだよとうまは構ってくれないし遊んでくれないし、こじろうはこじろうで帰ってくるのは夜遅いし」そんな舞夏を前に、インデックスは口を尖らせて体を左右に揺らしながら抗議する（三毛猫は彼女のフードを彩っている金糸の刺繍が気になっているのか前足でバタバタと『猫パンチ』を繰り返している）。

「上条当麻にも上条当麻の事情があるんだから迷惑かけちゃ駄目なんだぞー。大体、あっちだって好きでほったらかしにしている訳ではないんだからなー。風間小次郎もまた同じなんだぞー。学校というのは色々大変な所なのだぞー。あ、でも風間小次郎は学校以外でも半分ボランティアみたいなのをやらされていたなー」

「むう。分かっているけど……。じゃあ、どうしてまいかはガッコーに縛られてないの？」

「ふふん、私は例外なのだよー。メイドさんの研修は実地が基本だからなー」

実は実地研修に出られる家政科学校の生徒は、メイド（候補生）のエリートでなければ務まらない。

そんな事情を知らないインデックスは実に可愛らしく小首を傾げて、

「メイドになればいつでもどこでも出かけても良いの？ガッコーにも縛られない？とうまやこじろうのいるキョーシツに研修行っても大丈夫なの？」

「いや、メイドさんというのはそういうものじゃー……」

「じゃあ私もメイドになる！そしてとうまとこじろうのクラスに遊びに行くかも！」

「その台詞は素敵だけどメイドさんの道は厳しいのだぞー。毎日毎日男にお昼ご飯を作り置きしてもらっているような家庭的スキルゼロの女の子には難しいなー」

「じゃあとうまをメイドにする！そしてとうまに遊びに来てもらうかも！……こじろうはどうしたらいいだろう？」

「その台詞は素敵すぎて涙が出てくるから上条当麻には言わないのが優しさだぞー。……あと、風間小次郎は”そういったモノ”より用心棒とかSPの方が似合ってると思うぞー」

ムームー、と暇人少女インデックスが頬を膨らませて高速で体を揺さぶっていたが、

「うん、そうだね。悪いけど、君がメイドになる時間もヤツをメイドにする時間もないんだ」

不意にインデックスの背後から声が聞こえた。

へ？とインデックスの思考が一瞬真っ白になる。彼女の前にいる舞夏には、インデックスの後ろにいる何者かの姿が見えるのだろう。

驚きよりも、寧ろ、怯えるような表情を浮かべている。

（誰が……）

インデックスが声に出して振り返ろうとする前に、大きな手が、彼女の口を粘着テープのように押さえつけた。

小次郎と当麻は、夕暮れの街を歩いていた。

小次郎は手に何かが入った小さな箱を持って、いつもと変わらぬ足取りで、当麻はとぼとぼと歩いていた。

ドラム缶型の清掃ロボットが彼らの横をすれ違い、電柱代わりの風力発電のプロペラが都会カラスを追い払うようにクルクルと回っている。オレンジ色の空にはアドバールンがいっぱい浮かんでいて、その下には最新鋭の超薄型画面が幕のようにぶら下がっていた。『
備えあれば憂いなし 大覇星祭の準備 がんばりましょう！ー
風紀委員』という表示が縦長の電光掲示板のように下から上へ向かって流れている。

大覇星祭は言ってしまうえば、学園都市全ての学校合同の体育祭だ（しかも、一週間行われる上に能力使用全面解禁。さらには学園都市の数少ない全国公開日でもある）。

この一週間、転入したての小次郎も（秋沙も）その準備を行っていた。

「う、うだー」

と、このように当麻は精神的に参って疲れているようだが、中央アルプス不動岳の山中と森の中を一日中駆け回って生活していた小次郎にとっては大した事ではない。寧ろWelcomeな行事だ。何せ一切の気兼ねなく思いつきり暴れられるのだから。

「そういえば、小次郎。さっき土御門に何もなかったんだ？」

小次郎が大覇星祭の日が来るのを今か今かと心待ちにしてウキウキしていた時、不意に当麻が聞いてきた。

「ん？ ああ。よく分からねえけど、なんか俺の”これからの生活”に必要なモノだって、元春の奴言ってたぜ？」

左手に持つ箱を当麻に見せながら、小次郎は言う。

小次郎が箱を渡されたのは今からほんの少し前の事……。

それは昇降口を出て、校門を当麻と共に出ようとした時だった。

『おい、小次や〜ん』

と土御門元春（多重スパイ）の声でしたので振り向くと、やっぱりこちらに向かって元春が走って来た。

フレンドリーな笑顔を浮かべながら。

『どうしたんだよ、元春。俺に何か用か？』

怪訝な顔をしながら、当麻に、少し待っててくれ、と頼んでから小次郎がそう訊くと、元春はいつものチャライ笑顔で、

『統括理事長からの贈り物だぜい。ほい』
アレキスター

そう言いながら件の箱を元春は放り投げて渡す。

小次郎はそれを見事キャッチして、

『統括理事長から？中身は一体何なんだ？』

『それは開けてみてからのお楽しみぜよ。ただ、この中に入ってるブツは小次やんの”これからの生活”に必要なモノって事しか今は言えないにゃー』

『そうか。まあありがとな。統括理事長によりしく言っといてくれや』

『おう。よろしく言っとくぜい』

と元氣良く挨拶してから別れたのだ。

時を戻して、現在。

「しかし、何だろうな、それ。軽いのか？」

「ああ。軽いモンが二つ程入ってるっばいんだよな……本当に何が入ってるんだか」

当麻の問いに、小次郎は？マークを頭上に浮かべながら、答える。それから暫く、箱の中身について談義しながら、学生寮に向かっていると、

「あ。そういや冷蔵庫の中、空っぽじゃねーか」

「え？マジか!？」

と当麻が思い出したかのように言い、小次郎はその当麻の言葉に驚く。

しかし、生憎当麻は一度寮に帰らないとお金がない（小次郎は持っているが、今日は買う必要がない為、当麻のように切羽詰まっている）。ない）。

「また行って帰ってこないといけないのか」

「ドンマイ、当麻」

ぐったりする当麻を励ます小次郎。

途端に重くなった足を引き擦りながら、帰路に着く。小次郎はそんな当麻に肩を貸して歩く。

と、彼らの住む学生寮の入口近くまでやってきた時、不意に頭上から女の子の声が聞こえてきた。

「あー。かつ、かかかった、上条当麻だ上条当麻ー。それに風間小次郎ー」

ん？と小次郎と当麻が顔を上げると、七階通路にある金属の手すりから、舞夏が上半身を乗り出して右手を振っていた。

「よ、よよ用事があったの急用があったの。というか上条当麻お前は携帯電話の電源切ってるだろー」

「？」

言われて当麻がポケットの中のGPS機能付きの携帯電話を取り出すと、確かに電源が切れている。ボタンを押して画面を確かめると、舞夏からばんばんメールが送られてきていた。ちなみに小次郎は携帯電話を持っていない（第六話でのあの携帯は元春のモノであるので、後日返した）。

普段の舞夏の間延びした声が、今は鳴りを潜め、少し顔が青ざめているのが分かる。

事態を重く見た小次郎と少し首を傾げた当麻が急いでエレベーターに乗る（小次郎はなるべく目立たないようにする為）。

自分達の部屋のある七階に到着すると、舞夏はいつも正座で乗っている清掃ロボットのモップの戒めを解き、ゆっくりとこちらに近付

いてくる。いつもインデックスと一緒にいるはずの三毛猫が、どこかションボリとした様子でインデックスの持ち物の○円携帯電話をくわえて座り込んでいた。

舞夏を乗せた清掃ロボットが小次郎達の前に到着すると、舞夏はモップでロボットを固定し、

「緊急事態だ緊急事態だぞ。銀髪シスターが何者かにさらわれちゃったー」

「「は？／何だって!？」」

当麻は思わず声を出し、小次郎は驚愕の声を漏らす。舞夏は青白くなった顔で、

「だから誘拐だよ人攫い。通報したら人質殺すって言われたから何にも出来なかったの。ごめんなー上条当麻、風間小次郎」

当麻は思った。インデックスが誘拐される理由などいくらでもあるという事を。

小次郎は最近知った事だが、彼女は一〇万三〇〇〇冊もの魔導書を記憶している魔導書図書館で、魔術サイドにおいては重要人物である。そんな人物だからこそ、今回の誘拐騒ぎは予想できたはずな事に少し後悔した。

「ちよっと待て。何がどうなったか、順番に話してくれないか？」

「そうだな。状況が分かんなくちゃ動くに動けねえからな。聞かせてくれ」

そう二人が聞くと、舞夏はポツリポツリと説明し始めた。

舞夏が二時間前に学生寮に来た事から、インデックスと世間話をしていたら、突然インデックスの背後から誰かが彼女の口を塞いで、連れ去ってしまった事までを。

「去り際に、誘拐犯が封筒を渡してきたのー。そこに色々書いてあって……」

ダイレクトメールに使われるような、横に細長い封筒を舞夏は手渡してきた（彼女の声は恐怖だけではなく、自分が何も出来なかったが故の負い目から大分震えていた）。

当麻と小次郎は一度、封筒に目を落としてから、

「いや、闇雲に動いて下手に状況悪化させるよりずっとマシだよ」

「ああ。そうだぞ舞夏。だから気にすんな！」

その当麻と小次郎の言葉は舞夏を安心させる為のモノだったが、彼女は余計に困ったような表情を浮かべた。

「それで、その馬鹿野郎はどんな感じのヤツだった？」

「ああ。特徴を教えてくださいと助かる」

舞夏はちよつと考えるように頭上を見上げてから、

「うーん。まず一八〇センチを超えててなー、白人さんっぽかったぞ。でも日本語は上手だったし、見た目だけでこの国の人かまでは分からなかった」

「「ふんふん／ほうほう」」

「それで神父さんみたいな格好でなー」

「ふん？」

「当麻？」

「神父の癖に香水臭くて、肩まである髪が真っ赤に染まってて、両手の十本指には銀の指輪がごてごて付いてて、右目の下にバーコードの刺青タトゥーが入ってて、くわえ煙草で耳にはピアスが満載だったー」

「……、おい。すっごく見覚えあるぞ、その腐れイギリス神父」

「……、知り合いなのか？」

小次郎の問いに、当麻は無言で頷き、舞夏は『？』と首を傾げた。

当麻は封筒を開け、中に入っていた一枚の便箋を取り出す。

そこには、

『上条当麻 彼女の命が惜しくば 今夜七時に 学園都市の外にある 廃劇場「薄明座」跡地まで 一人でやってこい』

と書かれていた。

「……。今時、定規で筆跡隠しかよ」

「そう言うな、当麻」

当麻は少し呆れ、小次郎はそんな彼の肩を叩く。

（ナニ考えてんだか。一足遅い夏休みでももらって遊びに来たのか

あの馬鹿)

当麻は、インデックスを連れ去った張本人は彼女の同僚であり、自分の知り合いのステイル・マグヌスで間違いない。彼はインデックスを大事に思っているの、危害は絶対に加えないだろう、という事を小次郎に話すと、

「……そうか。じゃあ、俺は一旦部屋に帰って箱の中身を確認したら、何か気になるから、一応お前の後を追わせてもらうぜ」

と軽く言ってから、緊張感を一気に削ぎ落とした小次郎は自室に入って行った。

まあ、緊張感を削ぎ落としたのは当麻も同じだ。

(だが、内心小次郎が来てくれるのなら、厄介事があったとしても自分に降りかかる不幸が幾分か緩和するだろうという妙な安心感があった)

そうになると、本気で落ち込んでいる舞夏があまりにも無残すぎる。

「あー、大丈夫だぞ舞夏。多分この犯人は俺やインデックスの知り合いだ。だから心配しなくてもー」

「は、犯人は知り合いだったのか!? 動機は歪んだラブなのか?」

「あ、え? いや、そういう意味じゃねーんだけど……。でも歪んだラブはありそうだな」

余計に顔を真っ青にする舞夏を見ながら、当麻は溜め息を吐いた。封筒の中身を改めて確認すると、折り畳まれた書類――学園都市の外出許可証と関連書類が入っていた(既に必要事項は記入済み)。

当麻は脅迫状の馬鹿馬鹿しさと、それに反比例した妙に手の込んだ準備に呆れ返る。

当麻は思った。

(しかし、本当にあの神父は何を考えているんだろうか?)と。

廃劇場『薄明座』の跡地は学園都市からほんの三キロほど離れた場所にある。

そこは潰れてから三週間も経っていないせいかな、あちこちにホコリが積もっているものの、まだ、廃墟という感じはしなかった。

まさしく、『冬眠している建物』といった感じだ。

インデックスとステイルは何もない舞台の上にいた。

薄暗闇に落ちる舞台の上で、インデックスは女の子座りしていた。むっすー、と彼女はほっぺたを膨らませて、

「卑怯者」

「返す言葉はないし、必要もないかな」

ステイルは少女の敵意ある視線に一瞬だけ怯みかけたが、決してそれを表には出さなかった。

「大体状況は分かってもらえたと思う。もう一度説明が必要か、とは問わないよ。君の記憶力を考えれば、二度繰り返す事に意味などないだろうからね」

「……イギリス清教の、正式な勅命」

インデックスはここに連れて来られてから受けた説明を、もう一度思い出す。

そして思い出し終えた所で、

「その正式な『お仕事』に、一般人のとうまを巻き込む訳？」

「実は僕も何で巻き込まなくちゃいけないのか少し疑問だね。まあ、上のご指名というヤツさ」

ステイルは煙草の端をユラユラ揺らしながら言葉を続ける。

「その上、これでも僕達は難しい立場にいてね。学園都市所属の上条当麻へストレートに協力を求めると『科学サイドが魔術サイドの問題に首を突っ込んだ』と見なされかねない。あくまで学園都市内部で起きた問題なら『自衛』と言えば苦しい言い訳にはなっただろうけど、今回は違う。彼が首を突っ込む為には、それ相応の動機付けが必要となった訳だ」

その為の誘拐。

要は彼が戦いに赴く為の大義名分が欲しかったのである。

「大体話は分かったけど、やっぱり納得は出来ないかも」

「そうかい？」

「うん。こんな回りくどい事しなくたって、とうまは『助けて』って言ったら助けに来てくれるもん。どんなに危ない場所でも絶対来てくれるから、逆に頼みづらいんだけど」

「……、そうかい」

ステイルは、幼い娘が好きな男の子の話をしてきた時の父親のように、小さく笑った。

「あ。でも、最近はこじろうが付いてるから安心できるかも！」

「こじろう？ 先程も上条当麻の住んでいる学生寮でも言っていたが、一体何者だい？」

ステイルは今まで聞いた事がなかった名前に眉をひそめる。

インデックスに問い質す、その様子はもう完全に『お父さん』だ。

「ともだちだよ」

インデックスはまるで頼れる兄貴が出来た事が嬉しいというような顔で、

「すっごく強くて、頼りになるんだよ」

「そうか……」

ステイルは平静を装うと努力していたが、その声は若干震えていた。無理もない。

かつて自分がいた『インデックスの隣』という居場所。

今では、その場所には上条当麻という少年だけではなく、また新たに現れた別の存在がいるという事実が彼にそこまでの（精神的な）衝撃を与えたのだから。

「それで、これからどうするの？ 『法の書』とオルソラIIアクイナスは天草式の手に落ちてるんだよね。だったら、天草式の本拠地まで行くっていうの？」

少女の声に真剣味が宿る。少しでも当麻の危険を軽減したいが故だ

ろう。

「いや、状況は少し変わってる」

インデックスの質問を受けて立ち直ったステイルは苦しそうに煙を吐いてから続ける。

「つい十一分前に、ローマ正教と逃走中の天草式が激突したらしい。オルソラ救出戦だね」

インデックスは目を細める。煙草の煙を使った通信式の術式だと彼女が分析した。

「それで成功したなら、私がここにいる必要はないはずなんだけど」

「その通りだ。が、明確に失敗した訳でもないよ。双方共に死者は出なかったが、どうも乱戦になったらしい。『法の書』の方は知らないが、オルソラはその隙について逃げ出したそうだ」

「？　ローマ正教の方にも戻っていないの？」

「そういう事になるね。現在行方不明だから、再び天草式の手に落ちる危険性もある」

「……、それはまずいかも」

インデックスは事態の重さを悟る。こんな所でじっとしている暇はない、と。

「できれば上条当麻にも急いで欲しいものだが、今更書き置きの内容を変更する事も出来ないしね。ローマ正教側からの協力者が来る前に彼とは合流したかったが……」

ステイルがそう言った時、開けっ放しだった大ホールの出入り口の一つに、小柄な人影が現れた。

「……残念ながら、僕達も彼を待たずして動き始めなきゃならないみたいだ」

その小柄な人影は、ローマ正教側の協力者だった。

当麻と別れ、自分の部屋（実に殺風景。例えるなら、「Fate」の衛宮士郎の自室くらい）に入った小次郎は、鞆を置き、制服を脱いで、ハンガーにそれを吊し、今や私服に使っているいつもの『戦闘服』へと着替えた。

着替え終えた小次郎は、買い置きしていた海苔を食べた後、備え付けの冷蔵庫から取り出したスポーツドリンクを飲みながら、元春から受け取った小さな箱の封を解いて蓋を開ける。

そこには、

「……、随分と大盤振る舞いだな、オイ」

なんとクレジットカードぐらいの大きさの無期限自由外出許可証とパスポート、そして一通の手紙が入っていた。

手紙の送り主は言うまでもない。学園都市統括理事長のアレイスターだ。

手紙を手に取り、それを読む小次郎。

それには、

『丁度一週間振りだね、小次郎君。

遅くなったかどうかは分からないが、君への「バックアップの第二弾」として、この二つを贈ろう。

その二つは共に、君の”これからの生活”に大変必要なモノとなるだろう。遠慮なく自由に使ってくれたまえ。

アレイス

ター』

と書かれていた。

それを読み終えた小次郎は、手紙を箱の中に戻し、無期限自由外出許可証だけ手に持ったまま（パスポートは箱の中に入れたまま）近くの棚の上に置いた。

「別に遅くなっちゃあいねえさ。寧ろグッドタイミングだぜ！お言葉に甘えて早速使わせて貰うとすっか！」

小次郎はそう言う嬉しそうな顔をする。

それから簡単な夕食を済ませてから部屋を出て（その前に部屋の戸

締まりも忘れずに行った）、部屋の鍵をかける。

当麻の行き先が分かっているものでゆっくり行こうと思い、エレベーターの方へ進むと、

「あー、風間小次郎。上条当麻を追いかけるのかー？」

と横合いから声をかけられた。

声のした方を見ると、当麻に預けられたらしき三毛猫と戯れる舞夏の姿があった。

「おう。ちよっくら行ってくるあ」

「おー。留守は任せておけー」

と軽く挨拶を交わすと（舞夏からは先程感じられたような自分を責めているような感情はもう感じられなかった）、小次郎は学園都市の外にある廃劇場『薄明座』に向けて足を運び始めた。

それは偶然にも当麻が学園都市の『外』へ丁度出た時とタイミングが同時だった。

小次郎が部屋を出た頃、当麻は、

「なんか最近、結構街の外に出てるよなー。……できればのんびり見物してみたいもんだけど」

と学園都市の外壁沿いの道を歩きながら呟いていた。

当麻は三毛猫を舞夏に預け、街の外を歩いていた。

時計を見ると、約束の時間までまだ一時間近くもある、午後六時過ぎ。

ついさっきまで『薄明座』の場所を割り出すのに随分と手間取っていたのだが、何とか場所を把握する事が出来た。

（ええっと、あっちの道を歩いてそっちの大通りを渡って……ううっ！い、今すぐこの場で全部忘れちまいそうだ。インデックス「完全記憶能力保持者」や小次郎「忍び故、一度頭に入れた内容は中々

忘れない」はどんな頭をしてやがんだ……)

ぼんやりと考えながら、当麻はすぐ近くにあるバスの停留所を見た(当然、ここは目的地ではない。目的地まであと一キロ。当たり前だが、小次郎なら”その気”になれば、すぐ着く距離)。

(ちつくしよー……あー、バスで行く行かないより冷房の効いたトコに入りたい)

とあまりの暑さ(九月なので厳しい残暑)に思わずそう思ってしまふ。

と、その停留所に誰かがいる事に気が付いた。

当麻と同じくらいの身長のちよつと変わった修道服を纏ったシスターさんだ(しかもこの熱い中フル装備)。彼女は時刻表のくつついた停留所の看板を、調至近距離から食い入るように見つめている。

当麻は彼女の様子を横目で見ながら、

(む、シスターさんだ。……まさかインデックスの知り合いのジェノサイド修道女とかじゃあるまいな)

もの凄く失礼な事を考える当麻。まあ、そう思うのは仕方がないだろう。

何故なら、夏休み中色んな面々に酷い目に遭わされているからだ。だから警戒してしまう訳なのだが……。

「あの一……」

シスターさんの方から話しかけられた。その後、とてつもなく丁寧な日本語で語り始める。

「恐れ入りますが学園都市に向かう為には、このバスに乗ればよいのでございましょうか？」

丁寧な上にヘンテコな日本語だった。

当麻は立ち止まり、改めてシスターさんの方を振り返った。顔以外の全部の肌を隠しているが、逆にそのスタイルの良さが際立っている、奇妙な人だった。

「いや、学園都市行きのバスはねえよ」

「はい？」

「だから、学園都市は『外』との交通機関を切断しちゃってんの。つまりバスも電車も通ってない。乗り入れ契約してるタクシーなら入れるけど、普通に歩いていった方が安上がりだぞ」

「そうでございますか。それであなた様は徒歩で学園都市から出てきたのでございますね」

シスターさんがそう言ったので当麻は後ろを振り返ってみたものの、ここからではゲートは見えない（小次郎なら見えるのかもしれないが）。どうやって見たのか不思議に思い、シスターさんの方を見ると、彼女は袖の中からゴソゴソと何かを取り出した。

「こちらで確認したのでございますよ」

と取り出した安っぽいオペラグラスを指しながら、シスターさんは笑って言った。

と、そんな時、ボロボロの停留所に合わせたようなオンボロバスがやってきた。そして炭酸の抜けるような音と共に、バスの自動ドアが開く。

当麻はバスに乗る気が最初からないので、停留所から少し離れる。

そして、シスターさんの方を振り返りながら、

「とにかくバスに乗っても学園都市には行けねえから。許可証持ってるならそのまま歩いてゲートへ行けばいいよ。多分七、八分ぐらいで着くと思うけど」

「これはこれは。お忙しい中、ご助言いただき、まことにありがとうございます」

スタイル抜群なシスターさんはにこにこ笑いながらペコリと頭を下げて――

――そのまんまバスに乗り込んでしまった。

「って、おい！バスに乗っちゃ駄目だったろ五秒前に！」

「あ、はい。そうでしたね」

停まっているバスから両手で摘んでいそいそと降りてくるシスターさん。

そして、また同じ事の繰り返しをした後、バスの運転手は迷惑そう

な顔をしたままバスの自動ドアを閉めて乱暴に発進させていった。ぽけーっとバスの後ろ姿を見つめるシスターさんの事が物凄く心配になってきた当麻。

そんな当麻の心の内など一切気付かないシスターさんは、

「おや、何かイライラしているように見えるのでございますね。飴玉などはいかがでございますようか？」

「いや別にイライラしてねーけど。飴？何これ、オレンジ味？」

オレンジ色の飴玉を受け取った当麻はそれを適当に口の中に放り込む。すると、

「にっがあ！？何だこれ、明らかにオレンジじゃねえ！」

「はあ。渋柿キャンディだそうでございます。詳しい話は良く分からないのでございますが、喉が渴かなくなる効果があるとか」

「……。あー、それ唾液が出やすいからな。でもこの炎天下で元々体の中に水分が少ない場合は何の意味もないから」

「まあ。水分が足りていないのでございますか。それならそうと言っていただければ、お茶の用意はございますのに」

「何で修道服の袖の中から魔法瓶が出てくるのかとかもう聞かなくていいや。背中から木刀取り出すヤツもいるし。気にしたら負けな気がする。そっちはホントにありがたいかも。中身は何なの？」

「麦茶でございますよ」

「おっ、もうもうらう」

当麻は素直に喜んだ。真夏にはキンキンに冷えた麦茶が一番だ、と思いつながらシスターさんから魔法瓶のフタ兼カップを受け取ってみると、

「ーって熱う！何で麦茶なのに沸騰してんだ！？」

「はあ。確か、熱い時に熱い飲み物を用意するのがこの国の嗜みでございますよう？」

「おばーちゃん？そうか、おばーちゃんだな！さっきから何か言動が怪しいと思ってたらおばーちゃん的思考回路の持ち主なのか！？」
当麻は叫ぶが、シスターさんはニコニコと善意の笑みを浮かべてい

るだけだ。

シスターさんのその悪気がない様子に、当麻は怒りを沈めて（それでも若干ブルブル震えながら）、凄く熱い麦茶を飲み干していく。

「……、さんきゅー。あとそれから、ちょっと質問するけどさ。シスターさんは学園都市に行きたいって言ってたよな？」

「はい、はい」

「えっと、さっきも言ったけど、街が発行してる許可証はちゃんと持ってるのか？」

「許可証、でございますか？」

やっぱりキョトンとした表情を浮かべるシスターさん。学園都市に入るにはある理由から街が発行している許可証が必要だ。

そう伝えると、天然シスターさんはどこか困ったように頬に手を当てて、

「その許可証というのは、どこでもらえばよろしいのでございますようか？」

「……、ごめん。一般の人はどんな努力をしても発行してもらえないぞ。街の生徒の肉親とか、商品・資材の搬入の為の業者とかなら可能性はあるけど、それでも審査はあるし」

「はあ。それでは、もう諦めるしかないのでございますね」

シスターさんはションボリと肩を落とす。その様子を見て、

（でもこればかりはどうしようもないしなあ……）

当麻はちよつと罪悪感に駆られた。ふといつの間にかシスターさんが『それでは』と言って学園都市のゲートへ向かって歩き出している事に気が付いた。

「だからアああああ！！許可証がなきゃ街に入れないって……聞けよテメエは！！」

言われてみれば、という感じでシスターさんは立ち止まって振り返る。

先程までほのぼのと笑っていたのに、彼女の顔はみるみる曇っていくのが分かる。

そんな顔をするシスターさんに当麻は思わず怯みかけてしまう。どうやら彼女には魔術師や超人こじろうのようにポンポン壁を乗り越えていけるようなスキルは持っていないようだ。

そして、暫く悩んだ末、当麻は持ち前のお人好しスキルを発動した。

「なあ。お前は どうして学園都市に行きたいんだ？」

はあ、とシスターさんはちよつと首を傾げてから、

「実は私、追われているのでございます」

と言った。

それを聞いた当麻は嫌な予感がした。

「追われ……？」

「はい。ちよつとしたイザコザがありまして、ただいま絶賛逃亡中なのでございます。学園都市は教会諸勢力の手が及ばない所だとお聞きしているので、できればそこへ逃げ込みたかったのでございますが」

「教会……。なあ、それってもしかして魔術師絡みなのか？」

当麻がそう言うと、シスターさんはびっくりした顔で、

「何故、魔術師の存在を認めているのでございましょう？」

「その反応は、ビンゴって事か」

当麻は溜め息を吐いて話を続ける。

「学園都市、か。本気でお前が追われてるんだとしたら、街に入っただけじゃ完璧とは言えねーぞ。つか、それぐらいじゃ気合い入ってるヤツはバンバン侵入してくるし」

当麻は今までの経験から魔術師の特性を理解している。

「それでは、どうすれば——」

シスターさんはやや泣きそうな顔になる。当麻としては魔術師がどれほど危険な連中なのかは分かっているので、彼女を放っておくのは気が引ける。小次郎が、今この場にいれば彼に任せるのだが……。

「——バスの路線図を読む事ができるのでしょいか？」

「何個前の話だよ！しかも路線図ってなんか新ワードが追加されるし！学園都市に入る入らないの話はどこ行った！？」

当麻はツツコミの叫びを上げる。

キョトンとした顔の天然シスターさんに当麻は本気で頭を抱える。

色々当麻が考えた所で、ふと名案が浮かんだ。

（あれ。……、じゃあシスターさんと一緒にインデックスの所に行けばいいんじゃない？……脅迫状には一人で来い、なんて書かれていた気がするけど、別にいいよな）

この時は名案だと思った。そう、この時は。

一方、小次郎がゲートを目指して歩いていると、

「ちょっと、小次郎！貴様、こんな所で何をしているのよ？」

と声をかけられた。声からして自分と同じぐらいの年の少女だと分かる。

声のした方を小次郎が振り向くと、そこには見知った顔がいた。

「ん？誰かと思いきや吹寄の制理ちゃんじゃねーか。そっちこそどうしたんだよ？」

声をかけてきたのは小次郎や当麻（ついでに土御門元春も）の通う学校のクラスメイトであり、ちょっとした事情（第六・五話の冒頭、地の文参照）で小次郎の事が”気になっている”少女だ。彼女は夕食の買い物帰りなのか、スーパーのビニール袋を左手に提げている。まだ寮には帰っていないのか、制服のままだ。

彼女はクラスの中では背が高い方でスタイルも良い。いつもの制服姿なのだが、ぐぐつと胸が盛り上がっているのが一目で分かる。黒い髪は耳に引っ掛けるように分けられていて、おでこが大きく見えるようになっていいる（かと言って、決して彼女は、おでこキャラではない）。

ふきよせ せいり
吹寄制理。

クラス中では、美人なのにちっとも色っぽくない鉄壁の女とか呼ばれていたりする。

だが、小次郎自身は最初会った時こそ彼女の事を知人と同じようなタイプだと思っていたのだが、話してみたら”あの女性”とは全くタイプが異なる上に今では（会って一週間しか経っていないが）真面目で不器用だが、友達を思いやれる事の出来る凄く可愛い『美少女』と思っている。

話を戻そう。

小次郎に逆に問いかけられた制理は冷静に、だが、少し焦ったように、

「何って、買い物よ。夕食のね。ところで貴様は何をしているのよ？見たところ買い物じゃないのは確かみたいだけど……」

「ああ。ちょっとした野暮用だ。制理が気にするような事じゃねえから安心しな！」

少し頬を染めつつ質問する制理に対し、穏やかに微笑みながら答える小次郎。

「そう。野暮用が何なのか分からないけど、あまり遅くに帰宅しないようにね。明日も大覇星祭の準備があるんだから」

「ああ。そんじゃまた明日な、制理。それと俺が言えた義理じゃねえが暗くなる前に帰れよ。最近物騒だからな」

「貴様に言われなくても分かっているわよ。貴様こそ完全下校時刻までには帰りなさいよ」

分かってらあ、と小次郎はヒラヒラ手を振りながら返事をしてそこから歩き去って行った。

制理はその後ろ姿をどこか寂しそうな顔をしながら暫く見つめた後、帰路に着いた。

その頃、ステイルとインデックスは薄明座の大ホールから出て、元はチケット売場だったはずのロビー跡地を歩いていた。

彼らの少し前を、漆黒の、そして独特な修道服を着たインデックスより少し幼い少女が先導していた。

彼女はローマ正教のシスターで、名をアニエーゼⅡサンクティスと言う。

「状況はもうメチャクチャ。情報も錯綜しちゃってオルソラはどこへ行ったのやら、って感じですか。『法の書』の方も確保したって情報は上から上がってきやしませんし、こっちもヤバめな感じですよ」

アニエーゼは流暢な日本語で言った。

「一応、さらわれちゃったオルソラを輸送してた天草式への奇襲は成功って事なんですけどね。ウチの誰かがオルソラを救出したはいいものの、そいつが本隊に合流する前にまた天草式にかっさらわれちゃったんです。それで彼女を再び取り戻すと、さらに天草式の別働隊にかっさらわれて……ってな感じの繰り返し。索敵の包囲網を広げすぎたのが仇になりましたね。総合的に人数が多くて、一部隊一部隊の人数が少なくなっちゃったんで、そこを付け込まれました。そんなこんなで何度も何度も何度も何度も奪還・強奪を繰り返してる内に、いつの間にか追っかけてたはずのオルソラがどこかに消えちゃってたって訳なのですよ」

アニエーゼの独特な言葉遣いに色々考えていたステイルに、少女はクルリと振り返る。短いスカートがヒラリと舞って、白い太股が実際大きく露わになる。

「何か？ ああ、すいませんね。^{クイーンズ}英国語も出来るんですが、どうしてもイタリア語の訛りが残っちゃうのですよ。普通ならあんま気にしないんですけど、相手がイギリス人の場合だけは例外という事をお願いいたします。言葉は地元の方には敵いませんからね」

ステイルは特に気にした様子もなく口元の煙草を揺らしながら、

「いや、別に気にしてないよ。何ならこちらがイタリア語に合わせても構わないけど」

「それはやめてください。イギリス訛りの母国語なんて聞いちゃったら吹き出しちゃって仕事になりません。こういうのは、共通の外国語である日本語を使うのがいいですよ。”お互いに言葉遣いが変わなら”ケンカにならないですから」

パカパカとアニエーゼが履いている厚底サンダルが馬の足みたいな音を出す。

インデックスはさっきから黙ったまま、一言も声を発していない。ご機嫌斜めな少女の顔をステイルはチラリと見て、それから再びアニエーゼの方へ視線を戻す。

「それで、お宅から『法の書』とオルソラ・アクィナスを拝借したっていう天草式だけど、君達にとってそれ程脅威的な勢力なのかな」
「そりゃ言外に『ローマ正教は世界最大宗派の癖に』って言ってますね。いや実際、返す言葉ありませんよ。数や武装ならこちらが上なんですけどね、連中は地の利を生かして引っ掻き回しやがるんですよ。日本はヤツらの庭ですから。数字の上で不利なはずの相手に手傷を負わされるってのは結構頭にきちまうんですがね。悔しいですが、ヤツらは強いです」

「……、となると、簡単には屈しないって訳か」
ステイルの声がわずかに苦くなる。

「僕は日本の十字教史には疎いから良く分からないんだけど、天草式の連中はどんな術式を使うか分かるかな。それによって、探索や防御の為の陣や符を用意できるかもしれない」

神父に質問されたアニエーゼは困った顔で、

「実は……こっちは正確には天草式の術式は解析できちゃいないんです。ザビエルイエズスの耶蘇会が元になってんならヤツらもローマ正教の傍流という事になるんでしょうが、もはや匂いも残っちゃいません。チャイニーズやジャパニーズオリエンタルなど東洋系の影響力が強すぎるんです」
それを聞いても、ステイルは特にアニエーゼを責めたりはしない。

あれだけの小競り合いで、それだけの情報を分析が出来ただけでも上々と言える。

ステイルは今度はインデックスに意見を求める為に視線を移す。

「天草式の特徴は『隠密性』だよ。母体が隠れキリシタンだからね。十字教を仏教や神道によって徹底的に隠して、儀式と術式を挨拶や食事や仕草や作法の中に隠して、天草式なんてモノは初めからなかったように全ての痕跡を隠し通すの。だから天草式はあからさまな呪文や魔法陣を使わない。お皿や茶碗、お鍋や包丁、お風呂やお布団、鼻歌やハミング……こうした一見どこにもある物を使って魔術を行うんだよ。多分、プロの魔術師でさえ天草式の儀式場を覗いた所で正体は分からないと思うよ。だって、普通の台所とかお風呂場にしか見えないはずだもん」

ステイルは口の端の煙草をゆっくり上下させ、

「となると、偶像のスペシャリストといった所かな。ふむ、近接格闘戦より遠距離狙撃戦の方が得意そうだね。グレゴリオの聖歌隊のような大規模なモノでない事を祈りたいけど」

「ううん。天草式は鎖国時にも諸外国の文化を積極的に取り入れていて、洋の東西問わず様々な剣術を融合させた独自の格闘術も身に付けているの。彼らは日本刀からトゥヴァイハンダーまで何でも振り回せると思う」

「……、文武両道か。面倒な連中だ」

ステイルは忌々しげに吐き捨てた。ちなみにアニエーゼはいつの間にか会話の輪の外に追いやられた為かいじけ虫になっている。

煙草をくわえた神父はいじけて床を蹴っているアニエーゼの方に振り返り、

「それで、『法の書』及びオルソラ・アクィナスの搜索範囲はどこまでなのかな。僕達ものんびりしていられないだろう。どこを捜せば良い？」

「あ、はい。搜索はこちらで行ってんで大丈夫です」

話題の中心に戻ってこれたアニエーゼは少し慌てて姿勢を正し、

「人海戦術はウチの専売特許でね、今も二五〇人体制でやってます。今さら一人二人増えた所で何も変わりやしませんし、命令系統が違うんでかえって混乱しちまう恐れもありますんでね」

「……？それなら、どうして僕達はここに呼び出された？」

ステイルがわずかに眉をひそめると、少女は口の端を吊り上げて笑いい、

「簡単ですよ。ウチらに調べらんないトコを調べて欲しいんです」

「例えば？日本にイギリス清教が直接管理する教会などない。僕達に断らなければ探索できない場所など、せいぜいイギリス大使館ぐらいのものかな」

「いいえ、学園都市ですよ」

アニエーゼはパタパタと手を振って続ける。

「場所柄を考えれば、ありえん話じゃないでしょ。オルソラが学園都市に逃げ込んじまえば、天草式は彼女を追えません。いや、追いつらい、ぐらいかもですね。だからあなた達には学園都市に連絡を入れて欲しいんですよ。ウチらローマ正教は学園都市との繋がりが無いんで面倒ですし」

「確かに……。しかし、それなら前もって教えてもらえると助かったかな。ちよっと昔の僕に良く言って聞かせてやりたい気分だよ」
彼女がそう切り出したのは、イギリス清教が学園都市とある理由から（禁書原作参照）細い糸で繋がっているからだ。全く繋がりが無いローマ正教がステイル達にそう頼むのはおかしくはない。

「……けれど、だとすれば面倒な所へ駆け込まれたもんだ」

「あくまで可能性の話なんです。我らがオルソラ嬢に、そんなぐらいの分別がつく心の余裕があんのを祈りましょう。で、連絡つか確認にはどんなぐらいの時間かかります？」

「ああ、電話一本……とはいかないか。一度、聖ジョージ大聖堂の方へ連絡を入れて、そこから中継して学園都市へラインを繋がなくてはならないから……緊急と言っても七分から一〇分はかかるかもしれないね。ちなみに学園都市への侵入許可となるとさらに面倒に

なる。技術的に忍び込むのは可能なんだが、役所的に考えるとそれは避けたい所だしね」

「取り敢えず確認だけでいんで、もちっと早くしてもらえっと助かりまー」

言いかけた所で、不意にアニエーゼの動きが停止した。

彼女の視線を追うと、ロビーの先にある建物出入り口がある。

「何だ？ 一体どうしー」

問い質そうとしたスタイルも動きを停止する。

「？」

最後にインデックスが二人の視線を目で追い駆ける。

出入り口のさらに向こうにある駐車場跡地に誰かがいた。

「あ、とうまだ」

インデックスは見慣れた少年の名を告げ、

「お、るそらⅡアクイナス？」

アニエーゼは、少年の隣を歩いている漆黒のシスターの名前を言う。名前を呼ばれた彼らは、まだ薄明座の中にいる魔術師達の存在に気付いていない。

薄明座の近くまで来る前に、色々あった（詳しくは禁書七巻を参照。もう嬉しいやら恥ずかしいやら分からない出来事）当麻はグツタリしていた。

駐車場跡地に入り、薄明座に近付いていく。

（さつてと、連中は中かな。外は暑いし……。それにしても小次郎遅いな。もう追いついても良い頃だってえのに、何やってんだ？ ま、いずれ来るだろう……）

当麻は薄明座の休業中みたいな感じの入場口へ目を向ける。

と、当麻達の前で五つ並んだドアの一つが手前に開いた。

「ありゃ？」

当麻は思わず声を出した。

中から出てきた三人の少年少女の内、二人（言うまでもなくステイルとインデックスの事）は見覚えがあるのだが、インデックスより幼そうな厚底サンダルを履いた少女だけは見覚えがない人物だった。と、インデックスは当麻の顔を見るなり、

「とうま、そのシスターさんとはどこで会ったの？」

「……、のっけからそれか。っつーかこっちも主にお前の横に突っ立ってる凶悪神父に聞きたいんだけどな、何でまたこんな手の込んだ誘拐ごっこんなかやってんだ。そしてこの炎天下ん中三キロもグダグダグダグダと余計に歩かされた理由もぜひ問い質したい！是非だ是非！是が非でもと書いてな！！」

叫ぶ当麻に、ステイルは面倒臭そうな顔で、

「ああなんだ。狂言だっていうのはバレていたんだね。君をここへ呼んだのは人捜しを手伝って欲しかったからだよ。禁書目録はその為の匣に使っただけだ。ちなみに現場責任者はこちら。ローマ正教のアニエーゼⅡサンクティス」

ステイルが適当に煙草の端で指すと、厚底サンダルのシスター少女が、

「ど、どーもです」

と頭を下げた。

当麻は絶賛怒りモードに突入しているが、流石に見ず知らずの人間にそれをぶつける事は出来るはずがない。

と、ペースを崩された当麻へステイルは畳み掛けるように、

「悪いが君の世迷言よめごんごいに付き合っている時間はないんだ。さっきも言ったけど、君をここへ呼んだのは人捜しが目的だ。今も二五〇人体制で搜索しているが一向に見つからなくてね、時は一刻を争っているんだ。人の命が関わる問題だから速やかに協力して欲しい」

「世迷言って……。協力を求めている癖にゲストって感じのいたわりが一切ないし！くそ、何だやもう！人の命が関わるってどういう事

だ、一からちゃんと説明しろ！つつか素人の俺なんか人捜しのスキルなんてねーぞ！小次郎じゃあるまいし！そんな大事な事を”一般”の高校生なんぞに任せんじゃねえよ！」

「ああ、大丈夫大丈夫。その『こじろう』なる人物に頼まなくても、君の隣にいるシスターをこっちに引き渡してくれば良いだけだから」

『はい？』と当麻は目を点にする。

ステイルは心底つまらなそうに煙草の煙を吐いてから、

「だから、君の隣にいるシスターが行方不明の捜し人だよ。名前はオルソラⅡアキナス。はいお疲れ様。いやあ良く頑張ってくれたね。上条当麻、君はもう帰って良いよ」

「……、あの。狂言誘拐^{ドッキリ}かまされて、出所の怪しい学園都市の外出許可を片手に街から出てきた挙げ句、四〇度弱の炎天下の中を三キロも歩き続けたわたくしめの立場は？」

当麻は俯いてブツブツと言いついて出したが、
「だからお疲れ様と言っているじゃないか。何だ、カキ氷でも奢って欲しいのかい？」

俯いて齒軋りする当麻に、インデックスがあわわわと顔を青くする。

そして、ブツン、と当麻のこめかみの辺りから面白い音が聞こえ、

「これまではさ。馬が合わないと知りながらも仲良くやっていこうとは思っていたんだ。本当だぞ。本当に思っていたんだぞ？ああ、今この瞬間まではな！！」

「じゃれてないでさっさとオルソラをアニエーゼに引き渡せ。何だ、君はもしかして構って欲しいのか。生憎と僕は君の寂しさを埋める事は出来ないし気持ちが悪いくらいしたくない」

せっかくマジギレしたのに、それをあっさりスルーさえた当麻はそのまま燃え尽きたかの如く崩れ落ちた。

「う、ううううううう。今日はもう晩ご飯を作る気力もありません。インデックス、今日のご飯はおざなりなお持ち帰りのブタ丼

に決定ね」

『えっ！？とうまー！』と叫ぶ同居人を無視して当麻は漆黒のスタイル抜群天然シスター改めオルソラの方を振り返り、

「……そういや、お前誰かに追われてるって言ってたけど、この『人捜し』と関係してたのか？ま、お仲間と合流出たんならもう大丈夫だろうけど」

当麻が声をかけると、オルソラは何故かビクンと体を震わせた。

当麻は首を傾げた。どうもオルソラは当麻ではなくステイル達を見ているようだ。

と、その様子を見たステイルはつまらなそうに片目を閉じながら、
「ふむ。不安になる必要はないさ。僕達イギリス清教も仕事が終わればさっさと撤退する。ま、その程度の警戒心は持っていてしかるべきだとは思うけどさ」

部外者である当麻にはみんなまとめて『教会の人』とか『魔術世界の住人』と一括りに思えてしまうが、そんな単純なモノではないらしいな、と考えていると、

『いやいや。そうそう簡単に引き渡されても困るよなあ？』

不意に、野太い男の大きな声が聞こえた。

声は不自然にも、当麻の真上——夕空に浮かぶソフトボールぐらいの紙風船から聞こえてきた。

『オルソラ！アクィナス。それはお前が一番良く分かっているはずよな。お前はローマ正教に戻るよりも、我らと共にあった方が有意義な暮らしを送る事ができるとよ』

瞬間。

ゾフー！という鋭い音と共に、当麻とオルソラを遮るように地面から一本の剣の刀身が飛び出た。それは死角からの不意打ちと同じ事であった。

さらに二本、彼女を囲むように、ゾンギン！！と地面から剣が飛び

そして、三本の剣がオルソラを中心とした一辺二メートルの正三角形に地面を切り抜く。

ずず……、と重力の消える感覚にオルソラが戸惑いに近い声を上げ、それが明確に悲鳴になる前に彼女の体は暗い地下へと落下していく。

アニエーゼが叫んで手を伸ばそうとしたが、もう遅かった。オルソ
 うは既に暗い闇の底へと呑み込まれてしまった。当麻は慌てて穴の
 縁へと走り、忌々しそうに舌打ちする。

頭上の紙風船は要点を忘れていない、熱を帯びた声で、

『ローマ正教の指揮官さえ追つていれば、オルソラ・アクィナスがどこへ逃げようがどこへ逃げようが誰に捕まろうが、いずれはここまで連れて来られると踏んでいたのよ。まったく地下を辿って待ち構えていた甲斐があったというものよなあ!!』

だが、これだけは分かる。

彼らが事前に計画して、問答無用で刃物を使って人間を奪った、という事を。

当麻は正三角形に切り抜かれた穴の中を覗き、それ程高くないと確認した後、飛び降りようと穴へ向かっていき、

インデックスが思わず叫んだ瞬間、

ギラリ、と。闇の中から、何十もの刃の光が閃いた。

その光景はまるで獲物を待ち構える山賊のようだった。

その時、ブワリ、と熱風のような殺意の塊が溢れ出し、当麻の顔へ直撃する。

一瞬だけとはいえ、確実に動きを封じられた当麻の隣でステイルはルーンを刻んだカードを取り出した。

四枚のカードを自分の周囲の地面へと投げて配置し、

「我が手には炎（T I A F I M H）、その形は剣（I H T S O T S）、その役は断罪（A I H T R O T C）ー！ーッ！」

ステイルが叫んで煙草を真上へ弾き捨てる。煙草の軌跡を追ってオレンジ色のラインが引かれ、次の瞬間、そのラインに従うように炎の剣が彼の手から飛び出した。

新たに生まれた強力な光源に、下水道の闇が一気に拭い去られる。ステイルは炎剣を大きく振りかぶるものの、そこで動きを止めてしまう。

何故なら、もうそこには誰もいなかったからだ。

フワフワと頭上を浮いていた紙風船が、ゆっくりと降りてきて、正三角形に切り取られた穴の中へ消えていった。

「ちくしょうが。何がどうなってやがんだ」

当麻は吐き捨てるように言った後、

「おい。テメエーから十まで説明する気あんだろうな？」

「説明は、僕の方が求めたいぐらいだね」

ステイルが踏みにじるように答えた時、ひゅーううう、と風が吹いた。

『フッ……後を追いかけて来てみれば、随分と面白おもしろえ事になってんじゃないねえか、当麻にインデックスよ……』

風と共に、当麻やインデックスにとっては聞き慣れた、ステイルにとっては始めて聞く活発そうな少年の声がそこに響いた。

「誰だい!？」

「……やっと来たのかよ……」

「! ……もしかして!」

ステイルが風の吹く方に向かって睨み、当麻はやや呆れながら呟き、

インデックスは嬉しそうに言う。

風が吹いてくる方向から現れたのは……、

「小次郎／こじろう!!」

「何だって!?!」

「?」

当麻とインデックスは、友の名を叫び、ステイルはインデックスに聞かされていた彼女の（学園都市にいるはずの）新しい友の出現に驚き、アニエーゼは怪訝な顔をした。

そんな四者四様のリアクションに全く動じず、少年は静かに穏やかな笑みを浮かべながら口を開く。

「こっちの様子は聞いていたから、状況は大体分かってる。けどよ、もう少し詳しく知りてえ。誰か説明してくれねえか?」

そんな何気なく言う小次郎の様子に、当麻は若干怒りを込めた震える声で

「……なあ、小次郎。お前何でこのタイミングで来たんだ? お前ならもう少し早く来れたろ?」

「ん? どうした当麻。そんなに震えて。……さては俺に会えなかったのが寂しかったのか? ソイツは悪い事しちまったな」

その台詞に当麻は遂に吼えた。

「何で質問に答えねえで、そういう話を言うんだよ! んな事ア良い! どうしてさっさと来なかったんだよ! ? お前がいてくれりゃオルソラはさらわれなくて済んだかもしれないねえんだぞ! ?」

「カリカリすんなよ。真打ちってのはよ、遅れて来るもんだろ? それにさらわれた女の子を敵地で助けてこそ男の株が上がるんじゃないか」

「確かにそうだけど! でも一体何やってたらこんなに遅れんだよ! ?」

「ああ。ちょっと腹拵えに夕飯を、な。それで食休めにゆっくり歩いてきたって訳だ」

「遅刻の理由、それ! ? 俺なんかまだ全然食ってないんだぞ! 返せ

！俺の、いや、俺達の夕飯時を返せ！！」

一応緊急事態なのにぎゃあぎゃあと一方的に騒ぐ当麻とそれをのりくらりとかわす小次郎（しかし、そこには陰悪な雰囲気は見当たらなかった）を呆然と眺める三人。

「あの二人はいつもあんな感じなのかい？」

暫くして気を取り直したスタイルはインデックスに質問する。

それに対し、

「うん！いつもだよ！」

嬉しそうに元気良く答えるインデックスだった。

漸く陽が落ちて夜を迎えていた人工物に固められていた海岸に、二人分の人影があった。

しかし、殆どの人影は気絶しているのか、地面に転がったままピクリとも動かない。中には海中に沈んでいる者もいた。

そんな人影の中にただ一人だけテトラポットの上に佇む者がいた。それは女性だった。いや、まだ年齢的にも小次郎から見てもまだ、少女と呼べる人間である。

湿った夜風が彼女の髪を軽く揺らした時、宙から一人の騎士が地面に落下してきた。ゴン、という鐘のような音が夜の海岸に鳴り響く。よく見ると、辺りを転がっている人影も騎士である。

彼らは、勅命により”今回の件”でイギリスから派遣された騎士達である。皆が皆、（風魔の戦士達には及ばないものの）屈強な肉体を誇っているはずなのに、この女性の前では手も足も出なかったの

だ。

「加減はしたつもりです。この程度なら死者が出る事はないでしょう。そちらが頑丈な装備で身を固めていたので、こちらとしてもやりやすく助かります」

「き、さま……」

静かな声を侮辱と受け取って、騎士は立ち上がろうとする。だが、体の芯を揺さぶられた為、指先を動かすのが精一杯だった。

だからこそ、騎士は唯一動かす事の出来る口を必死で動かす。

「分かって、いるのか。貴様が今、攻撃したのは一体誰なのかを。貴様が今、牙を剥いたのは三つの約と四つの地を束ねた連合国家そのものだぞ」

「私もその一員です。ローマ正教やロシア成教など多宗派ではなく、同じイギリス清教内でのトラブルなら上の御方がどうとでもしてくれる事でしよう。……、と」

声を放った騎士が意識を失っている事に気付き、女性は言葉を切った。

女性の名は、かんざき かおり神裂火織。

イギリス清教の一員にして、元・天草式の女教皇トッテだった女性だ。

「海へ落としてしまった方もいましたが……まあ、潜水術式はまだ解除されていなかったようですし、溺死の心配はないでしょう」

火織は一度だけ暗い海面に目をやってポツリと呟いたが、

「そーんな心配そうな目で言われても迫力に欠けるぜい？」

「!？」

聞き慣れた声に、火織は初めて動揺を浮かべて振り返った。短い金髪をツンツンに尖らせて、青いサングラスをかけた、アロハシャツにハーフパンツの少年が立っている。

土御門元春だ。

彼の立っている場所を見て、火織は驚いた。元々彼女の鋭敏な感覚

は人の気配は逃さない（若干例外が一人いるが）。……はずなのだが、ほんの一〇メートル先にいる元春を見ても、”まだ気配を感じる事が出来なかった”。

「私を止めに来ましたか」

刀の柄へと手を伸ばす火織に、しかしサングラスの奥の瞳は笑ったまま、

「やめよーぜい。神裂火織、”テメエじゃオレには勝てねえよ”」
これだけの状況を前に緊張も見せず、武器も持たず、構えすらとらない。

「”テメエ”はどんなに強くても人を殺せない。そして能力者のオレは、”テメエ”と戦う為に魔術を使っただけで死にかねない。さて、この勝負。勝とうが負けようがどの道オレは死んじまうんだが、カミカゼボーイ土御門さんを殺して先へ進む覚悟は出来てんのかよ？あア？」

火織は奥歯を噛み締める。

彼女は人を死なせない為に術式を操り戦う人間だ。誰かが死ぬ戦いなど彼女の性質を考えれば、許容出来るはずもない。

刀の柄に触れる指が、カチカチと震えるのが分かる。

と、元春は一転して、無邪気な笑みを浮かべた表情になり、

「別に睨まんでもいいぜよ。オレはねーちゃん個人を止めるようには言われてない。ねーちゃんが問題を起こしそうな事柄に先回りして排除しろとは言われてるけど。それにこっちにはこっちの仕事があるんだぜい」

「仕事……ですか？」

「そ。ローマ正教と天草式がドンパチやってる隙に、その横から『法の書』の原典を掠め取って来いっつーありがたい命令ぜよ」

火織の目がわずかに細くなる。

「それは”イギリス清教と学園都市、どちらの命令ですか”？」

「さあってな。ま、常識で考えればすぐ分かると思うぜい。”普通に考えて”、魔導書を欲しているのは魔術世界と科学世界、どっち

でしょーかー？つか、オレが”どっちのスパイなのか”を考えりやすぐに分かるわな」

元春の言葉に火織は黙り込む。

両者の間に冷たい空気が流れる。

暫くの後、先に視線を外したのは火織だった。

「……、私はもう行きます。上へ報告したければご自由に」

「そうかい。あー、のびてる連中は回収しとくぜい。警察に拾われでも面倒だし」

その元春の言葉に、火織が感謝の言葉を言おうとした時、

『その必要はない』

と、静かな男の声がした。

「「!？」」

突然の男の声に二人は驚く。

火織は最近知り合ったある青年の声に。

元春は自分の知らない人物の声に。

すると、突如意識を失い倒れていた騎士達が全員（海中に沈む者含む）見えない”力”によって宙に浮かび上がった。

「なっ!？こいつは念動力!？テレキネシスそれかなり高レベルの……!？一体誰が!？これ程の力を有する念動能力者は見た事も聞いた事もないぜよ!」

「……こんな事が出来る者は私が知っている人間の中ではただ一人しかいません……」

冷や汗をかいて告げる火織の言葉に思わず振り向く元春。

「何だって、ねーちゃん!それは誰ぜよ!？」

「土御門……。あなたも一応、《必要悪の教会》の一員なのだから最大主教から聞いているでしょう。”彼”こそ最近、彼女の専属護衛となった……」

そう火織が言いかけている間にその人物は海岸に現れた。

穏やかな”風”と共に一瞬で。

「なっ！？空間テレポート転移だ！？それじゃあ、この男が！！」

「……、そうです。この青年が……」

彼女達の前に現れたのは、黒い長髪をした学生服を纏った隻眼の青年だった。

「独眼竜……竜魔」

火織が青年の名を告げた後、数秒間の沈黙があった。

数秒間の沈黙の後、最初に切り出したのは元春だった。

「お前さんが、ウチらのお姫さんが言っていた、竜魔ってヤツかにやー？会えて光栄ぜよ。オレの名は、土御門元春。どうもよろしく願いますぜよ」

そう胡散臭い笑みを浮かべながら話しかけてきた元春に竜魔は表情を変えずに、

「……お前が土御門元春か。ローラから話は聞いている。”大切な者”を護る為なら、何でもやる男だな……成る程、確かにそのような空気を漂わせる男のようだ」

「！ハッ……お前には何でもお見通しして訳か。本当に大した男だぜい」

その台詞を口にした元春の顔はいつもと変わらぬニヤけた顔であった。

それから、竜魔と元春は暫く会話を続けていた。

しかし、それは一般人から見ると何気ない会話に見えるのだが、そこには素人には決して分からない緊張の糸が張り巡らされていた。

暫く黙って二人の会話を聞いていた火織だったが、

「……竜魔。あなたは私を止める為に日本に来たのですか？」

不意に火織は緊張しながら、元春と会話していた隻眼の青年に問いかける。

すると、竜魔はかぶりを振り静かに答えた。

「いや、俺の『仕事』は”それ”ではない。俺の通る道に偶々お前達がいただけだ」

「……、では何故日本に？」

ホッと安心した後、火織は竜魔に訊く。

「なに、ローラからの直接の依頼でここに来たに過ぎん。だからお前が気にする事はない。……ここは俺達に任せて、もうお前は行け。やる事があるのだろう？」

「そうですね。ではここはお二人にお任せします」

律儀に頭を下げる火織に向かって、竜魔と火織の会話を黙って聞いていた元春が一言彼女に訊いた。

「ところで、ねーちゃんはイギリスから遠路はるばる何しに来たんだにゃー？」

火織は頭を下げたまま、ピタリと止まった。

ジャスト一〇後、彼女は頭を漸く上げ、

「さあー」

彼女は怒っているような、今にも泣き出しそうな、それでいて無機質な笑みを浮かべながら言う。

「ーー本当に、何がしたいんでしょうかね。私は」

第七話 戦士達の合流（後書き）

次回は遂に天草式とのバトルです（予定）。
それでは、また。

第八話 作戦会議（前書き）

今回、天草式との闘いまでを書こうかと思っていましたが、長くなりすぎた為、二話に分けました。

あと、この話を投稿する前にアクセス数を確認したら、何と、PV 10000を突破していました。

アクセスしていただいた皆様、本当にありがとうございます。これからも私めの作品を読んでいただけたら大変嬉しいです。

それでは、本編スタートです。

第八話 作戦会議

陽が沈み、夜が訪れた。

だが、夜の到来は決して静かなモノとはならなかった。多くの修道女達が指揮官であるアニエーゼの指示に従い、バタバタとあちこち動き回っている。

そのような慌ただしい夜の中で、小次郎、当麻、インデックス、ステイルの四人は少し離れた所に固まっていた。

多くのシスター達が活動している中、当麻が空腹を訴えるお腹を気にしながら、

「あのさ、自発的に来た小次郎はともかく、そもそも何で俺やインデックスはここに呼び出されたんだ？何かやるにしても実質、動いているのはローマ正教の人達だけじゃん。俺達は完全に手持ち無沙汰だし、それならここににいる意味ってあんまないんじゃないの？」

「……、いや。そろそろ僕達の増援も到着してなくちゃならない頃なんだけどね。何をやっているんだ、騎士団の連中は」

ステイルは苦しそうに煙草の煙を吐いて言葉を続ける。

「それから、約一名『イレギュラー』がいるけど、この件には僕達の力は必須だよ。いや、正確に言うなら彼女の力だけどね」

彼女の、とはインデックスのという意味だ。

「こいつの？」

「何となく予想が付くけどな……」

「コジロウだったかな。君は上条当麻とは違って、勘が良いみたいだね。そう。魔導書絡みなんだよ、今回の件は。それも『法の書』の原典ときた」

割と自己完結っぽく言うステイル（＝説明する気ゼロ）に代わり、インデックスが小次郎と当麻に説明する。

説明を聞いた後、

「……成る程。当麻がやけに焦っていた訳が漸く分かったぜ」

（あまくさしき。……天草式？）

小次郎はどういう状況なのかを再認識し、当麻はどこかで聞いたような名前だな、と首を傾げていた。

そして、当麻の頭の中に疑問が浮かび、訊ねる事にした。

「誰にも解読できない、ねえ。インデックスでも無理なのか？」

「無理だよ。一応やってみたけど、あれは普通の暗号とは違うかも」

「暗号とは違う、か……。どんなモンなのか見た事はねえが、『忍び文字』とも違うんだろ？」

「うん。三日前にこじろくに”それ”を見せて教えてもらったけど、やっぱり違うモノだよ」

「あのさ。その『誰にも読めない魔導書』って、そんなに価値があるものなのか？だって、誰も読んだ事がないんだろ。実はただの落書きかもしれないじゃねーか」

「かもしれないね」

インデックスは簡単に認めた。しかし、その様子は大人の余裕めいたモノを感じる。少なくとも見た目は小次郎や当麻よりも年下なのに……。

ステイルは短くなった煙草を吐き捨て、踏み潰し、

「『法の書』に書かれた術式はあまりにも強大すぎて、それが使われれば十字教が支配する世界が終わりを告げるとまで言われるいわくつきの魔導書さ。真偽なんていちいち確かめたくもないね、封が守られるならそのままにしておいた方が良いに決まっている。何せ、一説には人の理を超えた天使の術式すら意のままに操れるとまで言われてるんだし」

その言葉に、当麻が凍り付き、小次郎の目つきが険しくなった。

「「てん、し……だって？／……天使だと？」」

「うん？宗教を信じない国の住人である君達には少し奇抜すぎて想

像がつかないかな」

ステイルがそんな二人を嘲るように言ったが、違う。

当麻は”あの時”の事（禁書原作四巻参照）を思い出して冷や汗をかき、小次郎は神やその眷属である天使が自分が元いた世界で『聖剣』というモノを創り出した結果、どのような歴史を歩んだのかを思い出した為、凄まじい『怒気』を発生させた。

その小次郎の空気をすぐに感じたのだろう。

（な、何だ！？少なくともこれは”素人”の出せる『気』じゃない。この僕がここまで気圧されるなんて！……どうやら彼に対する認識を改めなければいけないかな）

（そういえば、こじろうは神様を激しく憎んでるんだった。やっぱり、宗教の話はあんまり振らない方がいいのかも……）

ステイルは、驚愕の表情を浮かべながら（少し冷や汗をかいている）小次郎に対する評価を改め、インデックスは、彼が激しく神やその眷属を激しく憎んでいる事を思い出した。

暫しの間、物凄く重苦しい空気が流れる。

そんな空気を壊したのは、当麻だ。

「でも……やっぱり、誰も『法の書』を解読した事がないっていうなら、本物かどうかは」

当麻が唾を飲み込んで言うと、漸くその雰囲気から脱したインデックスはこくりと頷いて、

「うん。でも『法の書』に関してはきつとクロだよ、とうま。あれを執筆する為に筆を尽くした魔術師っていうのがもう伝説級なの。それこそ新約聖書に登場してもおかしくないレベルのね。彼が活躍したのはほんの七〇年ぐらい前なんだけど、その七〇年で数千年を超える魔術師の歴史は塗り替えられてしまったと言っても過言じゃない。現在いる魔術師の二割は彼の亜流だし、何らかの影響を受けている程度なら五割に届くかもしれない程の実力者だったの」

インデックスの言葉は真剣で、当麻は下手に口を挟めなかった。（その代わり、小次郎の雰囲気がいっもの調子に戻っていたが）

「『法の書』は本物だと思う。もしくは、ウワサ以上の代物であっても私は驚かないよ。だって、もう”それ以上”かもしれない神秘を私は見ちゃったしね」

インデックスが小次郎を見ながら言う。

数秒経ってから、漸く当麻が口を開く。

「その……『彼』ってのは？」

「……………」

「エドワードIIアレクサンダー。またの名をクロウリー。今はイギリスの片田舎の墓で眠っている」

ステイルは新しい煙草に火を点けて言葉を続ける。

「一言で言えば、最悪の人間だったと記録されているね。ある魔術実験では守護天使エイワスと接触する器として共に世界旅行に出かけていた妻の体を旅先で使っているし、娘のリリスが死んだ時も顔色一つ変えずにmagicの理論構築を行っていたそうだ。しかも、その実験では娘と同じ年ぐらいの少女達を犠牲にしていたらしい。……一応、それらの功績として別世界―天界や魔界などと呼ばれる『層の異なる重なった界』の新定義を見出し、それまでの魔術様式を一新したんだがね」

ここまで話した所で風向きが変わったらしく、それに併せてステイルは立ち位置を変えた。そこは丁度、インデックスや小次郎に煙は向かわないが、当麻には向かってしまうという位置だ（ワザとそこに来たと思えない）。

「まあ、それだけ善悪好悪大小様々な逸話が多い魔術師としても知られているのさ。『法の書』もそうだ。奴は自分の進む道に迷うと、『法の書』を使った書物占いを行い、その内容を元に道を選んでいった。つまりは世界最高の魔術師の分岐点を―近代西洋魔術史全体の舵を取っていた魔導書って訳だ、『法の書』には何らかのいわくがあると踏んだ方が賢明だろう？」

自分で自分の言葉に嫌気が差したのだろう、ステイルは舌打ちした。「つか、そんなにヤバイ本だって分かってんなら何で処分しないん

だ？本なんて燃やしちまえば良いじゃねーか」

「……当麻、それが出来たら苦労はねえはずだぞ？」

それまで無言で聞いていた小次郎が口を挟む。

「何でだよ？」

「出来たらとうの昔にやってる。違うか？」

「うん。こじろうの推測通りだよ。魔導書は燃えない本なの。特に原典クラスになると、魔導書に記された文字、文面、文章そのものが魔術的な記号と化して、地脈や竜脈から漏れるわずかな力を動力^{パワー}源にした自動制御の魔法陣^{マジック}みたいになっちゃうの。だからせいぜい、封印するのが手一杯なんだよ」

インデックスは曖昧に笑ってからさらに続ける。

「でも、私が自分の記憶を手繰って原典の写本を書いてもそういう風にはならないんだけどね」

「『自動制御の魔法陣』を起動するには、やはり微弱でも人の魔力^{エンジン}がいるのさ。永久機関^{エンジン}を回す為のスターターとなる、”執筆者本人の魔力”がね。魔導書を書く魔術師の殆どは自分でも気付かない内に文字情報と共に魔力をページに刻み付けてしまう。それは筆記用具や画材を問わず起きてしまうので分かっても避けられないんだ。だけど、彼女はそもそも生命力を練って魔力を作る力がないから問題ないのさ。魔導書図書館の管理人としては打ってつけだろう？…

…何者かの作為があるのが気に食わないけどね」

「ふうん。そうなのか、インデックス」

「え、あう？すたーたー？えんじんって何？」

「大丈夫かインデックス！お前頭から湯気が出てるぞ！？」

「仕方ないな、僕が説明してあげよう」

補足説明してもらったはずのインデックスが一番困った顔になる（頭から湯気が出てる）。

それを見た小次郎は彼女を心配する。

そして、ステイルは彼女にやや嬉しそうにエンジンやスターターの事を律儀に教えようとしている。

そんなステイルを横目で見ながら、当麻は心の中で苦虫を噛み潰していた。

修道女達に指示を終えたアニエーゼが短いスカートを揺らしながら当麻達の元へ歩いてきた。

当麻は何故だか妙に身構えていたが、小次郎はいつもの自然体で立っていた。しかし、そんな彼女も彼女の次の言葉にやや驚く事になる。何故なら、

「あ、え、つと。こ、これから状況の説明を始めちまいたいんですのでけどそちらの準備は整っていますすごりますか？」

「……、」

「……………」

強烈な日本語が小さな修道女から出てきたからだ。

何やらカチコチに固まったローマ正教のシスターはフラフラと覚束ない姿勢で、顔を真っ赤にしている。

相当緊張してやがるんだな、と（外国人に対する）ファーストトークの緊張とは縁が全くない小次郎は思った。

「ど、どうも本場の日本人の方々に自分の拙い日本語を話すのは、き、緊張してしまっつたなて。あ、他の言語は使えますか。アベル語とかベルベル語とか、お互いの文化圏とは離れてるトコが好ましんですけど」

超早口で言ってきた。インデックスがそんな彼女に『落ち着け落ち着け深呼吸しろ』と思われる内容の外国語で言ってあげたようだ。ふと横を見るとステイルが暗い顔をして俯いていたので、小次郎が訊ねた。

「どうしたんだよ、ステイル。何か気分でも悪くなったのか？」

「いや、別に気分が悪くなった訳じゃないんだ。ただ、僕の知り合いにも奇妙な日本語を使う人がいてね」とステイルは返してきた。

アニメーゼはその發育してゐない胸に手を当てて何回か深呼吸する。暫くの後、職務を全うしようとする彼女（ちなみに緊張のせいで彼女の足は酔っ払いのようにユラユラと揺れている）は、シャッキリと首筋を伸ばして、

「いや、すいません。では改めて、これから今の状況と、今後の我々の行動についてお話するとしまひゃあ!？」

言葉が終わる前に、フラつく足もお構いなしに無理に背を伸ばしたアニエーゼは後ろへバランスを大きく崩してしまう。『わっ、わっ！』と宙を泳ぐ彼女の手が、藁をも掴む理論で当麻の手をガッチリとホールドする。

「うわっ!？」

手を掴まれた当麻も一緒に地面に引きずり倒された。

地面に倒れた当麻が目線を上げるとそこには”楽園”が広がっていたのであった。

ぶっちやけて言えばアニエーゼのスカートの中だ。

[illegible]

怯える当麻が慌てて頭ををそこから離脱しようとした瞬間、漸く事態に気付いたアニエーゼが『きゃあ! ?』という可愛らしい甲高い悲鳴と共に思い切り両手でスカートを上から押さえた。それがかえって、この状況から逃れられない事になるであろう事にも気付かずに。

スカートと太股で頭を挟まれた当麻にインデックスが叫び声を上げる。

「と、ととと、とうまア！それはちよつとしたイタズラとしての限

度を超えてるかも!!」

ラッキースケベ

「……また、例の不幸か？当麻よ」

「仕事中に発情するな。ほら、さっさと起きろ」

ドゴン、とステイルに脇腹を蹴飛ばされてアニエーゼのスカートと太股という”牢獄”から漸く離脱出来た当麻。

腹を蹴られた当麻は咳き込みながら首を振る。

と、ペタリと座り込んだアニエーゼと目が合ったようだ。彼女の顔は羞恥に染まっていた。それを見た当麻の顔が真っ青になった。

「ず、ずみばぜん……」

「い、いえ。謝んなくてもいいです。わ、私が転んだのが原因なんですし。どうも緊張すると体のバランスがおかしくなっちゃまうように……。えっと、立てます？」

アニエーゼが厚底サンダルを履いた足で器用に立ち上がり、地面に這い蹲っている当麻に手を差し伸べて彼をを起こして上げた。

少しは落ち着いたのか、アニエーゼはまだカチコチに固まっているが、口振りからは緊張の色がなくなっているようだ。

「ええ、では今から『法の書』、オルソラ・アキナス、及び天草式の動向と、我々の今後の行動について説明しちみたいと思います」

そう言いながら、再び転ぶのが怖いのだろう。アニエーゼは緊張でフラフラしたまま思わず当麻の服を掴もうとしたが、途中で止まってしまった。多分先程の事を思い出したが故だろう。彼女は手をアチコチさまよわせた後、インデックスの修道服をチョコンと摘むように握った。

「現状、『オルソラ・アキナス』は確実に天草式の手にあります。『法の書』の方も十中八九間違いないでしょう。今回の件に出張してる天草式の数は、推定で五〇人弱。下水道を利用して移動してるみたいなんですが、今は地上へ上がっちゃってる可能性もあんですよ」

「つまり、何にも分かんないって事かな？」

アニエーゼに寄りかかれてるインデックスが少しだけ苦しそうに言う。

「はい。我々はそのに残存してる魔力の痕跡から天草式の動向を追ってますが、これが上手くいきやしません。流石は隠密性特化型宗派・天草式十字凄教ってトコですかね」

彼女はフラフラと揺れながら、正三角形に切り抜かれた地面の方を指差す。

「並行して別働隊に辺りを包囲網を敷かせてますが、こっちの方が早くヒットしそうです」

「包囲網って……どれぐらいの規模なんだ？」

と当麻は首を傾げる。小次郎も目線で訴える。

「ここを中心として半径一〇キロってトコです。一三二の道路と四三の下水路、その程度の規模なら賄えるぐらいの味方はいると考えちまって構いません」

アニエーゼはインデックスに抱きつくようにしてから言葉を続ける。
「何にせよ、『法の書』及びオルソラを本拠地へ連れ込むつもりなら包囲網のどっかに触れますよ。情報では、天草式の本拠地は九州地方にある”らしい”ってな所までは掴んでんです。……”らしい”、ってのが気に食わないんですが。もっともヤツらが包囲網を抜けず、この場でオルソラに解説法を吐かせるってんなら話は変わっちゃいますが」

「それはないだろうね。当のオルソラにしても、読心系の魔術に対抗する知識ぐらいいは頭に用意してるだろう。かと言って、力づくでやるには環境が悪い」

と、そこで言葉を切ってからステイルは煙草の煙を吐いて、

「腰を落ち着けるには、この場には敵が多すぎる。オルソラの拷問、解説法の入手、『法の書』の解説版の作成、これらは一日程度で終わる仕事量じゃないと思うよ。自殺を防ぎ的確に心の壁を破って情報を引き出すなら、相手に直接触れない『徒勞系』^{ロングラン}や『安眠妨害系』^{スペシャルスベシー}の拷問がベストだと思う。だが、それでも一週間程度は必要だろう。

一日二日の徹夜じゃ拷問にもならないしね。あれは一二〇時間以上一睡もさせないで、初めて”心が壊れる風に出来てるから”」

淡々と話すステイルに小次郎は同意の頷きをし、当麻はゾツとした。それから、彼は何かやら考え込んでいるようだったが、

「どうしたの、とうま？」

インデックスが小首を傾げる（その動作をしたら、まわりについているアニエーゼの頭にコツンとぶつけた）。

「何でもねえよ。で、俺達は今から何すりゃ良いんだ？天草式の連中は、じきに包囲網のどこかに接触するんだったよな」

当麻の質問にアニエーゼは、殆どインデックスのほっぺたに頬ずりするような形で、

「あ、は、はい。基本的には後方支援に回ってもらいます。……可能性は低いんですがね、『法の書』が使われちゃう恐れもあるんで魔導書の専門家には、そちらへ当たってもらった方が良いかとー」

「ああ鬱陶しい！ちよっと暑苦しいかも！」

インデックスはバタバタと手を振ってから、

「でも、天草式ってそんなに簡単に捕まるのかな。ねえとうま」

「そこでこっちに話を振ってどうするよ？あれじゃねえの。そんな四〇人も五〇人も怪しい修道服着た集団が歩いてたら嫌でも目につくと思うけど」

「当麻、お前は何を聞いてたんだ？先程、天草式は”隠密性特化型””と言っていたのを聞いてなかったのか？修道服の類なんか着てる訳がねえだろう。そうだろ？インデックス」

「うん。こじろうの言う通り、天草式には決まった正式装束はないんだよ、とうま。彼らは普通に街を歩いている程度では見分けはつかないかも」

「……、」

「とうま、なに？その人を疑うような目は」

「何でもないです」

そんな当麻の考えてる事など小次郎にはお見通しである。

（ま、大方辺りを見回す限り、普通の格好をしてる人間が一人も見当たらないこの現状でインデックスの『普通』がどこまで通用するのか疑問に思っ、あんな目をしたんだろが、な）

「とにかく、天草式は『隠れる事』『逃げる事』に特化した集団なの。そんな連中が、『法の書』やオルソラⅡアクィナスを強奪した後にローマ正教がどんな手を打ってくるか、予想してなくちゃおかしいと思う。そして今回の件が計画的なものなら、対抗策を練っているのが普通かも」

その言葉に、インデックスへ完全に寄りかかっているアニエーゼが少し戸惑ったように、

「で、でも。実際問題、ウチの包囲網を突破しちまえる方法なんて――」

「あるの。そういう魔術が」

インデックスはアニエーゼの疑問に間髪入れずに返事をする。

「日本国内限定の術式なんだけどね。簡単に言えば、日本中に特殊なポイント『渦』がいくつもあって、『渦』と『渦』の間を自由に行き来出来るような『地図の魔術』があるの」

「大日本沿海輿地全図。――伊能忠敬か」

ステイルは何かを思い出したのだろう。苦い顔をして、呟く。

当麻だけサッパリ意味が掴めなかったので、

「何それ？伊能忠敬って伝説の魔術師か何かなの？」

と聞いた為、その場の全員から（友人である小次郎含む）物凄い冷たい目見られた。

「あの、とうま。日本で初めて実測で日本地図を作った人って、表の世界の歴史年表にも載ってる事なんだけど」

「君って歴史に疎そうだしね。どうせ日本の五代前の総理大臣ももう忘れてるんだろ？」

「……その、イタリア人の私でもそんなに知ってたんですけど」

「……全くお前の無知にはがっかりだぜ」

四方八方からボコボコに言われて、当麻はちよっぴり塞ぎ込んでし

まった。

「で、とにかくこの江戸時代に作られた日本地図には特殊な仕掛けがしてあるの。『偶像の理論』みんな分かるよね？……とうま以外は」

「まあ、大体は、な……」

インデックスの質問に小次郎は答える。

一方の当麻は蚊帳の外に置かれたような感覚に陥っていた。

「そんなとうまの為のお勉強会です。偶像の理論っていうのは、神様や天使の力を上手に利用する為の基盤となる知識なの。それを応用すると、例えば『神の子』の処刑に使われた十字架によく似たレプリカを教会の屋根に取り付けければ、本物の十字架が持つ聖なる力を分けてもらったりできるんだね。もっとも、レプリカに宿る力は普通、本物の○・○○○○○○○○○○○一%未満、レプリカの中でも伝説級の『聖なる飼い葉桶』だって数%が限界なの。まあ、本物の一%でも一二使徒クラスに匹敵するんだけど」

要はレプリカはオリジナルの劣化品なのに、複数集まれば限りなくオリジナルと同等のパワーを得られるといった所か、と小次郎は考えた。

「そしてこの『偶像の理論』っていうのは、逆流できるって仮説があるの。つまり、本物が『偶像』に影響を及ぼすだけじゃなくて、『偶像』が本物に影響を及ぼすって訳だね」

「仮説って……はつきりしてないのか？」

「いくつかの『例外』が埋められてないから、あくまで仮説。でも、聖書とかを粗末に扱うと罰が下るっていうのはそういう意味だよ。聖書の中には十字教を迫害してたギリシアの『偶像』が雷に打たれて壊れる話がいっぱいあるし、昔の日本でやってた『踏み絵』だって『偶像』を傷付ける事で本物へ悪影響を与えてしまうという恐れを逆手に取ったって説もあるんだから」

インデックスはやや不満そうな顔で言う。

「伊能忠敬はこの『偶像の理論』を逆手に取ったの。本物が偶像に

影響を与えるのなら逆に、本来あるはずのないモノー空間を瞬時に移動する為の出入口を強引に大日本沿海輿地全図へ書き込む事で、日本列島には存在しないはずの『渦』を四七ヶ所も作ってしまったの」

ここまでのインデックスの説明の中で出てきた情報を、当麻は頭の中で必死に整理しているようだ。

そして暫くしてから、

「おい。それってなんかメチャクチャやばくねーか！？だってその地図を消しゴムで消したら人も街も全部吹っ飛んじまうって事だろ」
「それは無理だよ。いい、偶像の条件っていうのは『ミニチュア』なの。本物との間にわずかでも魔術的な狂いが生じれば、偶像として機能しなくなるんだよ。だから『偶像の理論』は決して万能じゃないの。元の『像』を歪ませてしまえば理論そのものが適用されなくなっちゃうから」

インデックスはいつもとは異なる真剣な口調で語る。その話を聞いて、小次郎は『偶像』は所詮『偶像』でしかない、という事だと改めて思う。

「逆に言えば、そこが伊能忠敬の凄い所なんだね。明らかに狂ったモノを付け足しておきながら、『ミニチュア』としての黄金比を少しも歪めなかったんだもん。あんな事が出来たのは、魔術史上でも彼だけだったと思う。歴史に『If』はないけど、もしも彼が彫刻家だったら、『神の子』や『天使』だって操れたかもしれないね。

……もちろん、日本地図の制御だけでも十分に驚異なんだけど」

「……、で。天草式はそれを自由に使えるってのか」

「……………」

「うん。伊能忠敬は江戸幕府の時代に諸外国へ強い興味を持っていた、彼の一派は大日本沿海輿地全図をシーボルトへ売り払おうとしていた経緯があるからね。当時禁止されていた十字教も蘭学を通じて知っていたはずだし、主に学術的興味から天草式との非公式な接触もあったと見るのが妥当かも」

アニエーゼはその話をポカンとした顔で聞いていた。

当麻はこれまでの話を頭の中で整理しながら、

「だとしたら、どうする？もう天草式はワープしてるかもしれないんだろ？ポイントは限定されてるって話だからそれを全部調べてみるのか？」

「それは出来ないよ。実は大日本沿海輿地全図から『渦』は二三ヶ所しか見つかってないんだもん。黒船に売り渡そうとした際の仕様書には、ちゃんと四七ヶ所あるって書かれてるのに」

ポイントの半数以上は未だ謎のまま。これでは先回りをする事など出来やしない。

「しかも大日本沿海輿地全図を使った特殊移動法に加えて、”天草式は本拠地が知られていない”事でも有名なの。……逃走ルートが寸断されるんだから分かるはずがないんだけどね。さっきアニエーゼは九州にある『らしい』って言ってたけど、これも謎だね。天草式の本拠地の情報は無数にあって、まったく特定できない状態なの。情報が偽りなのか、全て本拠地として機能しているのか。それすらも分からないんだよ」

それを聞いたアニエーゼの顔が青ざめた。

そして、自分の体を支えていた両手でインデックスの肩を掴んで叫ぶ。

「じゃ、じゃあどうすんですか！？てかそんな情報があんなら何で黙ってたんですか！ポイントを先回りする事も出来ないし本拠地へ追撃する事も出来ないじゃ、飛ばされちまったらもう終わりだ！ヤツらが飛ぶ前に急いで手を打てばまだ何とかなかったかもしれないねえってのに、何をのんびりしてんですか！？」

「急ぐ必要はないからだよ」

インデックスがサラリと言うと、アニエーゼは再びポカンとした顔になる。

「大日本沿海輿地全図は夜空の星を利用して実測された地図なの。だから、特殊移動法を使うには地図に染み付いた特性『星の動き』

が大きく影響してくるの。簡単に言えば刻限があるんだよ。決まった時間じゃないと特殊移動法は使えないんだもん」

そう言った後、彼女は夜空を見上げ、

「今は……星を見る限り、ざっと午後七時半って所だね。特殊移動法使用制限解除は日付変更直後だから、まだ四時間半ぐらい余裕はあるよ。加えて飛ぶ為のポイント『渦』は既に固定されてるんだもん。この包囲網の中で使える『渦』は判明している二三ヶ所では一つしかないの。……もちろん、まだ明かされていない他の『渦』がある可能性は捨てられないけどね」

インデックスは自信満々で言い切った。

小次郎はその姿を見て、改めて『魔導書図書館』の異名は伊達じゃねえな、と感じた。

「で、そのポイントってのはどこだ？」

「とうま、地図が出るピコピコ持ってなかった？貸して貸して」

当麻が携帯電話を手渡したが、当然操作法なんて彼女に分かるはずがなかったので、横から操作してやり、インデックスに場所を教えてもらう事にした。

やがて彼女の白くて細い人差し指の先が、ある一点を指す。

「ここだよ」

インデックスの助言を受けてアニエーゼが指示を飛ばしてから十五分足らずの時間に、

「斥候に先行偵察させた結果、例のポイント付近で不審者を二名ほど発見したそうです。天草式の線が濃いですが、今は泳がせています」

と結果が出てきた。

「ただ、天草式本隊や『法の書』、オルソラなどの姿は発見できない

かったそうで」

「だろうな。こんな時間から何十人とゾロゾロ侵入したら嫌でも目についてしまう。何せあそこはまだ”営業中”だろうし」

当麻は現時刻が八時前という事もあってかそう言った。

作戦は簡単だ。

天草式の間人が大日本沿海輿地全図の細工を使って、ここから離脱するつもりなら、必ず『渦』と呼ばれる転移ポイントを使用しなければならぬ。小次郎達は、ここへやってきた天草式を迎撃して、

『法の書』の奪還とオルソラの救出を行うというモノだ。

「他に未知のポイントがある可能性もありますし、特殊移動法を使わねえって可能性もあります。本隊の姿を確認できなかった以上、全ての人員を指定区域へ割くのは難しいです。包囲網の維持と、エリア内の探索に多くの戦力を注いじまわないと、ヤツらに逃げられる危険性が増えちまいますんで。ただ、あそこが一番怪しいのは間違いないんですが」

困ったように言うアニエーゼに、インデックスは気にした様子もなく、

「それで普通だと思うよ。私の言葉に確たる証拠がある訳でもないし」

「よって使える人員は私を含めて七四名となります。今、武装や霊装を再編成してますが、仮に天草式本隊と遭遇した場合、必勝は確約できません。すいませんが、そちらの身はそちらで守ってもらう事になっちゃってます」

今までの天草式の戦力を考えると、アニエーゼの言葉は的を得ていると言える。

小次郎はヤンキー座りをしながら、

「別に構わねえぜ。寧ろ一人の方が色々動きやすいしな」

と答えて、その後に続いてステイルが新しい煙草に火を点けながら、「コジロウの意見に同意する訳じゃないけど、僕らもそれで構わないよ。援軍を送ると約束したこちらの『騎士』の馬鹿共とは連絡が

取れないし、その上で僕達がお荷物となつては話にならない。で、出発する前の再編成はどの程度で整う？」

「武器、防具の選定。聖水の使用、聖書の読み上げによる個人個人の加護を含めて……」

と、ここでアニエーゼは少し考えてから、

「三時間前後。……最悪でも十一時までには終わらせちまいます」

「移動時間を含めれば三〇分強で決着をつけなくてはならない訳か。まあいいさ、あまり早すぎても例のポイントへ天草式本隊がやってこない事には待ちぼうけを食らうだけだからね」

これにより、行動開始時間は午後十一時に決定した。

アニエーゼがパンパン！と両手を叩いて外国語で何か指示を飛ばすと、修道女達が一斉に動き出した。七四人を即座に二人から四人編成の行動班に分けて、それぞれが準備に走る。

小次郎は彼女達の手際の良さに戦場慣れしている集団だな、と感じた。

ちなみに小次郎達四人は準備など必要ない為、彼女達より早く食事と仮眠に入る事が出来る。

その為、当麻、インデックス、ステイルの三名は食事を取っている。数時間前に夕食を食べ終わった小次郎はそれをする必要がない為、彼らよりさらに早く仮眠を取る事にした。

小次郎が寝付いてから、暫くの後。

ふと、彼は目をパチリと開けた。何だか外が騒がしかったからだ。彼の覚醒に気付いたのか、ステイルが声をかけてきた。

「目が覚めたのかい？」

「ん？ステイルか。今何時だ？」

気になったので今の時刻を訊いてみる小次郎。

「君が寝てから、まだ一時間程しか経っていないんじゃないかな」

「そうか……」

そう返事してから、

「なあ、ステイルよ。この騒ぎは何だ？」

「さあね。大方、上条当麻が迷惑をかけているだけじゃないかな」

「……違えねえ」

そんな会話をしていると、当麻がテントに入ってきた。

「だから迷惑をかけるなど言っただろう。ん？どうした、何を頭なんか押さえて涙ぐんでるんだい？」

ボロボロな当麻を見て、寝っ転がったままのステイルは退屈そうに言った。

当麻は「何でもないです」と言った後、自分の頭をさすりながら自分の毛布に潜り込む。

すると、小次郎が小声で話しかける。

「おはこんばんわ、当麻」

「あっ！起きたのか小次郎」

「おう。で？またインデックスに何かやらかしたのか？」

「ぶほうっ！！？？」

それを聞いた当麻は激しく咳き込んだ後（幸いステイルには聞こえなかったようだ）、同じく小声で

「あ、あの、この事はステイルには話さないでくれませぬか。俺の命がリアルに危ないんで……」

「りょーかい」

そう小次郎が返事した後、暫く寝ようと頑張っていた当麻だったが、眠れない為、ステイルに話しかけた。

「なあステイル」

「なんだい。僕は今とてもイライラしているのだからできれば後回しにして欲しいね」

「一個聞くけど」

「大体この殆どの人間は危機管理能力が低すぎるよ『法の書』が何だと言うんだ。たった一冊の魔導書で右往左往しているなら一〇万三〇〇〇千冊を管理する彼女が一体どれだけの数の魔術師に狙わ

れているか分かるだろうが――」

「お前の好きな子誰だよ？」

「ぶばっ!？」

当麻の問いにステイルは呼吸が詰まってワナワナと震え始めた。

小次郎はその様子を見てニヤニヤ笑っている。

(俺も人の事あ言えねえけど、こいつも初心^{うぶ}だねえ)

と、内心そう思った。

面白そうなので小次郎は黙って二人の会話を聞く事にした。

「なあステイル。一個聞くけど」

「尊敬する女性はエリザベス一世で好みのタイプは聖女マルタだ。

愛と慈悲の祈りのみで悪竜を退治した逸話なんて痺れてしまうね。

他に質問は？」

「天草式十字凄教ってあれだろ。神裂が前にいた所だろ」

「……、」

ステイルが少し黙ったのが分かる。やがて、

「誰から聞いた？あの神裂が、自分の生い立ちを簡単に話すとは思えないね。土御門か？」

「ああ。お前が海のオヤジになってる間に聞いたんだ」

疑問顔をステイルがしているのが、彼とは反対側にいる小次郎にもよく分かる。

それにしても『海のオヤジ』とは一体何の事なのか。この一件が片付いたら、当麻に訊いてみるか、と小次郎は思った。

「でも、あれだろ。天草式ってのは、神裂の仲間達なんだろ」

当麻は、戸惑うようにそこで区切ってから、

「……、それでも、やるのか？あの『三沢塾』の時みたいに」

『三沢塾』の件は、当事者だった秋沙に聞いたので知っている。魔術師同士の闘いがまさしく殺し合いなのだというのは、分かるのだが、話を聞く限り、完全な闇の住人という訳ではないのだ。

自分達『忍び』とは違い、魔術師という連中は。

「やるよ」

スタイルは当麻の問いに即座に答えた。

「やるに決まってる。上の命令だろうが、”あるいは上に止められてでも”。僕はね、あの子を守る為なら何でもやるって決めているんだ。だから誰でも殺す。生きたままでも燃やす。死体になっても焼き尽くす。あの子のしている前でも、あの子の知らない所でも」あの子とはおそらくインデックスの事だろう。

そして、それは、その生き様はまるで、『あの”男”』のようだと小次郎は思った。

「勘違いするなよ、上条当麻。僕が今こうしているのはそれが全てあの子の為になるからだ。あの子の為にならないなら、僕は今この瞬間に君を骨まで灰に変えてみせる」

「……、」

「……………」

ゴクリ、と当麻の喉が動き、小次郎はスタイルに改めて好印象を持った。

最初に会った時に感じた彼の雰囲気はやはり『あの”男”』にソックリだった、と小次郎は思い出す。

そう、この少年は――

「ずっと昔に誓ったんだよ。『――安心して眠ると良い、例えば君は全てを忘れてしまおうとしても、僕は何一つ忘れずに君の為に生きて死ぬ』と」

小次郎の生涯最大の好敵手・『飛鳥武蔵』^{あすかむさし}。

彼と同じなのだという事を……。

暫く黙っていた当麻がやがて、

「でも、だったら何でこんな事にインデックスを巻き込んだんだ？」

「計画したのは僕じゃないし、出来れば僕も巻き込みたくなかったよ」

スタイルはスラスラと答える。

「しかし、僕だけで解決しては駄目なんだ。それではあの子が『無価値』だと判断されてしまうから。現状のインデックスの利用価値

をウチの上の人間に提示出来なければ、彼女はロンドンへと送還されてしまう恐れがある。今のあの子にとって、学園都市での生活を引き裂かれるのは何にも増して耐え難い出来事だろうからね」

その言葉はどこか投げやりだった。

どこか無理しているかのような痛々しさだった。

「もう寝ろ。強襲まで二時間もない。これ以上話しても夢見が無くなるだけだ」

それだけ言うと、ステイルは口を閉じて眠りについた。

それもそうだ、と思った小次郎も再び眠る事にした。

体力を万全に回復しておく事が戦場のならいだからだ。

尚、小次郎が知る由もない事だが、彼が眠っている間、また当麻に不幸という名のラッキースケベイベントが起きたのは言うまでもない。

午後十一時。

天草式の教皇代理の建宮齋字たてみやさいじと彼率いる本隊四七名は特殊移動法『縮図巡礼』の特定ポイント『渦』に集結していた。

そこは、『パラレルスイーツパーク』という看板を掲げた、大規模な菓子専門のテーマパークの一角であった。

彼らはここに到着すると同時に魔術『縮図巡礼』の準備を始めた。

(さて)

『縮図巡礼』の準備を整える天草式の面々から一人離れた建宮齋字は、己の持つ剣を横に薙いだ。

その数秒後には、光の満ちた金属製の街灯が、斜めに裂けて地面に

転がった。

（お前に見せてやろうぞ、女教皇様^{かんざき かおり}。多角宗教融合型十字教術式・天草式十字凄教の今の姿を）

軽く夜空を見上げながら、口の中でそう静かに唱えた。

暗い夜に呑み込まれた遺跡だ。

特殊移動法のポイントである『パラレルスウィーツパーク』を遠目で見た小次郎は、奇しくも当麻と同じ感想を抱いた。

小次郎は一緒に見ていた当麻より数秒遅れて『パラレルスウィーツパーク』から目を離れた。

百貨店の大きな駐車場には何十人という漆黒の修道女達が集まっていた。

インデックスは当麻を巻き込みたくはなかったようだし、当麻（起きた時に菌型とかが体についていたから、どうしたのかと訊いたが、何でもないと返答された。まあ、いつもの不幸だろうと小次郎は推測）は少し緊張しているようだ。

ステイルの方は、インデックスの少し後ろで一見いつもと変わらない様子（会って数時間しか経っていないが、彼の人となり為何となく分かった）で煙草を吸っている。内心ではインデックスを守る為の様々な案を練っているのだろうが……。

アニエーゼが厚底サンダルをパカパカ鳴らしながら小次郎達の元へと歩いてきた。

彼女の様子からは、もう最初に会った時に出ていた緊張で足元がふらついていた様子は見られなかった。

その顔つきは、既に一人の戦士の顔だった。

「例の『パラレルスウィーツパーク』で天草式本隊を発見しました。ですが『法の書』とオルソラは確認できやしませんでした。まさか

とは思いますがこれが全て陽動である可能性もあります。従って他の部隊が辺り一帯に展開してる包囲網を解く事はせず、我々は今の人員でこのまま交戦に入っちゃいます」

とうに決定した事柄を確認するかのよう、アニエーゼは言った。当麻はちよつとだけ彼女の言葉を転がしてから、

「『法の書』を天草式の誰が保管してるかとか、本当に園内にオルソラがいるかどうか分からないってのが痛いよな。そんな状態で助け出せるのか？オルソラを見つけるのに手間取れば彼女を連れて逃げ出されるかもしれないし、人質にされるかもしれないねーだろ」

そんな当麻の疑問に、アニエーゼは悩む暇もなく、

「『パラレルスウィーツパーク』から逃げられちゃった場合は包囲網が役に立つでしょう。それから人質……てか、盾として使われちゃう恐れはないと思われんですが」

「？」

と、アニエーゼのその言葉に、当麻は首を傾げる。

「天草式の第一目的は『オルソラから『法の書』の解説法を教えてくださいな』でしょ。そのオルソラを盾にして、万が一死なせちゃったらヤツらの計画は失敗になっちゃいます。ヤツらがここまでして『法の書』に執着してんなら、逆にオルソラは安全なんです」

ステイルは口の端にくわえている煙草を揺らし、

「おそらく天草式の目的は、神裂がいなくなった事で欠けた戦力の穴埋めとして『法の書』を使おうとしているって所だね。ここまで強硬に出たというのは、それだけ切羽詰まっているという訳さ。彼らは『法の書』の入手に失敗すれば次はない。だからオルソラの身柄も氷細工みたいに丁寧に扱ってるだろうさ」

「……、逆に言えば、天草式が破れかぶれになる前にオルソラを見つけないとな」

正直、天秤の傾き方は微妙な所だと小次郎も当麻も感じた。

アニエーゼもサジ加減の難しさは分かっているのだろう。

「そこで人員を分けちゃいたいと思います。我々ローマ正教の八割

の人員で構成する主力隊は囷なって、正面から天草式と激突します。その間に、あなた達は遊撃隊の一つとして『パラレルスウィーツパーク』内を探索して、『法の書』とオルソラの身柄の確認ができたら確保しちまってください」

そこで言葉を切り、カツンと厚底サンダルを鳴らしてから、

「特殊移動法のタイムリミットである午後〇時五分を過ぎましても見つからないって場合は『いない』ものとみなしちまいます。あなた達は『パラレルスウィーツパーク』から脱出しちまってください。我々の手で天草式を無力化した後に、園内を搜索しちまいます」
当麻がゴクリと唾を飲み込むと、インデックスが口を開いた。

「特殊移動法の『渦』もあるよ。あれを破壊しておかないとオルソラを連れて逃げられるかも。開いた『渦』自体はどうまがいれば簡単に消せるだろうけど、それだと午前〇時に開くまで待たないといけないんだよ。午前〇時より前に止める為には、準備の為のアイテム類を壊せば良いんだけど、天草式の場合はカムフラージュされてて捜すのに苦労するかも」

「『法の書』とオルソラの搜索にポイントの破壊。割と窮屈なスケジュールになりそうだ」

ステイルが言いながら煙草を吐き捨て踏み潰す。

「やる事が分かんねえよりは、遙かにマシだと思うぜ。ステイル」
小次郎が言うと、

「……確かにね」

同意の言葉を呟く。

この二人のやりとりに覚悟が決まったと判断したのか、アニエーゼは片手を挙げた。背後にいた七〇人強の修道女達が一様に武器（それぞれが持つ武器は様々）を担ぎ、冷たい金属音が闇夜に鳴り響いた。

「……許せねえですよね」

アニエーゼは修道女の一人から受け取った銀の杖を肩に担ぎながら、憎々しげな声を闇の先へと向ける。

「十字教ってな、本来みんなを助ける目的で広めてったモノなのに。それを逆手に取って、こんな事の為に力を使っちゃうなんて。つまらない内容の為に暴力を振るっちゃうから、それを止める為にさらにつまんねえ暴力を振るわなくっちゃいけねえんだって、どうしてそんな簡単な連鎖にも気付けないんでしょうかね、彼らは」

「……、」

「……………」

当麻は、それは簡単な事で、一步離れば誰もが考え付くのだろうけど、当事者達にとってそれは大変難しい問題なのだと思うと共に、アニエーゼの言葉には共感している。

小次郎はそう言う彼女を黙って見つめる。

「まあこういう言い方は何ですけど……だから私は天草式に限らず、魔術師とか、ああいう人間があんまり好きじゃねえんです。特に二〇世紀初頭に登場してきやがった近代西洋魔術結社なんぞ、殆ど十字教の屁理屈や裏技的な術式を並べた連中ですから。ほら、『神の如き者』^{ミカエル}やら『神の力』^{ガブリエル}なんつー大天使の名前を借りた魔法陣なんぞ典型的じゃねえですか。二〇世紀から離れたにしても、例えば魔女狩り時代に王侯貴族と契約してた錬金術師なんかは堂々と『これは十字教の奥義だから魔女術には当たらない。あくまで私は敬虔なる子羊の一人だ』なんて公言してましたし」

アニエーゼはパカパカと足音を鳴らして、

「ヤツらは聖書を上から下までびっちり読み直して、神様の言葉を一つ一つ吟味して、そこから矛盾や抜け穴を捜して甘い汁をすする。これが『対十字教黒魔術』^{アンチゴッドブラックアート}ー恐るべき『外敵』ならぬ、忌むべき『内敵』の正体です。魔術師ってのは法の抜け道をつついて国を腐らせる政治家みてえなモンなんですよ。私達みたいな人間がキチンとルールを守って一列に並んでパンをもらっているのに、ヤツらは何食わぬ顔で横から列に割り込んでくる。だから変なトラブルが起きちゃうんです。別にパンをもらうのをやめるとまでは言いやしません、大人しく列の後ろに並んでろってな感じですね」

アニエーゼの言葉に小次郎は少し不快感を感じた。何だか十字教至上主義みたいに聞こえたからというものもあるが、こういう宗教的な考えは彼自身あまり好きではないからだ。

まあ、もっとも彼女に小次郎があれこれ何か意見を言う気など毛頭ないのだが……。

「しっかしまあ、本隊は全部こっちに割けないとか謙虚な事言ってる癖に、一声かけただけでよくこれだけの人達が集められるよな」と、話題を変える為に当麻が呆れたような感心したような声を出すと、アニエーゼは笑って（雰囲気的に嫌な感じはしない）、

「数が多いのがウチの特権なんです。世界百十ヶ国以上に仲間がいんですから。日本にだって沢山教会がありますし、今もオルソラ教会って新しい神の家を建設中なんです。確かこの辺りだったと思いますよ。すぐ近くです。完成すりゃ日本国内では最大規模になるとかって触れ込みだったと思います。野球場ぐらいの大きさがあつたはずですけど」

パカパカ、とアニエーゼの靴底が柔らかな音を立てる。

「オルソラ？」

「……その子はそんな（名前が教会に付く程）に功績を残してるのか？」

「はい。あの人は三ヶ国の異教地で神の教えを広めたってな功績があつて、自分の名前を冠する教会を建てる許可を特別にいただいたんで。上手な言葉を使う人だったでしょ？」

小次郎が「そうなのか？」と訊くと、当麻は「言われてみればそんな気がする」と答えた。

どこことなく、いまいちピンと来ない答えだった。

「教会が完成したら招待状でも送りますんで。ですがその前に、目の先の問題を片付けちゃいましょう。後味良くて素敵な結末を迎えられますように」

アニエーゼが不敵に笑って重そうな銀の杖を肩に担ぐと、カンカン、と両足の踵でそれぞれ地面を叩いた。すると三〇センチ以上あつた

厚底が綺麗に外れて、普通のサンダルになった。

着脱可能なそのギミックに小次郎は感心する。

「……、あの。動きやすいのは分かんだけどさ。だったら日頃から外しておけば？」

「うっさいです。おしやれなんです自分のこだわりポイントなんです」

当麻とアニーゼが和やかに会話する場面を見ながら小次郎は思う。

（やれやれ、平和だねえ）

と。

第八話 作戦会議（後書き）

書いていて思った。

この作品の主人公、あんまり喋らねえ〜〜。

まあ、もう一人の主人公である当麻が喋ってくれるので今のところは別に良いんですけどね。

次回、天草式とのバトルに突入します。

小次郎は一体誰と闘うのでしょうか……。

それでは、また！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1229y/>

とある戦士の風林火山

2011年12月15日14時50分発行